宮城県文化財調査報告書第 156 集

上野館跡

－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書－

平成 5 年 3 月

宮城県教育委員会

第５次調査区（Ⅱ区の一部）

出土陶磁器類

序　　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもあります。

しかし、埋蔵文化財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成４年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成５年３月

宮城県教育委員会教育長　　大立目　謙　直

例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が計画した宮城県松山高等学校校舎改築に伴う上野館跡の第1次～第6次発掘調査の成果をまとめた最終報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および整理・報告書作成に当たっては、多くの方々・関係機関からご指導・ご助言をいただいた(敬称略)。

   入間田宣夫・飯淵康一(東北大学)　岡村道雄(文化庁)　佐々木常人（東北歴史資料館）

   茂庭邦元(松山町)　井口祐二(松山町ふるさと歴史館)　檜山泰貴(東北陶磁文化館)
4. 本書は文化財保護課職員の検討を経て、佐久間光平・佐藤憲章・千葉正康・手塚　均が資料整理に当り、佐久間・佐藤・千葉が編集・執筆した。動物遺体は菅原弘樹が執筆した。

   第Ⅰ章～第Ⅳ章：佐久間　第Ⅴ章1：千葉　2：佐藤　3(1)：佐久間・佐藤　(2)①⑨：佐久間

   ②：佐藤　③：千葉　④⑤：佐藤　⑥：佐藤・千葉　⑦：千葉　⑧：菅原　第Ⅵ章：佐久間
5. 本書の内容の一部については概報(宮城県教育委員会　1990b・1991・1992)を再録した。本書と概報の内容が異なる場合には本書が優先する。
6. 調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

調　査　要　項

1. 遺 跡 名：上野館跡（宮城県遺跡地図地名表登載番号32007、遺跡記号ＫＮ）
2. 所 在 地：宮城県志田郡松山町千石城字松山1－1
3. 調査主体：宮城県教育委員会
4. 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

   第1次　手塚　均・佐藤広史・伊藤　裕・加藤明弘

   第2次　手塚　均・加藤明弘・岩見和泰

   第3次　進藤秋輝・手塚　均・斉藤吉弘・阿部　恵・阿部博志・古川一明・菊地逸夫・伊藤　裕

   須田良平・吉田雅之・鈴木真一郎・加藤明弘・岩見和泰・大和幸夫・木皿直幸

   第4次　白鳥良一・手塚　均・小村田達也・大和幸生・佐藤憲幸

   第5次　白鳥良一・手塚　均・佐久間光平・佐藤憲幸・太田　肇・大和幸生・木皿直幸・吾妻俊典

   第6次　加藤道男・佐久間光平・佐藤憲幸・千葉正康
5. 調査期間・面積

   第1次　1988 7/26～8/26　225㎡　　第4次　1990 7/10～10/18　2,100㎡

   第2次　1989 4/24・25　180㎡　　第5次　1991 4/3～11/7　2,200㎡

   第3次　1989 8/22～10/27　2,700㎡　　第6次　1992 8/17～11/11　1,000㎡
6. 調査協力　宮城県松山高等学校、松山町教育委員会、松山町立ふるさと歴史館、茂庭邦元

   菊池　亮、及川　寛、青木祐慶、井口祐二

目　　次

カラー図版
序文
例言・調査要項
目次

第Ⅰ章　はじめに 1

第Ⅱ章　遺跡の概要 2

1. 上野館の位置と立地 2
2. 上野館の歴史 2

第Ⅲ章　調査の概要 6

1. 調査にいたる経緯 6
2. 調査の方法と経過 6

第Ⅳ章　層序 11

第Ⅴ章　遺構と遺物 12

1. 縄文時代 12
2. 古代 13
3. 近世 16
(1)遺構 16
①Ⅰ区：表門付近　②Ⅱ区：「表」中央部　③Ⅲ区：「表」南西部
④Ⅳ区：「表」南東部　⑤Ⅴ区：南辺部　⑥Ⅵ区：東辺北部
⑦Ⅶ区：北辺部
(2)遺物 59
①陶磁器類　②土師質・瓦質土器類　③人形類・ミニチュア土器　④瓦類
⑤金属製品　⑥石製品　⑦木製品　⑧動物遺体　⑨植物遺体

第Ⅵ章　考察 100

引用・参考文献
写真図版

図 目 次

第1図　遺跡の位置 1
第2図　調査区と周辺の地形 3
第3図　元和元年（1681）絵図 4
第4図　松山旧城平面図（大正7年作成） 5
第5図　調査区位置図 8
第6図　グリット配図 8
第7図　遺構全体図 ..... 9・10
第8図　層序模式図 11
第9図　縄文時代の遺物 12
第10図　SI01 竪穴住居跡と出土遺物 14
第11図　Ⅰ区遺構平面図 17
第12図　SB101・102,SX101 平面図 18
第13図　SB101-107,SA101-103 断面図 19
第14図　SK101,101,SX101・111 断面図 20
第15図　Ⅱ区地層断面図 ..... 21・22
第16図　Ⅱ区遺構平面図 ..... 23・24
第17図　SB50 平面図 28
第18図　SB50 断面図 29
第19図　SB52・53・56-58・67・68・108 断面図 30
第20図　Ⅱ区北側遺構平面図 ..... 31・32
第21図　Ⅱ区東側遺構平面図 ..... 33・34
第22図　SA11・33・36・37・41 断面図 35
第23図　SX50 池跡平・断面図 37
第24図　SE54 井戸跡平・断面図 38
第25図　SK50・52・57・58・63・69・70 断面図 39
第26図　SX54,SB51 平・断面図 40
第27図　SD50 平・断面図,SD52・60・61 断面図 41
第28図　Ⅲ区遺構平面図 43
第29図　SX01,SK02・05・18,SD15 断面図 45
第30図　SX03 通路状遺構断面図 46
第31図　Ⅳ区遺構平面図，地層断面図 ..... 47・48
第32図　SB06-109,SA105 柱穴断面図 50
第33図　SE104・105,SK01・102 断面図 51
第34図　SX103・104 竪穴状遺構断面図 52
第35図　SD07-09 断面図 53
第36図　SX05 カマド跡平面図 55
第37図　Ⅴ区遺構平面図 56
第38図　SE103,SX04・115 断面図 57
第39図　Ⅶ区検出溝跡の平・断面図 58
第40図　Ⅷ区検出溝の平面図 59
第41図　磁器（1） 63
第42図　〃　（2） 64
第43図　〃　（3） 65
第44図　〃　（4） 66
第45図　〃　（5） 67
第46図　〃　（6） 68
第47図　〃　（7） 69
第48図　〃　（8） 70
第49図　〃　（9） 71
第50図　陶器（1） 73
第51図　〃　（2） 74
第52図　〃　（3） 75
第53図　〃　（4） 76
第54図　〃　（5） 77
第55図　〃　（6） 78
第56図　土師質土器 80
第57図　瓦質土器 81
第58図　人形類・ミニチュア土器 83
第59図　瓦類（1） 86
第60図　〃　（2） 87
第61図　〃　（3） 88
第62図　〃　（4） 89

第63図　金属製品（1）……92
第64図　〃　（2）……93
第65図　石製品（1）……95
第66図　〃　（2）……96
第67図　木製品……97
第68図　主要遺構の新旧関係……102
第69図　図示資料と産地……107
付図　遺構全体図

表 目 次

第1表　上野館関連年表……4
第2表　調査一覧表……6
第3表　縄文土器・石器，土師器・須恵器集計表……13
第4表　Ⅰ区検出遺構……16
第5表　Ⅱ区検出遺構（1）……25
第6表　〃　（2）……26
第7表　Ⅲ区検出遺構……44
第8表　Ⅳ区検出遺構……49
第9表　陶磁器類集計表……61・62
第10表　瓦類集計表……84
第11表　金属・石・木製品集計表……91
第12表　出土動物種名表……98
第13表　動物遺体出土量……99

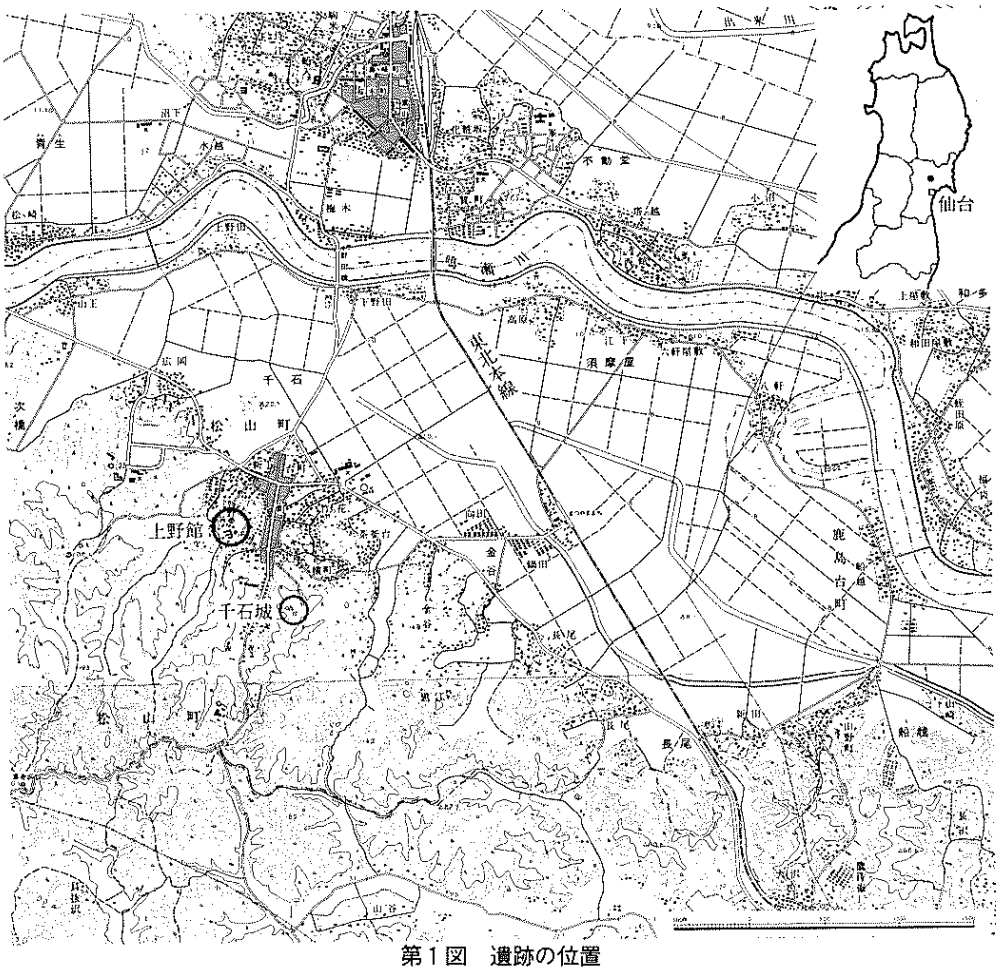
写真図版　目次

図版1　寛永年間の絵図，天和元年の絵図……115
図版2　上野館跡全景，第6次調査区……116
図版3　Ⅰ区:SB101-107,SA102・103,SD101……117
図版4　Ⅱ区:西壁断面，SB50・52……118
図版5　Ⅱ区:SB52・53・56・57・65・108,SX54……119
図版6　Ⅱ区:SA11-18・36・37・39・40・41,SE53……120
図版7　Ⅱ区:SX50……121
図版8　Ⅱ区:SX50，SE51・54……122
図版9　Ⅱ区:SK68-75,SX52,SD50……123
図版10　Ⅱ区:SD60・61,SK52・56，Ⅲ区:SX01……124
図版11　Ⅲ区:SK02・05・18付近,SD15……125
図版12　Ⅲ区:SX03,SD15，Ⅳ区:SA105,SB109……126
図版13　Ⅳ区:SX103・104……127
図版14　Ⅳ区:SD07-09,SA104,SK01・102,SX05……128
図版15　Ⅳ区:SX05,SE101・102……129
図版16　Ⅴ区:SX04,SE103……130
図版17　Ⅴ区:SX115,SD106,SI101……131
図版18　縄文土器・石器，土師器・須恵器，磁器（1）……132
図版19　磁器（2）……133
図版20　〃　（3）……134
図版21　〃　（4）……135
図版22　〃　（5）……136
図版23　〃　（6）……137
図版24　〃　（7），陶器（1）……138
図版25　陶器（2）……139
図版26　〃　（3）……140
図版27　〃　（4）……141
図版28　〃　（5）……142
図版29　土師質，瓦質土器（1）……143
図版30　瓦質土器（2）……144
図版31　人形，ミニチュア土器，瓦類（1）……145
図版32　瓦類（2）……146
図版33　〃　（3）……147
図版34　金属製品……148
図版35　石製品，木製品……149
図版36　骨・角製品，動物遺体……150

第１章　はじめに

宮城県教育委員会では、宮城県松山高等学校の校舎および体育館改築工事に伴い、昭和62年度から平成3年度まで5次にわたって上野館(仙台藩の重臣：茂庭氏の居館)跡の発掘調査を実施してきた。これらの調査成果についてはすでに概要を報告している(宮城県教育委員会：1990ｂ・1991・1992)。

平成4年度はこれらに引続き第6次調査を行い、この調査を最後にこれまでの一連の改築工事に伴う発掘調査をひとまず終了することになった。毎年継続して行ってきた第1次～第6次調査をあわせるとその調査総面積は約8,000㎡になり、これは上野館の「表」の区域の約8割程度の面積を調査したことになる。そこで、本報告ではすでに概要を報告した第1次から第5次調査までの内容と、さらに今年度の第6次調査の成果をあわせてまとめ、上野館跡発掘調査の最終報告とする。



第１図　遺跡の位置

第Ⅱ章　遺跡の概要

1．上野館の位置と立地

上野館跡は、宮城県志田郡松山町千石字松山に所在する。松山町は仙台市から直線距離で約32㎞北東に位置し、南を大松沢丘陵、北を鳴瀬川に画され、丘陵と鳴瀬川との間には肥沃な耕土がひらけている。

館跡は町の北側を流れる鳴瀬川の南側を東西方向に延びる丘陵の北端部に位置している(第1図)。標高約37～39mの高台にあり、沖積地との比高差は約25m、北～南東部が急傾斜であるのに対し西部は比較的なだらかに沖積地に続く。現在は松山高等学校・稲荷神社・上野地区集会所などの敷地となっている(第2図)。

現地形は東西約170m、南北150mで、南辺は校舎の増築時に削平・拡張されたため低くなってはいるものの、四周の道路に比べて5～6m(西辺)ないし3～4m(北・東辺)高くなっており、館当時の範囲を今でも知ることができる。現在松山高校校門のある東辺中央部はかつて館の表門があった位置である。その正面の急坂を下ると館に登る馬の体を清めたという「駒池」があり、これを経て南西～北東に細長く延びた低地に出る。そこは旧千石村で町場があり、南端の入町には昭和30年代まで足軽屋敷が残っていた。その一帯では現在でも屋敷地の短冊形の地割が大きく損なわれず、往時のたたずまいを窺い知ることができる。

2．上野館の歴史

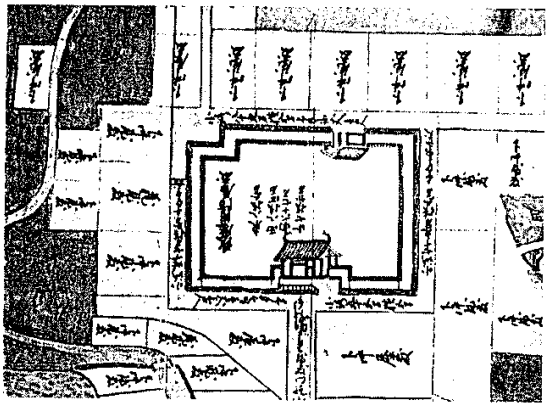
天正19年(1591)、豊臣秀吉の「奥州仕置」によって伊達正宗が米沢から岩出山に移封されるとともに、松山郷(現在の松山町・鹿島台町)の領主は、遠藤出羽高康から石川大和昭光にかわり、慶長3年(1598)には仙台藩奉行古田内匠重直が石川氏に代わった。そして慶長8年(1603)には、茂庭主水良綱(周防良元)が古田氏にかわって西磐井郡赤萩(現岩手県一ノ関市)より松山へ移封された。良綱は中世遠藤氏の居館であった「千石城」の三の丸を修復して入り、後に上野館を居館とし、以後幕末に至る11代265年間、茂庭氏が松山の額主となった。茂庭氏が松山に移封された当時の松山郷は、千石・次橋・金谷など14ヶ村からなっており、良綱の知行地は536貫517文(約5,365石)であった。茂庭氏は藩の新田開発奨励作のもとで野谷地(開田可能な低湿地)の開発に勤め、延宝3年(1675)には14,348石にまで知行高が増加している。同氏は代々仙台藩の奉行・若老(家老・若年寄に相当)など要職をつとめたが、近代末には当主の早世などの困難の中で幕末維新を迎えた。戊辰戦争に敗れた仙台藩は官軍側の進駐するところとなり、松山は明治元年(1868)、土浦藩(土屋相模守)の取締り地となった。このため茂庭家は上野館から退去して仙台小

鶴の別邸に移り、幕藩体制下での歴史を終えることになる。

上野館は一般に松山城と称されることもあるが、正式には城ではなく茂庭家の「居館」である。仙台藩の上級家臣は、城、要害、所、在所をそれぞれ拝領しており、茂庭家の場合には城でも要害でもなく「所」拝領であった(佐藤1979)。この居館(以下館と略記する)は、松山移封28年後の寛永8年(1631)に初代良元が下屋敷として築き、明暦3年(1657)二代定元の時に藩の許可を得て正式に居館とし、千石城からここへ移り、松山統治の中心とした(第1表)。

第２図　調査区と周辺の地形

上野館に移るまで居館としていた千石城三の丸は標高約70mの丘陵上にあり、天和元年(1681)の「茂庭周防屋敷絵図」(宮城県図書館蔵)によれば、東西29間、南北69間で北側に東西29間、南北13間の小曲輪が付属し、それらを高さ3間の土塁で囲んだものであったが、領内統治の場としては高所のため不便であった。藩体制の安定化とともにこのような中世的な山城は不向きになり、平石城より低い立地をもつ上野館が正式な居館になったものと考えられる。



第３図　天和元年(1681)絵図

館の規模・建物配置を知る上で参考となる絵図には、寛永年間・天和元年(1681：第3図、写真図版1)・文政9年(1826)作の3葉、幕末頃の館内の建物配置が描かれた作成時期不明の1葉、そして記憶を元にした大正7年作成の1葉(第4図)がある。寛永絵図では上野館は東西80間、南北67間の「下座敷」として描かれている。正式な居館となった後の天和絵図では東表85間、西裏84間、北脇72間、南脇67間で、西南隅に東西4間、南北15間の切り込みのある様子がわかる。また、正面の東側には鯱を飾った幅5間の表門があり、四方には東辺が1丈4尺、西辺2丈1尺・南辺1丈・北辺2丈程の高さの土塁と幅5間の道路がめぐり、土塁の上部には白壁の塀がまわっている。

第１表　上野館関連年表

1600　1700　1800

一六〇三　茂庭良元、赤萩より千石城に移り松山を治める

一六三一　良元、下屋敷として「上野館」を築く

一六五一　上野館を整備し、良元移り住む

一六五七　二代定元、千石城を廃城にして上野館に移る

一六八五　仙台藩主御成りに際し、「御湯殿」・「かわや」を新築

一六八八　四代姓元、「大書院」・「御座の間」などの普請を行う。

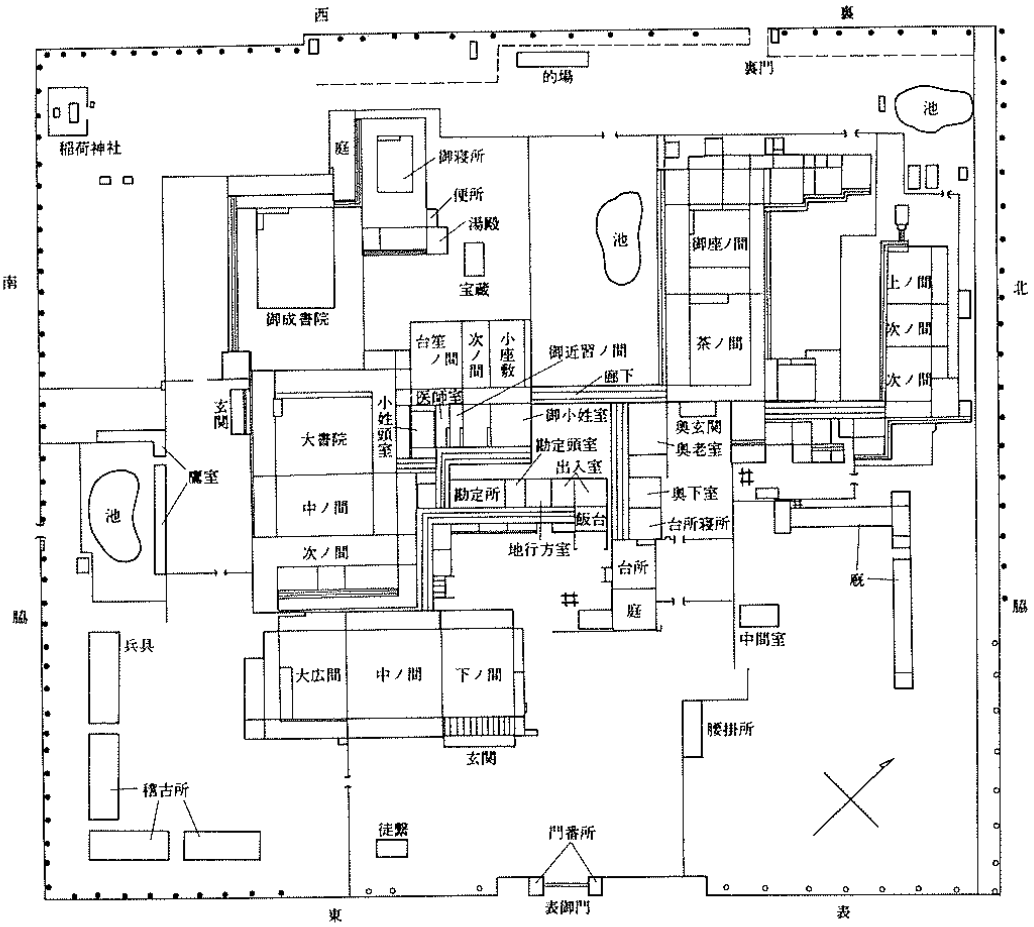
一六九六　上野館内に氏神稲荷神社造営

一七一四　南台に南御屋敷造営

一七三六　この頃「御成書院」建てる

一七七二　南御屋敷火災により消失

一八六八　上野館の廃絶



第４図　松山旧城平面図（大正７年作成）

館内の建物の配置については前述の2葉の絵図によって幕末頃の様子を窺い知ることができ、それは領内統治の政庁ともいうべき「表」と、領主の私生活の場である「奥」、仙台藩主来訪の際に使用する「御成書院」の3群に分けられる。これより遡った時期の建物や館建物の変遷については不明な点が多い。ただ「茂庭家記録」によれば、貞享2年(1685)の藩主伊達綱村来訪に際しての湯殿・かわやの新築、元禄元年(1688)の大書院・御座ノ間などの普請、元文2年(1737)における御成書院の存在などを知ることができる。

明治維新後、館の建物は「奥」の御座ノ間のある1棟を残して解体され、敷地は畑地となった。残った1棟はその後大正末年まで茂庭家の住宅となっていたが、昭和26年の町立松山中学校の校地となって取り壊され、校地造成工事に伴い地形も改変された。その後、古川女子校松山分校、松山高等学校の敷地となり現在に至っている(茂庭ほか1980)。

第III章　調査の概要

1．調査にいたる経緯

6次にわたる発掘調査は、松山高等学校の老朽化した木造校舎および体育館を全面的に撤去し、新築・整備する計画に起因したものである。

昭和62年度に校舎新築計画が具体化したため、昭和63年4月に工事計画を担当する宮城県教育庁財務課と文化財保護課とで協議がもたれた。協議では校舎の建設位置・仮校舎の建設位置・調査の時期と方法が検討された。本調査に先立ち、遺構の依存状況を確認する第1次調査が昭和64年に実施され、その結果、掘立柱建物群・池跡などが発見され遺構の残存が良好であることが確認された。この調査結果を受けて、新校舎の建設位置は削平が著しい南寄りに、仮校舎はグラウンドの有効な活用を加味してグラウンド西端に建設することになった。第2次調査は仮校舎建設にともない行われたが、仮校舎では地桁周りと便漕部分が採掘りされるため計画位置を中心に調査を実施した。引き続いて平成元年(1989)の秋には新校舎建設に先だって第3次調査が、翌平成2年には新校舎周辺の上水道工事・地下ケーブル埋設の電気工事・自転車置き場など掘削を伴う設備関係施設予定地を対象にして調査が行われた。これら新校舎建設に伴う調査が終了した後、旧校舎跡地の新体育館建設予定地の調査に着手し、平成3年には約7ヶ月間の長期にわたり第5次調査が実施された。新体育館の設備および東側の通路の舗装工事に伴って平成4年には第6次調査が行われ、この第6次調査を最後に、校舎・体育館新築、設備工事に伴う一連の発掘調査は終了した。

2．調査の方法と経過

1次～6次調査のそれぞれの調査区域を第5図に示し、調査期間・主要遺構については第2表にまとめた。

第1次調査：遺構の遺存状況を確認するためのものであったため、調査区は校舎の間の空き地に任意に設定した。Ａ－1区では掘立柱建物群を確認、Ａ－2・3区では近世の整

第２表　調査一覧表

調査	調査期間	面積	原因	主要検出遺構
1次	'88. 7/26～8/26	225㎡	確認調査	掘立柱建物跡, 池跡, 溝跡
2次	'89. 4/24・25	180㎡	仮校舎建設	溝跡
3次	'89. 8/22～10/27	2,700㎡	新校舎建設	掘立柱建物跡, 池跡, 井戸跡, 溝跡, 道路跡, 通路状遺構
4次	'90. 7/10～10/18	2,100㎡	設備関係工事	掘立柱建物跡, 井戸跡, 竪穴状遺構, 溝跡, 道路跡, 土塁跡
5次	'91. 4/3～11/7	2,200㎡	新体育館建設	礎石建物跡, 掘立柱建物跡, 柱穴列, 池跡, 井戸跡, 溝跡, 石列
6次	'92. 8/17～11/11	1,000㎡	設備・舗装工事	礎石建物跡, 掘立柱建物跡, 井戸跡, 溝跡

地層と、池跡・溝跡・ピット等を検出。一部層位的関係と旧地形を知るために深掘りを行い断面図を作成した。

第2次調査：おもに仮校舎の便漕部分のトレンチ調査。北西側では戦後の盛土が厚く0.7m～1.6mにも及ぶことが判明した。中央区域では溝跡を検出。

第3次調査：新校舎建設予定地の事前調査。建設部分にＣ－1区～4区を設定。調査のうちＣ－1区では南辺の東西軸を基準線として、これに直行する南北方向の基準線を設定して3m方眼のグリッドを組む。グリットは基準杭Ａからの距離によってE3N3と言うように名称を付した。北寄りで検出されたＳX01・02池跡では堆積土の掘り上げに重機を使用したため、出土遺物の層位的把握に一部難を生じた。

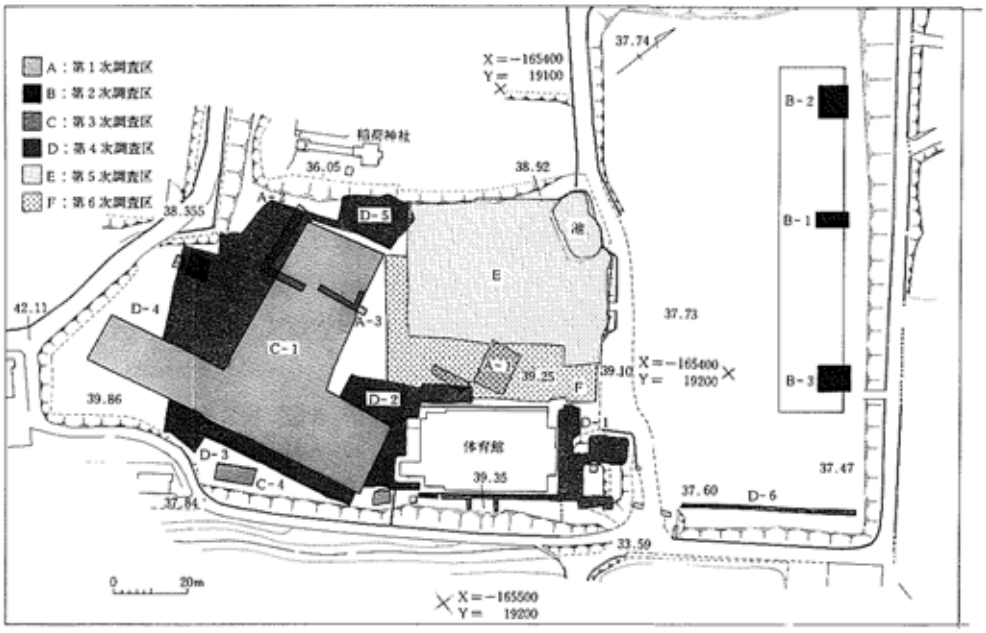
第4次調査：新校舎の設備関係工事に伴う調査。Ｄ－1～6区。校舎建設工事と平行する形で進められたため、一部の調査区では工事工程に併せて調査を進める。Ｄ－1・2区では調査区全体に、他の地区では遺構が検出された部分をおもに任意の基準線を設定し、3m単位のグリッドを組む。

第5次調査：新体育館建設に伴う事前調査。第4次調査Ｄ－2区基準線にあわせ、3m単位のグリッドを組む。西側の厚い整地層と複雑な遺構群のため、調査期間が予定より膨らみ、約7ヶ月間を要した。整地層出土遺物の取り上げは東西2グリッド・南北3グリッドを1区画として行った。

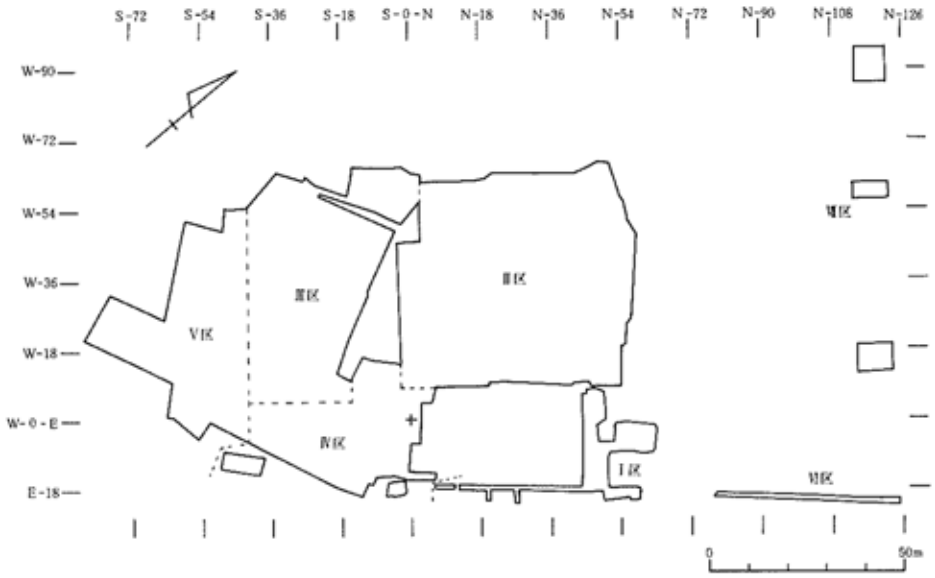
第6次調査：新体育館の設備関係工事および通路舗装工事にともなう調査。グリッドは第5次調査と同様に設定した。工事との関係で体育館設備区域(新体育館南側)を先行して調査を行い、通路区域(新体育館東側)はそれが終了してから進めた。通路区域は工事のおよぶ深度が小さいため、調査による遺構の掘り下げ、断ち割りは必要最小限にとどめた。遺物の取り上げは3m区画で行った。

遺構の平面図は各調査とも1/20で作成し、一部の調査区は平板測量によって1/100で、断面図は1/20でそれぞれ作成した。調査中の写真撮影は、モノクロとカラーリバーサルによって行った。なお、第3次および第5次・6次調査の際には、現地説明会を開いて調査成果を公表した。

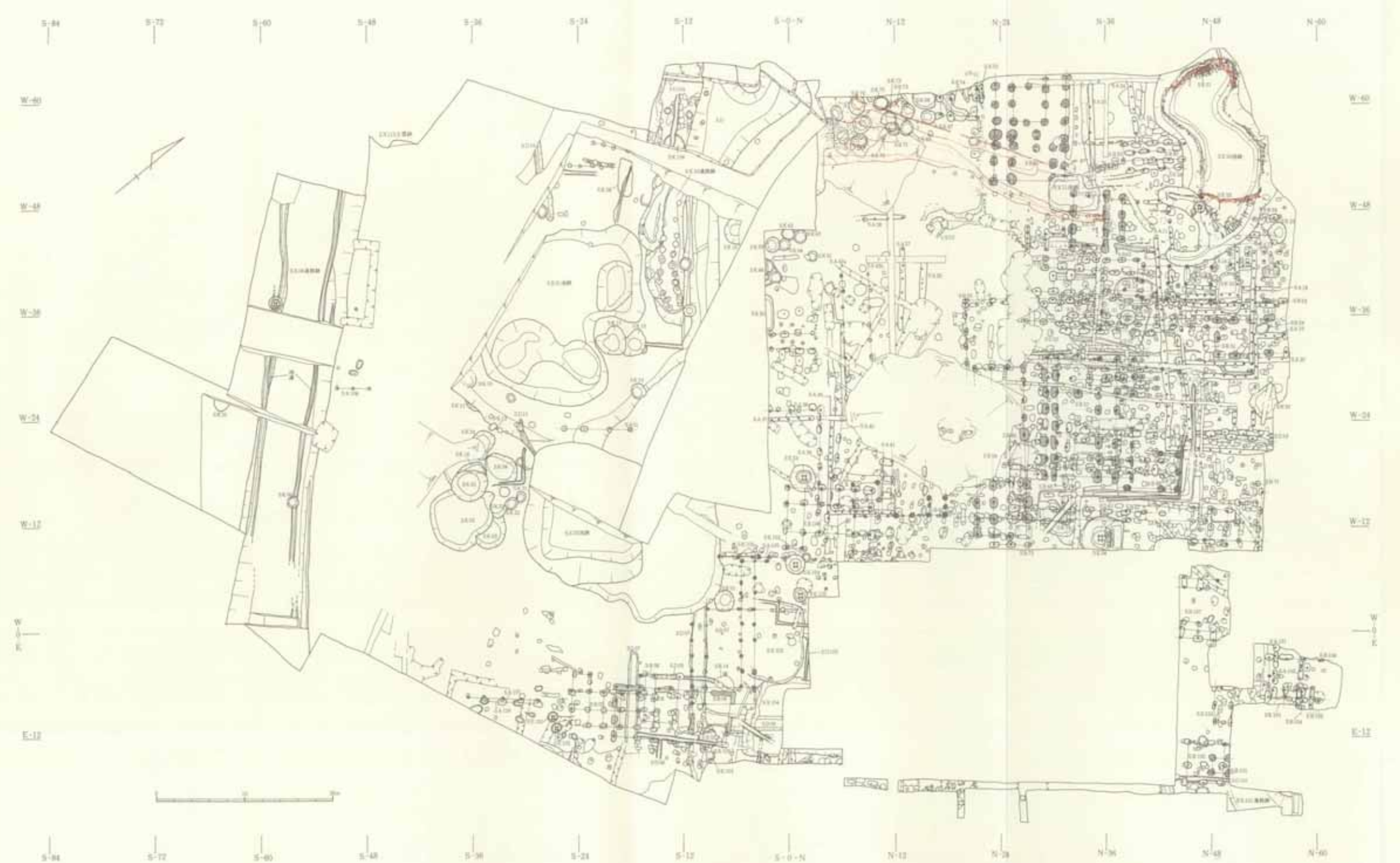
以上のような調査経過を経ているが、グリッドの設定においては1次・2次・3次と4次～6次調査ではそれぞれ異なっているため、本報告では第6図のように第4～6次調査のグリッドに合わせて統一しておく。このグリッドの南北軸は、国家座標の座標北から38°50′東偏し、E-3とN-15ラインの交点の座標値は、X＝-165,468.822m、Y＝19,145.751mである。また、各年次の調査区がそれぞれ入り組んでいるため、あらためてⅠ～Ⅶ区にまとめ、これからの説明はこれらの区にもとづいて行うことにする。



第5図　調査区位置図



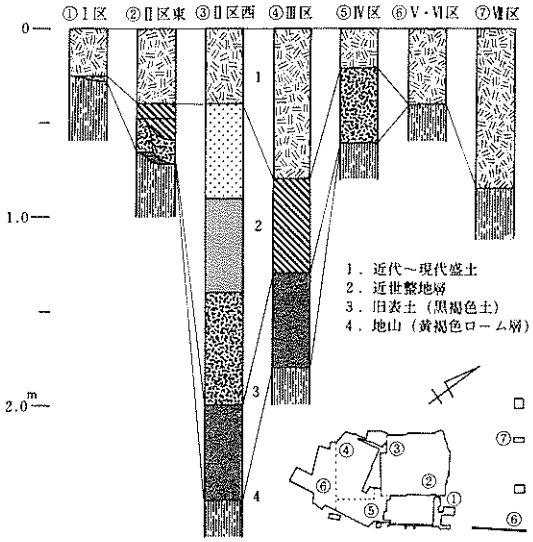
第6図　グリッド配図


S-84
S-72
S-60
S-48
S-36
S-24
S-12
S-0-N
N-12
N-24
N-36
N-48
N-60
W-60
W-48
W-36
W-24
W-12
E-12

第７図　遺構全体図

第IV章　層序

前にも述べたように、戦後の学校造成時に削平を受けているため全体的に上層部は残存しておらず、東側から南側にかけては近世の整地層～旧表土(黒褐色土)は全く残っていないか、あるいは部分的に浅く残っているのみである。ただし、西側(稲荷神社側)ではもともとの地形が西の神社側へ傾斜する地形であったため、館の造成の際に斜面に盛土をしており、厚いところでは約2.0～2.5mの整地層が確認されている。



第８図　層序模式図

整地層は複雑で層の認識が非常に困難なこともあって、同じ区域内であってもそれぞれの整地層の対応関係を捉えることは極めて難しく、1次～6次調査の整地層のつながりを厳密に捉えることはほとんど不可能である。したがって、それぞれの調査区の整地層の対応関係は大きく捉えざるをえないが、ほぼ以下のようにまとめることができるものと考えている。

盛土；近代～現代。近代以降の耕作土と学校造成時の盛土。層厚25～80㎝。

整地Ⅱｂ；近世(18世紀後半～19世紀)。東側では削平のため残っていないが西側区域では厚いところでは50㎝ほどある。1次～4次調査の整地Ⅱ・Ⅲの一部、第5次調査の西区3層、東区2・3層の一部などが対応する。

整地Ⅱａ；近世(17世紀末－18世紀)。1次～4次調査の整地Ⅱ・Ⅲの一部、第5次調査の西区4・5層、東区2・3層の一部が対応する。中央～西側にかけて分布。層厚20～70㎝。

整 地 Ⅰ；近世(17世紀)。1次～4次調査の整地Ⅱ・Ⅲの一部、第5次調査の西区6～8層、東区4・5層が対応する。東側ではほとんど残っていないが、中央から西側にかけて層厚10～60㎝。

旧 表 土；近世以前の黒褐色土(自然堆積)

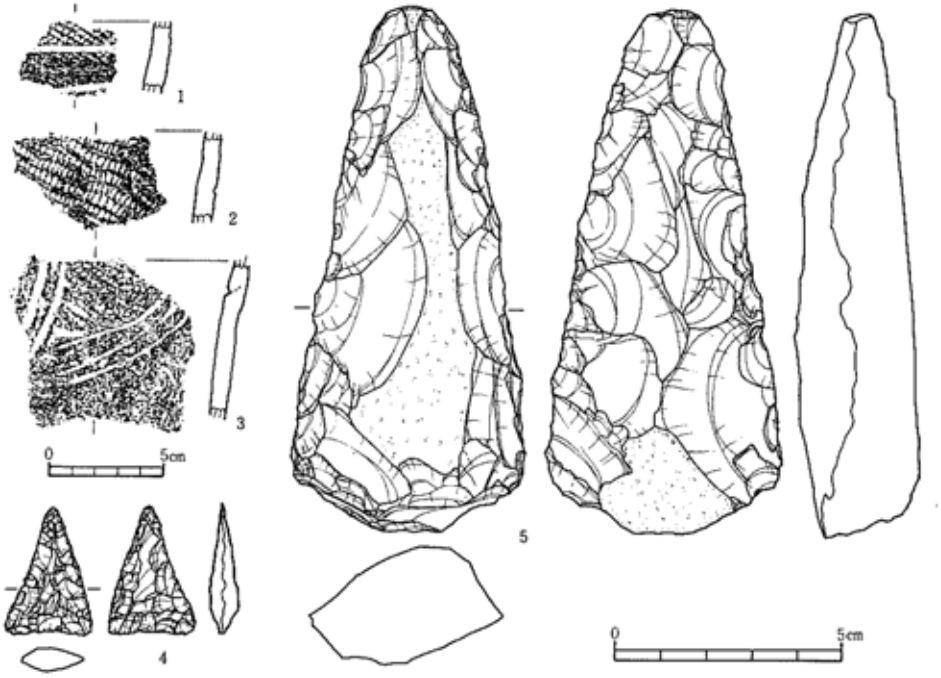
なお、第3次調査時に整地IVとしたIV区東側(Ｃ－1東側)の整地層は、本報告では整地Ｉの一部と捉えなおしておく。

第Ⅴ章　遺構と遺物

1. 縄文時代

第3表に示したように、主としてⅡ区の近世の整地層および遺構から縄文土器・石器が若干数出土している。縄文時代の遺構は確認されていない。これは、上野館の造成の際に館の北西部に隣接する縄文時代の上野遺跡の一部を破壊した結果、その遺物が紛れ込んでしまったためであろう。Ⅱ区に出土が多いのはそのためと考えられる。

土器は小片で摩耗しており大半は判別が難しいが、中には縄文中期後葉から後期前葉にかけてのものとみられる第9図-1・3のような磨消し縄文の土器片が含まれている。石器は、石鏃・ヘラ状石器・石斧・尖頭器・スクレイパーなど18点が出土している。第9図―4は珪化凝灰岩製の無茎の石鏃、5は両面に自然面を残す珪質シルト岩製のヘラ状石器である。



No.	種　類	地区－遺構－層位	備　　考	写真図版
1	縄文土器	Ⅱ　整地Ⅱ	外面：縄文(LR) 区画沈線＋磨消し縄文　内面：ミガキ	18－1
2	縄文土器	Ⅱ　ピット	外面：縄文(LR) 内面：ミガキ	2
3	縄文土器	Ⅱ　旧表土	外面：縄文(LR) 区画沈線＋磨消し縄文　内面：ミガキ	3
4	石　鏃	Ⅱ　整地Ⅰ・Ⅱ	珪化凝灰岩。長2.8cm、幅1.9cm、厚0.6cm	4
5	剥片石器	Ⅱ　整地Ⅰ・Ⅱ	珪質シルト岩。長11.7cm、幅5.2cm、厚0.6cm	5

第９図　縄文時代の遺物

第３表　縄文土器・石器、土師器、須恵器集計表

（注）土器の数値は破片数

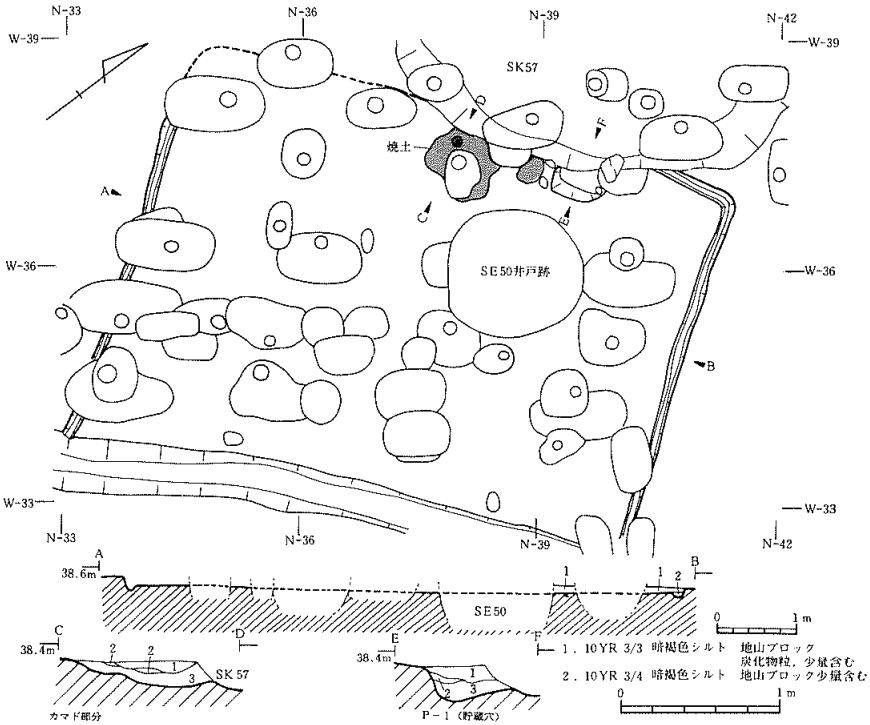
地区	遺物 / 遺構一層位	縄文								古代										
		縄文土器	石器							土師器							須恵器			
			石鏃	へら状石器	石斧	スクレイパー	尖頭器	すり石	剥片	坏	高坏	甕	鉢	甑	ミニチュア土器	不明	坏	高台付坏	甕	壺	不明
Ⅰ区	盛土・不明・撹乱															1					
	その他の遺構										1					2					
Ⅱ区	盛土・不明・撹乱	2							1			1	1	1		33			1		2
	整地Ⅰ・Ⅱ	4	1		1	2	1		4	3	1	1	2		1	217		2	17	1	11
	池跡　SX50（新）				1						1					13					2
	SX50（旧）			1							1										2
	井戸跡SE54							1								2					
	土壙　SK59															4					
	溝跡　SD51									1											
	SD52									1						1					
	SD61					1										1					
	竪穴住居跡S101									5	1	8				21					
	その他の遺構	2				1		1				2				64			14		3
Ⅲ区	整地Ⅰ・Ⅱ															1					
	池跡　SX02											1									
Ⅳ区	盛土・不明・撹乱									8		3		1		28	1		3		
	整地Ⅰ・Ⅱ								1	7		7				40	1		1		
	土壙　SK103									3		2				5					
	SK105									2						1					
	竪穴状遺構SX103		1													4					
	SX104											1				5					
	溝跡　SD03									1						2					
	SD04															1					
	SD05									1											
	SD09															2			1		
	SD10									1						7					
	カマド跡　SX05									1						5			1		
	その他の遺構									4	1					20	1				
Ⅶ区	盛土・不明・撹乱															2			2		
合計		8	2	1	2	4	1	2	6	38	6	26	3	2	1	482	3	2	40	1	20

2. 古代

Ⅱ区中央北寄りで竪穴住居跡が1軒検出された。館造成の際に削平を受けているため確認できたのは遺存状況の悪いこの1軒のみであるが、複数軒存在した可能性もある。遺物は、調査区の東側中央部から北西部にかけての近世の整地層・遺構およびこの竪穴住居内から土師器・須恵器片が数多く出土している。竪穴住居内出土遺物を除いてはほとんどが破片資料である。

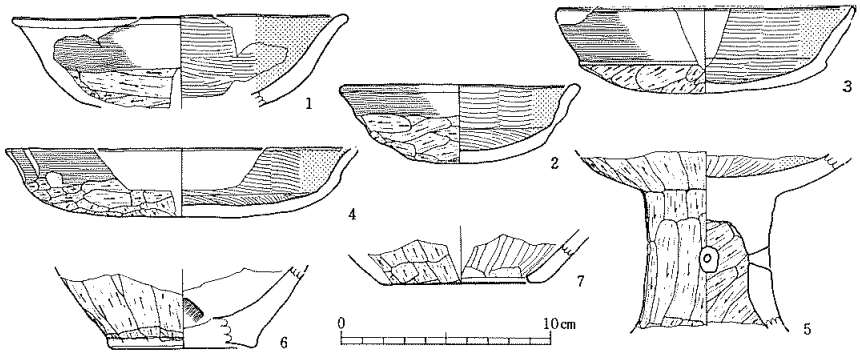
【ＳＩ01竪穴住居跡】(第10図、写真図版17・18)

Ｗ－36・Ｎ－39付近の地山面で確認した。この住居跡は館造成時の整地地業や遺構によ



No.	色調	土性	備考
1	暗赤褐色(2.5YR3/6)		焼土。
2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	

No.	色調	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土粒微量含む。
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土ブロック多量含む。
3	明褐色(7.5YR5/8)	粘土	掘り方埋土。焼土ブロック多量含む。



No.	層位	器種	外面	内面	外面色調	内面色調	器高cm	口径cm	底径cm	写真図版
1	床	土師器坏	口縁部：横ナデ 胴底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	黒褐色	黒褐色	(4.6)	16.0		
2	床	土師器坏	口縁部：横ナデ 胴底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	明黄褐色	黒褐色	3.8	11.5		18－6
3	床	土師器坏	口縁部：横ナデ 胴底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	明黄褐色	褐灰色	4.0	14.1		7
4	床	土師器坏	口縁部：横ナデ 胴底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	橙色	黒褐色	3.3	16.9		8
5	カマド	土師器高坏	坏部・脚部：ヘラケズリ	坏部：ヘラミガキ→黒色処理 脚部：ヘラケズリ	明黄褐色	黒褐色				10
6	床	土師器甕	底部：ヘラケズリ	軽いヘラナデ	にぶい褐色	にぶい橙色			(7.1)	
7	カマド	土師器甕	底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい褐色	明黄褐色			(7.6)	

第10図　SI01竪穴住居跡と出土遺物

ってかなり削平と破壊を受けており、南と北の壁と北西コーナー付近が残存するのみである。平面形は方形を基調とし、規模は南北で約7mを計る。堆積土は地山ブロックと炭化物粒を少量含む暗褐色のシルト層が1層確認されたのみである。床面はほぼ平坦であり、壁は残存高5～12cmで、やや急角度に立ち上がっている。柱穴と思われるピットは確認されなかった。周溝は西壁の一部と南と北壁で確認されている。上幅15cm前後、深さは5～15cmで断面は「U」字状を呈する。カマドは遺存状況が悪く、天井部や側壁などの施設そのものは確認されなかったが、西辺中央付近に焼け面が確認されている。貯蔵穴状ピットは西辺北寄り、焼け面の右側で確認されている。後世のピットや土壙により西側部分が壊されているが、長さ70cmほどが残存し、深さは約24cmである。堆積土は3層に分けられ、すべての層に焼土粒やブロックが混入する。

[出土遺物]すべて土師器で、破片資料も含めると床面から坏5点・高坏1点・甕1点、カマド内焼土層から坏1点・甑1点、カマド掘り方から甕1点、周溝から坏1点、堆積土中から坏1点の計12点が出土しており、そのうち実測可能な7点を図示した(第10図下)。1～4は坏である。1は口縁部が外反し、底部は欠損のため明らかではないが、残存部から丸底であると考えられる。口縁部と胴部との境は緩やかに屈曲し、外面に軽い稜線がつく。2も口縁部が外反し底部は丸底であるが、口縁部と胴部との境は屈曲し、外面に軽い稜線がつく。3は口縁部がやや内湾し、底部は丸底である。口縁部と胴部との境は外面に明瞭な段と沈線、内面に稜線を有する。4は器高が低く、やや皿状となっている。口縁部が外反し、底部はやや平底気味の丸底である。口縁部と胴部との境は緩やかに屈曲し、内外面ともに軽い稜線を有する。器面調整はすべて外面では口縁部が横ナデ、胴・底部はヘラケズリ、内面がヘラミガキで、黒色処理がなされている。5は高坏であるが、坏部上半と脚部の裾を欠損しているため全体の形状は不明である。坏底部は丸底である。脚部は柱状で1個の粗末な円窓がつく。器面調整は、坏部外面・脚部内外面はヘラケズリで、坏部内面がヘラミガキと黒色処理である。6は甕の底部、7は無底式の甑であるが破片のため全体の器形は不明である。調整は外面はともにヘラケズリ、内面は6が軽いヘラナデ、7がヘラミガキである。

以上のような出土遺物、特に土師器坏と似た特徴を持つものとして近隣の遺跡に類例を求めると、一里塚遺跡(宮城県教委1990ａ)第11号竪穴住居跡出土の坏などがあげられる。これらについて7世紀末～8世紀初頭の年代が与えられており、当住居跡の出土遺物も概ね同様の年代が推定される。

3．近世

(1) 遺構

①Ⅰ区：「表門」付近(第11～14図、第4表、写真図版3)

この地区は第4図の絵図によると、館跡の表門およびその周辺に相当する場所であるが、戦後の学校建設や水道タンク増設工事で破壊を受け、場所によっては削平が大きく及んでいる。調査の結果、現地表面から約25cmが学校造成時の盛土で、その下位は地山面(遺構検出面)になり近世の整地層は部分的にわずかに残っていたにすぎない。

発見された遺構は、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟、柱穴列3列、土壙1基、溝跡1条、通路跡1条、多数の柱穴などである(第4表)。ただし調査区が狭いこと、主たる部分が水道タンクなどで破壊されていることからいずれも部分的な確認である。

礎石建物跡

【ＳＢ101】表門の一部と推定される遺構である。径約80～90cm、深さ10cm前後の不整円形の浅い掘り方の中に拳大の礫あるいは礫の抜き取り痕が残る(第12図)。4個が約2m間隔で方形に検出され、さらに北側に展開すると考えられる。ＳＢ102掘立柱建物跡と重複するが直接の切り合い関係はない。

掘立柱建物跡

【ＳＢ103・104】ともにＳＢ101掘立柱建物跡と柱筋を揃え、東西棟と考えられる。ＳＢ103と他の遺構との重複はないが、ＳＢ104はＳＢ105・106掘立柱建物跡、ＳＡ103柱穴列、ＳＫ101土壙と重複し、いずれにも切られており、この地区で最も古い段階の建物跡である。この2つを1体の建物跡とするとその規模は東西5間・南北2間となり、中央の3間分(約6

第４表　Ⅰ区検出遺構

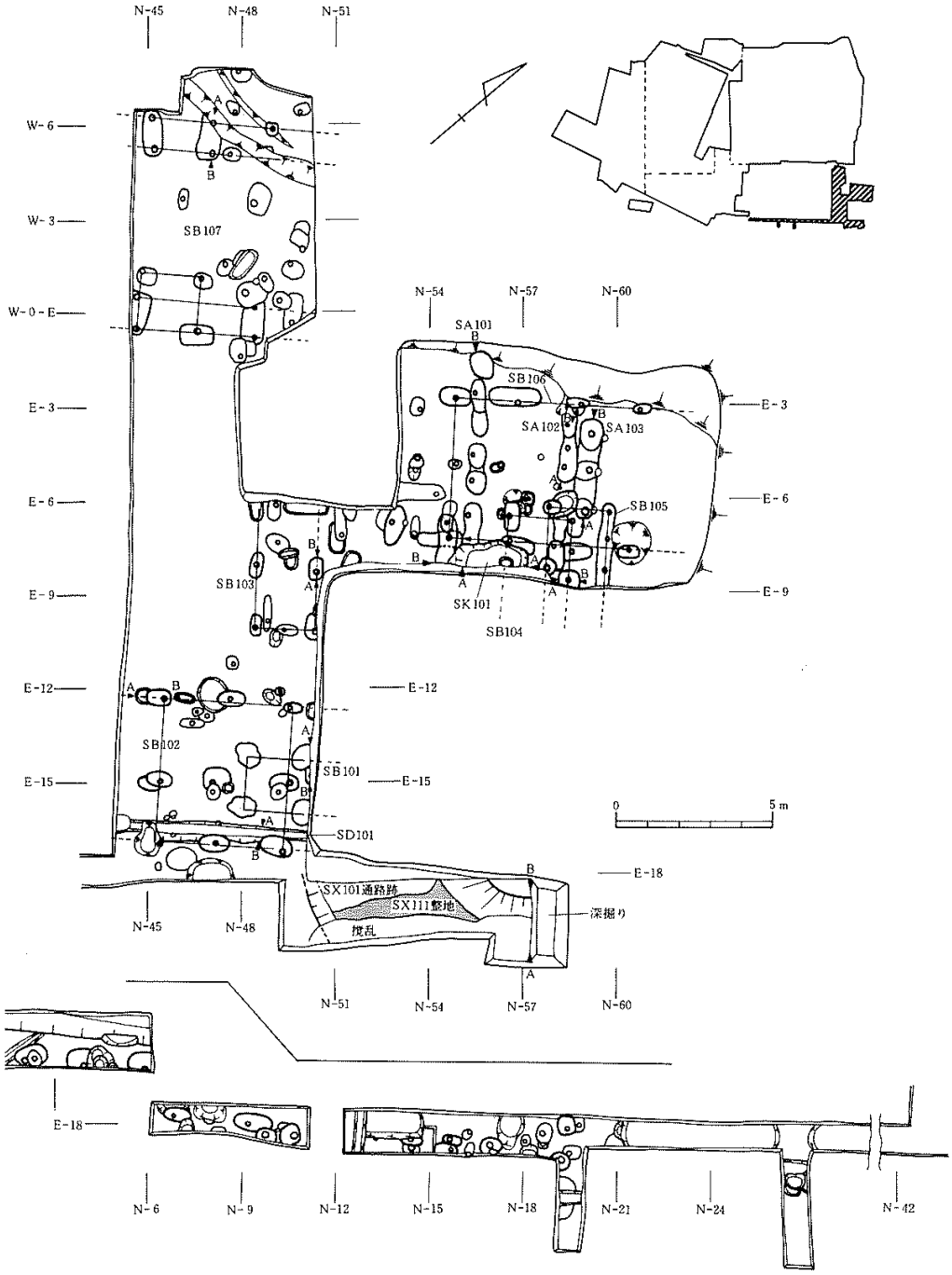
遺構名	確認面	棟方向	規模	柱間寸法	備考
礎石 SB101	地山	南北?	(桁)1間以上×(梁)1間	(桁・梁)2.0m	SB102と重複。
掘立柱SB102	地山	南北	(桁)2間以上×(梁)2間以上	(桁)2.1m　(梁)2.1・2.4m	抜取りや切取りの痕跡あり。
103	地山	東西	(桁)2間以上×(梁)1間	(桁・梁)1.9～2.0m	SB101と柱筋を揃える。
104	地山	東西		(桁)1.9m　(梁)2.0m	SB103と対の建物か?
105	地山	東西	(桁)1間以上×(梁)1間	(桁・梁)1.9m　北列2間割 0.9・1.0m	北列の掘り方は布掘り状を呈する。
106	地山・整地	南北	(桁)3間以上×(梁)1間	(桁西)1.9～2.0m(桁東)1.8～2.0m(梁)4.5m	
107	地山	南北	(桁)2間以上×(梁)1間	(桁)1.9m　(梁)6.6・6.7m	

遺構名	確認面	方向	布掘り状(A)・穴列(B)	確認長	柱穴数	柱間寸法	備考
柱穴列SA101	地山	東西	A	約3.9m	4	0.9～1.0m	(埋土)黄褐色地山ブロック＋小礫
102	地山	東西	A	約3.9m	2	60cm	(埋土)黄褐色地山ブロック
103	地山	東西	A	約2.5m	1	1.25m・1.3m	(埋土)暗・黒褐色シルト＋地山ブロック

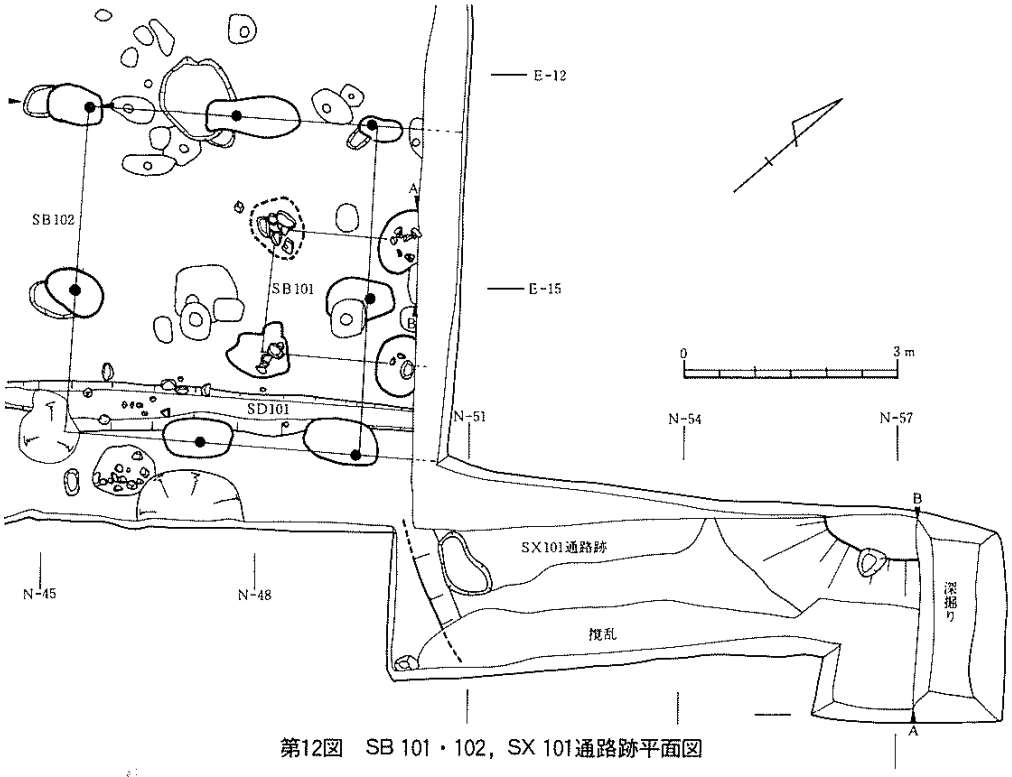
遺構名	確認面	形態	径(長×短)	深さ	備考
土壙 SK101	――	隅丸長方形	約2m×約1m	20～35cm	擂鉢片・灯明皿(カワラケ)・軒平瓦片?・丸瓦片・煙管出土

遺構名	確認面	方向	長さ	幅	深さ	備考
溝跡 SD101	地山	北→南	6m以上	約50cm(掘り方1m)	10～25cm	溝の肩に補強のための河原石が貼り付く。

遺構名	確認面	方向	長さ	幅	備考
通路跡SX101	地山	南西→北東	――	上幅約6m・下幅約4m	盛土中から近世～現代までの陶磁器・瓦出土。



第11図　Ⅰ区遺構平面図



第12図　SB 101・102，SX 101通路跡平面図

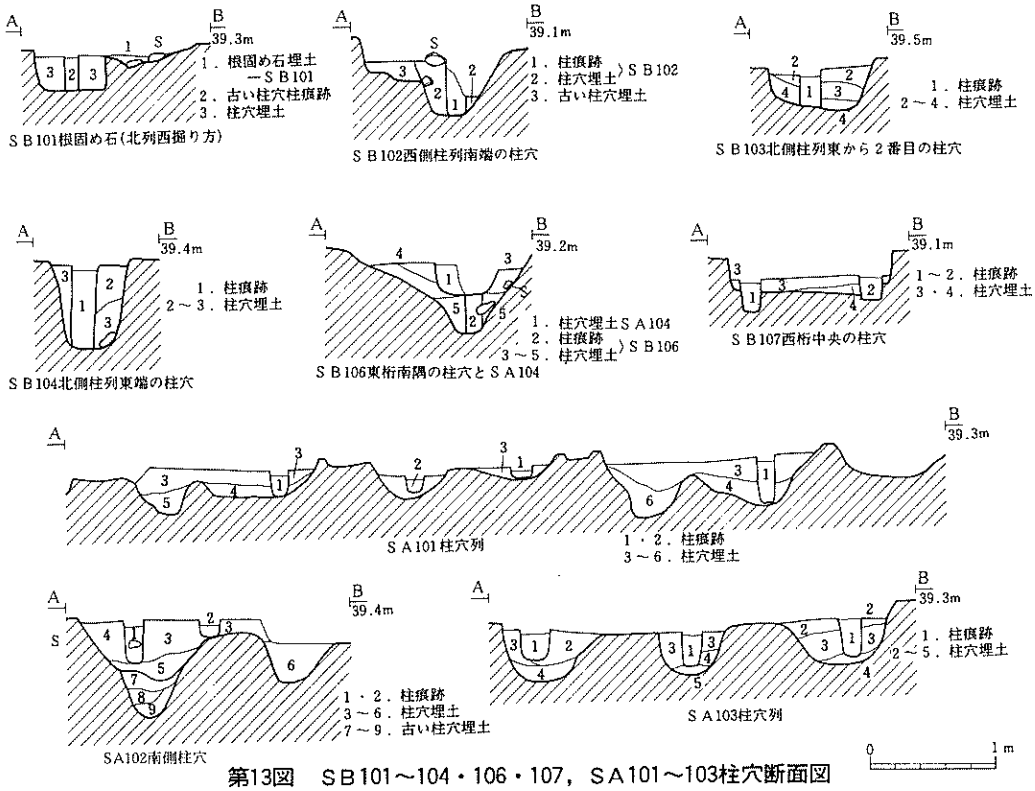
m)はＳX101通路跡の幅と一致する。位置と規模から考えて古い段階の表門の可能性も考えられる。

【ＳB106】ＳB104・105掘立柱建物跡、ＳA101～103柱穴列、ＳK101土壙と重複し、ＳB104・ＳA101を切り、ＳB105・ＳA102・ＳK101に切られるが、ＳA103との新旧関係は不明である。ＳB101と同時期の遺構と考えられる。

【ＳB107】地山面で検出した。検出された部分では桁行2間以上、梁行1間の南北棟であるが、より規模の大きい建物の一部である可能性も考えられる。柱間寸法は桁行が1.9m等間、梁行きが6.6m・6.7mである。柱穴は長辺1.2m前後・短辺60～70cm・深さ40～70cmの隅丸長方形を呈し、そのほとんどに90cm間隔で2個の柱痕跡が見られる。2個のうち内側の柱痕跡や東側桁列の内側に並ぶ、やや小さめの柱穴は床束的なものと考えられる。埋土には微量の炭化物を含み(第13図)、柱痕跡は径15～20cmの円形である。「表」の建物群の一部と考えられる。西桁南隅の柱穴から灯明皿が、東桁中央の柱痕跡から寛永通宝が出土している。

柱穴列

東西に延びる3本の柱穴列が地山面で検出された。これらはそれぞれ並行するものの



第13図　ＳＢ101～104・106・107，ＳＡ101～103柱穴断面図

ＳＡ102とＳＡ103は重複し、前者が後者を切っている。柱穴はＳＡ101～103すべて布掘り状を呈し、柱埋設部分は深く掘り下げられている。

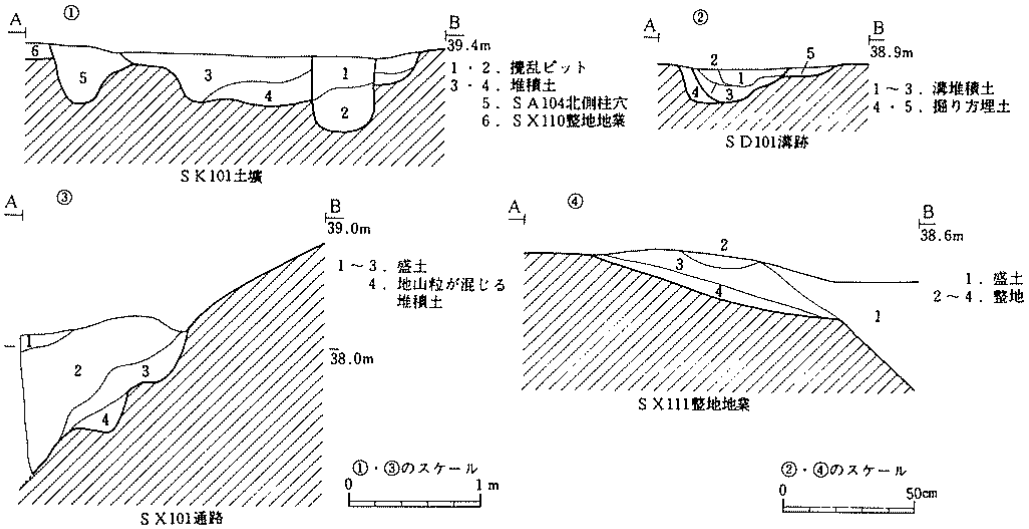
【ＳＡ101】4個の柱穴が確認されたが、本来は1本の布掘り柱穴列であったものが上部の削平により個々に分断された可能性も考えられる。

【ＳＡ102】2個の柱穴が確認されたが、ＳＡ101同様本来は1本の布掘り柱穴列であった可能性が考えられる。ＳＢ104～106掘立柱建物跡・ＳＡ103柱穴列と重複し、ＳＢ104・106・ＳＡ103より新しく、ＳＢ105より古い。柱穴から外面にナデ調整がある丸瓦小片が出土している。

【ＳＡ103】ＳＢ104～106掘立柱建物跡・ＳＡ102柱穴列と重複し、ＳＢ105・ＳＡ102に切られるが、ＳＢ106との新旧関係については不明である。

土壙

【ＳＫ101】ＳＢ106掘立柱建物跡を切り、A区の遺構の中で最も新しいものである。東側が撹乱を受けており全体の規模は不明である。残存する形状は長辺約2m・短辺約1m・深さ20～35㎝の隅丸長方形である。地山ブロックを多量に含む褐色・暗褐色のシルトで人為的に埋められており、層中からは摺鉢片・灯明皿(カワラケ)・軒平瓦片？・丸瓦片・煙管などが出土している。



第14図　ＳＫ101，ＳＤ101，ＳＸ101・111断面図

溝跡

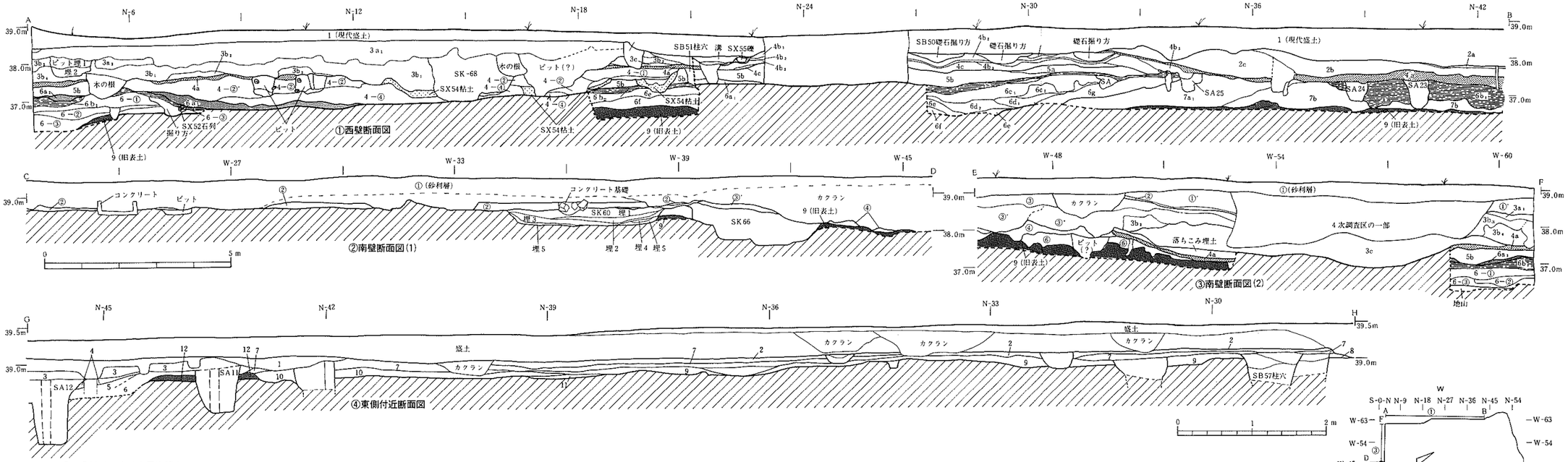
【ＳＤ101】ＳＢ101礎石建物跡の東辺沿いを南北方向に走っており、地山面で検出された。ＳＢ102掘立柱建物跡に切られている。幅約50㎝、深さ10～25㎝で、約1m幅の掘り方をもつ。壁面には部分的ではあるが10～20㎝大の比較的扁平な河原石が貼り付いている部分や石の抜き穴などが認められ、これらは溝の肩を補強していたものと考えられる。

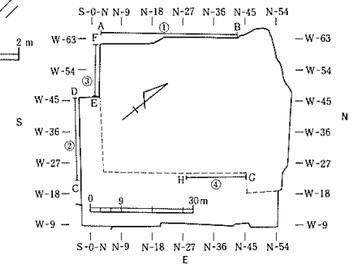
通路跡

【ＳＸ101】ＳＢ101礎石建物跡・ＳＢ102掘立柱建物跡の北東側で検出された地山を掘り込む浅い溝状の遺構(第12図)で、表門に通じる通路と考えられる。上幅で約6m・下幅で約4mを測り、右斜め方向(北東方向)から延びている。底面には地山の部分と整地された部分がある。また側壁は断面観察により地山を段階状に削り出している可能性が考えられた。遺構面までは厚い盛土がなされており、盛土中から近世～現代までの陶磁器類・瓦類が多量に出土している。

②Ⅱ区：「表」中央付近(第15～27図、第5・6表、写真図版4～10)

この区域は西側ほど近世の整地層が厚く残っている(第15図)。これはこの区域がもともと西の神社側へ傾斜する地形であり、館造成の際に東側の高い部分を削平し、西側の低い区域に盛土をして平坦面をつくりだしているためである。周囲より地形が低かった西(南西)側ほど厚く、南西部では約2～2.5mの整地(盛土)が確認された。これらの整地は何時期かにわたって行われており、遺構はこれらの整地層を挟んで検出されている。一方、周囲よりやや高い東～南東部にかけては、後世の削平によって上層が削られてしまい、整地層は全く残っていないかあるいは20～30㎝しか残っていなかった。





①～③西壁・南壁土層注記表

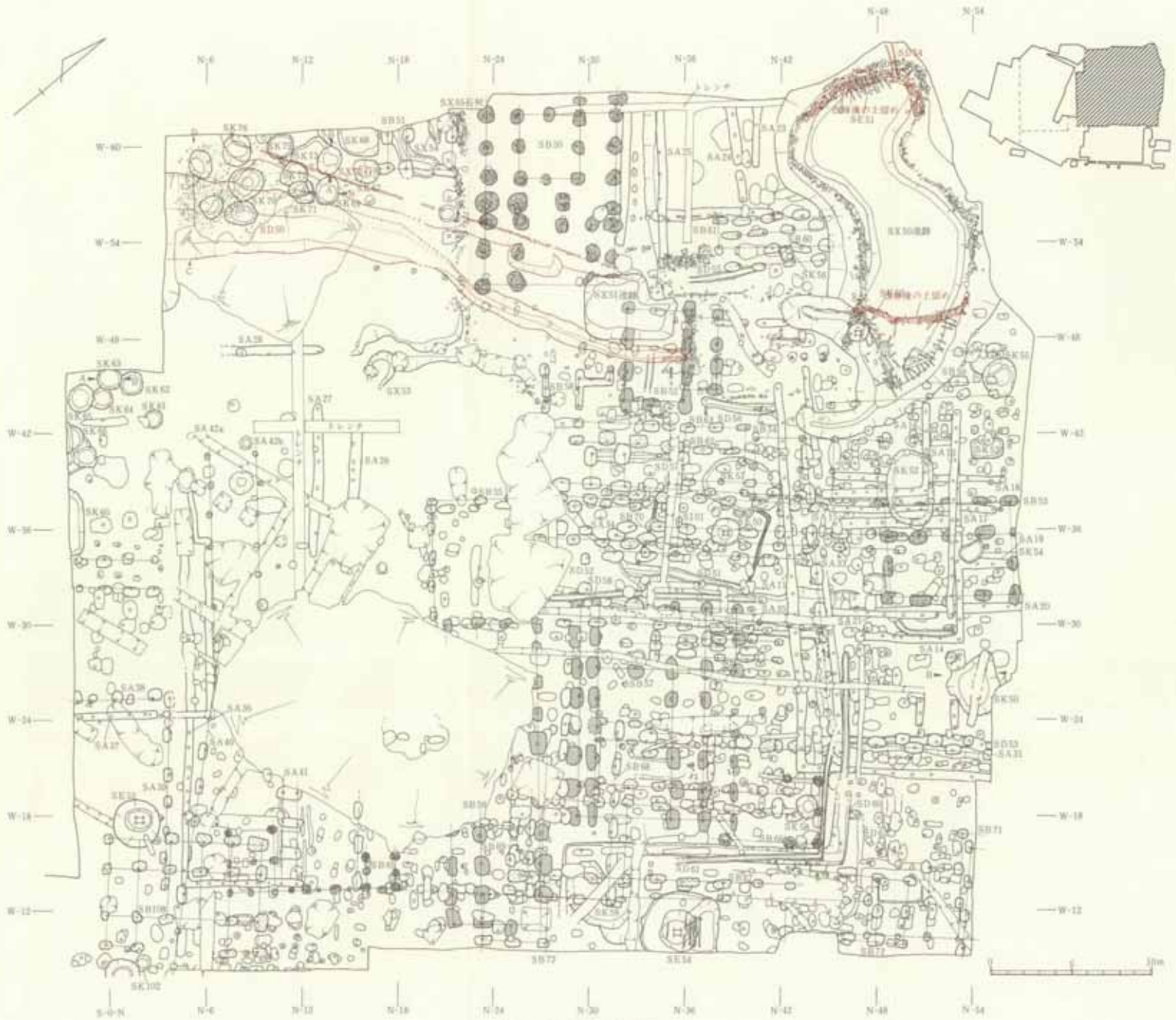
層	序	土色	土性	備考	
1		暗褐色(10YR3/3)	シルト	現代盛土。明黄褐色(10YR6/6) シルトなどが不均質に混じる。	盛土
2 a		にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	近代～現代。一見して灰色っぽい。粘性なく砂質。炭化物(φ5mm以下)比較的多い。	
2 b		褐色(10YR4/4)	シルト	近代以降。耕作土層？小礫、炭化物(φ1cm以下)若干含む。しまり不良、粘性なし。	
2 c		浅黄色(2.5YR7/4)	シルト	近代以降？＋明黄褐色(10YR7/6)シルト地山層の盛土。しまり不良、粘性若干あり。	
3 a₁		褐色(10YR4/4)	砂質シルト	近代以降の整地の可能性あり。黄褐色凝灰岩ブロック(φ1～5cm)多く含む。乾燥するとクラックが多く入る。しまり良、粘性なし。	整地Ⅱ
3 a₂		にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	＋黒褐色(10YR2/3)シルト(下部)。上部には黄褐色凝灰岩ブロック(φ1～5cm)が多い。しまり不良、粘性なし。	
3 b₁		にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	＋褐色(10YR4/4)シルト。灰色がかって見え、乾燥するとクラックが入る。酸化鉄の沈着著しい。炭化物(φ1cm以下)比較的多い。しまり良、粘性なし。	
3 b₂		黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄褐色(10YR5/6)シルトがブロック状(φ5cm程度)に入り込む。炭化物(φ5mm以下)若干。しまり不良、粘性なくパサパサ。	
3 b₃		黄褐色(7.5YR5/8)	粘質シルト	暗褐色(10YR4/6)シルトが不均質に混じる。炭化物(φ5mm以下)若干。黄褐色～白色凝灰岩ブロック(φ1cm以下)多い。しまり不良、粘性ややあり。	
3 b₄		黄褐色(7.5YR5/8)	粘質シルト	混入物がほとんどなく均質でオレンジ色に見える整地。しまり不良、粘性ややあり。	
3 c		褐色(7.5YR4/4)	シルト	一見褐色の盛土。暗褐色(10YR5/6)シルトブロックがまだら状に混じる。比較的均質で、岩片のまじりは少ない。しまりは良、粘性なし。	整地Ⅱb
Ⅲ		黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物(φ1cm以下)、凝灰岩(φ1～2cm)多い。調査区中央の一部区域のみ分布。瓦が多い。3a～3c層との上下関係は不明。ただ、3dの直上にのる。	
3 d		明黄褐色(10YR6/6)	シルト	客土。灰褐色(7.5YR4/2)シルトが均質に混じる。円礫(φ5cm)若干。調査区西側一部区域に分布。	
3 e		黒褐色(10YR3/2)	シルト	にぶい黄褐色(10YR7/4)粘土ブロック、炭化物(φ1～3cm)多量。火災しくは火の熱段の痕跡か？しまり不良、粘性ややあり。	
4 a		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	区域により若干異なる。黄褐色凝灰岩(φ1～3cm)多く含む(区域あり。調査区南西では上部にオリーブ褐色砂(厚さ1～3cm)。炭化物(φ1cm以下)若干。	整地Ⅰ
4 b₁		明黄褐色(10YR6/6)	シルト	鉄岩建物建設時の盛土(以下4c層まで)。鉄岩建物区域のみ分布。凝灰岩(φ1～5cm)多く含む。乾燥するとパサパサ。粘性なく、しまり不良。	
4 b₂		黄褐色(10YR5/6)	シルト	4b₁に比べやや粘質で褐色味あり。明黄褐色シルトが不均質に混じる。SB50礎石建物付近の部分的な分布。根固め石の埋土となる場合あり。しまりあり。	
4 b₃		褐色(10YR4/6)	シルト	暗褐色(10YR4/4)シルトがまだら状に混じる。円礫(φ5cm)若干。粘性なく、しまり良。	地山
4 c		明黄褐色(10YR6/8)	シルト	＋褐色(10YR4/6)シルト。小円礫(φ1cm以下)若干。粘性なし、しまり良。	
4 ①		褐色(10YR4/4)	砂質シルト	小礫(φ1cm以下)比較的多い。砂質。しまり良、粘性なし。	Ⅱa
4 ②′		褐色(10YR4/6)	砂質シルト	やや灰色がかって見える。凝灰岩ブロック(φ1cm以下)多く入る。しまり良、粘性なし。	
4 ②″		にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	黄褐色～白色凝灰岩(φ1～5cm)多く含む。しまり良、粘性なし。	
4 ③		暗褐色(10YR3/3)	シルト	4①に比べやや黒味がある。混入物がほとんどない均質な層。しまり良、粘性なし。	
4 ④		にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	やや灰色がかっている。凝灰岩、小礫(φ2cm以下)の混入物多い。炭化物(φ1cm以下)若干。しまり良、粘性なし。	
5 a		褐色(10YR5/6)	粘質シルト	＋暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。前者の割合がやや高い。小礫(φ5cm以下)若干。しまり不良、粘性ややあり。	
5 b		暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色(10YR5/6)粘質シルトブロックが多く混じる。一部区域凝灰岩小礫混じる。しまり不良、粘性ややあり。	

層	序	土色	土性	備考	
5 a₁		褐色(10YR4/4)	シルト	＋黒褐色(10YR2/3)シルト。SX52石列を部分的に覆う層。白色～黄褐色凝灰岩ブロック(φ5mm以下)若干含む。しまり良、粘性なし。	整地Ⅰ
5 a₂		褐色(10YR4/4)	褐色シルト	黒褐色(10YR2/3)シルトが不均質に混じる。黄褐色凝灰岩ブロック(φ1～3cm)多く含む。しまり不良、粘性ややあり。	
5 b₁		暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色凝灰岩ブロックが多量に混じる。炭化物(φ5mm以下)若干。しまり不良、粘性ややあり。	
5 b₂		褐色(10YR4/4)	シルト	明黄褐色(2.5YR7/6)凝灰岩ブロック(地山)の混じりが多く、一見すると黄褐色の盛土。小礫(φ1cm以下)多い。しまり不良、粘性なし。	
6 c₁		暗褐色(10YR3/3)	シルト	明黄褐色(10YR5/6)シルトブロックが比較的多くはいる。6bに比べ黒味が強い。粘性なし、しまり不良。炭化物(φ1cm以下)、礫(φ5cm)若干。	
6 d₁		暗褐色(10YR3/3)	シルト	6cに比べやや灰色がかっており、しまりもある。炭化物(φ5mm以下)、小礫(φ5mm以下)若干含まれるが、比較的混入物は少ない。粘性なし。	
6 d₂		にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	浅黄色凝灰岩ブロックが多く入る。炭化物(φ5mm以下)若干。しまり不良、粘性ややあり。	
6 e		暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色(10YR8/3)シルトブロックを少し混じる程度。炭化物(φ1cm以下)多く入る。しまり不良、粘性ややあり。	
6 f		褐色(10YR4/4)	シルト	6bに似る。地山起源土が多く入る。しまり不良、粘性ややあり。	
6 g		褐色(7.5YR4/4)	シルト	上部には明黄褐色(10YR6/6)シルトが多い。炭化物は含まれない。礫(φ5cm)若干。しまり良、粘性なし。	
6 ①		黒褐色(10YR2/3)	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘質シルトが不均質に混じる。黄褐色凝灰岩ブロック(φ1～3cm)多く含む。しまり不良、粘性ややあり。	
6 ②		にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	＋浅黄色(5YR7/4)凝灰岩。地山土を客土したもの。しまり不良でパサパサ、粘性なし。	
6 ③		……	……	7aに類似。	
7 a₁		褐色シルト(10YR4/6)	シルト	＋暗褐色(10YR3/3)シルト。部分的に明黄褐色(10YR6/6)シルトが入る。しまり良、粘性ややあり。	Ⅰ
7 a₂		黒褐色(10YR2/3)	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトブロックを斑状に多く含む。しまり良、粘性なし。	
7 b		褐色(10YR4/6)	シルト	黒褐色(10YR2/3)シルト層との互層。小礫、炭化物などはほとんど混じらない。SK50池南側の一部にのみ分布。しまり良、粘性なし。	
8		暗褐色(10YR3/3)	シルト	凝灰岩、小礫(φ1cm以下)多い。西側中央付近のみ分布。黒褐色(10YR3/2)シルト(旧表土)に似た層が斑状に入る部分あり。	
9		黒褐色(10YR2/2)	シルト	旧表土。西側区域は2度に厚く残る。しまり不良、粘性若干あり。	
①		……	……	高校による砂利層。	盛土
②		黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	現代整地層。	
③		褐色(10YR4/4)	シルト	現代整地層。小礫(φ2cm以下)比較的多く含む。オリーブ褐色の砂のブロックがところどころに入る。	土
③′		褐色(7.5YR4/4)	粘質シルト	小礫、凝灰岩ブロック(φ1～3cm)多く入る。③″に比べ礫、凝灰岩ブロックが多い。しまり良、粘性ややあり。	整地Ⅱ
③″		褐色(7.5YR4/4)	粘質シルト	小礫、凝灰岩ブロック(φ1～3cm)若干入る。しまり良、粘性ややあり。	
④		暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	凝灰岩ブロック(φ1～2cm)が多く混じる。粘性ややあり。調査区西壁の4a層面に対応？ただ、層位が違うので区別しておく。	
⑥		黒褐色(10YR2/3)	シルト	黄褐色シルトブロック(φ　一 以下)を比較的多く混じえる。調査区西壁の6層もしくは7層に対応か？しまり良、粘性ややあり。	整地Ⅰ

④東側付近土層注記表

層No.	土色	土性	備考	大別	層位
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物を含み、黄褐色地山ブロックを微量に含むしまりの少ない耕作土層。	1 b	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	多量の地山ブロックと微量の炭化物を含む整地層。	2	整地Ⅱ
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	北側ほど炭化物、地山粒を多く含む整地層。	3	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	多量の地山ブロックと少量の炭化物を含む整地層。	4	整地Ⅰ
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む整地層。		
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	少量の炭化物と微量の地山粒を含む整地層。		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	2層に似ているが、酸化鉄を多くふくみ、黒褐色10YR2/3シルトが混じる整地層。	5	
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む層。遺構の埋土？		
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物、地山粒を少量含む整地層。		
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	7層に似ているが、地山ブロックが主体の整地層。		
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む整地層。		
12	黒褐色(10YR2/3)	シルト	旧表土。しまりのある自然堆積層。	6	

第15図　Ⅱ区調査区断面図



第16図　Ⅱ区遺構平面図

第５表　Ⅱ区検出遺構（１）

遺構名	確認面	棟方向	規模（桁×梁）	柱間寸法	備考
礎石　SB50	整地Ⅱa	東　西	7間以上×4間	(桁・梁)1.2m、1.8m～2.1m	礎石抜取り痕あり。絵図に見られる「御裏所」か。
SB65	地　山	南北？	6間×2間以上	(桁・梁)1.8～1.9m(間に束柱)	掘り方径40～50cm。西側は削平と攪乱のため不明。
SB66	整地Ⅱb	南北？	3間以上×2間以上	(桁・梁)2.0m前後	根石は痕跡的に残る。SD61、SK58を切り、新しい段階の礎石建物。
掘立柱SB51	整地Ⅱa	南北？	3間以上×2間以上	(桁・梁)0.9m、2.1m	SX54粘土貼り遺構を切る。掘り方１個の中に柱痕跡が２個の柱穴あり。
SB52	整地Ⅱa	東　西	3間×2間	(桁・梁)1.9m～2.0m	SD50を切る。北辺に廂（入口）か？
SB53	地　山	南　北	4間以上？×3間	(桁)1.9～1.95m(梁)1.95～2.0m	西桁側の１間は縁か。SB54より古い。
SB54	整地Ⅰ	南　北	3間×2間	(桁)2.9/1.9/2.92m(梁)1.85～1.94m	柱穴径は約40ｃｍと小さい。SK57より古い。
SB56	地　山	東　西	9間×3間	(桁)1.9m(梁)1.85～1.9	柱穴掘り方は長1.2m前後・短0.8～1.0m、埋土は炭化物が非常に多い。
SB57	整地Ⅰ	東　西	7間×3間	(桁)1.9m(梁)0.9/1.85～1.9m	南桁側には縁か。柱痕跡には炭化物が多い。
SB58	整地Ⅰ	－　－	－－－－－－－－	東西2列1.2/0.6/0.6m 南北列0.8/1.2m	門跡か？ SB62と柱筋を揃える。
SB62	整地Ⅰ	南　北	9間以上×3間　？	(桁)1.9m(梁)2.1m/0.9m/3.0m	SB54・SA12より古い。SB58と柱筋を揃える。
SB63	整地Ⅰ	南　北	8間以上×4間　？	(桁)1.85～1.9m(梁)2.0～2.1m	SD70より古く、SA33より新しい。
SB67	地　山	南　北	8間以上×3間半？	(桁)2.1m(梁)1.2m、2.3～2.6m	西側と東側に縁、中央に廂下か。最も古い段階の建物の一つ。
SB108	地　山	南　北	5間×2間	(桁・梁)1.85～1.9m、3.0m	東桁中央部分の柱穴はない。出入り口か？ Ⅳ区SB05に類似する。

遺構名	確認面	方向	布掘り状(A)・穴列(B)	確認長	柱穴数	柱間寸法	備考
柱穴列SA11	整地Ⅰ～地山	東西・南北	A	35.5m	27	1.1~1.2m	L字状。SA12・33と並行する。
SA12	〃	東西・南北	A	30.0m	20	1.2m	SX50池跡南端で南側へ曲がる。SA11と並行する。
SA13	〃	東　西	A	13.0m	12	1.0~1.2m	SB53、SA14・16～20より新しい。SA21とつながる？
SA14	〃	東西・南北	A	17.5m	14	1.2m	逆L字状。SA13に切られ、SB53、SA17・20などを切る。
SA15	〃	南　北	A	8.0m	8	0.9m	SA16の南北列と並行する。SA14とつながる？
SA16	〃	東西・南北	A	13.0m	11	0.9m	逆L字状。SK52に切られ、SB54・SA18を切る。
SA17	〃	南　北	A	10.5m	9	0.9m	SB53を切り、SK52,SA13・14に切られる。SA18と並行する。
SA18	〃	南　北	A	10.5m	5	0.9m	SK52、SA13・14・16などに切られる。SA17と並行する。
SA22	－－	－　－	－－	－－	－－	－－－	SA12の一部。
SA23	整地Ⅰ	東　西	A	3.5m	1	－－	
SA24	整地Ⅰ	東　西	A	6.0m	5	1.2m	
SA25	整地Ⅰ	東　西	A	10.0m	5	1.5m	
SA26	整地Ⅰ	東　西	A	4.0m	4	0.5~1.2m	地中礎石あり。
SA27	整地Ⅰ	東　西	A	14.5m	5	1.5~1.8m	西側延長上にSA28北端の柱穴があり、両者は関連するものか？
SA28	整地Ⅰ	南　北	A	4.5m	4	1.5m	SA27と関連か？
SA31	地　山	南　北	B	7.2m	4	2.4m	SB53を切る。
SA33	地　山	東　西	B	17.0m	8	2.4m	SA12東西列と並行する。
SA34	地　山	南　北	B	5.6m	4	1.9m	SA35と並行する。
SA35	地　山	南　北	B	15.6m	9	1.9~2.0m	SA34と並行する。
SA36	地　山	東西・南北	A	28.5m	18	0.9~1.2m	L字状。SA40を切る。SA41と関連か？
SA37	地　山	(東西)・南北	A	(23.0m)	7	1.2m	逆L字状になり、SA37より新しい？
SA38	地　山	南　北	B	4.5m	3	2.4m	SA39とつながる？
SA39	地　山	東　西	B	12.0m	7	1.8~2.1m	SA38とつながる？
SA40	地　山	東　西	B	19.0m	6	2.4m	SA36に切られる。
SA41	地　山	東　西	B	5.7m	6	0.9/1.9m	一つの掘り方の中に柱痕跡が２個。SA40と関連か？

SD61	整地Ⅱ～地山	南→北→西	17.0m	0.3～0.35m	5～20cm	逆L字状。埋土はSD60に類似。木枠一部残存。
SD62	整地Ⅱ～地山	東・北→西	21.0m	0.25～0.5m	5～10cm	浅い。埋土は炭化物が多い黒褐色土。

遺構名	確認面	方向	長さ	備考
石列 SX52	整地Ⅰ	北-南→西	25.0m	径20cmほどの円礫を1～2段積む。
石組 SX55	整地Ⅱb	東－西	13.0m	径5～10cmほどの円礫を敷き詰めている。SB50礎石建物の雨落溝か。

第6表　Ⅱ区検出遺構（2）

遺構名	確認面	形態	長さ	幅	深さ	備考
池跡 SX50	整地Ⅱ	蟹鋏形	約23.0m	約6.0～9.0m	約1.0m	改修をうけ東端と西端が狭められている。底面から「明和四」年刻印瓦出土。
SX51	整地Ⅲb	不整形	約5.8m	約4.1m	約0.5m	SB52礎石建物を切る、新しい段階の遺構。

遺構名	確認面	形態	構造	径(長軸×短軸)	深さ	備考
井戸跡SE50	地山	円形	素掘り	1.7m	1.0m以上	
SE51	SX50下	〃	〃	1.2m	1.5m以上	SX50池構築時に埋め立てか。志野鉄絵丸皿出土。
SE52	整地Ⅲ	〃	〃	1.2m	1.5m以上	SX50池の改修時に埋め立てか。「明和四」年刻印瓦出土。
SE53	地山	〃	〃	2.8m	5.3m以上	大振袖馬の青土瓶片、白木箸など出土。
SE54	地山	〃	〃	1.8m	2.0m以上	北側に井戸構築時の土留めとみられる材を組み込む。

遺構名	確認面	形態	径(長×短)	深さ	備考
土壙 SE50	地山	隅丸不整方形	3.5m×3.0m	15～25cm	底面凹凸あり。壁は緩やかに立ち上がる。18世紀代の陶磁器出土。
SE51	整地Ⅱ	不整円形	1.4m	40cm	SE53を切る。底面はほぼ平坦。壁はやや急角度で立ち上がる。遺物は18世紀後半。
SE52	整地Ⅱ	楕円形	5.0m×3.2m	30～45cm	壁の立ち上がりは北側が急で、他は緩やか。遺物は18世紀中ごろ～19世紀前半。
SE53	地山	隅丸長方形	2.0m×1.2m	20～25cm	壁はやや急に立ち上がる。
SE54	地山	楕円形	1.5m×1.0m	10cm	浅い皿状。SA14・19を切る。
SE55	地山	不整円形	2.6m×2.0m	70cm	底面・壁面わずかに凹凸。
SE56	整地Ⅱ	隅丸長方形	0.9m×0.7m	15cm	底面に棟瓦が3個体分敷かれている。
SE57	地山	楕円形	5.0m×3.2m	20cm	SI01を切る。浅い皿状。炭化物が堆積。
SE58	地山	やや楕円形	1.5m×1.2m	35cm	壁は緩やかに立ち上がる。埋め土の一部炭化物層。
SE59	地山	不整楕円形	5.5m×3.0m	30cm	浅い皿状。底面やや凹凸あり。墨書土師質皿出土。
SE60	整地Ⅱ～地山	楕円形?	(4.0m)	40cm	埋め土下部は自然堆積層。壁はやや急角度で立ち上がる。壁面から鉄釘の出土多い。
SE61～66	整地Ⅱb	円形	1.6～1.0m	50～80cm	壁はやや急に立ち上がり、凹凸あるもの多い。埋土は小礫が多く一度に埋め戻し。
SE67～75	整地Ⅲb	円形	1.5～2.5m	40～120cm	壁は緩やかなものと急に立ち上がるものあり。凹凸あり。埋土はSE61～66に類似。

遺構名	確認面	形態	長さ	幅	深さ	備考
粘土貼り遺構SE53	整地Ⅰ	楕円形?	2.4m	1.7m	80cm	粘土厚最大5.0cm。広東碗タイプの飯碗出土。
SE54	整地Ⅱa	溝状	------	0.8～2.5m	40cm	粘土厚最大25.0cm。SE51に切られる。

遺構名	確認面	方向	残存長	幅	深さ	備考
溝跡 SD50	整地Ⅰ	北→南	35.0m	0.8～5.0m	40～70cm	北側の起点部分に石組溝が取り付く。17世紀代の陶磁器類出土。
SD51	地山	南→北	8.0m	0.6m	20cm	SD52に切られ、SI01を切る。
SD52	地山	南西→北	15.0m	1.5～3.0m	35～40cm	底面平坦。北側削平のため不明瞭。
SD53	地山	南→北	9.0m	0.45～0.7m	5cm	SA31に切られる。
SD54	整地Ⅱ	東→西	2.3m	0.2～0.45m	10～25cm	SX50池改修後の排水溝か。磁器製豆腐出土。
SD58	整地Ⅱ	南→北?	13.0m	0.4m	5～10cm	埋土は炭化物・礫が多く入る。
SD60	整地Ⅱ～地山	東→西→北→西	35.0m	0.3～0.8m	5～30cm	埋土は炭化物を多く含む黒褐色土。SD61より古い。
SD61	整地Ⅱ～地山	南→北→西	17.0m	0.3～0.35m	5～20cm	逆L字状。埋土はSD60に類似。木枠一部残存。
SD62	整地Ⅱ～地山	東・北→西	21.0m	0.25～0.5m	5～10cm	浅い。埋土は炭化物が多い黒褐色土。

遺構名	確認面	方向	長さ	備考
石列 SX52	整地Ⅰ	北-南→西	25.0m	径20cmほどの円礫を1～2段積む。
石組 SX55	整地Ⅱb	東－西	13.0m	径5～10cmほどの円礫を敷き詰めている。SB50礎石建物の雨落溝か。

発見された遺構には、礎石建物跡3棟、掘立柱建物跡11棟以上、柱穴列25条以上、池跡2箇所、井戸跡5基、土壙26基以上、溝跡15条、石列・石組5条以上(第5・6表)などがあり、遺構の密度が最も高い(第16図)。特に北東部の掘立柱建物跡の重複は著しく、建物群が何度も建て替えられた区域であることが分かる。

礎石建物跡

西側と東側で3棟検出された。そのうちＳＢ50は比較的全体が捉えられたが、他は削平などによってその一部が確認されただけである。これらの他にもＳＢ52掘立柱建物跡の北側で根石とみられる痕跡が確認されている。

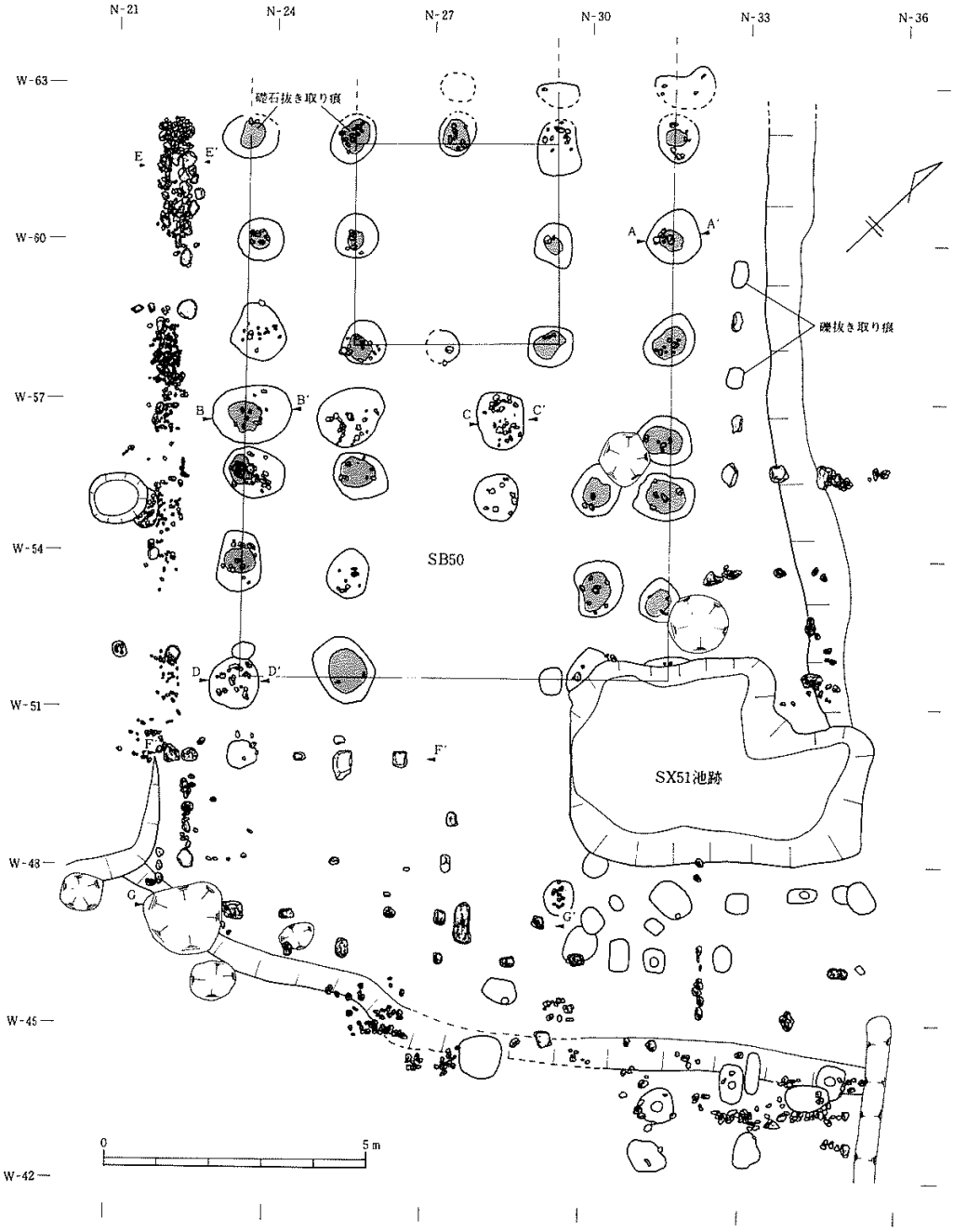
【ＳＢ50】西側中央部の整地Ⅱａ面で確認された。北東隅の一角がＳＸ51池跡によって壊されている。東西7間以上、南北4間の東西棟で、調査区の西側へ更に延びている可能性が高い(第17図)。礎石はいずれも残っていないが、柱間寸法は1.8～2.1m(6尺～7尺)、建物中央付近の近接した柱列の間隔は1.2m(4尺)程度と推定される。この建物は基壇状に厚さ30～40㎝の黄褐色の盛土をした後に径0.9～1.2程の円形をした浅い皿状のピット(深さ約20㎝)を掘って根固め石を詰め礎石を据えている。大半の据え方にはその中央部に礎石の抜取り痕と見られる痕跡が確認された。

全体の礎石の配置はやや不規則で、この礎石の配置から2棟の礎石建物の存在も考えられるが、据え方の確認面が同じであり、その構造(大きさ、形状、埋土など)も類似していることから、分離しないで同時に構築された1棟分の礎石群と捉えてよいだろう。この礎石建物の方向は東西方向のグリッド線に対し約2°北偏する。この礎石建物の南側には雨落溝と考えられる東西方向のＳＸ55石組遺構、また、東と北側には縁束柱あるいは廂の礎石と考えられる礫が1.2m間隔で並んでいる。南側のＳＸ55石組遺構は西の調査区外へさらに延びている。

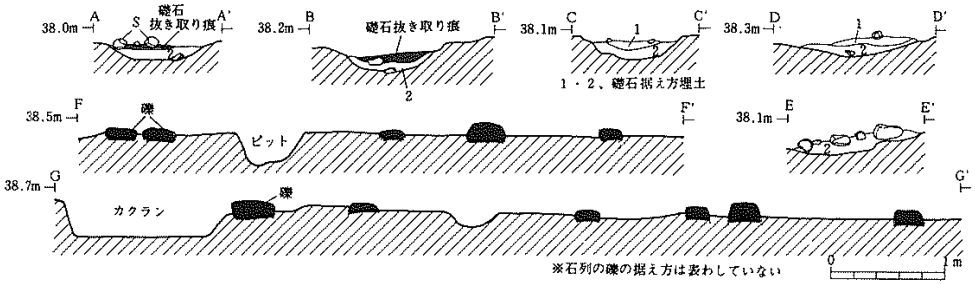
なお、礎石建物は位置的にみると東側に対してはやや低い場所になり、ＳＸ50池跡をのぞむ北側に対しては一段やや高い区域となる。

【ＳＢ65】地山面検出。削平を受けている区域であり、また、西側が大きく撹乱を受けているため全体の規模は不明であるが、桁行6間、梁行2間以上の南北棟と推定される(第20図)。礎石は残っておらず、根石痕と礎石抜取り痕とみられるピットが検出された。東桁行と北側の2列の梁行には束柱の礎石痕と思われる根石の痕跡が見られる。柱間寸法は約1.8～1.9m。ＳＢ108掘立柱建物跡、ＳＡ41柱穴列を切る。

【ＳＢ66】整地Ⅱ層面検出。残りは悪く、一部の根石痕が確認された。3間以上×2間以上の南北棟と推定される。柱間は2.0m前後。新しい段階の遺構の一つで、ＳＢ57掘立柱建物跡、ＳＤ61溝跡、ＳＫ58土壙などを切る。ＳＤ61の埋土からは19世紀代の陶磁器類が出土してい



第17図　ＳＢ50平面図



第18図　ＳＢ50断面図

るのでそれ以降の年代になるだろう。

掘立柱建物跡

北東部を中心に数多くの掘立柱建物跡が検出されている(第16図)。一般に近世の上級武家屋敷の建物の構造は複雑であるため、検出された柱穴群から建物を復元するには非常に困難が伴うことが多く、重複が著しい場合にはなおさらのことである。ここでも同様で、検出された柱穴群から建物を復元するには限界があり部分的なものになっている。第5表には主な掘立柱建物跡について示した。

【ＳＢ52】ＳＢ56・57などの掘立柱建物跡と方向を一にする桁行3間・梁行2間の東西棟で、調査区やや西側の整地Ⅱａ面で検出された(第20図)。ＳＸ51池跡に切られ、ＳＡ30・ＳＤ50を切っている。柱間寸法は1.9～2.0m、柱穴は長軸1.3～1.6m、短軸60～90cmの楕円形あるいは隅丸長方形で、深さは55～80cmである。これらの柱穴には一片約15cm(五寸)の方形の柱材が残存していた(第19図)。埋土は黒褐色シルトに地山や凝灰岩のブロックを多く含んでいる。北側には2.0～2.1m離れて4個の柱穴が桁行方向に平行して発見されている。柱穴は長軸1.0～1.2m、短軸80cm、深さ45～55cmで楕円形・隅丸方形を呈し、柱間寸法は1.4～1.5mである。埋土は建物跡の柱穴とほぼ同様である。建物に対して柱筋は揃わないが、廂などこの建物跡に関連する柱穴列であると考えられる。

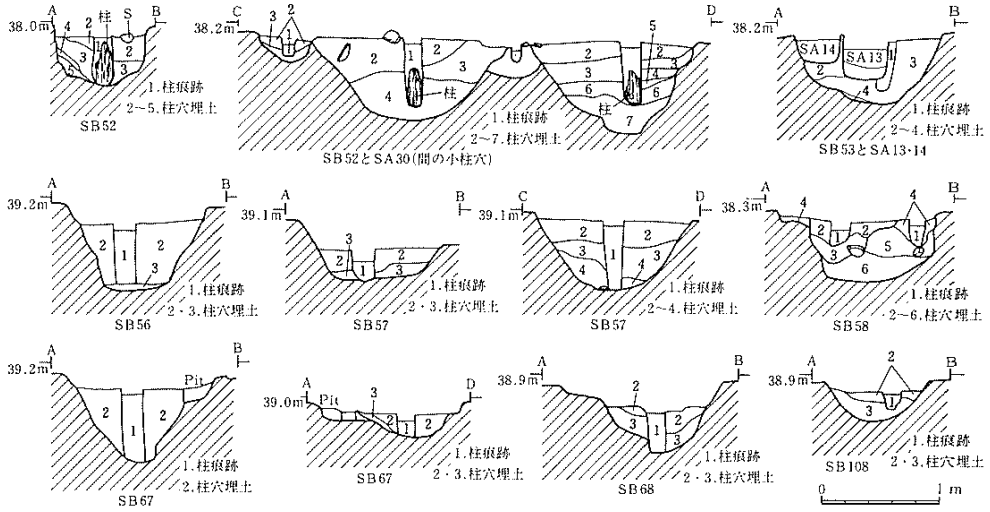
【ＳＢ53】身舎は桁行4間、梁間2間の南北棟で、西桁側に1間分の縁あるいは廂が取り付く。地山面検出。桁行きはさらに北側に延びる可能性がある。ＳＡ19・20を切り、ＳＢ54、ＳＡ13～15・17、ＳＫ51・52・54に切られている。柱間寸法は縦行きが1.9～1.95m、梁行きが1.95～2.0mで、廂の出は1.85～2.05mである。柱穴は長軸0.9～1.32m、短軸52～82cmの楕円形あるいは隅丸長方形で、北妻・前妻棟通り柱を除いて桁行方向に長軸を揃えている。長軸方向での断面形は逆台形状で、深さは55～65cm、埋土は暗褐色・黒褐色シルトに地山の細かなブロックを多量に含んでいる。柱痕跡は径あるいは一辺が16～22cmの円形あるいは隅丸方形であるが、角柱の可能性が高い(第19図)。

【ＳＢ56】東側中央の地山面検出。桁行9間、梁行3間、柱間寸法が桁行約1.9m、梁行

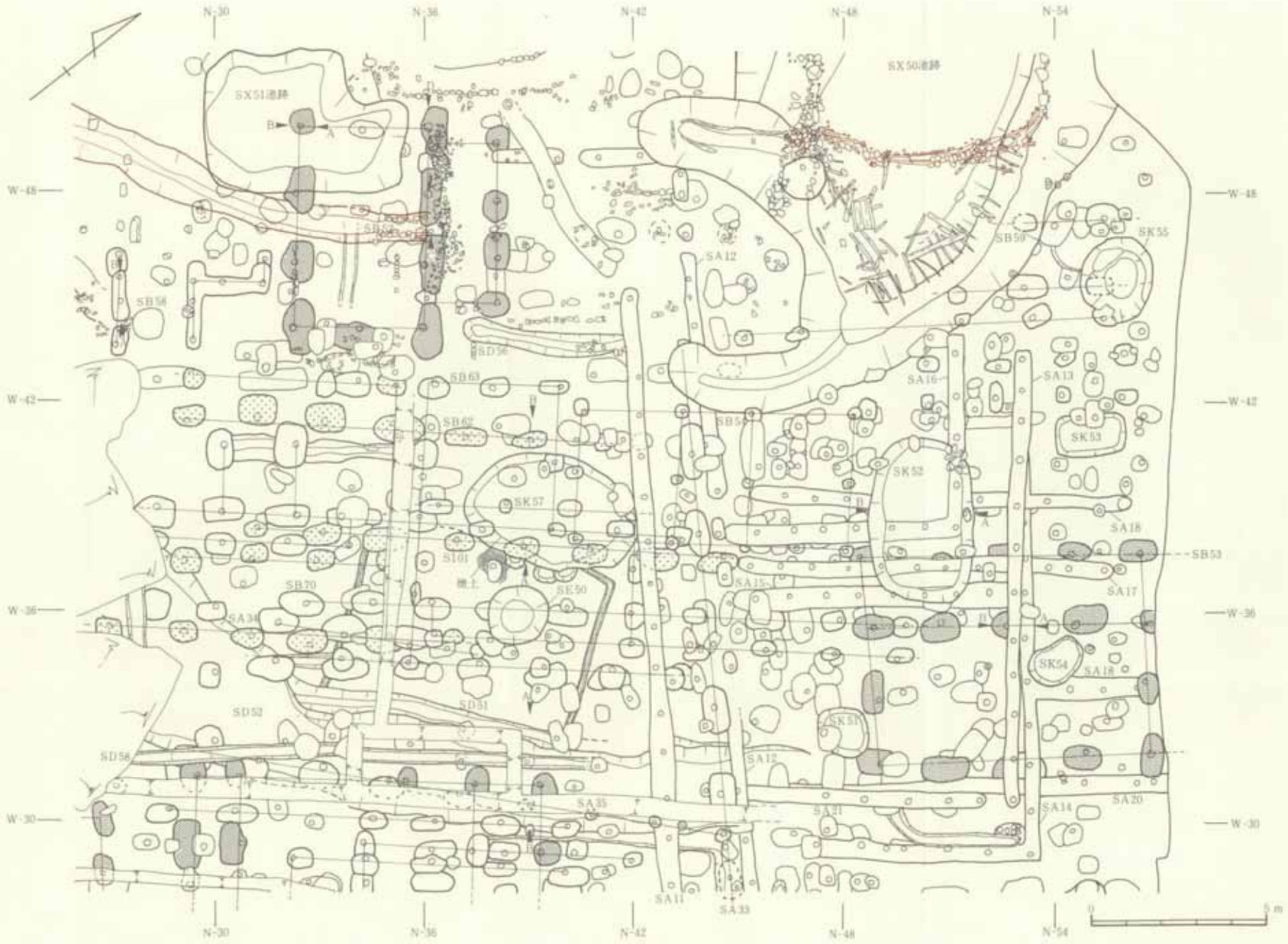
1.85～1.9mで、わずかに棟方向が西へ傾く東西棟である(第21図)。桁行き南側1間分は、縁もしくは廂の可能性がある。柱穴掘り方は、長軸1.0～1.2m、短軸80cm～1.0mの隅丸長方形、ほかの掘立柱建物跡に比べやや大きい。柱穴痕は約15～18cmを計る。火災後に建て替えられた建物らしく、柱穴掘り方埋土には炭が非常に多く含まれている。ほかの掘立柱建物でこのように埋土に炭の多いものはない。ＳＢ67・ＳＢ68掘立柱建物などより古い。この建物は更に東側へ延びるかあるいは西側の柱列とつながり鍵型におれて北方向へ展開する可能性もあるが、はっきり確認できなかった。

【ＳＢ57】ＳＢ56北側の整地Ｉ検出。身舎は桁行7間・梁行3間の東西棟である。南桁には幅1.1～1.2mの縁もしくは廂が取り付き、また、北桁側は東と西が1間分(1.9m)張り出す。ＳＢ67、ＳＤ52などを切る。柱間寸法は桁行が1.9m、梁行は1.85～1.9mである。柱穴掘り方は不正楕円形や隅丸長方形で、長軸1～1.4m・短軸70～80cm・深さ50～60cmである。南桁側の2列の柱は建物の内寄りに柱がすえられ、堀り方もその部分が内側へ張り出している。柱の下に沈下を防ぐための石が置かれているものもあった。埋土は暗褐色または黒褐色シルトに地山ブロックや小礫を多く含んでいる。柱痕は径15～20cmでその埋土に炭を多く含むのが特徴であり、火災を受けた可能性がある。

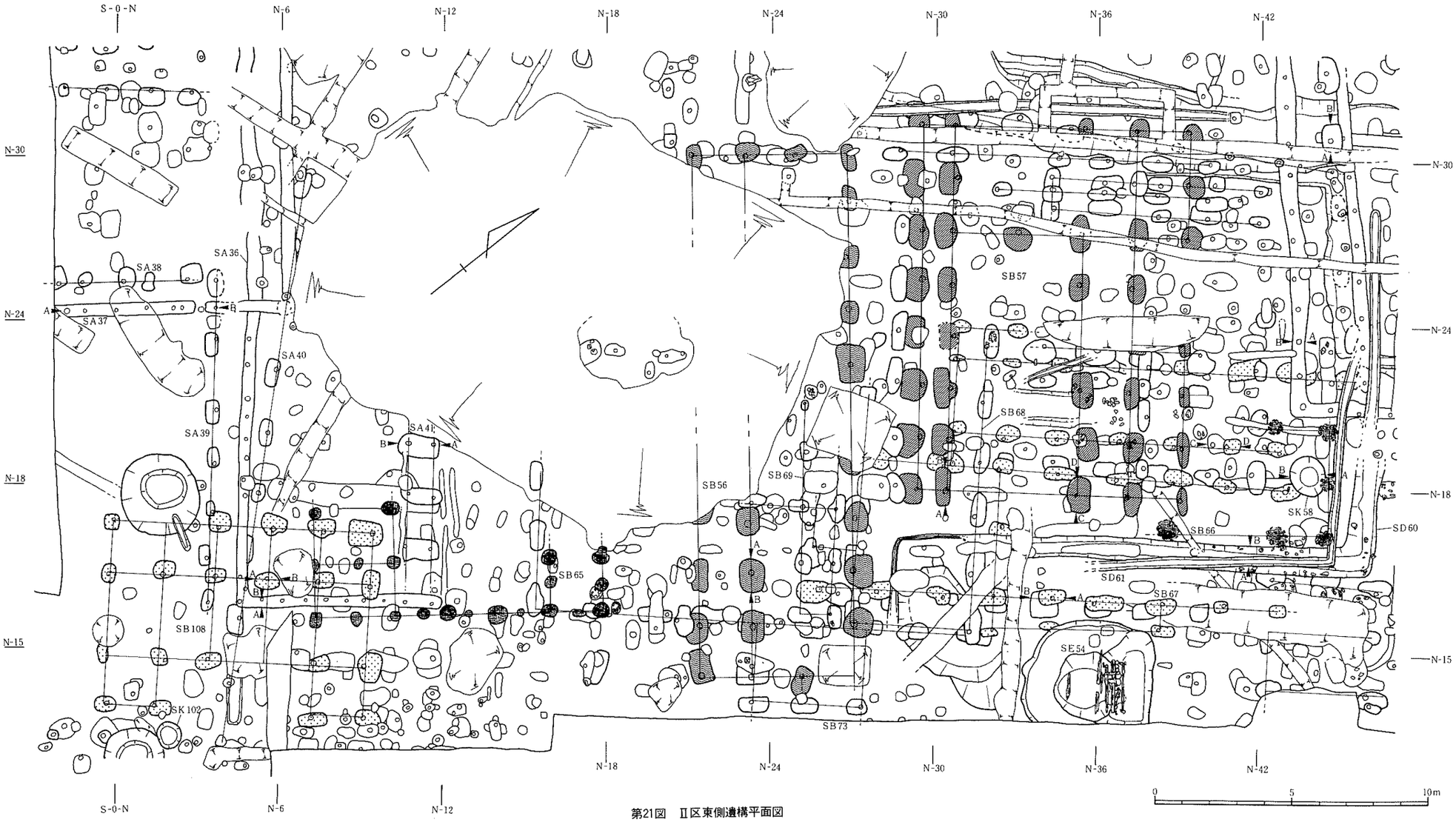
【ＳＢ67】地山面検出。全体の構造がはっきりしないが、桁行8間以上、梁行3間半の規模の大きい南北棟と推定される(第21図)。最も古い段階の掘立柱建物跡の一つで、ＳＢ57・ＳＢ69掘立柱建物跡、ＳＫ59土壙、ＳＥ554井戸跡などに切られる。柱間は桁行2.1m、梁行は東から1.2m・4.5～4.6m・1.2m・2.6m・1.2mとなる。中央の幅1.2mの狭い柱列は廊下、東側と西側の場合は縁の可能性がある。柱穴掘り方は長軸80cm～1.2m、短軸50～60cm



第19図　ＳＢ52・53・56～58・67・68・108柱穴断面図



第20図　Ⅱ区北側遺構平面図



第21図　Ⅱ区東側遺構平面図

の隅丸長方形で、埋土は暗褐色シルトに地山ブロックが混じり、炭化物は全く含まない。

【ＳＢ108】地山面検出。桁行5間、梁行2間の総柱の南北棟で、東側両脇は1間分張り出す(第21図)。柱間寸法は桁行約1.85～1.9m、梁行は西から1.9m・3.0m・1.9mである。柱穴堀り方は長軸80～1.2m、短軸50～80cmの隅丸長方形を呈し、埋土は地山の割合が多く粘質である。柱穴は径15～18cmほどで褐色砂質シルトの埋土である。ＳＥ53井戸跡に切られ、ＳＡ36柱列を切る。南東部(Ⅳ区)で確認されたＳＢ05掘立柱建物跡(P.46～49参照)と大きさ・構造が類似する。

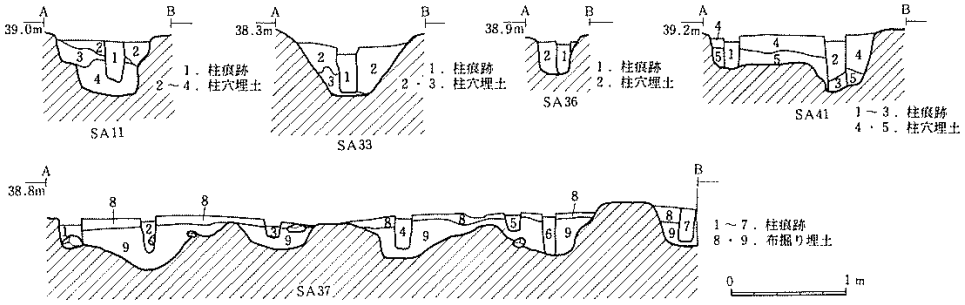
柱穴列

柱穴列には幅40～70cm、深さ30～70cmの溝を掘り、その中に90cm～1.2m前後の間隔で柱を並べるいわゆる布掘り状のＡタイプと、独立した柱穴がほぼ一定の間隔で直線的に並ぶＢタイプの2つがある。

Ａタイプは北側において集中し、南東部でも鍵型に折れ曲がるものが2条検出されている。中にはＳＡ11とＳＡ12のように並行するものもあり、これらは2列で一対をなす可能性がある。Ｂタイプには掘立柱建物跡の柱穴の一部がふくまれている可能性もあるが、ここではなるべく取り除いた。これらの2タイプの柱列は、その形態・構造から塀跡・廊下跡などが考えられる。

【ＳＡ11】整地Ｉ～地山面検出。Ａタイプ。概報(Ⅲ)でＳＡ10として報告した布掘り状の柱列とつながり、全体はＬ字状であることが判明した(第16図)。柱間隔は1.1～1.2mで,柱穴は径15cm程の円形を呈する。前に述べたようにＳＡ12と幅2.1～2.3m程離れて並行しており、これらは2列で一対となるか、またはＳＡ11はＳＡ33とも柱筋をそろえて並行するのでこの柱穴列との関連も考えられる。

【ＳＡ26】整地Ｉ検出。幅60～70cm、深さ10cmほどの布掘り状の溝の中に、やや不規則であるが50～1.5m間隔で径20cmほどの偏平な礫を据えたものである(第16図)。柱穴痕は確認できなかったが、これらの礫は柱の根元に据えられた礎石と考えられる。こうした



第22図　ＳＡ11・33・36・37・41柱穴断面図

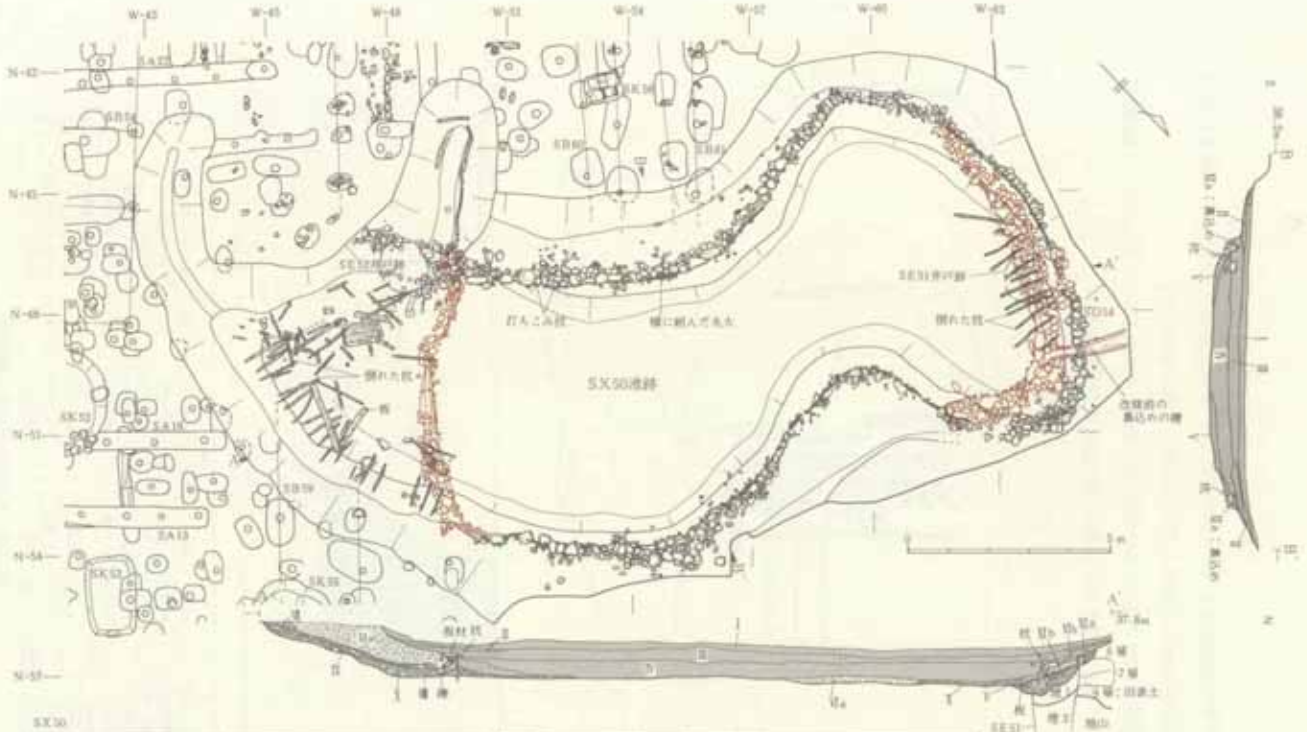
構造のものはこのＳＡ26のみである。
【ＳＡ33】地山面検出。Ｂタイプ。柱穴掘り方は長軸1.2～1.5m・短軸60～70㎝の隅丸長方形で、比較的大きい。埋土は地山と小礫を多く含む。ＳＡ11・ＳＡ12と並行する。
【ＳＡ36】地山面検出。ＡタイプでＬ字状。柱間寸法は0.9～1.2m。この柱列の北端2つの柱穴は、後でのべるＳＡ41の柱穴と東西方向の柱筋が揃っており、両者は関連する可能性が高い。
【ＳＡ37】地山面検出。Ａタイプで逆Ｌ字状。柱間寸法は1.2m、幅40㎝で、柱穴の部分は周囲より深く掘り下げられ、深さ40㎝程のピット状になる(第22図)。ＳＡ36・ＳＡ40を切る。
【ＳＡ41】地山面検出。柱列のなかに含めたが、90㎝間隔の2つの柱穴をもつ長軸150㎝・短軸60～70㎝の隅丸長方形の掘り方が東西方向に3基並ぶもので(第21図)、他の柱列とは異なる。東西方向の柱穴の間隔は1.9mほどである。さきに述べたようにＳＡ41の北端の2つの柱穴と方向を揃えているので両者は関連するとみてよいだろう。

池跡

北西部で2箇所確認した。このうち規模の大きいＳＸ50池跡は第4図の絵図に描かれている中央奥の池に相当し、調査前まで池の景観をとどめていた。
【ＳＸ50】絵図にある瓢箪形の池である(第23図)。丸太や板を杭でおさえて拳～頭大の礫を裏込めして池の外郭を造りだしている。構築当初は東側に長く、東側部分が2股に分かれ南側へ突出する形態であったが、東端と西端が改修を受けて両端が狭められている。改修後の規模は、長軸15.5m、中央のくびれ部の幅約4.5m、深さ1m程である。

改修前の両端には柵が設けられていたらしく、柵の一部とみられる径5～6㎝の杭が、尖った先を池の外側に向けて平行して倒れていた。東端の2股の突出部の西側の底部には丸太材が組まれており、取水に関係する遺構の可能性もある。西端の池に付属するＳＤ54溝は改修後の池の排水溝であろう。

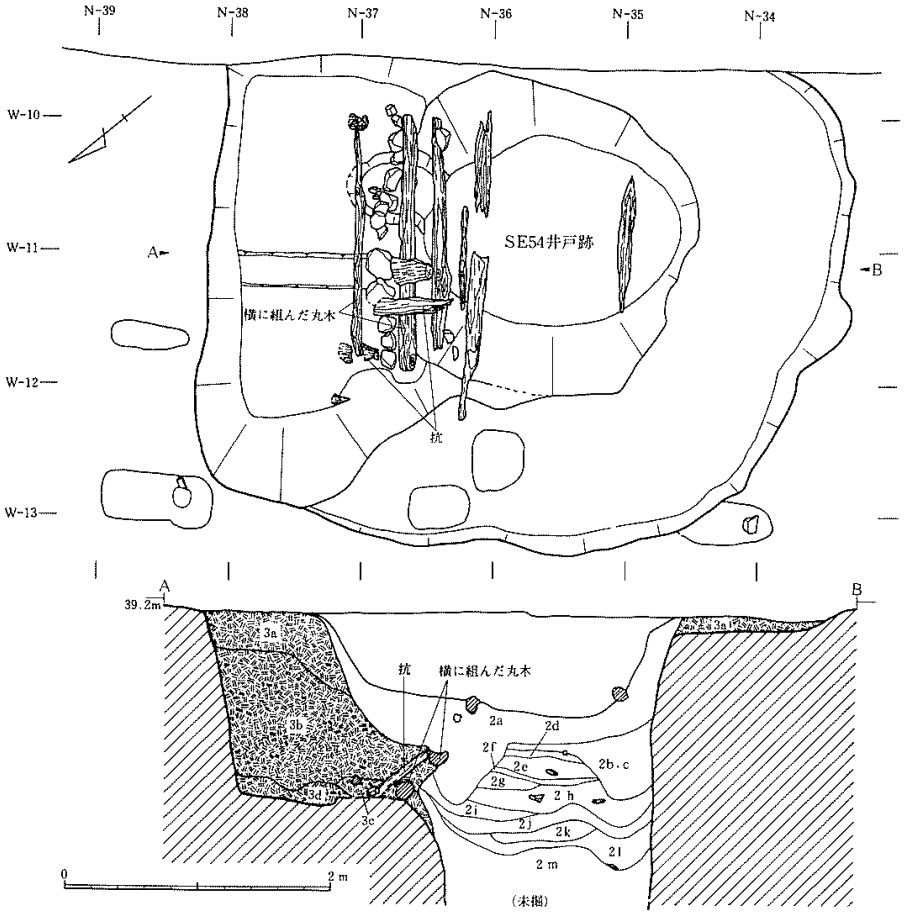
池の改修時に同時に埋め立てられたと見られるＳＥ52井戸跡の埋土と改修後の池の最下層から「明和四年」(1767)の刻印をもつ軒平瓦が出土しており、この瓦と出土陶磁器の年代を考え合わせると、池の構築年代は18世紀後半で、19世紀に入ってから改修されたものと推定される。なお、池の中からは陶磁器類のほかに瓦類(第59図－1，第60図－13ほか)、木製品(第67図－1・2，5～7)などが比較的まとまって出土している。
【ＳＸ51】ＳＢ50礎石建物跡を切る、南北約5.8m・東西約4.1m・深さ約0.5mの最も新しい段階の池である。遺物は陶磁器の小片と瓦の細片が数点ある。


SX50池跡
SE51
SE52
SE53
SE54
SA12
SA13
SA15
SA18
SB59
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90
SK91

井戸跡

素掘りの井戸が5基検出されている(第6表)。いずれも全掘していないので深さは不明であるが、ＳＥ53は5m以上掘り下げても底面に到達しなかった。

【ＳＥ51】ＳＸ50池跡の西端で検出。池の構築時に埋め立てられている。ＳＸ52石列、ＳＤ50溝に近い時期の井戸跡か。埋土からは第51図－20の志野鉄絵丸皿が出土した。



層No.	土色	土性	備考		層No.	土色	土性	備考	
1	オリーブ褐色(2.5YR4/3)	シルト	地山ブロック・小礫多い。	整地	2i	黄灰色(2.5Y4/1)	粘質ｼﾙﾄ	炭化物・焼土・砂粒少量。	自然流入土
2a	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	〃	礫・炭化物少量、しまりなし。	自然流入土	2j	黒褐色(10YR3/1)	〃	炭化物・焼土多量。	
2b	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	〃	ややしまりがあり、砂質。		2k	褐灰色(10YR4/1)	ｼﾙﾄ質砂	炭化物微量。	
2c	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	〃	大きめの礫目立ち、しまりなし		2l	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物少量。酸化鉄沈着。	
2d	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物・地山ブロック少量。		2m	黄褐色(2.5Y5/3)	粘質ｼﾙﾄ	地山主体。炭化物少量。	
2e	黒褐色(10YR3/1)	粘質ｼﾙﾄ	〃		3a	暗オリーブ(2.5Y3/3)	シルト	地山ブロック多量、炭化物少量。	井戸埋土
2f	黒褐色(2.5YR3/1)	〃	地山ブロック、自然木多い。		3b	黄褐色(10YR5/6)	〃	小礫多い。	
2g	黒褐色(10YR3/1)	〃	炭化物・焼土・貝片少量。		3c	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質ｼﾙﾄ	やや灰色。地山ブロック・小礫少量。	
2h	黒褐色(10YR3/2)	砂質ｼﾙﾄ	灰・炭化物・貝片少量。		3d	灰黄褐色(10YR4/2)	〃	灰色味強い。グライ化。	

第24図　ＳＥ54井戸跡平・断面図

【ＳＥ52】ＳＸ50池跡の南東隅の石組部で検出。池の改修時に埋め立てられている。埋土から第59図－7の「明和四」年(1767)の刻印がある軒平瓦が出土している。

【ＳＥ54】上部に木組(土留め？)をもつ特異な構造の井戸である(第24図)。北側が一段深く掘り込まれ、井戸とこの段の境には土留めのためか杭が一列におかれ丸木がわたされ、段の部分は人為的に埋め戻されている。井戸を掘るときの足場として一段掘り下げたのち土留めの木組を行い埋め戻したものであろうか。遺物は多く、すり鉢・火鉢・灰吹きなどの陶磁器や瓦・寛永通宝・キセルなどが出土している。なお、この井戸跡はその位置から第4図の中央やや東側に描かれている井戸に対応するものと推定される。

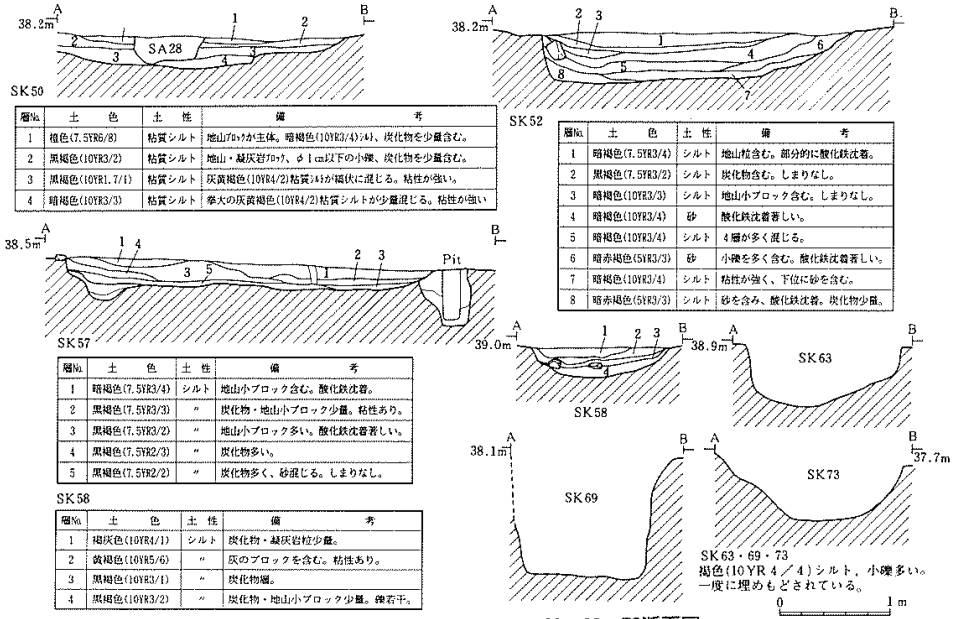
土壙

北半部と西南隅を中心に30基以上検出されている。このうち西南隅のＳＤ61～66土壙群・ＳＫ67～75土壙群は、それぞれ形状・埋土が類似する。

【ＳＫ56】小型の浅い土壙であるが、底部に第61図－16・17に示した大棟にのせる棟瓦(伏間瓦)が3個体分割られた状態で敷かれていた。

【ＳＫ58】皿状の土壙。下部には灰を含む炭層が2～3cmの厚さで堆積しているが、火を扱う施設と関連する遺構であるかどうかは不明。

【ＳＫ59】不整な楕円形で皿状にくぼむ。埋土最下層は非常に炭の多い自然堆積層で、中から第46図－54の色絵輪花皿、第56図－8の墨書のある土師質皿が出土している。



層No.	土色	土性	備考
1	橙色(7.5YR6/8)	粘質シルト	地山ブロックが主体。暗褐色(10YR3/4)シルト、炭化物を少量含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山・凝灰岩ブロック、φ1cm以下の小礫、炭化物を少量含む。
3	黒褐色(10YR1.7/1)	粘質シルト	灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトが縞状に混じる。粘性が強い。
4	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	拳大の灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトが少量混じる。粘性が強い

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山粒含む。部分的に酸化鉄沈着。
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物含む。しまりなし。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロック含む。しまりなし。
4	暗褐色(10YR3/4)	砂	酸化鉄沈着著しい。
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	4層が多く混じる。
6	暗赤褐色(5YR3/3)	砂	小礫を多く含む。酸化鉄沈着著しい。
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粘性が強く、下位に砂を含む。
8	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	砂を含み、酸化鉄沈着。炭化物少量。

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山小ブロック含む。酸化鉄沈着。
2	黒褐色(7.5YR3/3)	〃	炭化物・地山小ブロック少量。粘性あり。
3	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	地山小ブロック多い。酸化鉄沈着著しい。
4	黒褐色(7.5YR2/3)	〃	炭化物多い。
5	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	炭化物多く、砂混じる。しまりなし。

SK58

層No.	土色	土性	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物・凝灰岩粒少量。
2	黄褐色(10YR5/6)	〃	灰のブロックを含む。粘性あり。
3	黒褐色(10YR3/1)	〃	炭化物層。
4	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物・地山小ブロック少量。礫若干。

第25図　ＳＫ50・52・57・58・63・69・73断面図

【ＳＫ61～75土壙群】平面形はほぼ円形であるが、底面・壁面はやや凹凸があり、埋土はいずれも一度に埋め戻されたような状態を示す(第25図)。遺物はほとんど出土していない。これらの土壙は、植栽あるいは抜根の痕跡の可能性がある。

粘土貼り遺構

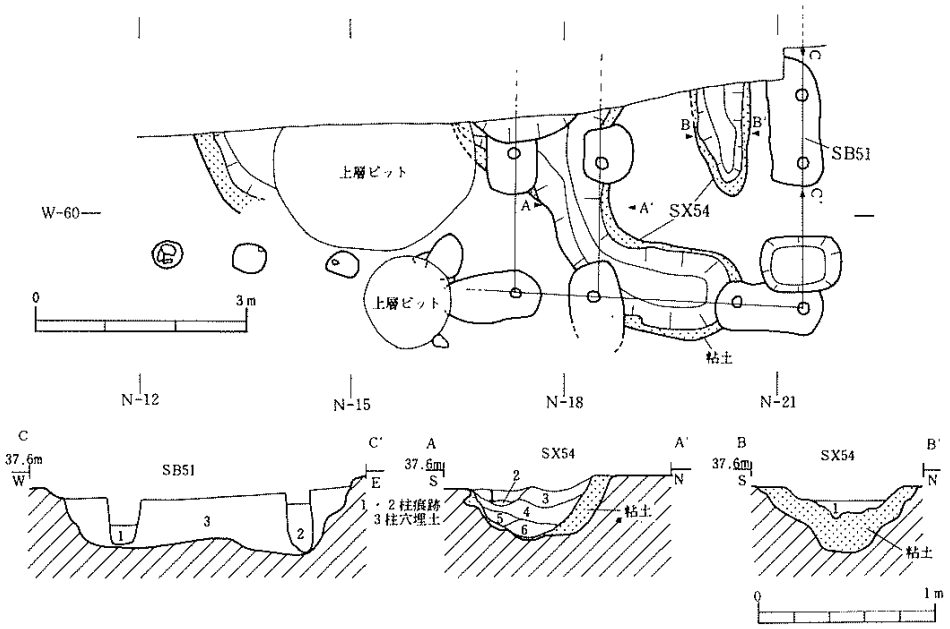
不整形な土壙・溝状の遺構の壁面に厚さ10㎝程の白色粘土を貼付けたものを仮称した。南西部で2箇所確認されている。いずれもその性格は不明である。

【ＳＸ53】撹乱のため東側が失われ全体形は不明だが、長軸2.4m、深さ0.8mほどの楕円形をした土壙と推定される。粘土は最も厚い部分で6㎝。堆積層は3層に区分できるが、水成堆積土は明瞭には認められなかった。底部付近から第42図－22の広東碗タイプの飯碗が出土している。

【ＳＸ54】不整形な溝状をなす。幅0.8～2.5m、深さ40㎝、粘土厚は最大で25㎝。ＳＢ51掘立柱建物に切られる(第26図)。水の影響を示す堆積土はやはり認められなかった。遺物の出土はない。

溝跡

【ＳＤ50】整地Ｉ面検出。南へ傾斜しながら広がる。北側の起点部分には角礫を2～3段積み重ねた長さ1.6m、幅70㎝の石組溝が取り付く。この石組溝の北側の一部はＳＢ52掘立柱建物跡の横穴掘り方によって壊されているが、石組溝の延長線上には前面を東側へ向けた1列の石列が痕跡的に残っている。溝の中からは17世紀代の陶磁器類が出土している。



第26図　ＳＢ51、ＳＸ54粘土貼り遺構平・断面図

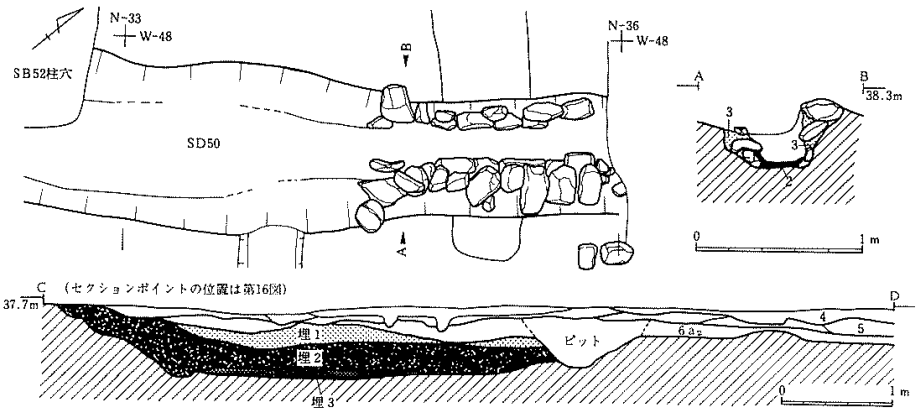
【ＳＤ52】地山面検出。ＳＩ01竪穴住居跡、ＳＤ51溝跡を切り、ＳＢ57掘立柱建物跡に切られている。底面はほぼ平坦で、南側から北側にかけてわずかに傾斜している。北側はＳＡ12柱穴列付近で不明瞭になり、南側は撹乱で壊されているがその延長線上には確認されなかった。

【ＳＤ60】地山面～一部整地Ⅱ面検出。鍵型に折れ曲がり、埋土は炭化物の多い黒褐色砂質土である。東端と西端は除々に浅くなり不鮮明になる。19世紀代の陶磁器類を多く含む。

【ＳＤ61】地山面～一部整地層Ⅱ面検出。ＳＤ60溝跡より新しく一部重なる。埋土はＳＤ60と同様炭化物の多い黒褐色砂質土である。一部両側に木枠の痕跡が残っていた(第27図)。

石列

以下で説明するＳＸ52の他に、ＳＢ50礎石建物跡の周辺部とＳＢ52掘立柱建物跡の北側で

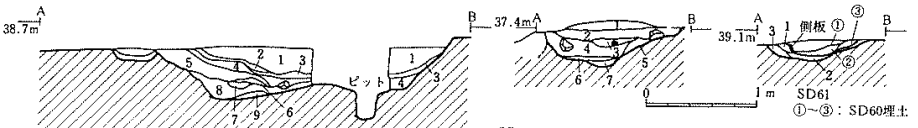


SD50

層No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	整地土。整地Ⅰ上位層に類似。
2	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	自然堆積層。黄褐色凝灰岩ブロック、炭化物若干。
3	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	自然堆積（水成）層。有機物含む。

SD50石組部

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	整地土。黄褐色ソルトブロックを多く含む。炭化物若干。
2	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	自然堆積（水成）層、砂層が混じる。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	石組裏込め礫の間を充填。明褐色粘質ソルトブロック多い。



SD60

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	砂質シルト	炭化物多く、粘性なし。
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	1層に較べやや褐色味あり。円礫少量。
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	褐色砂、炭化物が多い。円礫少量。
4	黒褐色(10YR3/2)	〃	2層に類似。
5	黒褐色(10YR2/3)	〃	炭化物少量。
6	暗褐色(10YR3/3)	砂礫	炭化物多い。
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	1～6層に較べ砂が少ない。炭化物少量。

SD52

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物少量、黄橙色ブロック多い。
2	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	炭化物・黄色ブロック微量。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	炭化物多く、黄橙色ブロック微量。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物・黄橙色ブロック少量。
5	黒褐色(10YR2/3)	〃	黄橙色ブロック多い。
6	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	
7	明褐色(7.5YR5/6)	粘土	炭化物少量。
8	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物・黄橙色ブロック・小礫少量。
9	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物微量、地山ブロック少量。

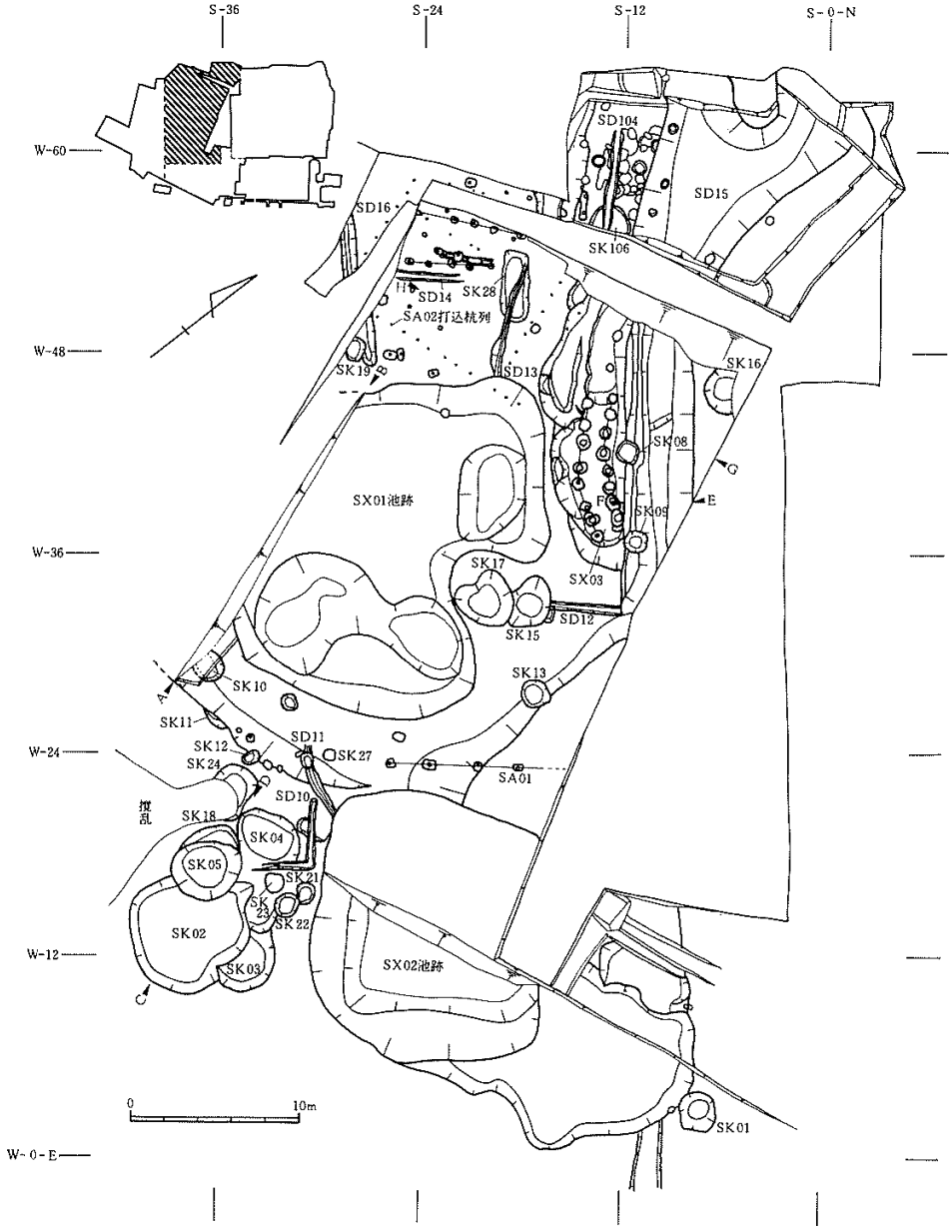
SD61

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	砂の割合高く、炭化物多い。
2	黒褐色(10YR2/2)	〃	1層より更に砂の割合高く、炭化物はやや減る。
3	―――	―――	オリーブ黄色の砂岩の塊

第27図　ＳＤ50平・断面図，ＳＤ52・60・61断面図

少なくとも5列確認されている。ＳＸ52以外はいずれも痕跡的な石列である。
【ＳＸ52】整地Ⅰ面検出。径20㎝ほどの角礫を1～2段積む石列で、中央付近から南西方約へ26mほど直線的に伸び、調査区の壁際で西側へ曲がる。この石列を検出した面は南西部の神社側へ傾斜しており、石列もこれに沿って傾斜しているので、中央部と南西隅では1.3～1.5mほどの高低差がある。石列の方向は、前にのべた掘立柱建物跡や礎石建物跡のいずれとも合わないが、何らかの区画的な施設と考えられる。なお、石列の礫に第66図－13に示した安山岩製の石臼(下臼)が転用されていた。

③Ⅲ区：「表」南西付近(第28図、第7表、写真図版10～12)
この調査区では、柱穴列・打込杭列・池跡・溝跡・土壙・通路状遺構を検出した。調査区内の層位を見るとＳＸ01池跡以西の旧地形は稲荷神社方向へ緩く傾斜しており、昭和26年の松山中学校地造成時のものと考えられる盛土が40㎝～1.6mの厚さで認められた。また、ＳＸ01池跡の西～北には整地層が分布しているが、整地Ⅰ・Ⅱのいずれと対応できるのかその関係は把握できなかった。
柱穴列・打込杭列
【ＳＡ01】調査区中央のやや北寄り、ＳＸ01池跡北東部の地山面状で南東～北西方向の3間分の柱穴列を検出した。検出部分の柱間寸法は北西から2.25m－2.8m－2.3mである。柱穴は長辺50～70㎝・深さ30～40㎝の方形ないし長方形を基調とし、地山粒や炭化物の混じる褐色シルトが堆積している。柱痕跡の直径は15～20㎝前後である。なお、本遺構は柱穴列の折り返しがＳＸ02池跡に破壊された掘立柱建物跡の可能性も考えられる。
【ＳＡ02打込杭列】ＳＸ01池跡の西側で40本の打込杭を検出した。はみ出しは幾つかあるものの、約70～90㎝の間隔で東西約10.5m・南北約6.5mのほぼ方形に並ぶ。杭列方向は南北軸でグリッドの軸に対して31°ほど西に振れており近世の建物群とは大きく異なる。旧校舎の建物方向がこれとほぼ同様であることから、旧校舎時代のものである可能性もある。
池跡
【ＳＸ01】構築面は整地層上である。長軸約22m・深さ約60㎝で北辺の一部がくびれる不整円形状を呈し、東側にはテラス状の段が見られる。また、断面観察により1度改修が行われ規模が縮小されていることが判明している。底面は平坦ではなく中央部に円礫が集積された部分が認められる。堆積土は第6層までが整地層の一部、以下は自然堆積層である(第29図上)。
遺物は堆積土各層から近世～近代の陶磁器や瓦の破片が出土しており、底面付近からは



第28図　Ⅲ区遺構平面図

第７表　Ⅲ区検出遺構

遺構名	確認面	方向	布掘り状(A)・穴列(B)	確認長	柱穴数	柱間寸法	備考
柱穴列SA01	地山	南北	B	7.6m	4	2.3～2.8m	

遺構名	確認面	形態	長さ	幅	深さ	備考
池跡 SX01	整地	不整形	約22m		約60cm	北側がくびれ、東側にテラス状の段。陶磁器や瓦、瓦質・土師質土器等出土。
SX02	地山	不整楕円形	約25m	約14.5m	30～40cm・1.6m以上	陶磁器片出土。

遺構名	確認面	形態	径（長×短）	深さ	備考
土壙 SK01	地山	不整円形	約2.3m	約70cm	
SK02	地山	不整円形	約7.5m	約55cm	
SK03		（不整円形）	約3.9m	約30cm	
SK04		不整円形	約3.3m	約45cm	
SK05	地山	不整円形	約4.0m	約60cm	
SK06	整地	円形	1.3m	約70cm	
SK09		円形	約1.4m		
SK10	整地	楕円形	約2m（推定）	60cm	
SK11	地山			約50cm	陶器片出土。
SK12		楕円形	長軸 約1.2m・短軸86cm	22cm	
SK13	地山	不整円形	1.8m	30cm	瓦・磁器片出土
SK15		不整円形	約2.7m		SD12を切る。
土壙SK16		（円形）	（3m）	37cm	
SK17	整地	不整円形	約3.7m	45cm	SK15を切る。
SK18				50cm	
SK19		不整円形	約1.2m	45cm	
SK21		楕円形	長軸1.4m 短軸1.0m	20cm	
SK22		不整円形	1.4m	34cm	
SK23		円形	1.1m	22cm	
SK24	地山			約40cm	
SK27		不整円形	0.6m		
SK28		不整長方形	長軸7.2m 短軸約3.0m	56cm	
SK105	SK117	（円形）	2.35m	20～30cm	

遺構名	検出面	方向	長さ	幅	深さ	備考
溝跡 SD09	地山	南→北→西	約7.2m	25～40cm	13～20cm	（埋土）黄褐色シルト　（重複）SK04・05→SD10
SD11	地山	北東→南西	約6.0m	50～70cm	6～31cm	（埋土）灰褐色シルト　（重複）SD11→SX02
SD12	整地	南→北	約4.2m	約40cm	12～24cm	（埋土）褐色粘土・シルト　（重複）SD12(SK15に接続）→SD15
SD13	整地	東→西	約7.5m	29～70cm	41～43cm	（埋土）褐色砂質シルト・粘土　（重複）SK14→SD13
SD14	整地	南→北	約3.9m	40～50cm	4～7cm	（埋土）褐色砂質シルト
SD15	整地	東→西	約14m以上	上幅3～6.5m・下幅1～2m	0.6～2.0m	（埋土）褐・黒褐色シルト　（重複）SD12・SD03→SD15
SD16	整地	東→西	約8.6m以上	約80cm	27～30cm	（埋土）地山ブロック・褐色砂質シルト（重複）SD16→SK19
SD104	SK117	東→西	約6.0m	35～65cm	20～30cm	（埋土）褐色シルト・地山ブロック・小礫

遺構名	確認面	方向	長さ	幅	備考
通路跡SX03	旧表土	東→西	14m以上	約3.5～4.5m	ピット２列・計18個検出。

大掘相馬焼の土瓶や瓦質の七厘などが出土している。

【ＳＸ02】地山面上で検出。ほぼ隅丸方形を呈する池で、約3/5程を調査した。最近まで池としての景観をとどめていた浅い部分と性格不明の深い部分があり、長軸約25m、深さは浅い部分で30～40cm、深い部分で1.6mである。深い部分にはグライ化した粘土層が堆積していた。

遺物は深い部分の上層から陶磁器片、下層から近世の陶磁器片が出土している。浅い部分からの遺物の出土はない。

土壙

Ⅲ区では性格不明の土壙を計24基検出している。その幾つかは重複しており、ＳＸ02池跡の南側に多く分布している。

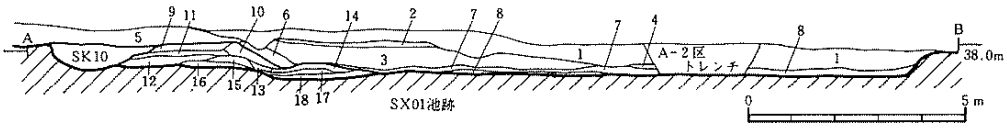
【ＳＫ01】ＳＸ02池跡に切られる土壙で、地山面上で検出した。直径約2.3m・深さ約70cmで、褐灰色・明黄褐色の粘土・シルトが堆積している。堆積土中から近世磁器の小破片が出土している。

【ＳＫ02・05・18】ＳＸ01池跡南側の地山面上で検出された土壙である。ＳＫ05→ＳＫ18→ＳＫ02の新旧関係があり、これらの土壙からは近世磁器の破片がまとまって出土している(第29図中)。

ＳＫ02は直径約7.5m・深さ約55㎝の不整円形である。堆積土は上層が整地層の一部、下層は褐灰色・明黄褐色の粘土・シルトなどであり、最下層はグライ化している。ＳＫ05は直径約4m・深さ約60㎝の不整円形である。堆積土は地山ブロック・円礫・炭化物の混じる褐灰色・灰黄褐色の粘土・シルトなどであり、最下層はグライ化している。ＳＫ08は深さ86㎝で規模は不明である。堆積土はにぶい黄褐色・褐灰色などの粘土・シルトである。

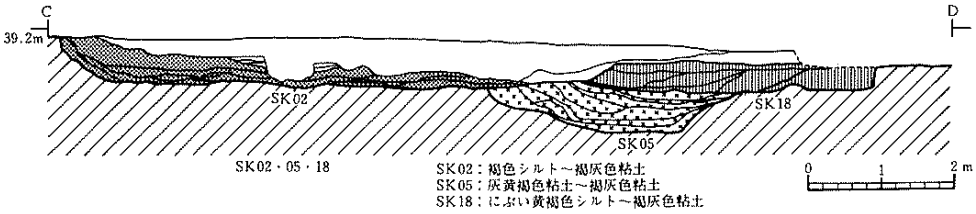
溝跡

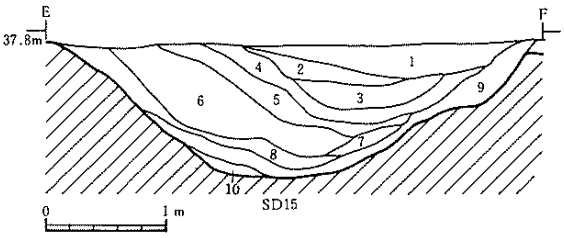
【ＳＤ15】整地層上から掘り込まれた溝でＳＤ12溝跡・ＳＸ03通路状遺構より新しい。上幅3～6.5m・下幅1～2m・深さ60㎝～2mであるが調査区西端では南北の二股に分かれ、南側は上幅4.3m・下幅0.9m・深さ1.6m、北側は上幅約7.0m・下幅1.5m・深さ1.6mである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは二股に分かれる北溝北側が約15°の傾斜で



層No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	シルト	盛土。
2	明黄褐色(7.5YR5/8)	〃	盛土。
3	褐色(7.5YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。盛土。
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃	地山ブロックを多く含む。粘性あり。盛土。
5	褐色(10YR4/6)	〃	地山ブロックを多く含む。盛土。
6	褐色(10YR4/4)	〃	硬くしまっている。池跡（新）の立ち上り部。
7	褐灰色(10YR5/1)	粘土	炭化物を多く含む。池跡（新）堆積土。
8	黄褐色(10YR5/6)	シルト	マンガン粒を多く含む。粘性あり。池跡（新）堆積土。
9	橙色(7.5YR6/6)	〃	池跡（旧）の埋め立て土。

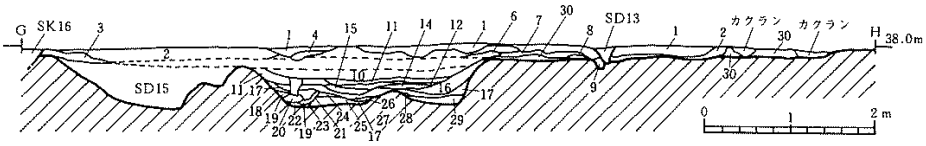
層No.	土色	土性	備考
10	明黄褐色(7.5YR5/6)	シルト	粘性あり。非常にしまりあり。池跡（新）の立ち上り部。
11	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	池跡（旧）の埋め立て土。
12	明黄褐色(7.5YR5/6)	〃	炭化物を少量含む。粘性あり。グライ化した層を挟む。
13	明褐色(7.5YR5/8)	〃	
14	橙色(7.5YR6/6)	〃	上面にマンガン粒を多く含む。グライ化した層を挟む。
15	黄褐色(7.5YR5/6)	〃	地山ブロックを多く含む。池跡（旧）堆積土。
16	橙色(7.5YR6/6)	〃	粘性あり。しまりあり。池跡（旧）の岸。
17	褐色(7.5YR4/4)	〃	炭化物を僅かに含む。池跡（旧）堆積土。
18	橙色(7.5YR6/6)	〃	粘性あり。上面は粘土質である。池跡（旧）堆積土。





層No.	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。
2	褐色(7.5YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。
3	褐色(7.5YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。
4	褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	大きい地山ブロックを多く含む。
5	褐色(10YR4/6)	シルト	しまりがない。
6	褐色(7.5YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。
7	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	炭化物・地山粒を若干含む。しまりあり。
8	褐色(10YR4/6)	〃	他の土をあまり含まない。しまりあり。
9	褐色(7.5YR3/2)	〃	地山粒を含む。しまりあり。一部グライ化。
10	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	地山粒を含む。しまりあり。一部グライ化。

第29図　ＳＸ01池跡，ＳＫ02・05・18，ＳＤ15断面図



層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	明黄褐色(7.5YR5/8)	粘質シルト	炭化物・旧表土が縞状に入る。凝灰岩小礫を含む。	16	暗褐色(10YR3/3)	シルト	旧表土の二次堆積土。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物・旧表土・凝灰岩の小礫が縞状に入る。	17	褐色(10YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。粘性あり。
3	暗褐色(10YR3/4)	〃	炭化物・地山ブロックを含む。SD15堆積土。	18	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒を含む。粘性あり。ややしまりあり。
4	褐色(10YR4/6)	〃	炭化物・凝灰岩小礫を含む。	19	黄褐色(10YR5/8)	砂質シルト	暗褐色土を僅かに含む。粘性あり。しまりなし。
5	褐色(10YR4/6)	〃	炭化物・凝灰岩小礫・地山ブロックを含む。	20	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を若干含む。粘性あり。ややしまりあり。
6	黄褐色(10YR5/8)	〃	凝灰岩小礫を含む。	21	黄褐色(10YR5/8)	〃	礫を含む。粘性あり。しまりなし。
7	明黄褐色(7.5YR5/6)	粘土	炭化物を含む。旧表土。	22	褐色(10YR4/4)	〃	砂粒を含む。粘性あり。しまりなし。
8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む。旧表土。	23	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒を含む。やや粘性あり。しまりなし。
9	灰黄褐色(10YR4/2)	〃	炭化物・凝灰岩小礫を含む。SD13堆積土。	24	黄褐色(10YR5/6)	〃	礫を含む。粘性あり。ややしまりあり。
10	明黄褐色(7.5YR5/6)	〃	ロームブロック・凝灰岩小礫を含む。しまりなし。	25	褐色(10YR4/6)	〃	地山の二次堆積土。
11	にぶい黄褐色(7.5YR5/3)	〃	汚れが多い。	26	褐色(10YR4/4)	〃	地山粒・小礫を含む。粘性あり。しまりなし。
12	褐色(10YR4/4)	粘質シルト	地山粒を僅かに含む。	27	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山の小ブロックを含む。粘性あり。しまりなし。
13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	小礫を含む。粘性なし。しまりあり。	28	黄褐色(10YR5/6)	〃	やや粘性あり。地山粒を含まない。
14	黄褐色(10YR5/6)	〃	炭化物・地山ブロック・凝灰岩小礫を含む。	29	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロック・黒褐色土を含む。粘性あり。
15	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒を多く含み、炭化物を僅かに含む。粘性あり。	30	暗褐色(10YR3/3)	〃	旧表土。

第30図　ＳＸ03通路状遺構断面図

緩く、他では35°～40°の傾斜である。Ｓ－9～12・Ｅ－36～39付近で調査区外に延びるがⅡ区やⅣ区においても溝の延びは確認できなかった。堆積土は褐色ないし黒褐色のシルトが堆積している(第29図下)。遺物は西側底面から施釉陶器破片が出土しているが、細片のため器種・産地・年代は不明である。

通路状遺構

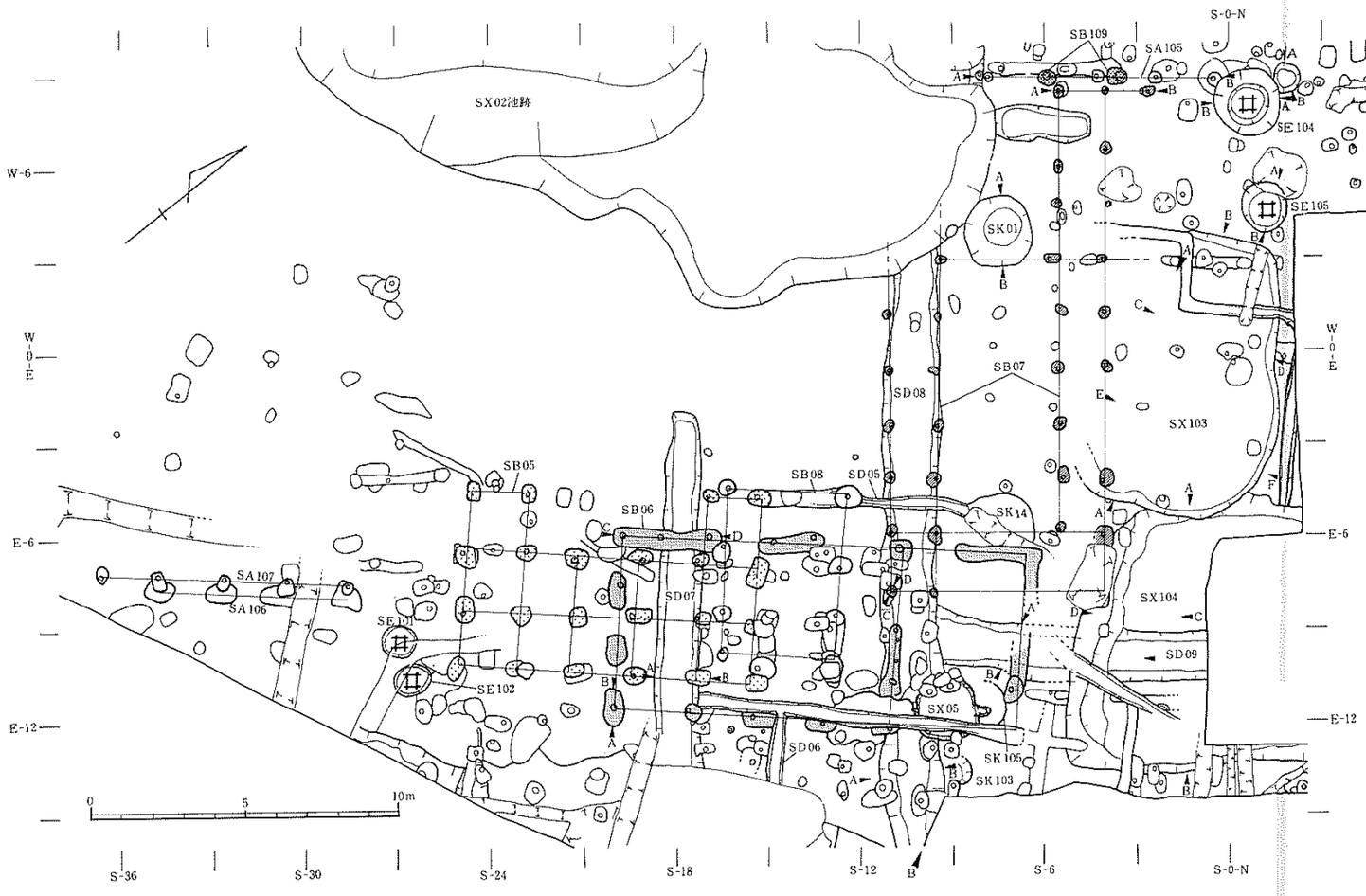
【ＳＸ03】ＳＸ01池跡の北西で検出され、幅3.5～4.5m・深さ20㎝～1.2mの溝状を呈する。整地層の下位にある旧表土から掘り込まれており、ＳＤ15溝跡・ＳＫ08・09土壙より古い。また西辺の一部が土壙状の落ち込みによって壊されている。西へ傾斜しており、掘り込みの底面には柱穴と思われるピットが2列、0.7～1.6mの間隔で計18個検出された。ピットには一部重複があり、柱の建て替えがなされていたことがわかる。ピットには柱抜き取り痕をもつものがあり、褐色ないし暗褐色の粘土・シルトが堆積している。また、溝状部分には褐色系のシルト・粘土質シルトなどが堆積している(第30図)。

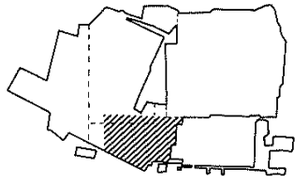
④Ⅳ区：「表」南東付近(第31～36図、第8表、写真図版12～15)

掘立柱建物群の集中する東側では、東隅部分に館の構築に関連すると見られる整地層が残存している。他の区域では表土直下で地山面が露出し、学校造成時に削平されたものと考えられる。この調査区域では、掘立柱建物跡、柱穴列、溝跡、竪穴状遺構、カマド跡などを検出した(第8表)。

掘立柱建物跡

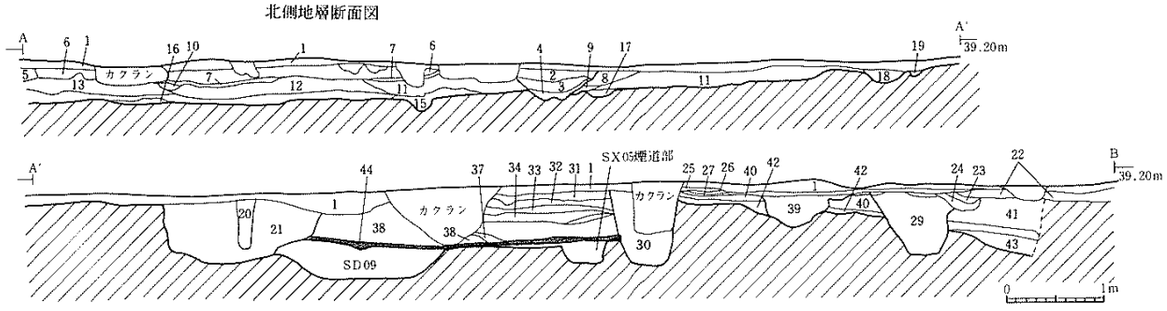
【ＳＢ05】地山面で検出。桁行5間、梁行2間、総柱の南北棟で、西側両脇に1間分の張り出しがある。構造的にはⅡ区ＳＢ108と類似する。ＳＤ07溝跡を切っており、これより新しい。





層No.	土　色	土　性	備　考
1	----------	砂　利	盛土。炭化物が混じる。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物が多く混じる。遺構埋積土。
3	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒・炭化物が混じる。遺構埋積土。
4	褐色(10YR4/4)	〃	同上。遺構埋積土。
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	整地層。
6	褐色(10YR4/6)	〃	整地層。
7	褐色(10YR4/4)	〃	地山粒を斑状に含む。整地層。
8	暗褐色(10YR4/4)	〃	遺構埋積土？
9	褐色(10YR4/4)	〃	炭化物少量含む。遺構埋積土？
10	褐色(10YR4/4)	〃	遺構埋積土？
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	炭化物を多く含む。整地層。
12	暗褐色(10YR3/4)	〃	木炭粒を多く含む。白色地山ブロックを若干含む。整地層。
13	褐色(10YR4/4)	〃	地山の細粒を含む。整地層。
14	褐色(10YR4/6)	〃	地山ブロック・地山粒・炭化物を斑状に含む。整地層。
15	明黄褐色(10YR6/8)	粘　土	整地層。
16	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	炭化物粒を含む。整地層。
17	褐色(10YR4/6)	粘　土	遺構埋積土？
18	褐色(10YR4/4)	シルト	SB07柱穴埋土。
19	褐色(10YR4/4)	〃	地山ブロックを多く含む。ピット埋土。
20	褐色(10YR4/4)	〃	SB06の柱痕跡埋積土。炭化物含む。
21	褐色(10YR4/4)	〃	上記柱堀り方。地山ブロックと小礫が多量に混在。
22	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロックを少量含む。整地層。
23	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロックを多量に含む。遺構埋積土？
24	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	遺構埋積土？
25	暗褐色(10YR3/4)	砂質土	整地層。
26	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	木炭粒を含む。整地層。
27	黒褐色(10YR2/3)	----------	木炭層。整地層。
28	褐色(10YR4/4)	シルト	柱穴掘方埋土。
29	暗褐色(10YR3/4)	〃	大粒の地山ブロックを多量に含む。柱穴掘方埋土。
30	暗褐色(10YR3/4)	〃	SB06柱穴埋積土。地山ブロックを多量に含む。
31	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物・地山粒を含む。整地層。
32	にぶい黄褐色10YR5/4	〃	小礫・地山ブロックを含む。整地層。
33	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロックを多く含む。整地層。
34	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロック・木炭粒を多く含む。整地層。
35	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土ブロック・木炭を多く含む。整地層。
36	暗褐色(10YR3/4)	〃	小礫・炭化物を少量含む。整地層。
37	褐色(10YR4/4)	〃	多量の木炭を含む。整地層。
38	暗褐色(10YR3/4)	〃	36層と同一。整地層。
39	褐色(10YR4/4)	〃	地山粒を斑状に含む。遺構埋積土。
40	明黄褐色(2.5YR6/8)	〃	地山ブロックを多量に含む。整地層。
41	黄褐色(10YR5/6)	〃	地山ブロックを多量に含む。整地層。
42	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒を含む。整地層。
43	黒褐色(10YR2/3)	〃	少量の地山ブロックを含む。整地層。
44	にぶい赤褐色(5YR5/3)	粘　土	性格不明。

北側地層断面図



第31図　Ⅳ区遺構平面図、地層断面図

第８表　Ⅳ区検出遺構一覧

遺構名	確認面	棟方向	規模（桁×梁）	柱間寸法	備考
掘立柱SB05	地山	南北	５間×２間	(桁)2.0~2.1m(梁)1.9~2.1m	西桁中央部柱穴なし。SB108に類似。SD07を切る。
SB06	地山	南北	７間×３間　？	(桁)1.2/1.5/2.1(梁)1.5/2.1m	SB07より古く、SD08・09より新しい。
SB07	地山	東西	(一部)６間×３間	(桁)1.8m(梁)1.5/4.0m	３方に縁か。西側に南北棟が連なる？ SD08との関係不明。
SB08	地山	東西	３間×２間	(桁・梁)1.9m	SB05より古く、SB06より新しい。
SB09	地山	東西	３間以上×１間	(桁)？　(梁)2.1m	SB05より古く、SB08より新しい。

遺構名	確認面	方向	布掘り状(A)穴列(B)	長さ	柱穴数	柱間寸法	備考
柱穴列SA105	地山	南北	B	7.5m	5	1.9m	SB109・SE104に切られる。柱材一部残存、丸柱で径約15cm。
SA106	〃	南北	B	6.3m	4	(2.1m)	SA107に切られる。
SA107	〃	南北	B	8.2m	5	1.8~2.1m	SA106を切る。

遺構名	確認面	形態	構造	径	深さ	備考
井戸跡SE101	地山	円形	素掘り	1.0m	3.2m以上	
SE102	〃	〃	〃	1.1m	2.2m以上	
SE104	整地	〃	〃	2.2m	1.8m以上	SA105・SK102を切る。壁は下方が垂直で中位から上は開く。
SE105	地山	〃	〃	1.6m	1.8m以上	壁は垂直に立ち上がる。

遺構名	確認面	形態	径（長×短）	深さ	備考
土壙跡SK01	地山	円形	2.3m	70cm	SX02池に切られる。
SK14	整地	円形？	2.5m	30cm	SD05より古い。
SK102	地山	円形	0.9m	50cm	SE104より古い。堆積土下位および底面直上から平瓦片出土。
SK103	〃	円形？	0.8m	20cm	南半分欠。埋土に焼土・炭化物が含まれる。
SK105	〃	円形？	1.2m	25cm	SK05カマド跡との新旧関係は不明。壁は比較的急に立ち上がる。

遺構名	確認面	形態	長	短	深さ	備考
竪穴状遺構SX103	地山	隅丸長方形？	約9.0m	約6.0m	20cm	SD102・SK104に切られ、SB07・SX104を切る。人為的に埋め立て？ 遺物多い。
SX104	地山	不整楕円形？	10m以上	約9.0m	30~60cm	SD102・SX103に切られ、SB07・SD09を切る。 17世紀~18世紀前半の遺物多く出土。

遺構名	確認面	方向	長さ	幅	深さ	備考
溝跡SD05	地山	南一北	7.0m	0.4m	8~18cm	SB08より古い。埋土は暗褐色砂質シルト。
SD06	地山~整地	南→北、西→東	14.0m	0.4~0.5m	10~20cm	T字状。SB06・SD07より新しい。埋土は暗褐色砂質シルト。
SD07	地山	西→東	11.5m	0.9~1.4m	21cm	SB05・06・09、SD06より古い。埋土は暗褐色シルト。
SD08	地山	西→東	19.5m	1.6~2.0m	8~36cm	SX05カマド跡より古い。埋土は褐色シルト・粘土。
SD09	地山	南一北	9.0m	1.6~1.9m	18~30cm	SD08、SX104竪穴状遺構より古い。
SD102	SX103上~地山	東→西→南	15.0m	0.3m	3~10cm	鍵型に屈折。SX103竪穴状遺構より新しい。

遺構名	確認面	長	短	備考
カマド跡SX05	整地~地山	2.2m	2.0m	石組の焚口と煙道部。SD08・09より新しく、SB06・07より古い。

柱間寸法は、桁行きが2.0～2.1m、梁行は1.9～2.1mである。柱穴は長軸50cm～1m前後、深さ7～45cmの隅丸長方形ないし方形を基調とし、褐色系のシルトが堆積している。柱痕跡の直径は20cm前後である。

【ＳＢ06】桁行7間(東桁行は6間割)、梁行3間の南北棟で、一部は整地層の上面で検出されたが、多くは地山面上での検出である。ＳＢ07建物跡より古くＳＤ07・ＳＤ09溝跡より新しい。南から4列目の梁行では間仕切りと思われる柱穴が3間分検出されている。柱間寸法は桁行が西側柱列で南から5間目まで1.2m－1.5m－2.1m－1.2m－2.9m、梁行は南側柱の東から2間と3間目の間が約1.5mである。間仕切り部柱列は東から1.5m－0.7m－1.0m－2.7mである。柱穴には布掘り状を呈し2～3本の柱を据えたものが西桁行きにみられるが、他は長軸0.6～1m、深さ8～76cmの方形ないし長方形・隅丸長方形を呈する。埋土

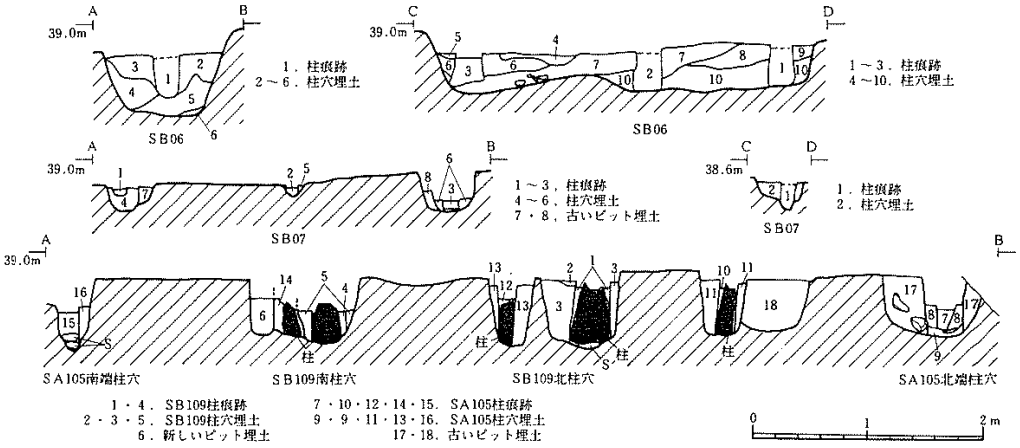
は褐色系の砂質シルトで、柱痕跡は直径12～30cmである。東側柱南端の柱穴から近世の磁器片が出土している。

【ＳＢ07】地山面で検出。東西棟と思われる建物の一角で、ＳＢ06建物跡より新しい。規模のわかるところでは桁行6間、梁行3間、3方(南・東・北)の1間分は縁もしくは廊下の可能性がある、柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行が1.5m－4m(2間分)－1.5mである。柱穴は長軸27～40cm、深さ18～40cmの楕円形状を基調とし、暗褐色シルトが堆積している。柱痕跡の直後は10～18cmである。柱穴は長軸50～80cm、深さ18cm～29cmの隅丸長方形状を基調とし、暗褐色ないし黒褐色のシルトが堆積している。柱穴の直径は14～24cmである。

【ＳＢ109】地山面検出。2.4mの間隔をおいて2本の角柱が並ぶもの(第32図)。ＳＢ07掘立柱建物跡の北側に位置している。ＳＡ105柱穴列と同じライン状に並び、これを切る。柱穴は長軸が50～70cmの円形基調で、深さは60cmほどである。埋土は褐色シルトに多量の地山ブロックが混入する。炭化物も少量見られた。柱は一辺が30cm程で北側の柱の下には沈下を防ぐための石が置かれていた。建物の出入り口もしくは門に相当する遺構と考えられる。なお、南側柱穴埋土からは軒桟瓦が出土している。

柱穴列

【ＳＡ105】地山面で検出。ＳＢ07掘立柱建物跡西辺の50cm西に位置し、南北方向に5個の柱穴が並ぶ。ＳＢ109、ＳＥ104井戸跡に切られている。柱間隔は1.9m等間で、炭化した柱材が残存していた。柱穴は一辺が35～40cmの不整隅丸方形で、深さは50～65cmである。埋土は褐色シルトに多量の地山ブロックが混入するもので、炭化物も少量見られた。柱は径が15cmほどの丸柱で柱の下に沈下を防ぐための石が置かれているものがあった(第32



第32図　SB06・07・109，SA105 柱穴断面図

図)。

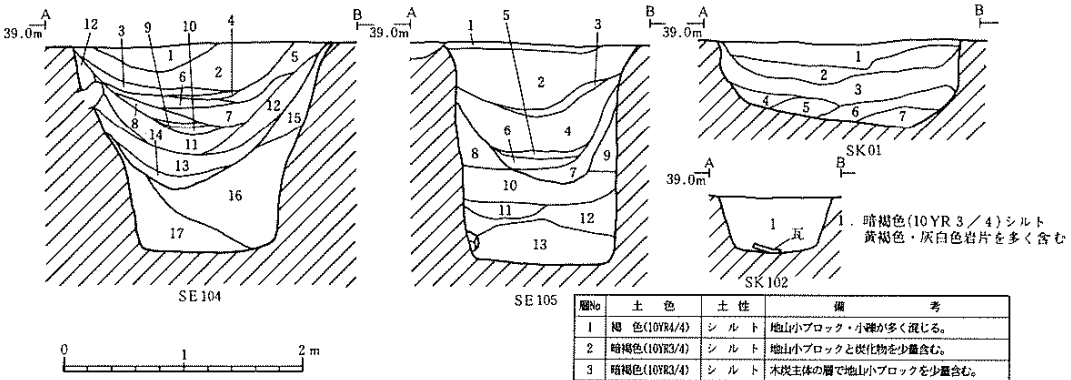
井戸跡

【ＳＥ104】ＳＸ103竪穴状遺構の西約5mに位置し、ＳＡ105柱穴列・ＳＫ102土壙を切っている。円形の素掘りの井戸で、壁は下方が垂直で中位から上は開いている。上端径約2.2m、下端径約1.1m、深さ1.8mで、堆積土は17層に細分される。上位の1～14層はレンズ状の堆積をしている。

【ＳＥ105】地山面検出。ＳＥ104井戸跡の東約2mに位置する。円形の素掘りの井戸で壁は垂直に立ち上がる。上端径約1.6m、下端径約1.1m、深さ1.8mで、堆積土は13層に細分され、上位の1～7層はレンズ状の堆積をしている。

土壙

【ＳＫ01】地山面検出のやや大きい土壙。ＳＸ02池跡に切られる。褐灰色・明黄褐色の粘土・シルトが堆積。中から近世磁器の小破片出土。



SE 104

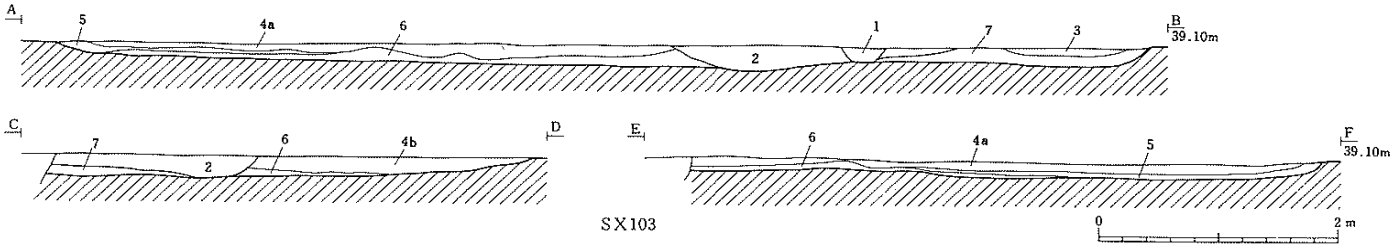
層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックと小礫を僅かに含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	1層に比して地山ブロックを多く含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	炭化物を僅かに含む。
4	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	微量の地山ブロックと炭化物を含む。
6	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	5層に比して多めの炭化物を含む。
7	褐色(10YR4/4)	シルト	微量の地山ブロックと炭化物を含む。
8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	多量の地山ブロックと少量の小礫を含む。
9	褐色(7.5YR4/3)	砂	
10	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	
11	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを僅かに含み、小礫の混じりが多い
12	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	多量の地山ブロックを含む。
13	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	グライ化している。
14	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	グライ化し15・16層の砂質シルトが混じる。
15	明黄褐色(10YR6/8)	砂質シルト	12層に似ているが小礫の混じりが多い。
16	明黄褐色(10YR6/8)	砂質シルト	多量の地山ブロックと小礫を含む。
17	黄褐色(10YR7/8)	砂質シルト	多量の地山ブロックと小礫を含む。

層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山小ブロック・小礫が多く混じる。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山小ブロックと炭化物を少量含む。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭主体の層で地山小ブロックを少量含む。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	2層とほぼ同様である。
5	黒色(10YR2/1)	シルト	3層とほぼ同様である。
6	褐色(10YR4/4)	粘土	地山ブロック。
7	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	大きめの地山ブロックを少量含む。
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少量含む。
9	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山小ブロックを少量含む。
10	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロック・地山粒・炭化物を少量含む。
11	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む。
12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。
13	黄灰色(2.5Y4/1)	粘質シルト	20cm大の礫が混じる。

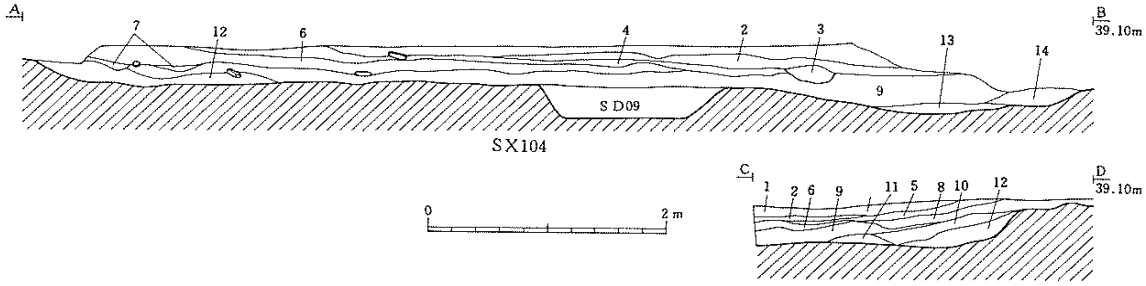
SK 01

層No	土色	土性	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物を少量含む。
2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	地山礫のブロック・砂粒を非常に多く含む。
3	褐灰色(10YR5/1)	粘土	5cm大の礫を少し含む。
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	
5	灰褐色(10YR5/2)	粘土	
6	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	

第33図　ＳＥ104・105，ＳＫ01・102断面図



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	褐 色(10YR4/4)	シルト	凝灰岩片・粒が多量に混じる。SD102 溝埋土。	4b	暗 褐 色(10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物が少量混じる。
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	炭化物が少量混じる。SK104 土壙埋土。	5	黒 褐 色(10YR3/1)	シルト	炭化物・焼骨・魚骨などが混じる。
3	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)	シルト	小礫・炭化物が少量混じるグライ層。撹乱層?	6	明 黄 褐 色(10YR6/8)	粘土	地山主体で灰黄褐色土が若干混じる。
4a	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	地山粒・炭化物が少量混じる。	7	褐 色(10YR4/6)	シルト	地山粒・炭化物・岩片が均質に混じる。



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	褐 色(10YR4/4)	シルト	地山粒・木炭が少量混じる。	8	黒 褐 色(10YR2/3)	シルト	木炭が混じる。
2	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	多量の木炭と少量の焼土が混じる。	9	褐 色(10YR4/4)	粘質シルト	粘性があり、酸化鉄が混じる。
3	褐 色(10YR4/4)	シルト	地山粒が少量混じる。	10	褐 色(10YR4/4)	砂質シルト	微量の炭化物を含み、酸化鉄の混じりが多い。
4	灰 黄 褐 色(2.5GY3/1)	シルト	木炭粒を含む。	11	暗 褐 色(10YR3/4)	シルト	木炭と焼土粒が僅かに混じる。
5	褐 色(10YR3/4)	粘質シルト	地山ブロックが斑状に混じる。	12	褐 色(10YR6/8)	シルト	多量の地山ブロックが斑状に混じる。
6	褐 色(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物を含み、酸化鉄が混じる。	13	褐 色(10YR4/4)	粘質シルト	地山粒を僅かに含む。
7	褐 色(10YR3/4)	粘質シルト	地山ブロックが混じる。	14	灰 黄 褐 色(10YR4/2)	粘質シルト	少量の炭化物を含み、グライ化している。

第34図　SX103・104竪穴状遺構断面図

【ＳＫ102】地山面検出。ＳＥ104井戸跡に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒・凝灰岩小ブロックを多く含む暗褐色シルトで、堆積土の下位および底面直上から平瓦片が多く出土している。

竪穴状遺構

【ＳＸ103】地山面検出。ＳＢ07掘立柱建物跡の北側に位置し、ＳＤ102溝跡・ＳＫ104土壙に切られ、ＳＢ07掘立柱建物跡・ＳＸ104竪穴状遺構を切っている。隅丸長方形を呈すると思われ、長軸は約9m、短軸は残存部で約6m、深さは20cm程である。堆積層は5層が確認され、人為層の可能性が高いように思われる。層中から陶磁器類・焼塩壺・硯・銭貨が出土している。

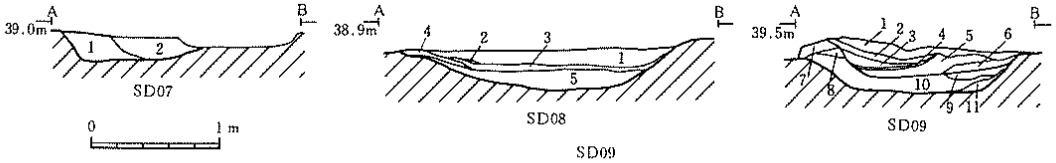
【ＳＸ104】地山面検出。ＳＸ103竪穴状遺構の東側に位置し、ＳＤ102溝跡・ＳＸ103竪穴状遺構に切られ、ＳＢ07掘立柱建物跡・ＳＤ09溝跡を切っている。長軸10m以上・短軸約9mの不整楕円形状を呈すると思われる。深さは概ね30cm程で、底面はほぼ平坦であるが北東部分のみ60cmほどに深くなっている。14層が確認され、2層を主に上下の層から磁器・陶器・土師質土器・焼塩壺・瓦類・煙管・銭貨など多くの遺物が出土している。

溝跡

【ＳＤ07】地山面検出。北西～南東方向に延びる。幅90cm～1.4m、深さは21cm前後で褐色シルトが堆積している。

【ＳＤ08】地山面検出。ＳＸ01カマド跡に壊されており、整地層に覆われている。南東から北西に延び、幅1.6～2m、深さ8～36cmで、褐色系のシルト・粘土などが堆積している。

【ＳＤ09】整地層の下位にある赤褐色粘土層に覆われており、ＳＤ08・ＳＸ104竪穴状遺構に切られている。上幅が最大で2.4m、下幅は0.9m、深さは最大で74cmを計る。底面は平坦



SD07

層No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒・小礫を含む。しまりあり。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・炭化物・焼土を含む。しまりあり。

SD08

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。整地層。
2	褐色(10YR4/6)	砂質土	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土	
4	褐色(10YR4/6)	砂質土	
5	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。

SD09

層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒を斑状に含む。
4	褐色 (10YR4/4)	粘土	
5	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	地山ブロックを含む。
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土	地山ブロックを少量含む。
7	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	細かな地山ブロックと炭化物を多く含む。
8	黄褐色 (10YR5/6)	粘土	
9	褐色 (10YR4/4)	粘土	大粒の地山ブロックを多く含む。
10	褐色 (10YR4/4)	粘土	
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土	

第35図　ＳＤ07～ 09断面図

で、壁の立ち上がりは緩やかである。

カマド跡

【ＳＸ05】概報(宮城県教委1990ｂ)では、古代の炭窯跡の可能性を考えた遺構(第36図)であるが、大きさ・構造(石組の小さな焚き口がある点など)からみて炭窯とは考えにくいこと、さらに年代的な位置づけに用いた遺物(須恵器・土師器)は混入の可能性があることなどからあらためて検討し直し、本遺構は火を用いる施設：カマド跡と考え、年代的にも近世に位置づけられると判断した。

この遺構は、ＳＤ08・09より新しく、ＳＢ06・07より古い。構築面はＳＤ08の堆積土上にある、地山粒を多量に含む層である。この層はＳＤ08の外にも分布しているため、カマドの構築に際してなされた小規模な整地層と考えられる。カマド跡は燃焼室、前庭部、煙道からなる。燃焼室は長軸2.2m、短軸2mの円形で西側に焚口があり、かまどの壁が検出面から深さ15㎝ほど残存している。堆積土上層は掘立柱建物構築に関わる整地層で、下層に褐色系のシルト質粘土等が堆積している。検出部の壁と底面は地山層で、壁は熱のため赤変し固くしまっている。底面はほぼ水平で、炭化物粒子が散在する。

焚き口は板石を組み、幅35～40㎝、高さ34㎝、奥行き21㎝の方形の開口部を設けたものである。天井石を支える袖石は据え方を掘って固定されている。

煙道部は焚口反対部に位置しており、一部検出した。焚口と同様な構造で天井部に板石、袖石に自然石を用いて、幅20㎝、高さ9㎝の開口部を設けている。

前庭部は焚口の南側に接しており、長軸2.8m、短軸1.7mの不整楕円形を呈する。底面は擂鉢状で、炭化物が遺構外まで広がっている。

⑤Ⅴ区：南辺付近(第37・38図、写真図版16・17)

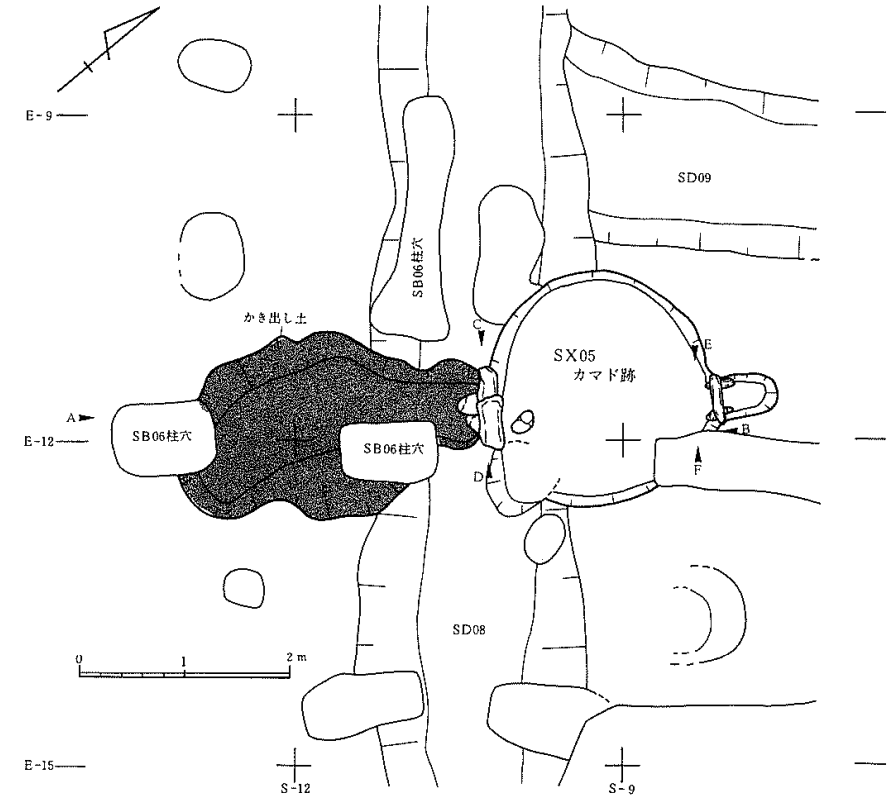
館の南脇に相当する地区である。西側は中学校造成の際1m以上の盛土が行われている。また北側は第3次調査後の校舎建設にともない大きく削平され、遺構は壊されていた。調査の結果、柱穴列・井戸跡・土壙・道路跡・土塁跡が検出されている。

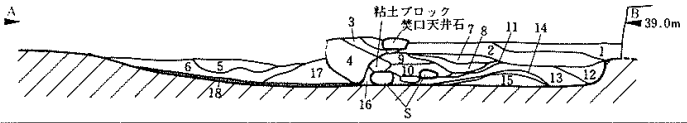
柱穴列

【ＳＡ108】4個の横穴が東西に1間、南北に2間のＬ字状に並ぶもので、ＳＸ04道路跡から北側に約50㎝離れた地山面で検出された。柱間寸法は東西が1.85m・南北が1.8m等間である。柱穴は径が25～35㎝の円形を基調とし、埋土は暗褐色シルトに地山ブロックが混じる。柱痕跡は径が10～15㎝の円形で、深さは20㎝程である。

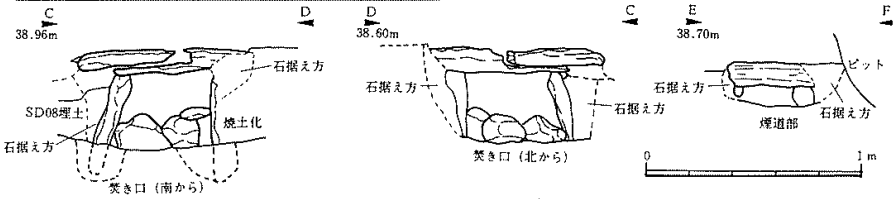
井戸跡

【ＳＥ103】円形の素掘りの井戸である。ＳＸ04道路跡と重複し、側溝を切っている。上端径

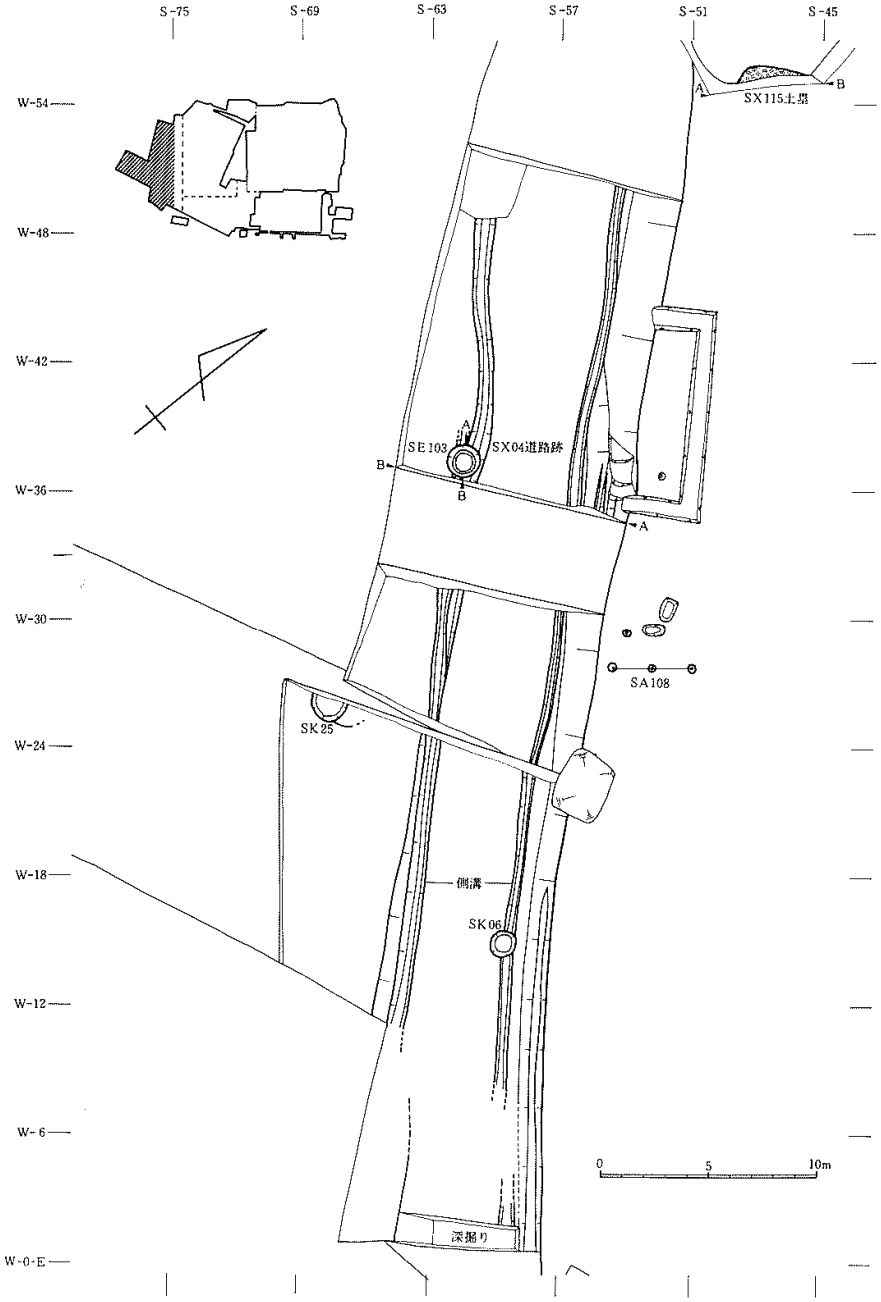




層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒・炭化物を若干含む。整地層。	10	褐色(10YR4/4)	〃	焼土・炭化物を多く含む。カマド内堆積土。
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	地山粒を多く含む。整地層。	11	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	焼土を含む。カマド内堆積土。
2	褐色(10YR4/4)	粘土	他の土が混じらない。空間部への流入土か。	12	黒褐色(10YR2/2)	〃	焼土を含む。カマド内堆積土。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。被熱している。ピット埋土。	13	赤橙色(10YR6/8)	シルト質粘土	被熱している。カマド内堆積土。
4	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	焼土・炭化物を含む。地山粒を多量に含む。ピット埋土。	14	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物を多量に含む。カマド内堆積土。
5	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒・炭化物を多量に含む。前庭部堆積土。	15	赤橙色(10YR6/8)	〃	被熱している。カマド内堆積土。
6	黒褐色(10YR2/3)	〃	炭化物多い。地山粒・焼土を少量含む。前庭部堆積土。	16	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	焼土を含む。カマド内堆積土。
7	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物を多量に含む。カマド内堆積土。	17	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	地山粒・炭化物を多量に含む。焼土あり。前庭部堆積土。
8	赤橙色(10YR6/8)	〃	被熱している。カマド内堆積土。	18	炭化物層	--------	地山の上に炭化物が面的に広がる。前庭部堆積土。
9	褐色(10YR4/4)	〃	焼土・炭化物を微かに含む。地山粒多い。カマド内堆積土。				



第36図　ＳＸ05カマド跡



第37図　Ⅴ区遺構平面図

が約1.5m、下端径が50cm、深さ1.4mで壁は上方が開いている。堆積土すべて自然堆積土である(第38図)。

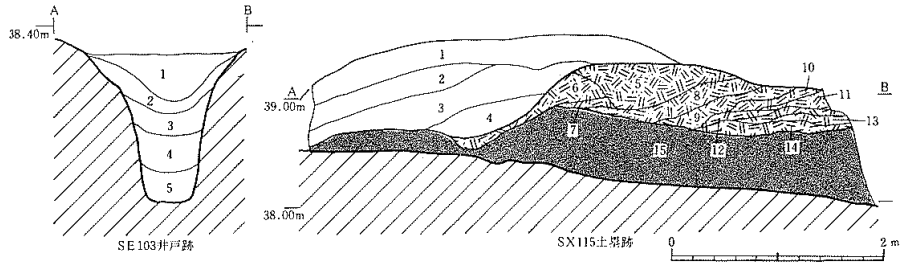
土壙

Ⅴ区東側で2基の土壙が確認されている。

【ＳＫ06】直径1.2m～1.3m、深さ90cm前後の円形の土壙である。ＳＸ04道路跡の側溝を切っており、堆積土には近代以降の盛土と考えられるシルトが堆積している。

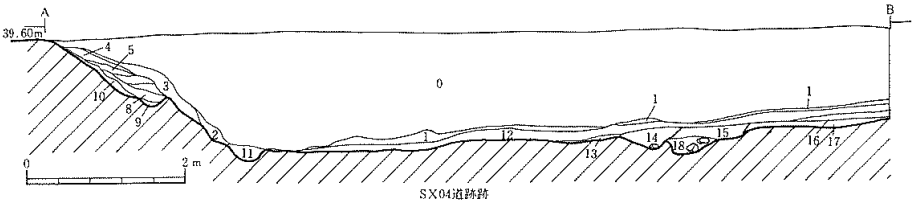
道路跡

【ＳＸ04】地山面で検出した。東西に延びる館南脇の道路と考えた遺構である。幅8m前後・



層No	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR5/8)	砂質粘土	10～15cm大の礫が混じる。
2	灰オリーブ色(5Y4/2)	砂質粘土	
3	灰オリーブ色(5Y5/3)	砂質粘土	微量の炭化物を含む。
4	オリーブ灰色(5GR5/1)	砂質粘土	グライ化している。粘性あり。
5	青灰色(10BG6/1)	砂質粘土	グライ化している。粘性あり。

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	木根による攪乱多し。しまりなし。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック・小礫を若干含む。しまりなし。
3	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山ブロックを含む。しまりなし。磁器片出土。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	3層よりも地山ブロックの量が少ない。
5	黄褐色(10YR7/8)	粘土	地山ブロック。しまりあり。
6～15	黒褐色(10YR2/3)＋黄褐色(10YR7/8)	シルト＋粘土	地山ブロックと旧表土が混じる。7、8、10、13、14は地山ブロック主体で6、12はほぼ半々の割合。9、11は旧表土主体。しまりあり。
16	黒褐色(10YR2/3)	シルト	旧表土。均質でしまりあり。粘性は少ない。



層No	土色	土性	備考		層No	土色	土性	備考
0	浅黄色(2.5Y7/4)	粘土	地山ブロック・砕石等混じる盛り土。	整地1	10	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。
1	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	グライ化した腐食土。		11	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	グライ化粘土ブロック・砂を含む。側溝堆積土
2	にぶい黄橙(10YR6/4)	シルト	酸化鉄を含み粘性が強い。		12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	東側はグライ化。底面堆積土。
3	にぶい黄橙(10YR6/4)	シルト	地山粒を少量含む。		13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む。底面堆積土。
4	黄褐色(10YR5/6)	シルト			14	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を含む。側溝堆積土。
5	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	地山粒を多量に含み、黒色土も少量混じる。		15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
6	黄橙色(7.5YR7/8)	粘土	白色粘土ブロック・粒が若干混じる。		16	にぶい黄橙色(10YR7/2)	シルト	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
7	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	白色粘土ブロック・粒が若干混じる。		17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
8	黄褐色(10YR5/6)	シルト			18	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粘土	地山・礫混じりの旧側溝埋土。
9	褐色(10YR4/6)	シルト						

第38図　SE103井戸跡，SX115土塁跡，SX04道路跡断面図

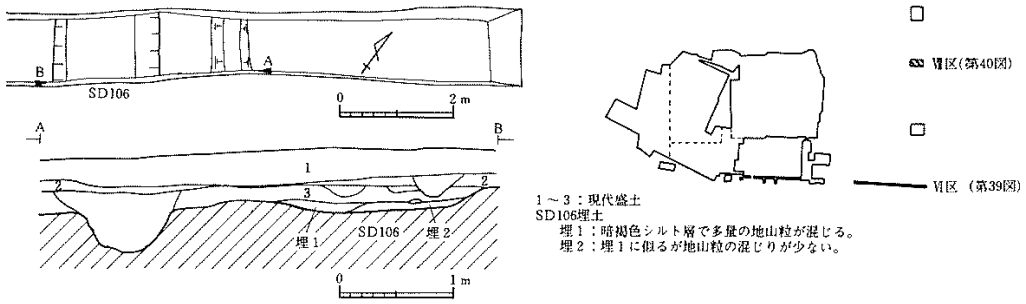
深さ1m強の溝状を呈する。館に連なる北側の肩は約45°の角度で立ち上がり、途中に段状の部分がみられる。南側の肩は削平によって明瞭ではなく、部分的に35cm程の立ち上がりを残すのみである。道路面はほぼ平坦で西側に向かって傾斜している。道路幅は約5m、両側には幅50～60cm・深さ20cm程の側溝が取り付く。南側の側溝では1回の掘り直しが認められており、旧側溝を径20cm程の円礫などで埋め、整地後その内側に新側溝を掘っている。北側側溝でも断面観察により2回の掘り直しが確認されている。これらは北側側溝がＳＫ06土壙に、南側側溝がＳＥ103井戸跡にそれぞれ切られている。また東側では地山を1m前後掘り下げた後、道路面まで埋めもどす地業が見られた。堆積土上層は厚さ0.6～1.3mの中学校造成時の盛土で、道路上には腐食した植物遺体を含む黒褐色あるいは黄褐色の層が10～20cmの厚さで堆積している(第38図)。南側旧側溝埋上中から陶磁器類・瓦・石臼などが出土している。

土塁跡

【ＳＸ115】ＳＸ04道路跡の北側約1.8mに位置する。今でも土塁状の高まりとして残り、調査区の西側に延びている。削平を免れた一部が調査区にかかったもので、断面観察のみで詳細な調査は行っていないが、ＳＸ04とともに館の南辺を区画する施設と考えられる。積み土は旧表土を基底として内側から外側へと積まれ、内側では黒褐色土と黄褐色地山土が10cm前後の厚さで互層に積み上げられている。基底部の幅は3.9m以上(北側は削平され全体の幅は不明)で残存する高さは60cm程である。なお、外側には暗褐色土に若干の黄褐色地山土が混じるしまりのないボソボソした崩壊土と考えられる堆積土が見られた(第38図)。崩壊土第4層上面からは磁器片が出土している。

⑥Ⅵ区：東辺北部付近(第39図、写真図版17)

この区は館の北東隅に近い部分に当たる。幅1.3m、高さ48mのトレンチを設定し掘り下げたところ、地表面下にグランド造成に関わる25～30cmの盛土がみられ、その下は削



第39図　Ⅵ区検出溝跡の平・断面図

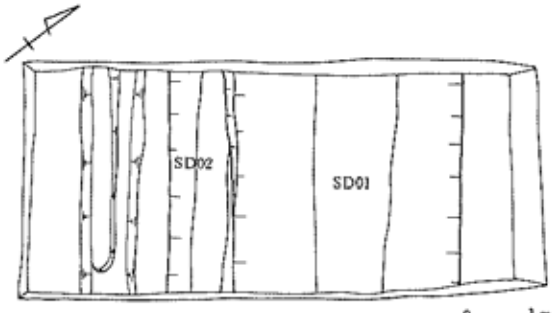
平された地山面であった。

調査区北寄りで溝跡が1条検出されている。

【ＳＤ106】盛土下の地山面で検出。上幅1.8～1.9m、下幅1.2m、深さ10cmである。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒を含む暗褐色のシルトである。

⑦Ⅶ区：北辺付近(第40図)

Ⅶ－1・2区では70cm～1m前後、Ⅶ－3区では2m以上の盛土がある。1区では地山まで下げたが遺構は確認されず、3区では盛土が厚かったので遺構確認には至らなかった。2区では盛土下の地山面で溝を2条検出した。



第40図　Ⅶ-2区検出溝跡の平面図

【ＳＤ01】幅3.5m、深さ80cmとやや規模の大きい東西方向の溝であるが、東側の1区では確認されていない。北辺外郭と関連するものかどうかは不明である。

【ＳＤ02】深さ36cm。ＳＤ01に切られる東西方向の溝である。

(2) 遺物

Ⅱ区を中心として調査区の中央から北西部にかけて多種多様の遺物が出土した。遺物は第9～11表に示したように、陶磁器類を主体にして、土師質・瓦質土器類、土製品(人形)、瓦類、金属製品(煙管・かんざし・銭貨ほか)、石製品(硯・石臼ほか)、木製品(漆塗碗・曲物ほか)など、近世遺跡特有の種類と数量の多さをみせている。

以下、これらの遺物について説明する。

①陶磁器類(第41～55図、第9表、写真図版19～28)

磁器(第41～49図)

碗類(碗蓋含む)(1～31)

1～11は小坏・小碗類である。1は外面口縁部に竹文を施す小坏である。2は半筒形の湯呑碗で、外面に花散松竹文、見込に手描き五弁花文、高台内には二重方形枠内に「福」？銘が見られる。3は端反形の器形で、口縁部には墨弾きの雲・花散文、見込に手描き四弁花文が施されている。4・5は腰部が丸みを持ち口縁が直線的に立ち上がる。5は貫入が顕著である。6～9は半球形の小碗類であるが、7はやや器高が低い。いずれも肥前産で、18世紀の製品であろう。10・11は端反形で、11は鉄釉による口紅が見られる。10は瀬戸、11は不明である。いずれも19世紀。12は腰部がやや厚くて丸みが弱い、外傾気味に立ち

上がる器高の高い碗である。口縁部に渦繋文、体部に草花文(？)を配する。肥前産の17世紀中ごろのものであろう。13はやや薄手で外に開き、暗緑灰色の草花文をもつ。14も外へ開く器形で、外面にコンニャク判による紅葉文、内面に流水花文を施している。15は底部がやや厚みのある蛇の目高台で外へ開く器形である。外面全体に線描きによる草花文を施し、見込には瓢箪に扇文を配する。16は丸みが強く、全体が薄手である。外面には蛸唐草文がみられる。17は外面花唐草文(花文部分コンニャク判)、高台内には一重方形枠内に渦福文が施されている。18～20はいわゆるくらわんか手で厚みがある。19はＳＫ52出土。21・22は広東形である。22は21に比べ高台が高く貫入が顕著である。外面に稲と雀文をもつ。21は瀬戸、22は肥前産。22はＳＸ53粘土貼り遺構からの出土。23～25は広東形碗とセットとなる蓋である。25には22の碗と同様に稲束と雀文が描かれている。26～28は端反形で、26は県内切込窯の製品である。縦縞草花文、腰から高台部には3重の圏線、見込には千鳥文が描かれる。28は外面にやや青みの強い縦縞文をもつ、瀬戸の製品である。29・30は形押しによる白磁の紅皿、31は坏部と脚部に圏線をもつ仏飯器である。

皿類（32～61）

32～34はいずれも肥前産の小皿である。32は底部が厚く浅い。34は内面草花文、見込には手描き五弁花文、高台内には二重方形枠の渦福文が描かれている。35は鳥獣文を描いた15世紀～16世紀頃の中国製品である。蛇の目高台の底部はやや厚めだが口縁部は薄手である。36～40はいずれも17世紀中ごろの肥前の製品である。36は柳文が描かれ、口縁部は平坦にカットされ鉄釉の口紅が施されている。39は型打ち成形で、草花文。口縁部は鉄釉の口紅が施されている。41も型打ち成形で内面に牡丹文、花唐草文の裏文様を描く。これと同様の資料で高台内に「宣徳年製」銘をもつ資料も出土している。44は外面にコンニャク判による紅葉文を施す。43・45・47・50は口径21.0㎝前後の皿類で、17世紀末から18世紀頃の肥前の製品である。49のような芙蓉手の折れ縁皿は比較的出土数が多い。52・53はともに切込の製品で、両者とも見込に蛇の目釉剥ぎがなされている。胎土は全体的に灰色味がある。54は軟質の型打草花文輪花皿である。17世紀中ごろの肥前の製品であろう。58は色絵角皿で、内面に連雁文、外面に如意頭文(？)、高台内には赤彩で「福」銘が施されている。55～57は、小型の変形皿・角皿類である。56のいわゆる手塩皿は呉須の青みが強い。59～61は口径30㎝を越える大皿類である。59は青磁の陰刻文大皿、60は窓絵草花文大皿で、ともに17世紀の肥前の製品である。61は芙蓉手の花鳥文折れ縁大皿、中国製で16世紀頃のものであろう。

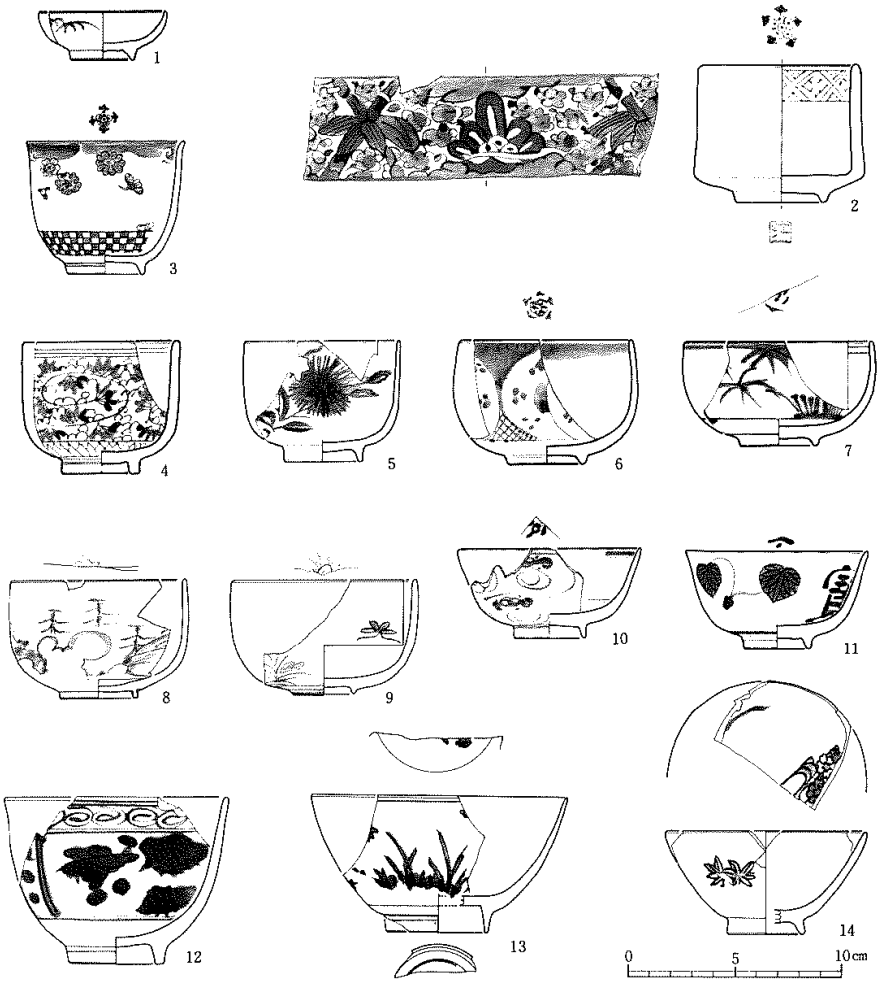
鉢類(62～71・74～76)

62は鍋島様式の鉢で、内面に桜文、外面に七宝文を描く。63～59は猪口である。63は小

第９表　陶磁器類集計表

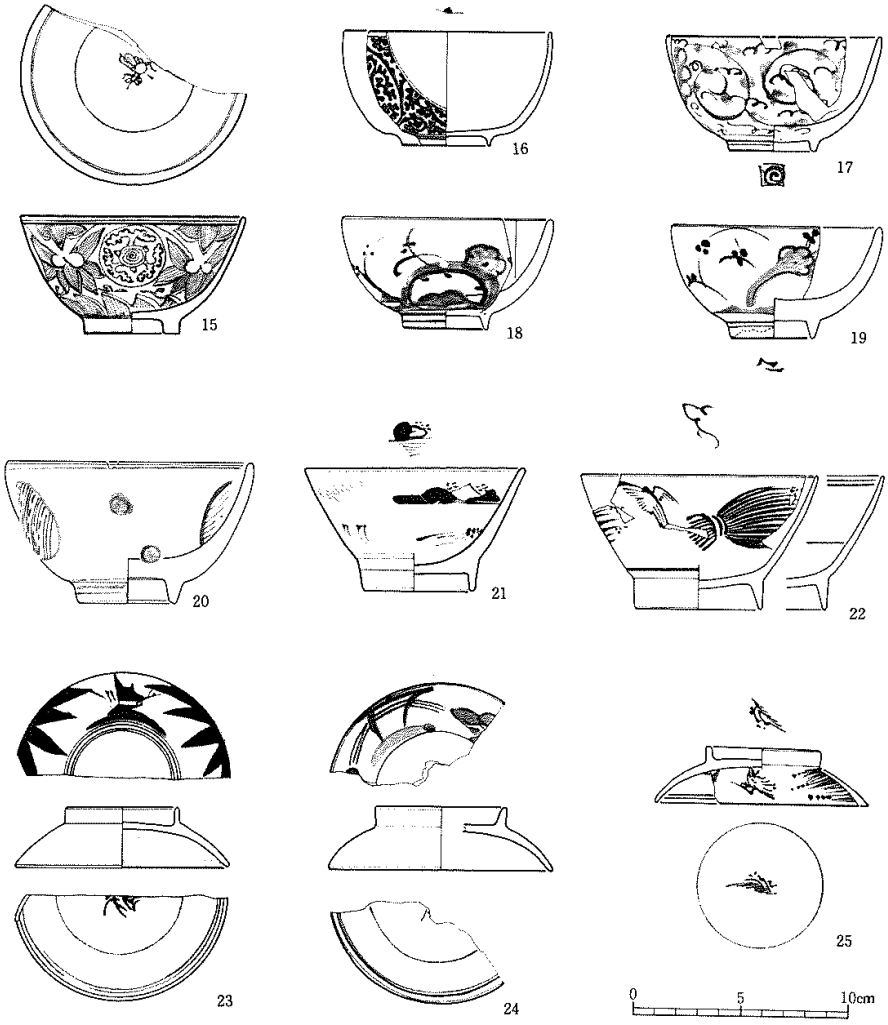
（注）数値は破片数を示す。（ ）内数値は、底部から口縁部まで残存し全体器形が復元できる資料数（内数）

| 地区 | 種類 | 須恵器 | | |



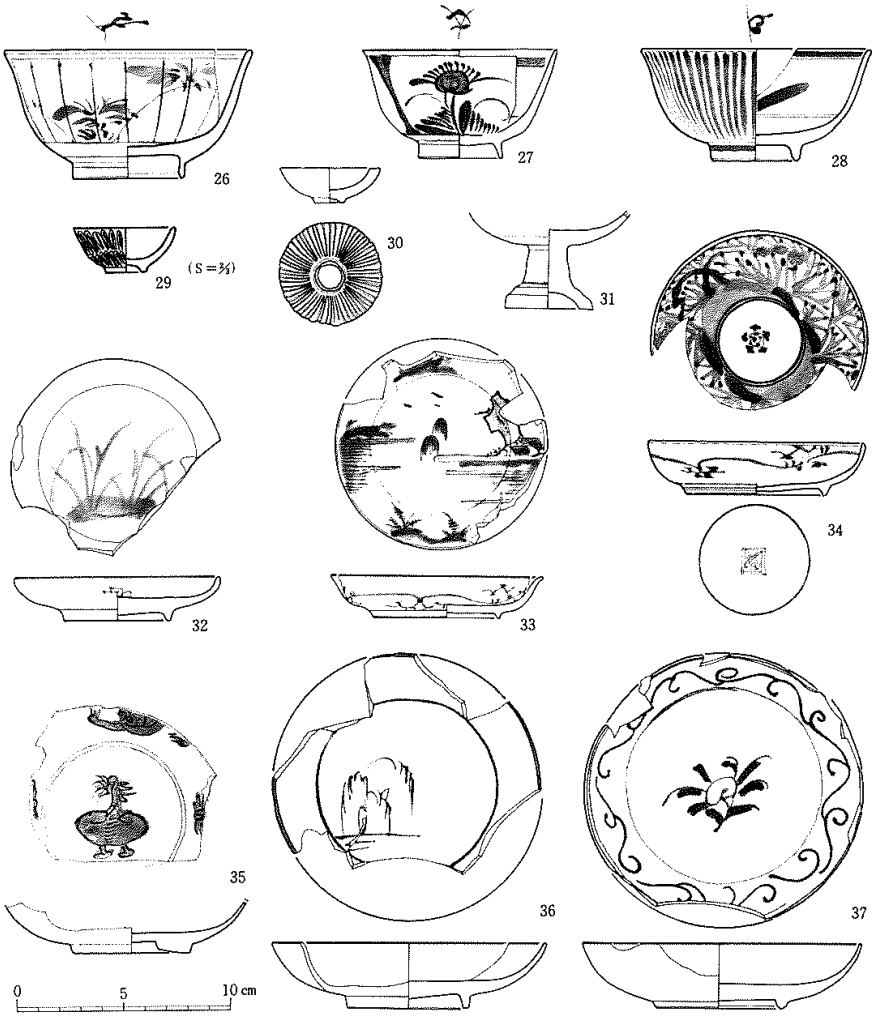
No.	地区・遺構・層位	種類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	特徴	写真図版
1	Ⅱ 整地Ⅱ	小 坏	5.9	2.9	2.3	肥 前	染付竹文。	18－11
2	Ⅲ SX01池跡	小 碗	7.3	4.0	6.3	肥 前	半筒形湯呑碗。染付花散竹松文。見込に手描き五弁花文。高台内に二重方形枠「福」？銘。	15
3	Ⅳ SX104整穴	小 碗	7.4	3.4	6.3	肥 前	湯呑碗。染付千鳥格子に墨弾き雲・花散らし文。見込に手描き四弁花文。17C末～18C時。	12
4	Ⅲ SK02・05付近	小 碗	7.3	3.6	6.1	肥 前	湯呑碗。染付花唐草文。	13
5	Ⅱ SK02・05付近	小 碗	7.2	3.6	5.6		湯呑碗。染付果文。貫入が顕著。18C末～19C前。	14
6	Ⅲ SX01池跡	小 碗	8.0	3.5	5.6	肥 前	湯呑碗。染付窓絵文。見込に手描き五弁花文。18C。	16
7	Ⅲ SK02・05付近	小 碗	8.6	3.5	4.86	肥 前	湯呑碗。染付竹笹文。見込文様は不明。18C。	17
8	Ⅱ 整地Ⅱ	小 碗	8.3	3.5	5.4	肥 前	湯呑碗。染付楼閣山水文。見込に磯島文？ 18C。	18
9	Ⅱ 整地Ⅱ	小 碗	8.5	2.8	5.4	肥 前	湯呑碗。染付蘭に蝶文。見込に火炎文？ 18C。	19
10	Ⅰ SX101通路	小 碗	8.5	3.4	4.2	瀬 戸	湯呑碗。染付草花文。見込に五弁花崩し文。19C。	20
11	Ⅲ SK02.05付近	小 碗	8.4	3.1	4.6		湯呑碗。染付「宝」字＋草花文。口紅。19C中。	19－1
12	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	10.2	4.4	7.8	肥 前	染付渦雲文・草花文？。高台部に一条の圏線。生がけ。17C中。	2
13	Ⅱ 整地Ⅰ	碗	12.0	4.6	6.4	肥 前	染付草花文。高台部に三重、高台内に一条の圏線。貫入あり。17C後。	3
14	Ⅰ 住穴	碗	9.4	4.9	3.6	肥 前	紅葉文（コンニャク判）。内面流水花文（コンニャク判）。17C末～18C初。	4

第41図　磁器（1）



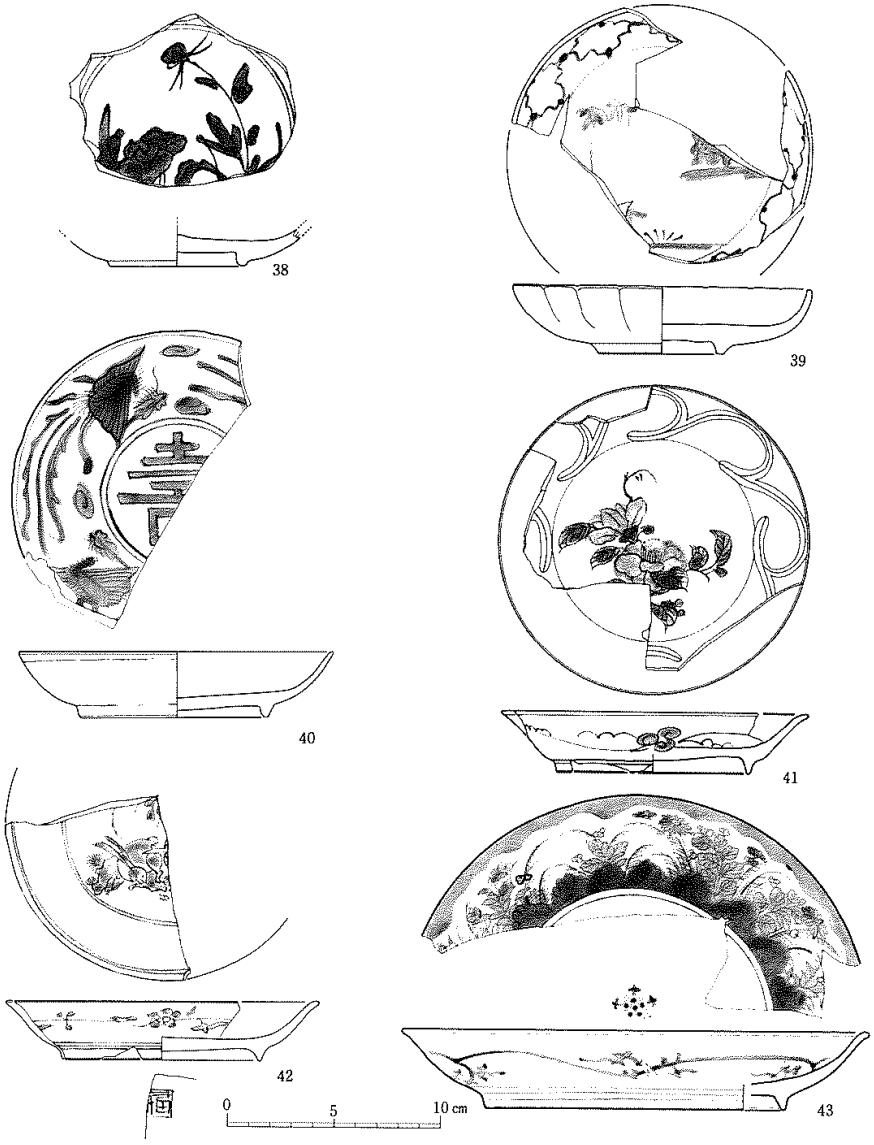
No.	地区-遺構-層位	種 類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産 地	特 徴	写真図版
15	Ⅱ SK02・05付近	碗	10.2	4.4	5.4	肥 前	線描き草花文。見込は瓢箪に唐文。蛇の目高台。	19－9
16	Ⅳ SX104壁穴	碗	9.6	4.0	5.4	肥 前	染付唐草文。見込に手描き五弁花文。高台内不明文字文。18C。	5
17	Ⅱ SK51	碗	9.9	4.1	5.4	肥 前	染付花唐草文（花文：コンニャク判）。高台内には一重方形枠内に漢「福」銘。18C。	6
18	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	9.8	4.0	5.2	肥 前	くらわんか手。染付雪持草花文。腰から高台部に三重の圏線。高台内に波文？ 18C。	7
19	Ⅱ SK52	碗	9.8	3.9	5.3	肥 前	くらわんか手。染付雪輪草花文。腰から高台部に二重の圏線。18C。	8
20	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	11.5	4.6	6.6	肥 前	くらわんか手。染付丸文。腰から高台部に三重の圏線。18C。	10
21	Ⅲ SX01池跡	碗	10.1	5.0	5.6	瀬 戸	広東形。染付磯兵文。腰から高台部三重の圏線。見込磯鳥文。高台内朱書き銘。19C前。	12
22	Ⅱ SK53	碗	11.0	5.8	6.3	肥 前	広東形。染付稲束に雀文。内面口縁部に二重、腰部に一条の圏線。 18C末～19C初。	11
23	Ⅱ 整地Ⅱ	碗 蓋	10.0	5.2	2.8	肥 前	広東形碗の蓋。染付竹笹文。見込文様（不明）あり。焼き継ぎ痕あり。18C末～19C初。	17
24	Ⅲ SX01池南側	碗 蓋	10.3	6.0	2.9		広東形碗の蓋。18C末～19C初。	18
25	Ⅱ SX50池跡	碗 蓋	9.9	5.3	2.6	肥 前	広東形碗の蓋。染付稲束と雀文。高台内と見込に荒磯文。18C末～19C初。	16

第42図　磁器 (2)



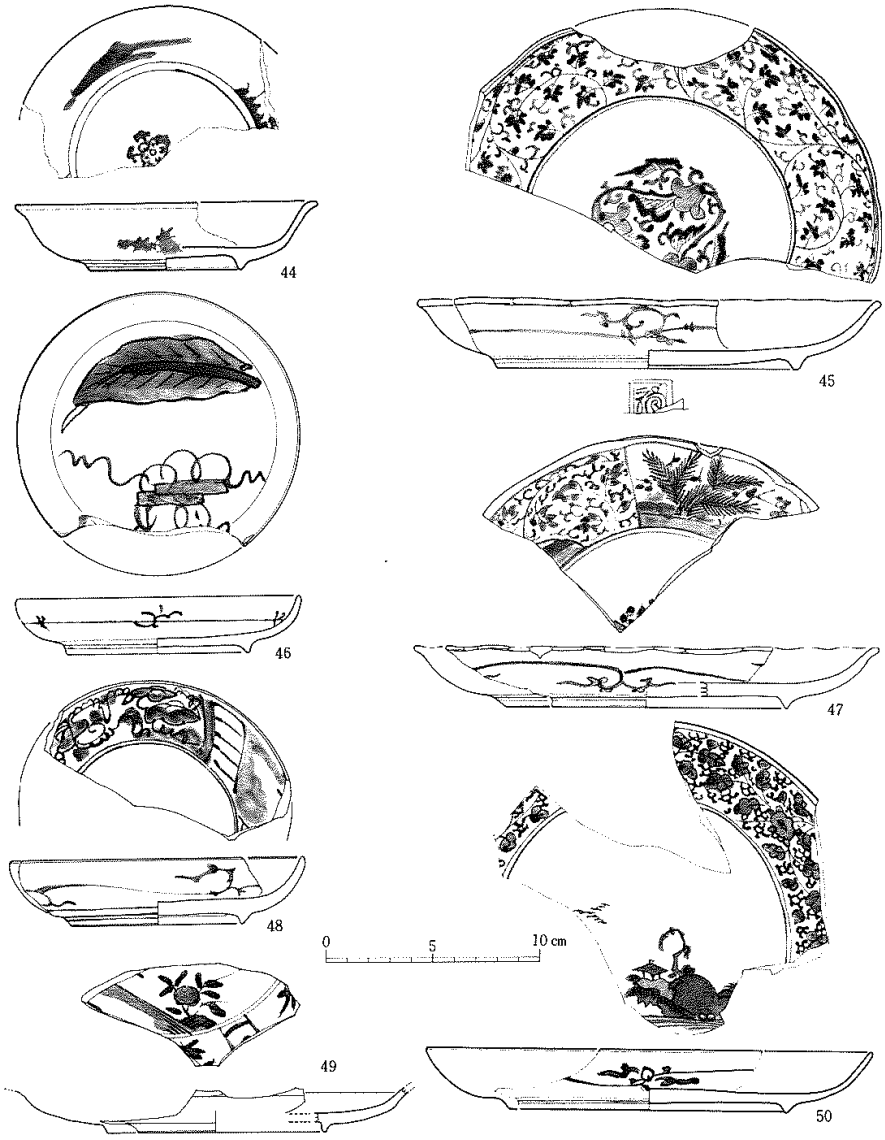
No.	地区-遺構-層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
26	Ⅲ SX01池跡	碗	11.4	5.0	6.0	切　込	端反形。染付縦横草花文。腰から高台部に三重の圏線。見込みに千鳥文。19C中。	19－14
27	Ⅱ SX50池跡	碗	9.3	3.3	5.1		弱い端反形。染付区画割草花並文。高台脇二重圏線、内面口縁部にグラデーション帯。19C。	13
28	Ⅲ SX01池跡	碗	10.6	3.9	6.0	瀬　戸	端反形。染付縦横文。高台脇と内面口縁部にグラデーション帯。見込は千鳥文。19C。	15
29	Ⅱ SX50池跡	紅　皿	2.4	0.9	1.0		白磁。形押し菊花文。	20
30	Ⅲ SX01池跡	紅　皿	4.6	1.4	1.7		白磁。形押し成形。	19
31	Ⅱ 整地Ⅱ	仏飯器		4.2	(4.7)		染付。坏部と脚部に圏線。	21
32	Ⅱ 整地Ⅱ	小　皿	9.8	5.0	2.1	肥　前	染付草文。外面源氏香文。底部が厚い。19C。	20－1
33	Ⅱ 整地Ⅱ	小　皿	10.0	6.0	2.1	肥　前	染付楼閣山水文。外面唐草文。18C～19C	2
34	Ⅲ SX01池跡	小　皿	10.0	6.3	2.4	肥　前	染付草花文。見込手描き五弁花文。外面唐草文。高台内に二重方形枠の渦「福」銘。18C。	3
35	Ⅲ SX01池跡	鉢		5.2	(2.3)	中　国	染付鳥獣文。蛇ノ目高台。高台裏にカンナ目。15C～16C（明末？）。	5
36	Ⅱ 整地Ⅱ	鉢	12.6	5.6	3.1	肥　前	染付柳文。鉄釉の口紅。17C中。	6
37	Ⅱ 整地Ⅱ	鉢	13.0	5.9	3.1	肥　前	染付草花文。17C中。	7

第43図　磁器（3）



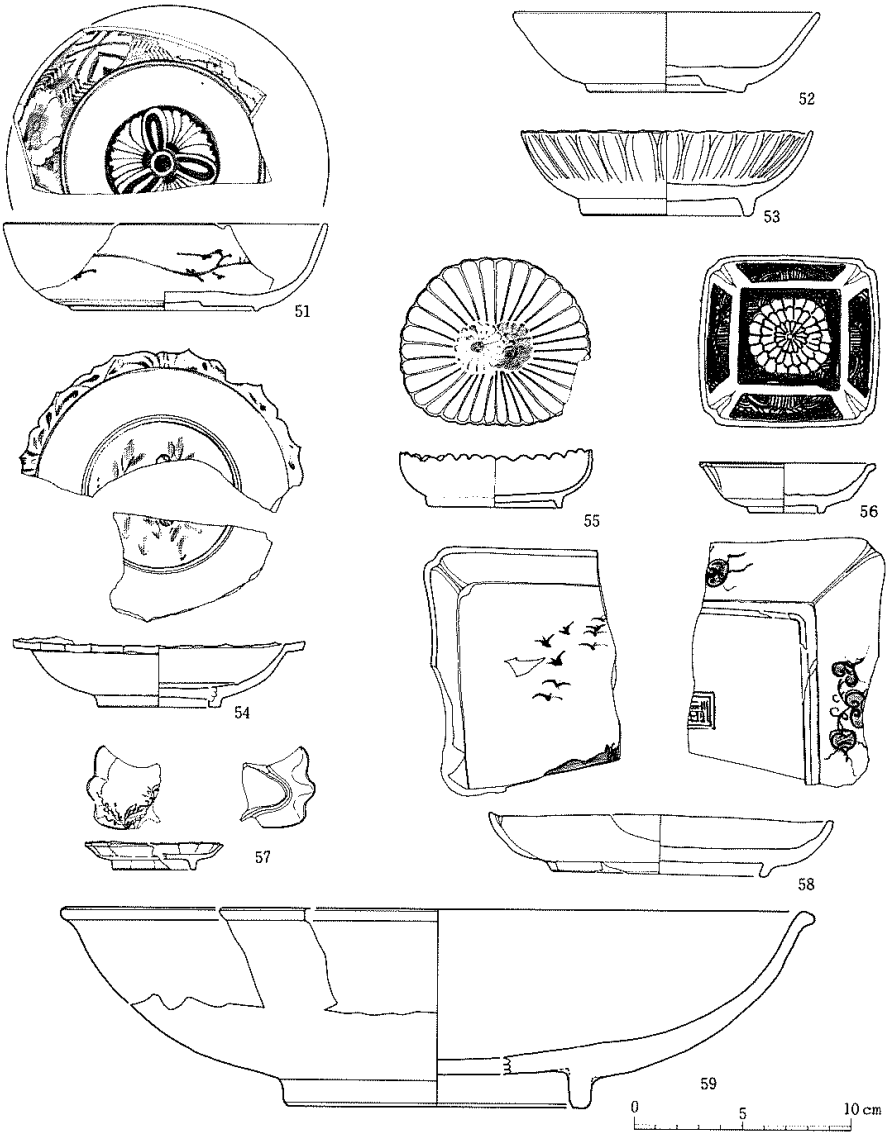
No.	地区-遺構-層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
38	Ⅱ 整地Ⅱb	皿		6.4	(1.8)	肥　前	染付牡丹文。釉はやや白濁。17C中。	20－4
39	Ⅱ 整地Ⅰ	皿	14.0	5.8	3.2	肥　前	染付草花文。鉄釉の口紅。型打ち成形。17C中。	9
40	Ⅱ SB57柱穴	皿	14.7	8.9	3.1	肥　前	染付露字菊唐文。17C中。	8
41	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	14.9	9.3	2.6	肥　前	染付牡丹文。外面に花唐草文。型打ち成形。17C後。	10
42	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	14.7	9.3	2.8	肥　前	染付兎・草木文。外面に花唐草文。高台内に一重方形枠の「福」銘。ハリ支え痕1。17C。	21－1
43	Ⅲ SK02-05付近	皿	21.6	13.8	3.6	肥　前	染付草花文。外面唐草文、見込手描き五弁花文。高台内「大明成化年製」銘。17C末～18C初	3

第44図　磁器（4）



No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
44	Ⅲ SK02・05付近	皿	14.0	7.0	3.2	肥　前	染付花山水文。外面に紅黄文（コンニャク判）。貫入あり。17C末～18C初。	21－2
45	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	21.7	14.2	3.2	肥　前	染付側帯花散花文輪花皿。外面唐草文。高台内二重方形枠の「福」銘とハリ支え痕。18C。	5
46	Ⅳ SX104整穴	皿	13.3	8.6	2.7	肥　前	染付宝に葉文。外面唐草文。高台内に一条の圏線。18C。	4
47	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	21.8	13.2	3.0	肥　前	染付区画割花唐草松梅文輪花皿。外面唐草文、見込に花文。18C。	22－1
48	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	13.8	8.0	3.1	肥　前	染付区画割花唐草文。外面唐草文。腰から高台部に三重の圏線。18C。	21－6
49	Ⅱ SX50池跡	皿			(2.1)	肥　前	染付芙蓉手花文折れ縁皿。17C末～18C初。	22－2
50	Ⅱ SK02・05付近	皿	20.5	12.8	2.8	肥　前	染付樣間山水文。外面唐草文、内面花唐草文。高台内にハリ支え痕。貫入あり。18C初。	3

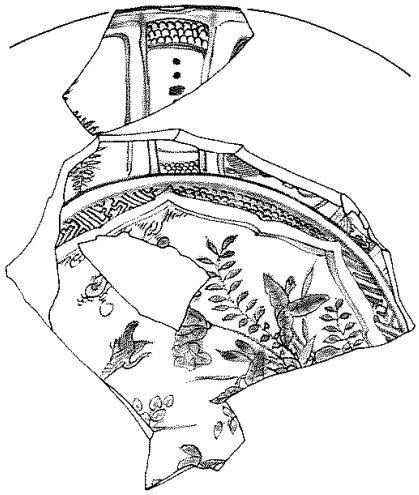
第45図　磁器（5）

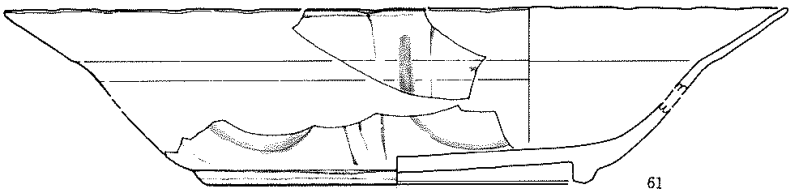


No	地区－遺構－層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　　徴	写真図版
51	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	14.9	8.6	4.0	肥　前	染付側帯丸・牡丹文深皿。見込に花文。高台内二重方形枠の「福」銘とハリ支え痕。18C。	22－4
52	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	14.0	7.0	3.7	切　込	白磁丸皿。見込蛇ノ目釉剥ぎ。蛇ノ目高台。19C中。	5
53	Ⅱ SX50池跡	皿	13.4	7.8	3.9	切　込	白磁輪花皿。胎土灰色味あり。見込蛇ノ目釉剥ぎ。19C中。	6
54	Ⅱ SK59	皿	13.4	5.6	3.1	肥　前	色絵草花文輪花皿。型打ち成形。貫入あり。17C中？	7
55	Ⅲ SX01池跡	変形皿	8.5	6.0	2.5	肥　前	染付重菊花文皿。型打ち成形糸切り細工。17C末～18C中。	10
56	Ⅱ SX50池跡	角　皿	一辺:8.2	一辺:3.7	2.3		染付方形手塩皿。型造り。見込みに菊花文。呉須の青み強い。19C。	11
57	Ⅳ SX104竪穴	変形皿			1.3	肥　前	見込に蔦草文。型打ち成形糸切細工。	9
58	Ⅱ 整地Ⅱ	角　皿	(11.8)	(7.5)	2.7	肥　前	色絵連珠文風入角皿。外面に如意頭文？口紅。高台内に赤彩二重方形枠「福」銘。17C中。	8
59	Ⅱ 整地Ⅰ	大　皿	34.5	13.6	9.1	肥　前	青磁陰刻文大皿。 17C。	23－3

第46図　磁器 (6)

60



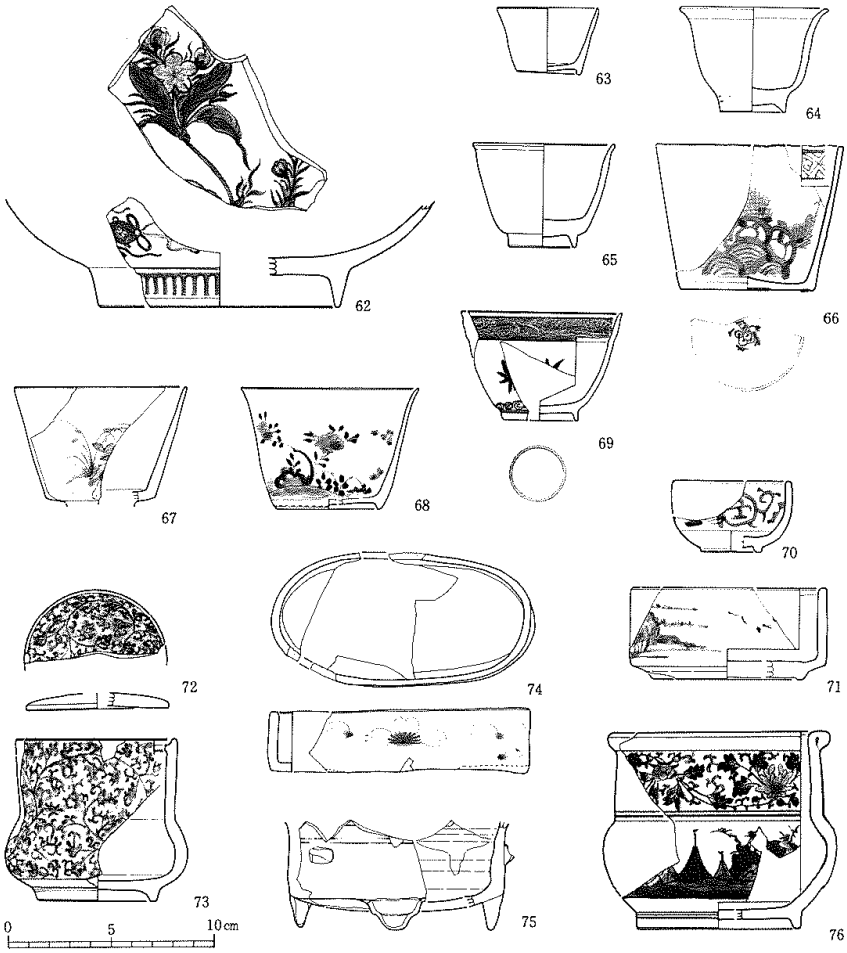


61

0 5 10cm

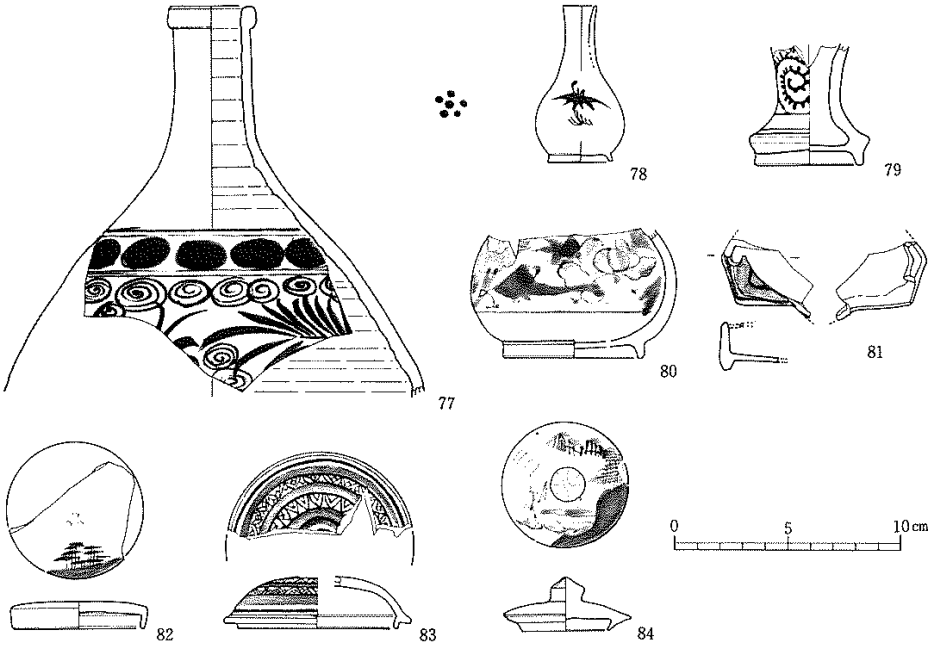
No.	地区－遺構－層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　　徴	写真図版
60	Ⅱ 整地Ⅱ	大　皿	33.2	22.2	5.1	肥　前	染付窓絵草花文大皿。外面に牡丹唐草文。17C後。	23－1
61	Ⅱ 整地Ⅰ	大　皿	(36.6)	17.7	(8.2)	中　国	染付芙蓉手花鳥文折れ縁皿。高台内にカンナ目。内面に草花文・宝尽文、見込に花鳥文。16C	2

第47図　磁器（7）



No.	地区－遺構－層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　　徴	写真図版
62	Ⅲ SX01池跡	鉢		11.5	(5.2)	肥　前	染付桜文鉢。外面に七宝文、柳高台。鍋島様式。17C末～18C中。	23－4
63	Ⅱ SX50池跡	猪　口	5.0	3.2	3.2	肥　前	白磁。畳付きを除き施釉。	5
64	Ⅱ SK50	猪　口	6.3	3.2	5.1	肥　前	端反形。高台に三重の圏線。高台断面形は三角形で、底部が厚い。17C前。	6
65	Ⅱ 整地Ⅰ	猪　口	7.2	3.2	5.1	肥　前	白磁、端反形。底部が厚い。17C中。	7
66	Ⅱ SK02・05付近	猪　口	8.9	6.3	6.9	肥　前	内面口縁部に四方たすき掛文。見込に手描五弁花文。蛇ノ目凹形高台。19C。	10
67	Ⅱ 整地Ⅱ	猪　口	8.4		(5.6)	肥　前	腰折形。染付草花文。18C。	8
68	Ⅱ 整地Ⅱ	猪　口	8.6	5.0	5.9	肥　前	端反形。染付草花文。18C。	9
69	Ⅱ 整地Ⅱa	猪　口	7.8	3.0	5.3	肥　前	外面口縁部に墨弾き文、腰部に盤渦文。18C。	11
70	Ⅲ SX01池跡	蓋　物	5.7	2.9	3.4	肥　前	染付唐草割菊花文、口唇部は無釉。	13
71	Ⅱ 整地Ⅱ	蓋　物	9.4	7.3	4.5	肥　前	段重？　染付山水文。口縁部釉剥ぎ。蛇ノ目凹型高台。19C。	14
72	Ⅱ 整地Ⅱ	蓋	6.9		(0.7)	肥　前	染付花唐草文。73と組む。18C～19C。	15
73	Ⅱ 整地Ⅱ	壺	7.7	5.6	7.9	肥　前	染付花唐草文。落し蓋72が付く。　18C～19C。	16
74	Ⅱ 整地Ⅱ	盤水入			3.2		染付梅花文。長軸推定12.7cm、短軸6.5cm。口唇部無釉（伏せ焼き）。19C。	12
75	Ⅰ SX101通路	香　炉		10.5	(5.4)	肥　前	青磁。三足付き？　耳付き。内面無釉。18C？	18
76	Ⅱ SD61	香　炉	10.7	7.8	9.5	肥　前	頸部染付花唐草文、胴部網干海浜風景文。内部無釉。18C末～19C。	17

第48図　磁器（8）



No.	地区－遺構－層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
77	Ⅲ SX01池跡	徳　利	4.0		(19.2)	切　込	頸部渦繋文、胴部染付草花文？　胎土は灰色。19C中。	24－1
78	Ⅱ SX50池跡	神酒徳利	1.5	2.8	7.0		染付松竹梅文。高台内無釉。18C～19C。	2
79	Ⅰ 柱穴	神酒徳利		4.8	(5.3)	肥　前	染付蛸唐草文。瓶子形。19C。	3
80	Ⅱ 整地Ⅱ	徳　利		6.2	(5.7)	肥　前	染付牡丹文。18C。	4
81	Ⅱ SX50池跡	水　滴			(2.2)		上絵付け。型造り。19C。	5
82	Ⅱ 整地Ⅱ	合子蓋	5.8	5.8	1.3		染付海浜風景。19C。	6
83	Ⅳ SX104竪穴	蓋	9.2	8.0	(2.3)	肥　前	染付のグラデーション同心円文と赤絵による弁花繋同心円文。	7
84	Ⅲ SK02・05付近	蓋	5.7	3.8	2.4	肥　前	染付海浜風景。	8

第49図　磁器 (9)

型の白磁で、直線的に外へ開く器形である。64は端反形で、断面三角形の高台の脇に三重の圏線を施す。17世紀前半の肥前産。65は63と同様白磁であるが、端反形で底部が厚い。67は腰折れ形であろう。68のような草花文を描いた端反形のものは比較的点数が多い。69は口縁部に墨弾き文が見られる。70・71は口縁部無釉の蓋物、74はびん水いれ(口縁部無釉：伏せ焼き)である。75・76は香炉で、75は3足付？の青磁(内面無釉)である。

壷類(蓋含む)(72・73)

73は外面全体に花唐草文を施した内面無釉の壷である。同様の花唐草文を施した72の蓋はこの壷と組むものであろう。

瓶類(徳利)(77～80)

77～80が瓶類(徳利)である。77は暗オリーブ色に発色する呉須で草花文・渦繋文が描かれた切込の徳利である。胎土は灰色がかっている。78は松竹梅文、79は瓶子形で蛸唐草文をもつ御神酒徳利、80は牡丹文の徳利である。

その他(81～84)

81は上絵付けの水滴、82は合子蓋である。83は染付のグラデーション同心円文と赤絵による弁花繋同心円文をもつ蓋、84は海浜風景を描いた蓋である。

陶器(第50～55図)

碗類(1～17)

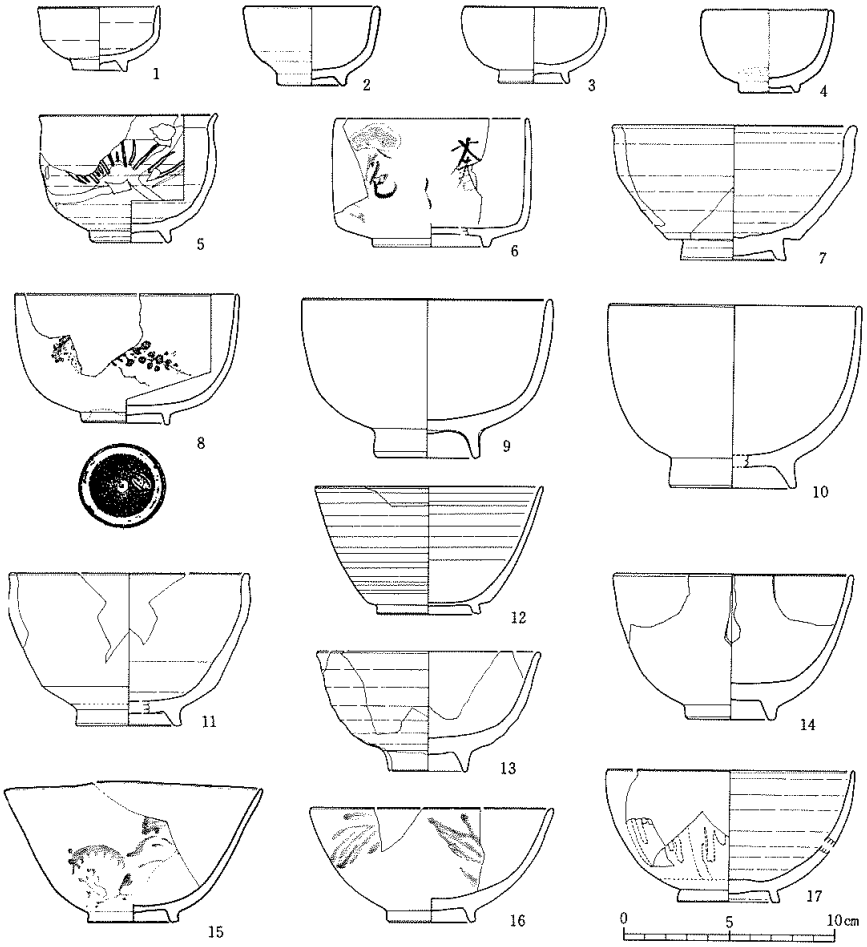
1～4はいずれも灰釉を施した小坏である。1は大掘相馬、3・4は瀬戸・美濃の製品であろう。5は大堀相馬産と思われる端反形の小碗で、口縁部と内縁部が灰釉、体部は鉄釉上に灰釉を振り掛け、半菊文の削りを施している。6は淡灰黄色をした半筒形の京焼の碗で、黄緑色・青・金彩による上絵付けが施され、鉄絵の文字が書き込まれている。7は瀬戸・美濃産の天目茶碗、8は鉄絵および呉須による葡萄文を描いた京焼の碗である。8は高台内に「清閑寺」とみられる刻印がある。9・10は淡黄色～淡灰色を呈したややおおぶりの碗で、17世紀末～18世紀前半頃の肥前の製品かと思われる。11は唐津の天目形の碗で、外面には縦方向の白泥刷毛塗りがなされている。13・14も内外面同心円文上に刷毛目がある。15～17は大堀相馬の製品で、15には呉須で駒絵が描かれている。

皿類(18～29・33)

18・20は長石釉を施した美濃の製品で、20はより古い段階の遺構であるＳＥ51井戸跡出土である。21～23はいわゆる京焼風陶器といわれる肥前の皿類で、淡黄色～明オリーブ色の色調を呈し、細かな貫入がみられる。内面には鉄絵山水文が描かれ、高台内には円刻と刻印(23：小松吉)がなされている。24～27は大掘相馬の製品である。いずれも灰白色を呈し、24・25は内面に鉄絵山水文が描かれている。28は粒子の粗い焼き締りの悪い胎土に、灰青色の厚めの灰釉を施したものである。見込は蛇の目釉剥ぎがなされている。29は厚い灰青色の灰釉を施した唐津のひだ皿で、見込には白釉で円文を描く。33は鉄絵の雁文を描いた美濃の足付の変形皿(向付)である。17世紀前半頃のものであろう。ＳＤ50溝跡出土。

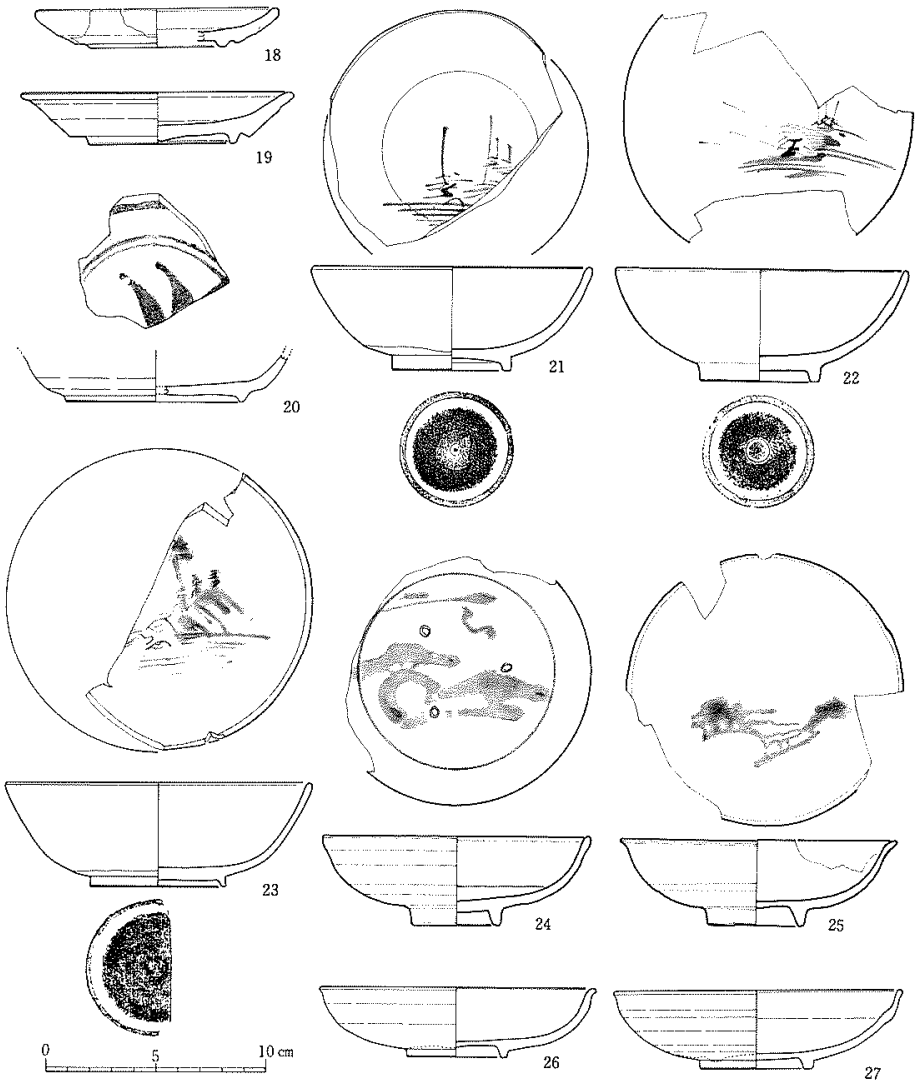
鉢類(30～32・34～43・47～50)

30・31は体部に灰オリーブ色の灰釉を施し、口縁部から灰青色灰釉を流しかける大鉢である。産地不明。32は瀬戸・美濃の大鉢で、淡黄色を呈し、内面には鉄絵が描かれる。目跡が付く。34の猪口は淡緑灰色で貫入が著しい大掘相馬の製品である。35は外面に釘彫りの文様を持つ灰吹きで、口唇部全周に叩打痕がある。36も灰吹き。体部に鉄釉、口縁部に灰釉を施す。二次被熱の痕跡がある。37は蛇の目高台の香炉で、外面には鉄釉を施す。38の3足の香炉は、全面灰釉である。39のびん水入れは、灰黄色の灰釉を施し、外面に刷絵による花文を描く。40は器種不明。内面鉄釉、外面銅緑釉を施し、口唇部・高台部は無釉である。41は灰白色を呈し、外面に黄緑色・赤色などによる草花文の上絵付を施す京・信



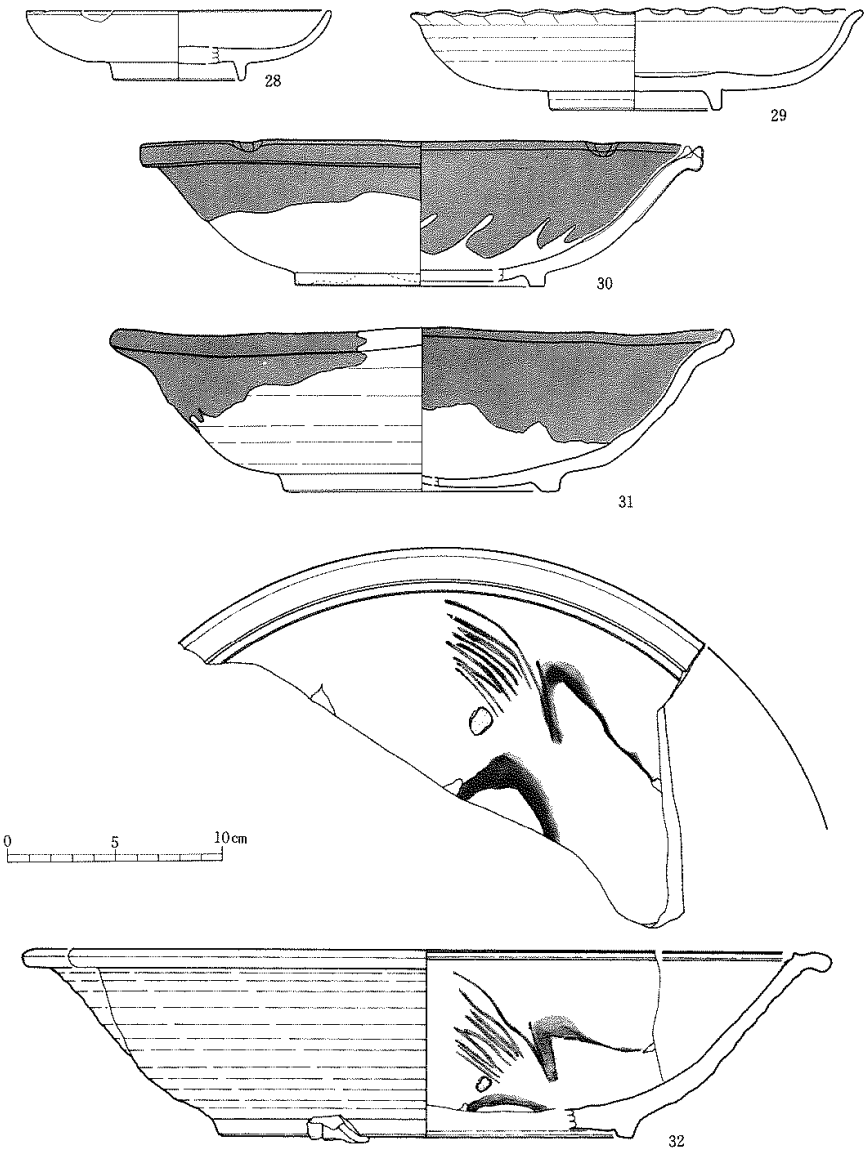
No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
1	Ⅱ SX50池跡	小　杯	5.8	2.6	3.0	大堀相馬	灰釉。色調は灰白色。高台部露胎。貫入あり。18C後～19C	24－9
2	Ⅲ SK02・05付近	小　杯	6.3	3.2	3.7		灰釉。色調は灰白色。	10
3	Ⅱ SK52	小　杯	6.6	3.5	3.4	瀬戸・美濃?	灰釉。色調は灰白色。高台部露胎。貫入あり。	11
4	Ⅲ SX01池跡	小　杯	6.1	2.7	3.9	瀬戸・美濃	灰釉。色調は灰白色。	12
5	Ⅱ 整地Ⅱ	小　碗	8.5	3.6	5.1	大堀相馬	口縁部と内面は灰釉、体部は鉄釉上に灰釉を振りかける。半菊状削り。19C。	13
6	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	9.2	5.6	6.2	京　都	半筒形。淡灰黄色、細かな貫入。鉄絵文字、黄緑色・青・金彩上絵付け。鉄釉口紅。	14
7	Ⅱ 整地Ⅰ	碗	11.6	5.0	6.4	瀬戸・美濃	天目茶碗。赤褐色の鉄釉。削り出し輪高台。外面腰部から高台部は露胎。17C。	15
8	Ⅱ 整地Ⅱa	碗	10.5	4.1	6.1	京　都	色調淡灰白色。外面鉄絵および呉須による葡萄文。高台内に楕円枠「清閑寺」刻印。	16
9	Ⅲ SX104整穴	碗	11.8	4.5	7.6	肥　前?	色調淡黄色。貫入あり。17C後～18C前	18
10	Ⅱ 整地Ⅱa	碗	12.0	6.0	8.7	肥　前?	色調淡灰白色。貫入あり。17C後～18C前。	19
11	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	11.4	5.0	7.3	唐　津	天目形。色調灰オリーブ色。外面縦方向の白泥刷毛塗り。高台部露胎。17C末～18C前	20
12	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	10.8	4.9	6.1		色調灰白色。	17
13	Ⅱ 整地Ⅰ	碗	10.6	3.7	5.7	唐　津	色調灰オリーブ色。内外面同心円文状に刷毛目。17C末～18C前。	21
14	Ⅳ SX104整穴	碗	11.3	4.5	7.6	唐　津	色調灰オリーブ色。内外面同心円文状に刷毛目。17C末～18C前。	22
15	Ⅲ SK02	碗	12.1	4.1	6.5	大堀相馬	色調灰白色。外面に呉須で鉤絵。貫入あり。高台内兜巾。19C。	23
16	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	11.6	4.2	5.5	大堀相馬	色調灰淡黄緑色。外面に鉄絵。貫入あり。19C。	24
17	Ⅱ 整地Ⅱ	碗	11.7	4.8	6.3	大堀相馬	色調灰白色。貫入あり。高台内に「り」の墨書。18C後～19C。	25

第50図　陶器（1）



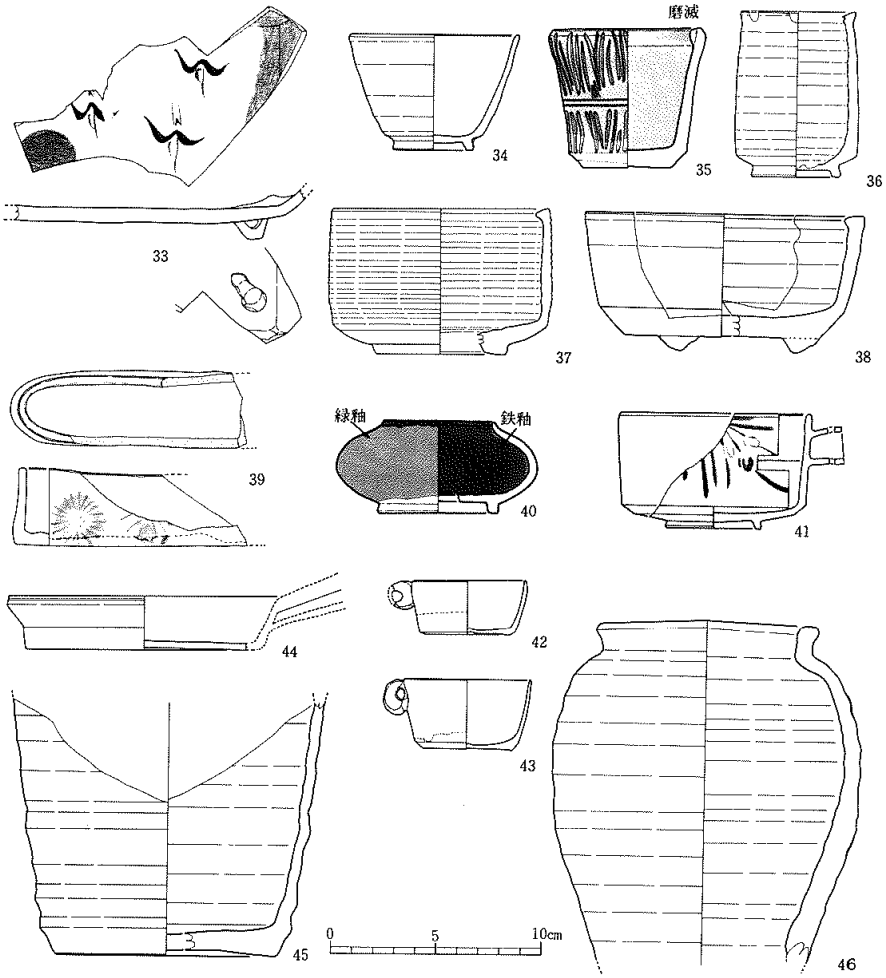
No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　　徴	写真図版
18	Ⅱ 整地Ⅰ	皿	11.3	6.2	1.8	美　濃	長石釉。16C末。	25－1
19	Ⅳ SX104竪穴	皿	12.4	6.6	2.3	大堀相馬	色調暗灰黄色。重ね焼きの痕跡あり。	3
20	Ⅱ SE51	皿		8.0	(2.1)	美　濃	志野織部。長石釉。見込に鉄絵。貫入あり。17C前。	2
21	Ⅳ SX104竪穴	皿	12.7	5.4	4.8	肥　前	京焼風陶器。淡黄色、細かな貫入。鉄絵山水文。高台内浅い円刻と押印。17C後～18C前。	4
22	Ⅲ SK05	皿	13.1	5.4	5.0	肥　前	京焼風陶器。淡黄色、細かな貫入。鉄絵山水文。高台内浅い円刻と押印。　〃　。	5
23	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	14.0	6.1	4.8	肥　前	京焼風陶器。明オリーブ色、細かな貫入。鉄絵山水文。高台内浅い円刻と「小松吉」。〃。	6
24	Ⅲ SK02	皿	12.0	5.0	4.0	大堀相馬	色調灰白色。見込鉄絵山水、目跡３。18C末～19C。	7
25	Ⅲ SK02	皿	12.3	4.0	3.2	大堀相馬	色調灰白色。見込鉄絵山水文。18C末～19C。	8
26	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	12.6	4.5	3.2	大堀相馬	色調灰白色。口縁部一箇に鉄釉流し掛け。高台部露胎、高台内に墨書あり。18C末～19C。	9
27	Ⅱ 整地Ⅱ	皿	13.0	5.2	3.6	大堀相馬	色調灰白色。高台部露胎。18C末～19C。	10

第51図　陶器（2）



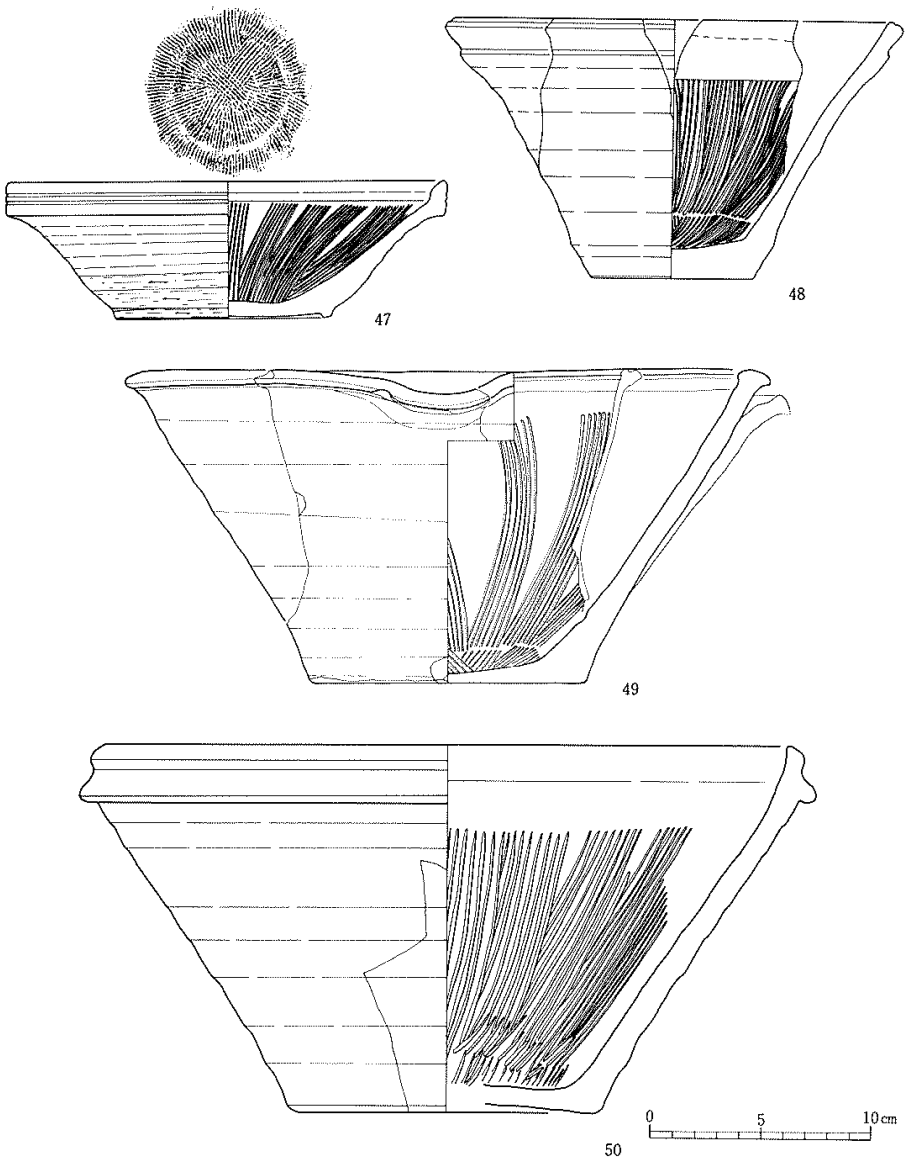
No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
28	Ⅱ SD61	皿	14.1	6.1	3.3		灰青色の厚めの灰釉。粒子が粗く焼き締りの悪い胎土。見込蛇ノ目釉剥ぎ。	25－11
29	Ⅱ SK55	皿	21.0	8.0	4.7	唐　津	ひだ皿。厚い灰青色の灰釉。見込に白釉で円文。18C。	27－1
30	Ⅱ 整地Ⅱ	大　鉢	25.9	11.6	6.8		体部に灰オリーブ色の灰釉。口縁部より灰青色灰釉を流し掛け。19C？	2
31	Ⅱ 整地Ⅱ	大　鉢	29.0	12.7	7.7		体部に灰オリーブ色の灰釉。口縁部より灰青色灰釉を流し掛け。目跡5。高台内に墨書。	3
32	Ⅱ 整地Ⅱ	大　鉢	37.6	19.0	8.7	瀬戸・美濃	灰釉。色調は淡黄色内面に鉄絵文。18C。	4

第52図　陶器（3）



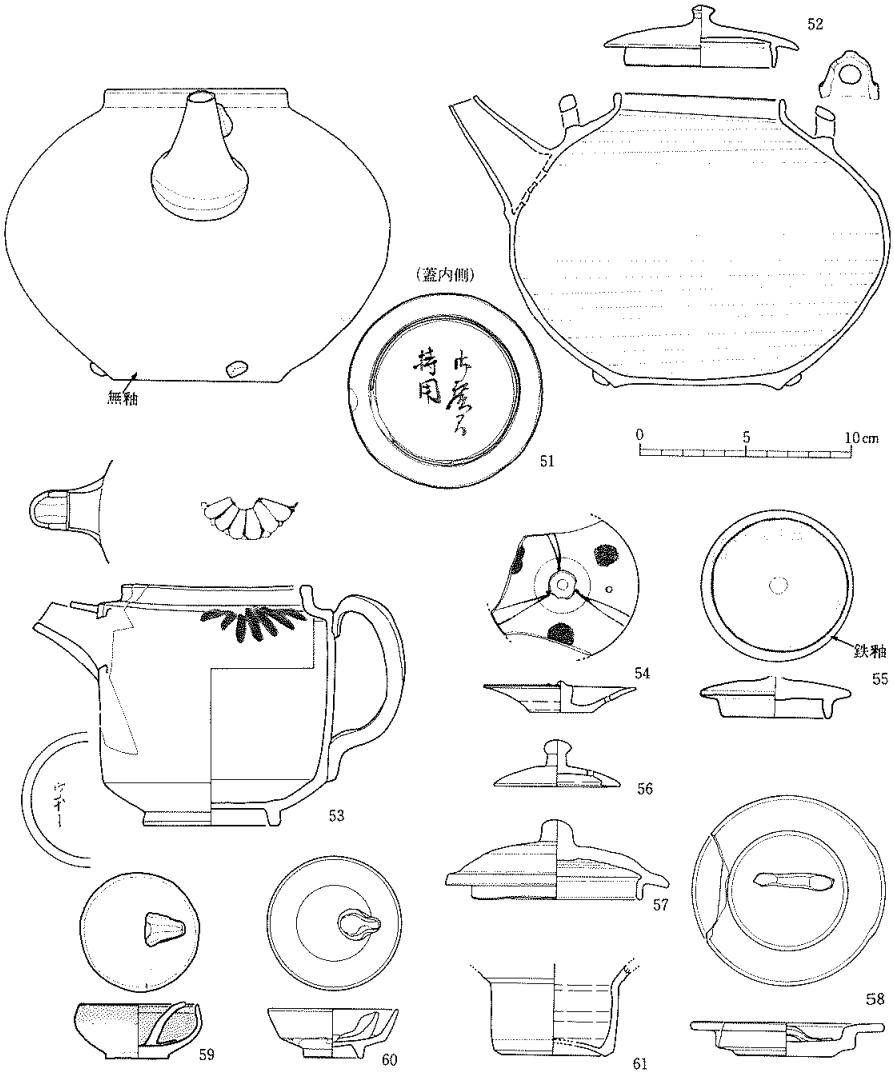
No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
33	Ⅱ SD50	変形皿			(2.8)	美　濃	鉄絵雅文。 17C前。	25－12
34	Ⅱ 整地Ⅱ	鉢　口	7.9	3.7	5.7	大堀相馬	色調は淡緑灰色。貫入が著しい。19C。	13
35	Ⅲ SK02・05付近	灰吹き	6.8	4.1	6.5		色調は灰緑白色。外面に釘彫りによる文様。口唇部全周に叩打痕。	14
36	Ⅱ 整地Ⅱ	灰吹き	5.8	4.4	9.0		体部に鉄釉、口縁部に灰釉。二次被熱の痕跡あり。	15
37	Ⅱ 整地Ⅱ	香　炉	10.4	6.2	7.0		鉄釉、内面無釉。蛇ノ目高台。高台内施釉。	26－1
38	Ⅱ SE54	香　炉	13.2	(9.2)	6.6		三足。全面に灰釉。	2
39	Ⅱ 整地Ⅱ	髪水入			3.7	瀬戸・美濃	長軸推定12.0cm/短軸3.6cm。灰黄色灰釉。外面に櫛絵花文。内面に底部接合の指痕。18C	4
40	Ⅲ SX01池跡	不　明	5.1	5.5	4.3	大堀相馬	内面鉄釉、外面駒緑釉、口唇部無釉、高台部は無釉。19C。	5
41	Ⅱ 整地Ⅱ	鳥　餌	8.8	4.5	5.5	京・信楽系	色調灰白色。外面に黄緑色・赤色・その他不明色による草花文上絵付け。	6
42	Ⅱ SX50池跡	組入れ	5.3	3.0	4.6	瀬戸・美濃	内外面灰釉。底部無釉。貫入著しい。底部回転ヘラケズリ。	8
43	Ⅱ SX50池跡	組入れ	6.1	4.1	3.3	瀬戸・美濃	内外面無釉。底部無釉。貫入著しい。底部回転ヘラケズリ。	7
44	Ⅱ SX50池跡	焙　烙	(12.6)	7.7	2.9	堤	内外面暗燈色鉛釉。把手欠損。注口あり。19C。	3
45	Ⅱ 整地Ⅱ	甕		10.5			桶形。鉄釉。底部糸切り。底部に駒紐2条、焼成時の土玉付着。	28－1
46	Ⅱ 整地Ⅱ	壷	10.5		(16.2)		内外面鉄釉。	2

第53図　陶器（4）



No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　　長	写真図版
47	Ⅱ 整地Ⅱ	摺　鉢	19.9	9.7	6.2		色調暗赤褐色。櫛目8条1単位。口縁部は縁帯状で直立し、2条の沈線が巡る。	28－3
48	Ⅱ SX50池跡	摺　鉢	(20.6)	7.2	11.7		体部鉄釉、口縁部灰釉。櫛目9条1単位。	4
49	Ⅴ SX04西側溝	摺　鉢	29.1	12.4	14.2		鉄釉。注口あり。櫛目7条1単位、上部処理なし。	5
50	Ⅱ 整地Ⅱ	摺　鉢	30.9	13.5	16.5		鉄釉。櫛目8条1単位。	6

第54図　陶器（5）



No.	地区・遺構・層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産　地	特　徴	写真図版
51	Ⅲ SX01池跡	土　瓶	8.4	8.0	13.4	大堀相馬	体部は灰白色の灰釉、全面貫入あり。スス付着。注口体部孔４。足３。19C。	26－11
52	Ⅲ SX01池跡	土瓶蓋	9.1	6.9	2.8	大堀相馬	51に伴う山茶。色調灰白色。貫入著しい。内側に「御廟間持用」の墨書あり。19C。	10
53	Ⅱ 整地Ⅱ	水　注	9.0	6.5	12.0	瀬戸・美濃	外面灰黄色灰釉。胴部対面に割菊花文。高台内に墨書あり。19C。	9
54	Ⅱ SX50池跡	土瓶蓋	7.2	3.0	2.8	大堀相馬	落し蓋。色調灰白色。鉄絵。底部糸切り。空気孔１。19C	14
55	Ⅲ SK02・05付近	土瓶蓋	7.0	5.1	1.9		天井部鉄釉。摘み部欠失。	12
56	Ⅱ SX50池跡	土瓶蓋	6.0		2.2	大堀相馬	山茶。色調は灰黄色。貫入著しい。空気孔１。19C。	13
57	Ⅱ SK52	蓋	10.5	8.0	3.8		天井部格縞赤褐色の鉄釉。	16
58	Ⅱ 整地Ⅱ	蓋	9.0	4.5	1.6	瀬戸・美濃	落し蓋。外面灰釉。底部糸切痕。	15
59	Ⅲ SK02・05付近	灯明皿	5.4	2.9	2.5		外面口縁部から内面灰釉（色調は淡黄色）。底部糸切り。	17
60	Ⅱ SX50池跡	灯明皿	6.2	2.3	2.3	土野目	内外面鉄釉（色調オリーブ色）。19C。	18
61	Ⅱ SX50池跡	灯明台			(11.0)	大堀相馬	内外面鉄釉。	19

第55図　陶器（6）

楽系の鳥鉢、42・43は内外面灰釉、底部無釉で把手付の瀬戸・美濃産の餌入れである。47～50はすり鉢類で、49は注ぎ口が付く。すり鉢の出土量は比較的多い(第9表)。

その他(44～46・51～58)

44は内外面に暗燈色の鉛釉を施した仙台市堤窯の焙烙である。把手部は欠損している。45は鉄釉を施した桶形の甕で、底部に胴紐が2条めぐる。46は内外面鉄釉の壷。51は灰白色灰釉の大堀相馬の土瓶で、貫入が著しい。注口体部孔4。52の蓋が伴う。この蓋の裏面には「御広間持用」の墨書がなされている。両者ともＳＸ01池跡出土。53は肩部対面に割菊花文を描き、灰黄色灰釉を施した瀬戸・美濃の水注ぎである。54～56は土瓶蓋。鉄絵の54と灰黄色灰釉の56は大堀相馬産である。57の蓋は天井部に極暗赤褐色の鉄釉を施す。58は外面灰釉の落蓋。59・60は灯明皿であるが、60は内外面オリーブ色の鉄釉を施した宮城県北部の上野目窯の製品である。61は内外面鉄釉の大堀相馬の灯明台。

②土師質・瓦質土器類(第56・57図、写真図版29・30)

1～19が土師質、20～28が瓦質の土器類である。

皿(1～14)

いわゆる「かわらけ皿」と称する素焼で無高台の小皿である。底部には回転糸切り痕を残し、口径は5.5～12.5㎝とばらつきがある。9は体部外面、内面全体に解読困難な墨書がなされている。5・10～14は口縁部～内外面にススや不純物が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

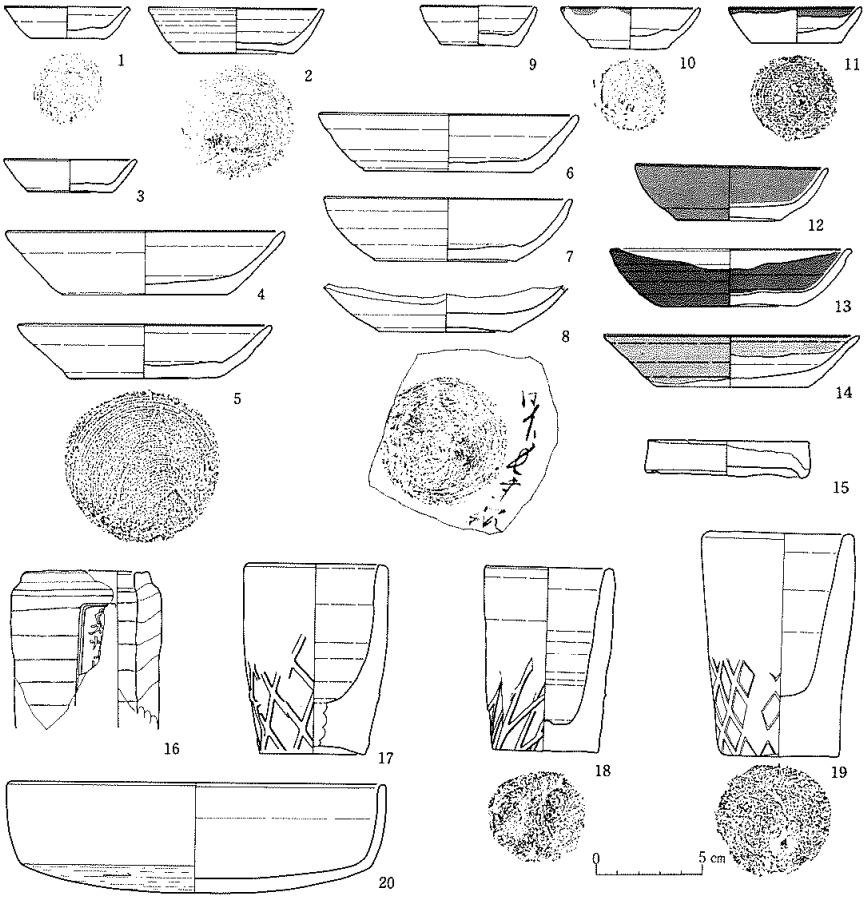
焼塩壷(15～19)

15は型作りの蓋である。体部の受け口が外からは見えないいわゆる印篭蓋で、断面は逆凹字形を呈する。かえりがやや外側に開き、凹みはやや浅い。外面は二次焼成のため明赤褐色に変色している。

16～19は身である。16は蓋受けを持ついわゆる印篭形で、輪積によって成形され、ナデ・ケズリ調整が施されている。体部には二重の方形枠に囲まれた「泉州麻生」と思われる刻印がある。刻印から17世紀後半～19世紀前半の年代が考えられている(渡辺1985)。17～19は体部に斜格子状タタキ目が施されるもの、底部には回転糸切り痕を残す。底部は18のように1㎝前後の薄いものから、19のように4.5㎝と厚いものまで様々であり、斜格子状タタキ目についても大小が見られる。

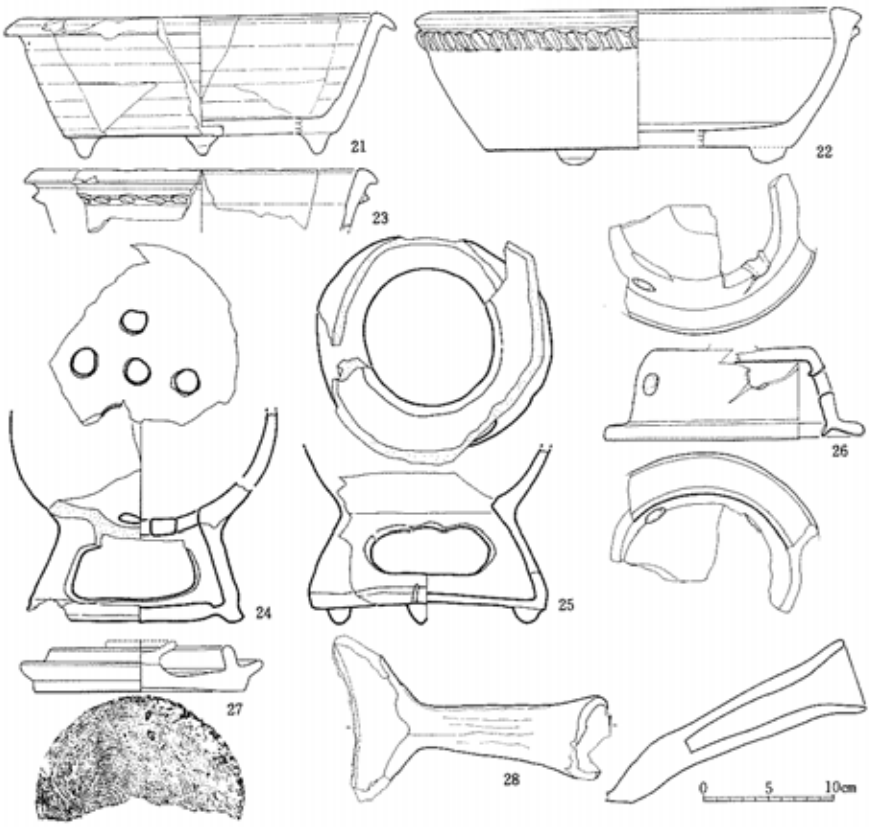
焙烙（20）

ロクロ成形で、やや厚手の皿形である。口縁部は平坦に面取りされており、体部は内湾して立ち上がる。底部は大きめで、切り離し後ナデ調整によって平滑に仕上げられている。



No.	地区-遺構-層位	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎　質	特　徴	写真図版
1	Ⅱ　整地Ⅰ	皿	5.8	3.5	1.6	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	29－1
2	Ⅱ　整地Ⅱ	皿	8.4	5.2	2.2	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	2
3	Ⅱ　整地Ⅱ	皿	6.3	3.8	1.6	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	
4	Ⅳ　SX104竪穴	皿	13.2	7.8	3.1	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	29－3
5	Ⅳ　SX104竪穴	皿	12.0	7.0	2.5	土師質	カワラケ（灯明皿）。口縁部に煤付着。底部に回転糸切り痕。	10
6	Ⅳ　SX104竪穴	皿	12.2	7.9	2.8	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	
7	Ⅱ　整地Ⅱ	皿	11.8	6.1	3.1	土師質	カワラケ。底部に回転糸切り痕。	29－4
8	Ⅱ　SK59	皿		6.3		土師質	カワラケ。判読困難だが内外面に墨書あり。底部に回転糸切り痕。	5
9	Ⅱ　整地Ⅱa	皿	5.5	3.6	1.9	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。口縁部に煤付着。	6
10	Ⅱ　整地Ⅰ	皿	6.1	3.7	2.1	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。口縁部に煤付着。	7
11	Ⅳ　SX104竪穴	皿	6.2	4.2	1.7	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。口縁部に煤付着。	8
12	Ⅱ　整地Ⅰ	皿	9.1	4.9	2.7	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。内外面に煤付着。	9
13	Ⅱ　整地Ⅱ	皿	11.4	6.2	2.8	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。内外面に煤付着。	
14	Ⅳ　SX104竪穴	皿	12.0	7.2	2.5	土師質	カワラケ（灯明皿）。底部に回転糸切り痕。内外面に煤付着。	29－11
15	Ⅱ　SD61	焼塩壺（蓋）		8.0	1.6	土師質	印籠蓋。	12
16	Ⅱ　整地Ⅱ	焼塩壺	5.8			土師質	印籠形。輪積み後ナデ・ケズリ調整。二重方形枠内に「泉州麻生」？銘刻印。	13
17	Ⅱ　整地Ⅱa	焼塩壺	6.2	5.0	8.8	土師質	コップ形。底厚2.2cm。ロクロ成形で外面に格子タタキ目。底部回転糸切り痕。	14
18	Ⅱ　整地Ⅰ	焼塩壺	6.8	5.0	9.1	土師質	コップ形。底厚1.3cm。ロクロ成形で外面に格子タタキ目。底部回転糸切り痕。	15
19	Ⅳ　SX104竪穴	焼塩壺	7.1	5.5	10.7	土師質	コップ形。底厚2.9cm。ロクロ成形で外面に格子タタキ目。底部回転糸切り痕。	16
20	Ⅱ　整地Ⅱ	鉢　焙	18.2	16.8	5.3	土師質	底部回転ケズリ調整。	

第56図　土師質土器



No.	地区・遺構・層位	種 類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎質	特 徴	写真図版
21	Ⅱ SK103撹穴	火 鉢	(30.2)	21.0	10.0	瓦質	三脚付。色調は外面が灰褐色。内面がにぶい橙色。	
22	Ⅲ SK10、SK12	火 鉢				瓦質	三脚付。脚部に縄文の突帯。	29－17
23	Ⅳ SK103撹穴	火 鉢	22.2		(4.0)	瓦質	色調は内外面ともに黒褐色。脚部に縄文の突帯。	18
24	Ⅲ SK01地層	七 厘		19.0	(14.0)	瓦質		30－1
25	Ⅲ SK01地層	七 厘		17.0	(16.0)	瓦質		2
26	Ⅱ SK50地層	蓋	13.4		7.1	瓦質	火鉢・こんろの蓋か？ 内面全体にタール状の付着物。	3
27	Ⅱ SK01	瓦灯蓋	13.2	16.2		瓦質		29－19
28	Ⅲ SK02・05付近	十 能				瓦質	柄部15.5cm。	20

第57図　瓦質土器

火鉢(21～23)

21・22は足が付き三足になると思われる。22・23は口縁部下に粘土紐による突帯が施されている。

七厘(24・25)

焜炉の一種で、胴部下方に窓(風口)が付く。口縁部が欠損しているため全体の器形は不明である。体部はどちらも「く」の字に屈曲し、底部は24が三足、25には高台状の台が付く。24は本体と炭をのせる「さな(簀)」とが一体となったもの、25は屈曲した部位にさなが付属するタイプのものである。25のさなの部分には灰を下に落とすための穴が穿たれ

ている。

火鉢・焜炉類蓋？(26)

かえりが付き、天井部中央には把手とみられる痕跡があることから蓋として扱った。側面には数個の穴が穿たれている。内面にはタール状になったススが全面に付着しており、火鉢・焜炉類あるいは灯明具のなどの蓋に用いられたものと考えられる。

瓦灯皿(27)

盤形で、口縁部には瓦灯傘を受ける傘受けが付く。欠損しているが中央には灯明皿をのせる皿が付いていたと思われる。底部には回転糸切り痕を残す。

十能(28)

竈・火鉢などから炭火・灰などをのせて移動したり、火を掻きおこしたりする時に使うもので、中空の柄と皿の一部が残存している。

③人形類・ミニチュア土器(第58図、写真図版31)

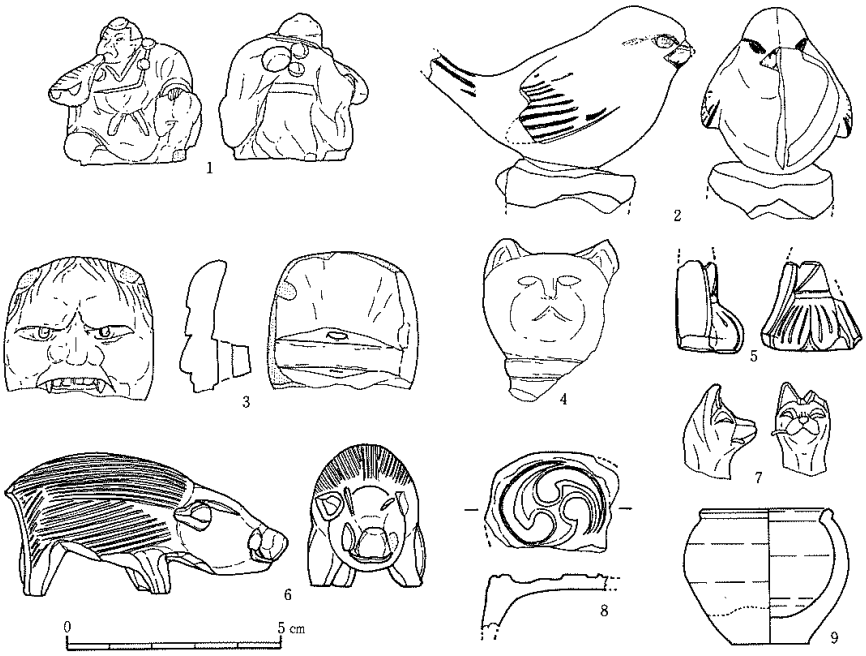
断片的な資料も含めると58点(根付けも含む)出土している。その中から8点図示した。

1は肥前産の磁器製の根付けで、18世紀後半頃の製品と考えられる。体部は赤で彩色されており、中空で背面・低面に孔がある。2は京焼の陶製人形である。体部全体が緑色で着色され、茶色、青色、金色で彩色されている。また、中空で人形の底部に台が芯棒で止めてあり、その芯棒が下に伸びていることから何らかの飾りになっていたものと考えられる。3は陶製の鬼面で、全体に鉄釉がかかる。背面には紐通しと考えられる孔があり、根付けに使われていたものであろう。4は前後型合わせの素焼の人形で、部分的に墨痕が残っている。5・6は素焼の人形である。7は素焼で耳部に朱もしくは赤で着色された痕跡が残っている。口にあたる部分には、細長い金属棒が差し込んである。8も素焼で、三つ巴文を型どっている。9は外面底部を除き内外面に鉄釉を施した豆甕である。

④瓦類(第59図～62図、写真図版31～33)

本遺跡からは破片数にして約2,000点の瓦が出土している(第10表)。ここでは各種類ごとに遺存状態の良好なものを図示した。

種類は平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・桟瓦・軒桟瓦・伏間瓦・鳥伏間瓦・棟込瓦(菊丸・輪違い)・熨斗瓦・面戸瓦・鬼瓦に大別される。そのうち平瓦と桟瓦は断片的で判別が不可能なものが多かったため、集計表において不明としたものの大半はそのどちらかに属するものである。また図示はできなかったが、これらの他に塀桟瓦も出土している。なお、瓦の名称・分類は、「日本の瓦屋根」(坪井1976)を参考にした。



No.	地区・遺構・層位		種　類	特　　徴	産地	写真図版
1	II	整地II	磁製根付	赤絵彩色の山伏。高さ3.5cm。中空で背面に径6mmの孔。底面にも孔。	肥前	31－2
2	II	整地II	陶製人形	緑色に彩色された鶯の飾り。長さ6.1cm。幅3.5cm。	京都	4
3	II	整地II	陶製根付	鬼面。鉄釉。背面に紐通しの孔。残存高・最高幅とも3.3cm。		3
4	II	整地II	土製人形	前後型合わせの素焼き。猫の頭部。残存高3.9cm。		6
5	II	SX50池跡	土製人形	素焼き。頭部欠。残存高2.1cm。		8
6	II	SA13	土製人形	橙色の猪。長さ6.6cm。高さ3.3cm。幅2.8cm。		5
7	II	整地II	土製人形	物をくわえた狐の飾り。首部下欠。残存高2.2cm。幅1.4cm。		9
8	II	SX50池跡	土 製 品	素焼き。三つ巴文。		7
9	II	SD54	磁製豆鍋	口径3.1cm、底径1.8cm、器高3.2cm。鉄釉。		1

第58図　人形類・ミニチュア土器

平瓦(1)

判別の可能なものは14点出土しているが、完形に近いものは図示した1のみで、頭幅と尻幅の差が小さな長方形状を呈する。凹面はミガキ調整によって平滑に仕上げられており、凸面には軽いナデ調整が施されている。

丸瓦(2・3)

2・3ともに玉縁のつく有段丸瓦で、2の体部には径1.8cm程の吊り穴が1個穿たれている。2・3ともに凸面体部に縦方向の、玉縁細には横方向のナデ調整が施され、凹部には糸切り、布目痕を残し、特に3には先端の角張った工具による刺突痕も認められる。

軒平瓦(4～7)

図示したようにすべて均整唐草文で4種類がある。4は中央に「剣花菱」を配したもので唐草は凸線で表現される。5は凸線で描かれるものではなく、唐草全体が凸面を呈する

第10表　瓦類集計表

（注）数値は破片数

地区	種類 / 遺構・層位	平瓦	丸瓦	軒平	軒丸	桟	堀桟	軒桟	伏間	鳥伏	菊丸	輪違	熨斗	面戸	鬼瓦	不明
I区	盛土・不明・撹乱		1													
	整地Ⅰ・Ⅱ		9													15
	道路跡　SX101		3			1										12
	その他の遺構		3										1			17
II区	盛土・不明・撹乱	2	25	2		5		1	3							80
	整地Ⅰ・Ⅱ	1	135	6	11	2			9		22	28		1	2	164
	池跡　SX50新	3	11			21	10	22	12		3	1		1		119
	SX50旧		17	2			1		1			2				44
	SX51		1									3				4
	井戸跡　SE50										1	3				6
	SE52		1	1												5
	SE53	1														
	SE54	2	45	1	2						1	1				105
	土壙　SK57								3							
	溝跡　SD60		6													2
	SD61		4													11
	SD63															10
	その他の遺構	4	17					1	1			2		1		18
III区	盛土・不明・撹乱	1	14	2		1			1							29
	整地Ⅰ・Ⅱ		7	1		9		12	14			2	26			293
	池跡　SX01		12	3		7		7	18	1	1	4	3			159
	SX02		3							1		1				3
	土壙　SK02・05		1		3											
	SK14															5
	その他の遺構		1						1			1				2
IV区	盛土・不明・撹乱		5	1		2		1	1		1	2			1	13
	整地Ⅰ・Ⅱ			1												1
	井戸跡　SE102		6													4
	土壙　SK01		2						1							
	SK101		1						4		1					5
	SK102		2													6
	SK105															1
	溝跡　SD07		1													
	竪穴状遺構　SX103		4													25
	SX104		17					1				1			8	37
	その他の遺構		1													21
V区	盛土・不明・撹乱															2
	道路跡　SX04の溝											1				
調査区	盛土・不明・撹乱		5									2				1
合計		14	360	20	16	48	11	45	69	2	30	54	30	3	11	1221

ものである。6は中央に「雪持ち笹」を配したもので唐草は凸線で表現される。7も同様であるが文様が6に比べて小さめである。瓦当右脇に「明和四」年(1767)の刻印がある。

軒丸瓦（8・9）

8は右巻きの三ッ巴文で周囲に16個の連珠が巡る。9は伊達家の家紋である三ッ引両文である。これらの他に左巻きの三ッ巴文で推定22個の連珠が巡ると考えられるものや、茂

庭家の家紋である「重剣菱文」の軒丸瓦も出土している。後者については後で述べる鳥伏間瓦の第61図18とほぼ同様のものである。

桟瓦（10）

桟瓦は48点出土しているが、図示した10は他の桟瓦に比べてかなり大きなもので、尻部に2つのクギ穴が穿たれている。ちなみに10以外に全体の大きさ知り得るものは1点のみであるが、長さ27.3㎝・幅27.6㎝である。どちらも凹面はミガキ、凸面は軽いナデ調整が施されている。

軒桟瓦（11～15）

平瓦部の瓦当文様はすべて均整唐草文で、図示した3種類がある。11は丸瓦部が左巻きの三ッ巴文、平瓦部が均整唐草丈、12は丸瓦部が三ッ引両文、平瓦部が中心飾りに点珠がつく均整唐草文である。13は丸瓦部は左巻きの三ッ巴文で11のと比べてやや小さい。平瓦部は不明である。14・15は同一文様であろう。丸瓦部は不明であるが他に丸瓦部の文様が認められないことから13と組み合う可能性も考えられる。平瓦部は中央に三ッ引両文を配した均整唐草文である。14の尻部左側には長さ12㎝・幅4㎝の切り込みがある。調整は桟瓦と同様である。

伏間瓦(16・17)

16・17は大棟の伏間瓦である。ともに頭部に角桟がつき、尻部にはV字状に幅5㎜程の溝が切られている。16はさらに頭部左端に長さ約3㎝・幅約7㎝の切込みがあり左側辺には径約1㎝の穴が穿たれている。凸面はミガキ調整によって平滑に仕上げられており、凹面はナデ調整が施されている。他に形態は同様であるが、降棟に葺かれるやや小さめのものも数点出土している。

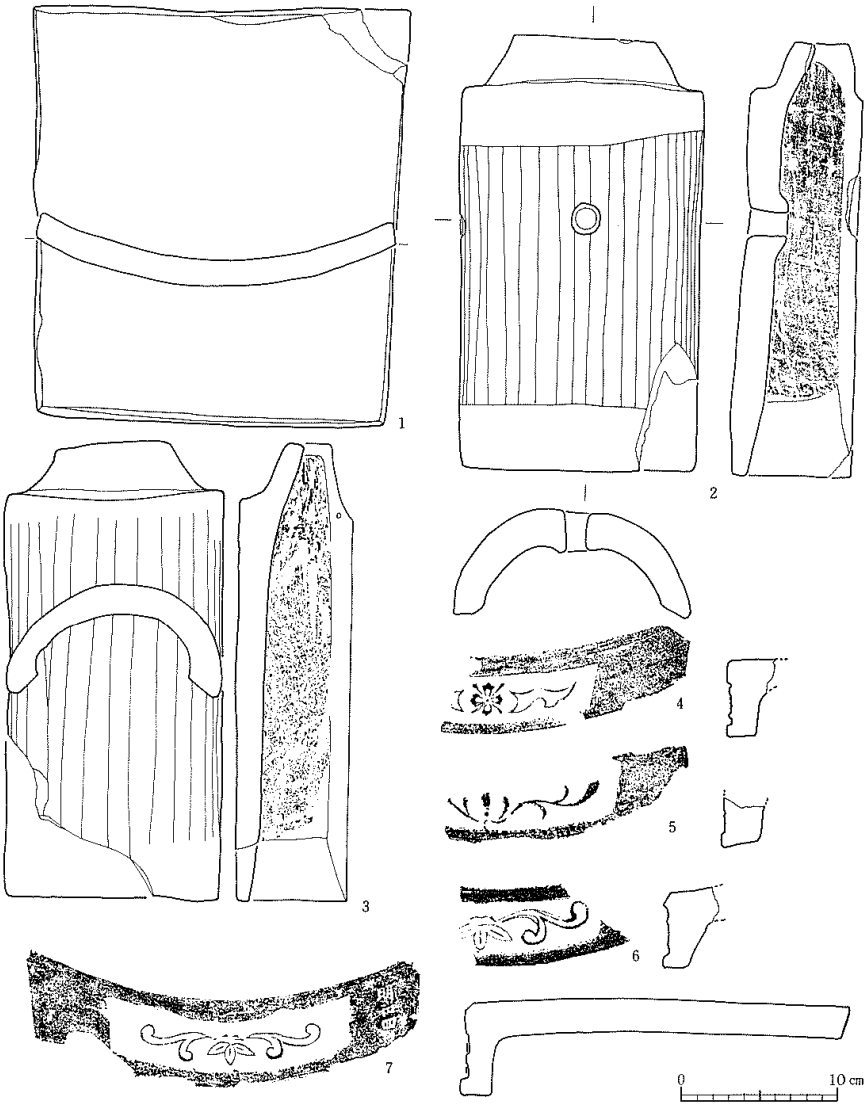
鳥伏間瓦(18・19)

ＳＸ01池跡から2点出土しており、突出部(鳥休み)の瓦当文様はともに茂庭家の家紋である「重剣菱文」である。范は異なっており、19のほうがやや横長になっている。器面調整は欠損のため不明。

棟込瓦(20～24)

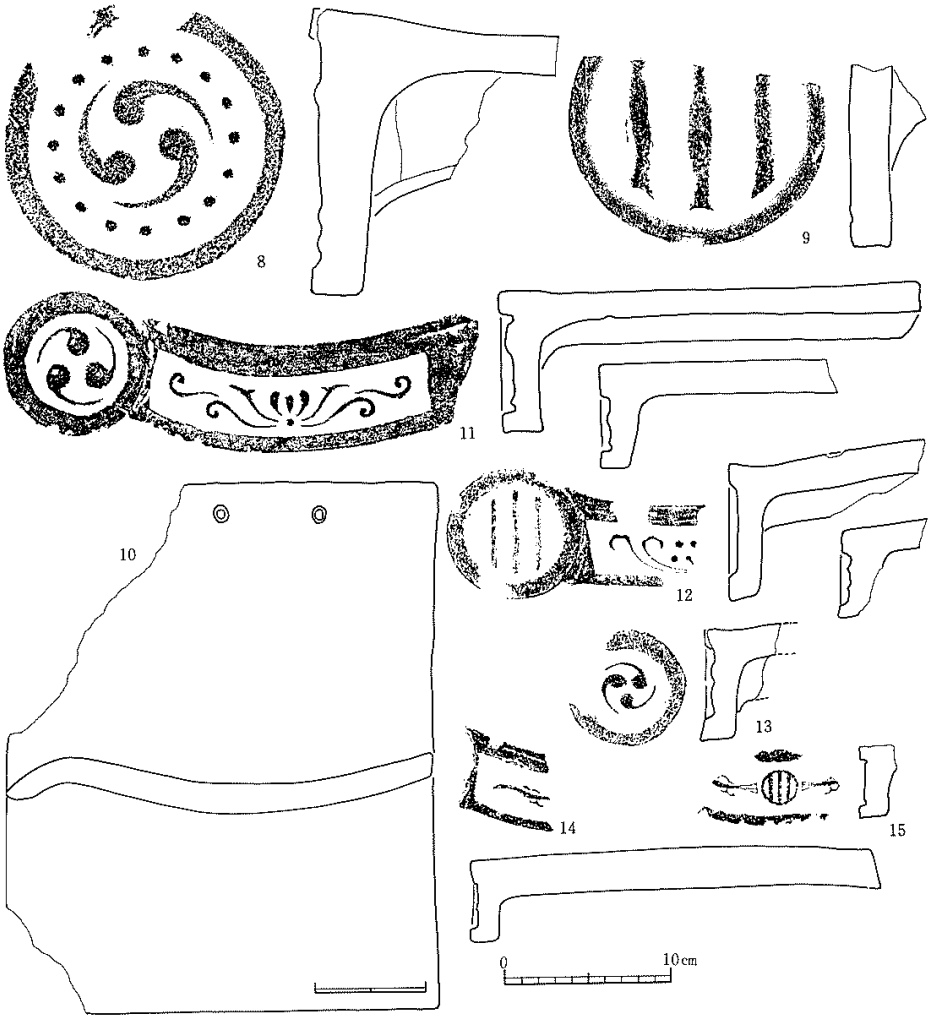
20・21は16弁の菊丸である。形態的には軒丸瓦とほぼ同様であるが、全体的に小ぶりで体部は短く玉縁がつかない。また瓦当は平縁である。22～24は輪違いである。丸瓦を焼成前に横に分割し、側辺を直線的(22・23)、あるいは曲線的(24)に切り取って平面形を台形にしたもので、24のほうがやや大ぶりである。凹面は前者が各辺を大きく面取りしているのに対し、後者は面取りはされていない。

熨斗瓦(25)



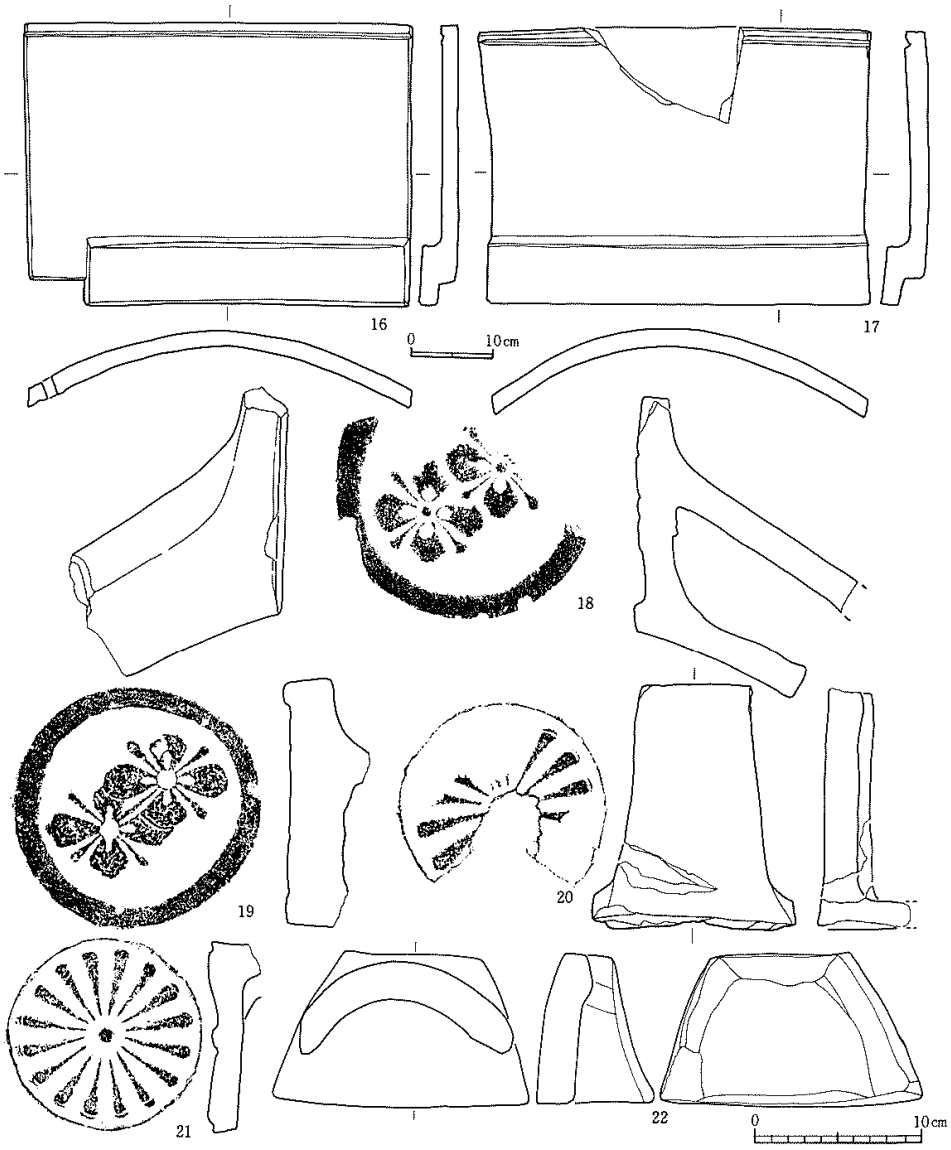
No.	地区・遺構・層位	種　類	全長(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	その他(cm)	特　　徴	写真図版
1	Ⅱ　SX50地跡	平　瓦	27.0	頭部22.1　尻部24.0				31－14
2	Ⅱ　整地Ⅰ	丸　瓦	27.8	15.2	1.8～2.4	玉縁長2.9		15
3	Ⅳ　SX104墓穴	丸　瓦	29.2	13.5	1.5～2.0	玉縁長3.0		32－1
4	―― 表採	軒平瓦	――	――	――	瓦当高4.9	唐草文（中央に剣花菱）	
5	―― 表採	軒平瓦	――	――	――	――	〃	
6	Ⅳ　整地層	軒平瓦	――	――	――	瓦当高5.2	〃　（中央に雪持笹）	31－10
7	Ⅱ　SE52	軒平瓦	25.6	25.6	2.2	瓦当高5.9	同上。瓦尻に「明和四年」刻印	11

第59図　瓦類（1）



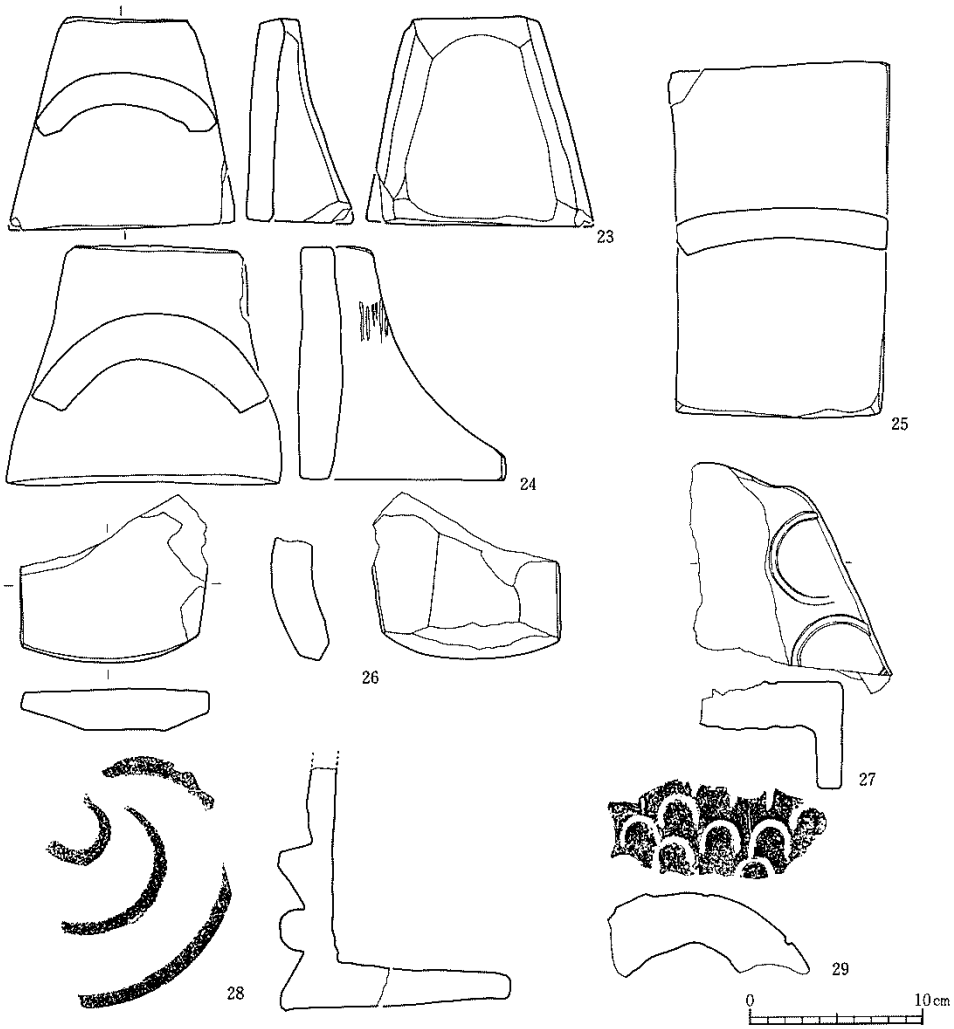
No.	地区・遺構・層位		種　類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	瓦当面径・高さ(cm)	特　徴	写真図版
8	Ⅲ	SK02	軒丸瓦	― ―	― ―	2.3	15.4	連珠三ツ巴文	31～13
9	Ⅲ	SK02・05	軒丸瓦	― ―	― ―	― ―	17.0	三ツ引両文	12
10	Ⅲ	SK02・05	桟　瓦	65.6	38.4	2.6	― ― ―		32～6
11	Ⅲ	盛土	軒桟瓦	25.2	28.8	― ―	丸瓦部8.4　平瓦部6.3	三ツ巴＋唐草	5
12	Ⅱ	整地Ⅱb	軒桟瓦	― ―	― ―	― ―	丸瓦部8.4　平瓦部5.4	三ツ引両＋唐草	4
13	Ⅱ	SX50	軒桟瓦	― ―	― ―	― ―	丸瓦部6.1　平瓦部― ―	三ツ巴文	3
14	Ⅳ	SB09柱穴	軒桟瓦	24.6	― ―	― ―	丸瓦部― ―　平瓦部4.9	唐草文	2
15	Ⅲ	SX01池跡	軒桟瓦	― ―	― ―	― ―	丸瓦部― ―　平瓦部― ―	唐草文（中央に三ツ引両文）	

第60図　瓦類（2）



No.	地区・遺構・層位	種　類	全長(cm)	幅 (cm)	瓦当面径	特　徴	写真図版
16	Ⅱ　SK56	伏　間　瓦	34.5	頭幅46.6　尻幅47.2	−−		32−7
17	Ⅱ　SK56	伏　間　瓦	33.8	頭幅45.5　尻幅47.2	−−		8
18	Ⅲ　SX02池跡	鳥 伏 間 瓦	−−	−−　−−	16.0	重剣菱文	33−1
19	Ⅲ　SX01池跡	鳥 伏 間 瓦	−−	−−　−−	15.0	〃	2
20	Ⅱ　整地Ⅱb	棟込瓦（菊丸）	14.7	広端幅9.6　狭端幅6.7	12.6		4
21	Ⅱ　整地Ⅱb	棟込瓦（菊丸）	−−	−−　−−	11.8		3
22	Ⅱ　SX50池跡	棟込瓦（輪違）	−−	広端幅15.7　狭端幅8.4	−−		6

第61図　瓦類（3）



No.	地区・遺構・層位	種　類	全長(cm)	幅 (cm)	特　徴	写真図版
23	Ⅱ　整地Ⅱb	棟込瓦(輪違)	13.4	広端幅15.7　狭端幅10.0		
24	Ⅲ　SK02・05	棟込瓦(輪違)	12.1	広端幅11.0　狭端幅 6.9		33－7
25	Ⅲ　盛土	熨斗瓦	20.5	12.2		5
26	Ⅱ　SX50地跡	面戸瓦	－－	10.8		8
27	Ⅳ　SX104竪穴	鬼　瓦	－－	－－－－	内面にカキトリ・ケズリの痕跡	11
28	－　表採	鬼　瓦	－－	－－－－		10
29	Ⅱ　整地Ⅱ	鬼　瓦	－－	－－－－	シャチ瓦	9

第62図　瓦類（4）

平瓦を縦に分割したもので、分割線を凹面にいれ焼成後分割するもの(16点・幅10.3〜12.7㎝)と焼成前に分割するもの(14点)とがある。後者はさらに分割面が無調整のもの(8点・幅10.5〜12.5㎝)とヘラケズリ調整するもの(6点・幅9.3〜12.4㎝)とに分けられる。25は焼成前分割で無調整のものである。

面戸瓦(26)

丸瓦を焼成前に横に分割し整形したものが3点出土している。完形品はない。凹面の各辺を大きく面取りし、さらに上・下辺の角を除去して弧状に整形している。

鬼瓦(27〜29)

27は鬼面文の頭部、28は右足部の破片と考えられるもので、27の文様は工具押圧によるものである。内面にはカキトリ・ケズリの痕跡がある。29はU字状工具により鱗を施文している鯱瓦の破片で、同様の破片が他に1片出土している。

⑤金属製品(第63・64図、第11表、写真図版34)

金属製品は、煙管(86点)、簪(6点)、火箸(3点)、切羽(1点)、襖金具(1点：剣菱文)、和鋏(1点)、包丁(1点)、鉈(1点)、鎌(1点)、鉄砲玉(13点)、釘(347点)、銭貨(86点)など、用途不明のものを除けば12種が出土している。

煙管(1〜9)

1〜5は雁首で、1・2は火皿下の脂返しが大きく湾曲する「河骨型」という形態である。また、羅宇に接続する部分が一段太く巻かれた「肩付」で、火皿と首部の接合部には補強帯が巻きつけられている。3は首部が一枚の銅版を巻いてつくられており、肩や補強帯は付かない。脂返しの湾曲がやや小さいものの、「河骨型」にほぼ近い形態である。4は脂返しの湾曲がさらに小さくなっている。5は逆台形で小型の火皿を持ち、脂返しの湾曲がほとんどないものである。1・2は17世紀前半、3は18世紀前半、4は18世紀後半、5は19世紀以降のものとされている(古泉1987)。資料数が少なく形態と出土地点・層との関係を厳密に論じることはできないが、整地層出土のものを見てみると整地Ⅰ層からは5のような19世紀以降のものは認められていない。

6〜9は吸い口である。6のみが「肩付」で、9は断面が六角形になっている。

簪(10〜12)

10は欠損のため詳細は不明だが、透かし彫りなどの細工がなされていたと思われる。11・12は耳掻付き簪である。11には放射状の細工がなされている。

その他の銅製品(14〜16)

14は整地Ⅱb層から出土した切刃、15は襖金具で「剣花菱文」が見られる。15は薄い1

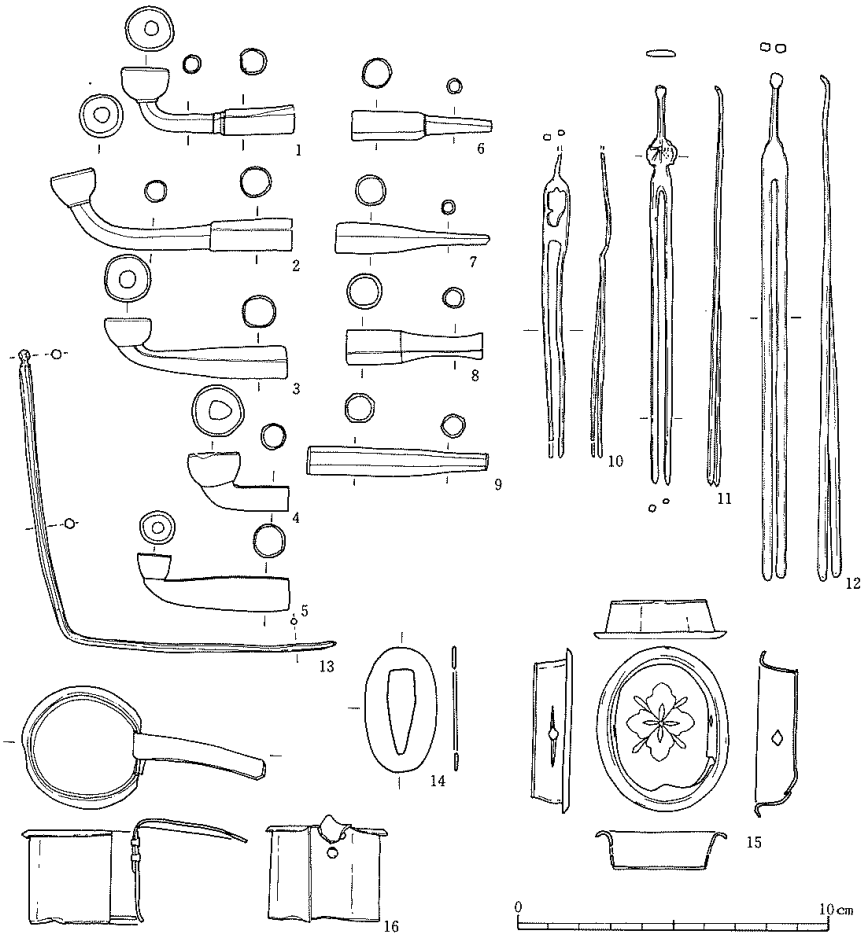
第11表　金属製品・石製品・木製品集計表

地区	種類／遺構一層位	金属製品												石製品						木製品							
		煙管	簪	火箸	切羽	雑金具	和ばさみ	包丁	鎌	釘	鉄砲玉	古銭	不明	硯	香石	石臼	砥石	石煙管	不明	漆椀	箸	曲物板	柄杓の柄	桶	漆皿	障子の桟	不明
I区	盛土・不明・撹乱									1																	
	整地Ⅰ・Ⅱ	2								2		2							1								
	通路跡　SX101	1												1													
	その他の遺構											2	6						1								
II区	盛土・不明・撹乱	11								65	3	7	42	5	6		1		4								
	整地Ⅰ・Ⅱ	35	5	1	1	1	1			140	4	30	107	24	7		4		11								1
	炉跡　SX50(新)	4	1	1			1					5	10	3	1		1	2	5	3		1	1		2	1	2
	SX50(旧)							1	1	2		2	2						1	2		1	1	2	2		1
	SX51												2														
	井戸跡　SE53																		1		2						17
	SE54	3								25	1	6	23	5					2								
	土壙跡　SK50	1								1		1	3														
	SK51	1												1			1										
	SK52	2								3			2														
	SK53											1															
	SK55												1														
	SK59									1			3														1
	溝跡　SD50																										
	SD52	1											2	1	1												
	SD60	1								5		2	4	7	1				1								
	SD61	1		1						9		4	32	6					1								
	その他の遺構	1								13	4	16	22	2	1	1			2								
III区	盛土・不明・撹乱									14			3	1													
	整地Ⅰ・Ⅱ									2			2	1													
	炉跡　SX01									2		1															
	その他の遺構									1				1													
IV区	盛土・不明・撹乱									8			1						1								
	整地Ⅰ・Ⅱ									4		1	1														
	井戸跡　SE102																1										
	土壙跡　SK101																1										
	竪穴状遺構SX103									9		1	1	3			1										
	SX104	5								35		5	11				1		1								
	溝跡　SD105									1																	
	その他の遺構									6			1														
V区	道路跡SX04南側溝										1					2				1							
合計		86	6	3	1	1	2	1	1	347	13	86	280	61	17	3	11	2	32	6	2	2	2	2	1	1	22

枚の銅版を丸め筒状にしてから、別の銅版を貼り付けて底部にし、一方の縁は外へ折り返して、さらに把手状のものを貼り付けている。用途は不明である。

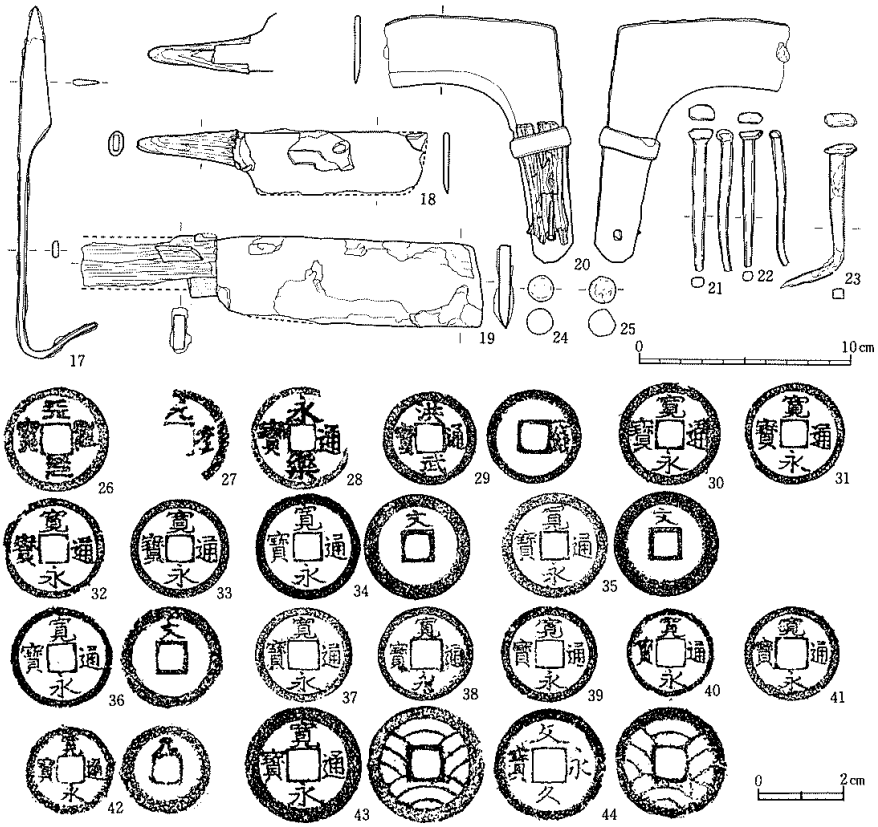
鉄製品(17～23)

17は和鋏で片方を欠損している。18は包丁、19は鉈、20は鎌でいずれも柄の木質部を残している。21～23は角釘で頭部が丸く折り返された頭巻釘である。鉄錆の付着は17～23いずれも著しい。



No	地区-遺構-層位	種 類	全長(cm)	特 徴	写真図版
1	Ⅱ 整地Ⅰ	煙管	5.5	羅首。河骨形。胴付で補強帯有り。火皿径1.5cm。火皿高1.1cm。首部径0.6cm。胴部径(1.0cm)。	34－1
2	Ⅱ 整地Ⅰ	煙管	7.8	羅首。河骨形。胴付で補強帯有り。火皿径1.4cm。火皿高1.0cm。首部径0.7cm。胴部径1.0cm。	2
3	Ⅱ 整地Ⅱ	煙管	5.5	羅首。河骨形。補強帯なし。火皿径1.5cm。火皿高0.9cm。首部最大径1.0cm。	3
4	Ⅱ SX52	煙管	3.3	羅首。補強帯なし。火皿径1.7cm。火皿高1.1cm。首部最大径0.8cm。	4
5	Ⅱ 盛土	煙管	5.0	羅首。補強帯なし。火皿径1.1cm。火皿高0.8cm。首部最大径1.1cm。	5
6	Ⅱ 整地Ⅱ	煙管	4.5	吸口。胴付で補強帯なし。最大径1.0cm。吸口末端部径0.35cm。	6
7	Ⅱ 整地Ⅱ	煙管	5.0	吸口。補強帯なし。最大径1.0cm。吸口末端部径0.3cm。	7
8	Ⅱ 整地Ⅱ	煙管	4.4	吸口。補強帯なし。最大径1.2cm。	
9	Ⅱ 整地Ⅱ	煙管	5.8	吸口。補強帯なし。最大径0.9cm。吸口末端部径0.5cm。	
10	Ⅱ 整地Ⅱ	簪	(9.3)	双足。	11
11	Ⅱ 整地Ⅱ	簪	13.1	双足。耳掻き付き。	10
12	Ⅱ 整地Ⅱ	簪	15.8	双足。耳掻き付き。	9
13	Ⅱ SD61	火箸	18.1	断面六角形。	16
14	Ⅱ 整地Ⅱ	切羽	4.1	幅2.35cm。厚さ0.1cm。	13
15	Ⅱ 整地Ⅱ	櫛金具	5.4	幅4.3cm。厚さ1.25cm。	12
16	Ⅱ SX50地鎮	不明	8.0	身部径3.6cm・高さ3.05cm。	8

第63図　金属製品（1）



No.	地区-遺構-層位	種類	特徴	写真図版	No.	地区-遺構-層位	器種	特徴	写真図版
17	Ⅱ 整地Ⅱ	和鉄	残存長16.8cm。刃部最大幅1.5cm。	34－17	20	Ⅱ SX50池跡	鐔	刃部幅3.3cm。先端部欠。	20
18	Ⅱ SX50池跡	包丁	残存長13.8cm。刃部幅1.5cm。刃部一部欠	18	21～23	Ⅱ 21・22:SE54, 23:整地Ⅱ	釘	残存長5:6.9cm, 6:6.5cm, 7:9.2cm。	21・22
19	Ⅱ 整地Ⅰ	鉈	残存長19.0cm。刃部幅1.5cm。	19	24・25	Ⅱ 整地Ⅱ	鉄格玉	径8:1.2cm, 9:1.3cm。	14・15

No.	地区-遺構-層位	銭貨	特徴	外形cm	穿径cm	初鋳年	鋳造地	写真図版
26	Ⅱ 整地Ⅱ	天聖元寶	中国北宋時代の渡来銭。	2.5	0.7	天聖元／1023	中国。	34－23
27	Ⅰ 確認面	元豊通寶	中国北宋時代の渡来銭。	－－	0.7	元豊元／1078	中国。	24
28	Ⅱ 整地Ⅱ	永楽通寶	中国明時代の渡来銭。	2.4	0.6	永楽6／1408	中国。	
29	Ⅱ 整地Ⅰ	洪武通寶	模鋳銭。　背郭部右「一銭」。	2.25	0.65	天正～元禄？	不明。	
30	Ⅱ 整地Ⅰ	（古）寛永通寶	吉田銭。	2.5	0.6	寛永14／1637	三河国田新銭座町。	34－25
31	Ⅱ 整地Ⅱ	（古）寛永通寶	松本銭。	2.45	0.6	寛永14／1637	信濃国松本。	26
32	Ⅳ SX104竪穴	（古）寛永通寶	岡山銭。	2.45	0.65	寛永14／1637	備前国御野郡二日市。	
33	Ⅱ 盛土	（古）寛永通寶	井之宮銭。	2.4	0.6	寛永16／1639	駿河国宇郡郡井之宮。	
34	Ⅱ 盛土	（新）寛永通寶	「文銭」。	2.55	0.65	寛文8／1668	武蔵国江戸亀戸。	
35	Ⅱ SK50	（新）寛永通寶	「文銭」。	2.55	0.6	寛文8／1668	武蔵国江戸亀戸。	
36	Ⅳ SX104竪穴	（新）寛永通寶	「文銭」。	2.45	0.6	寛文8／1668	武蔵国江戸亀戸。	
37	Ⅱ 盛土	（新）寛永通寶	四ツ宝銭。	2.3	0.7	宝永5／1708	武蔵国江戸亀戸。	
38	Ⅱ 整地Ⅱ	（新）寛永通寶	猿江銭。	2.3	0.7	享保期／1716頃	武蔵国江戸猿江。	
39	Ⅱ 盛土	（新）寛永通寶	虎ノ尾寛。	2.35	0.65	元文元／1736	武蔵国江戸深川十万坪。	34－28
40	Ⅱ 整地Ⅱ	（新）寛永通寶	小梅手広穿。	2.1	0.65	元文2／1737	武蔵国江戸本所小梅。	
41	Ⅱ 整地Ⅱ	（新）寛永通寶		2.45	0.6	元文4／1739	武蔵国江戸深川十万坪。	
42	Ⅱ SD61	（新）寛永通寶	背元。	2.15	0.6	寛保元／1741	摂津国大阪高津新地。	34－29
43	Ⅱ SX50池跡	（新）寛永通寶	「波銭（11波）」。四文銭。	2.8	0.75	明和6／1769	武蔵国江戸深川千田新田。	
44	Ⅱ SX50池跡	文化寛永寶	11波。　草文。	2.7	0.75	文久3／1863	武蔵国江戸真崎・小菅。	34－30

第64図　金属製品（2）

鉄砲玉(24・25)

鉛？製の鉄砲玉でこれらの他に11点出土している。

銭貨(10〜28)

出土総数86枚の銭貨の内訳は、渡来銭が4枚(26〜29)、本邦銭(30〜44など)が82枚である。

26は天聖元宝、27は元豊通宝でともに中国北宋時代のものであり、28は永楽通宝、29は洪武通宝で中国明代のものである。29には「一銭」の背文が認められる。30〜43は寛永通宝で、30〜33が古寛永、34〜43は新寛永と称されるものである。新寛永のうち34〜36は背郭部上に「文」字を配した俗称「文銭」、42は背郭部に「元」字を配している。43は四文銭で11波の俗称「波銭」、44は文久永宝で四文銭である。

⑥石製品(第65・66図、第11表、写真図版35)

Ⅱ区を中心に、硯(61点)、碁石(17点)、石臼(3点)などが出土している。

硯(1〜7)

出土した硯のうち比較的残存状況のよい7点を図示した。

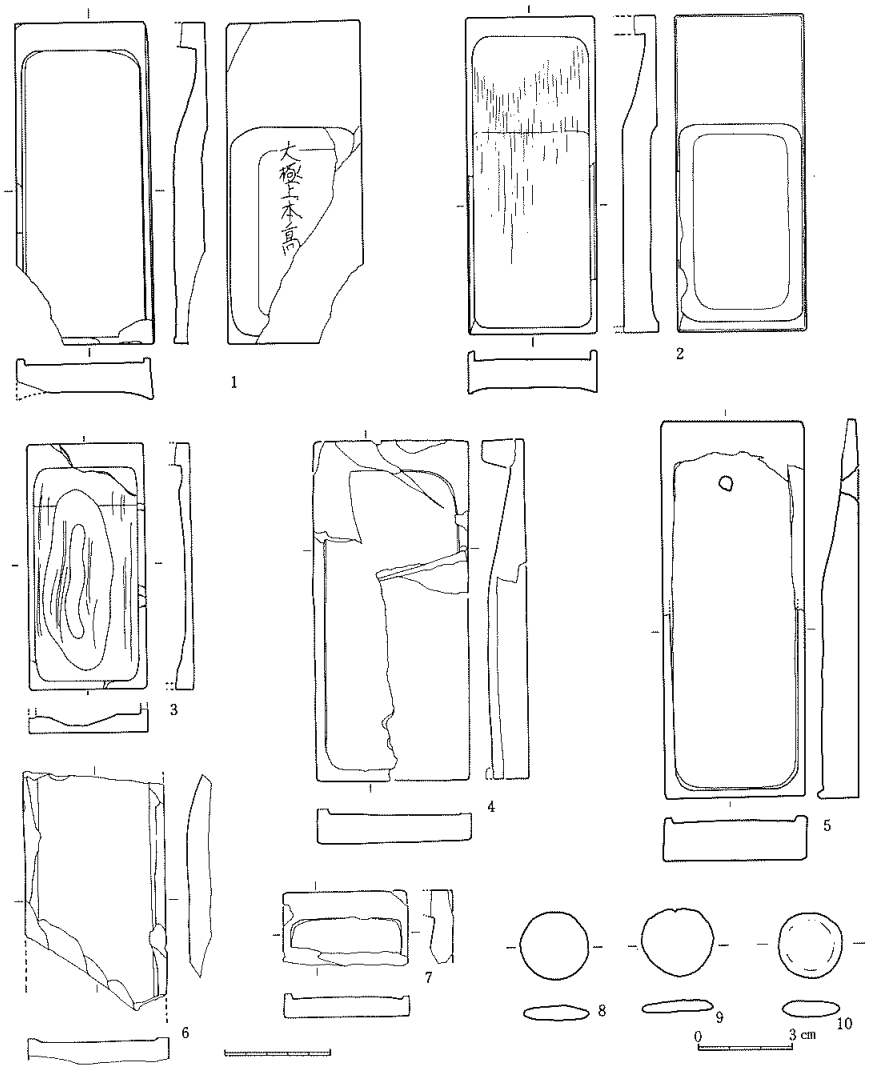
すべて短冊型の長方石硯で、石質は5が輝緑凝灰岩、その他は粘板岩製である。硯面の形状はすべて隅丸を呈し、硯面からの縁の立ち上がりは垂直に立ち上がるもの(1〜3)と、斜めに立ち上がるもの(4〜7)とがある。1は背面(硯陰)に浅い掘り込みがあり、「大極上本高…」の釘彫りが認められる。硯面には墨が付着している。2も1と同様に硯陰に浅い掘り込みを持つ。3はやや小型で墨汁を溜める部分(海)は比較的浅い。墨をする部分(丘)の中央(墨道)は、長径8.5㎝ほどの楕円形を呈して凹状に摩滅しており、長期間にわたって使用されていたことが窺える。硯面には1と同様に墨が付着している。4は全体の器形は推定できるものの硯陰をかなり欠損している。5は海部中央が硯陰側から穿孔されている。6はおもに丘部、7は海部が残存するのみである。

碁石(8〜10)

17点中3点図示した。これらは全て粘板岩製である。

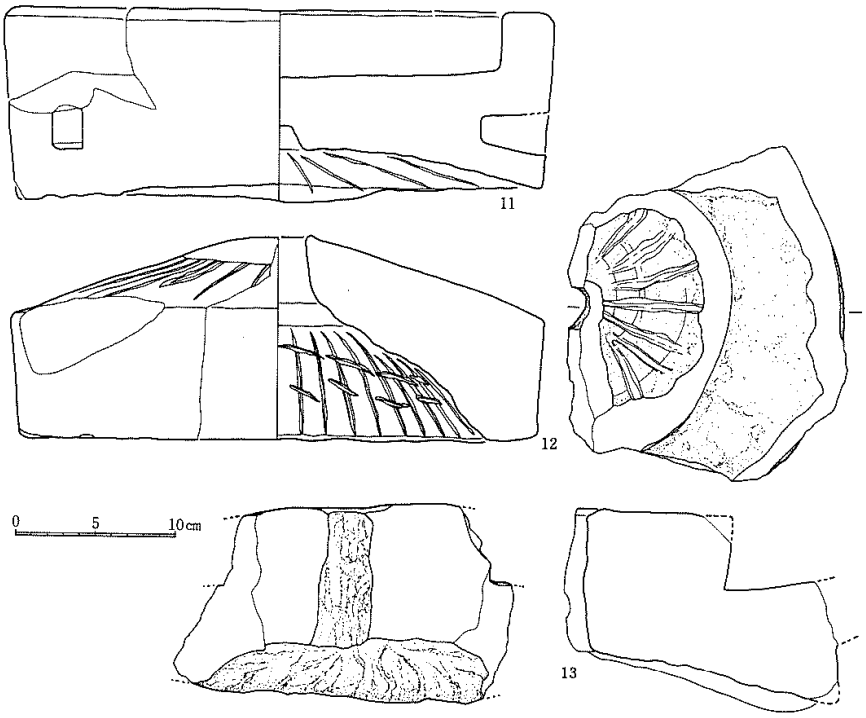
石臼(11〜13)

3点出土しており、石質はいずれも安山岩である。11は上臼で、上面には高さ3.5㎝ほどの縁が巡り、下面には不規則な目が刻まれている。また、下面中央部には軸受け用のほぞ穴が切られ、側面には平面形が一辺3.5㎝の正方形で、深さ4.8㎝の把手用の孔が穿たれている。12は下臼である。上面には放射状の目が見られるが、使用による摩滅が激しく残りが悪い。中央部には軸受け用の穴が穿たれており、下面には製作時の粗い削り痕が



No.	地区・遺構・層位	種類	特	徴	写真図版
1	Ⅲ SK03通路状	硯	長さ15.2cm、幅6.2cm、厚さ2.0cm。裏面凹部に「大極上本高」の文字。		35－1
2	Ⅱ 整地Ⅱ	硯	長さ15.1cm、幅6.1cm、厚さ2.1cm。粘板岩の長方硯。丘に対応する硯陸に浅い彫り込みあり。		4
3	Ⅱ 整地Ⅰ	硯	長さ11.8cm、幅5.5cm、硯面に凹状の使用痕。粘板岩の長方硯。		2
4	Ⅳ SX103竪穴	硯	長さ16.3cm、幅7.3cm、厚さ(1.6)cm。粘板岩の長方硯。		
5	Ⅲ SX01他跡	硯	長さ18.1cm、幅6.5cm、厚さ2.0cm。紫雲石の長方硯。輝緑凝灰岩。海部分が摩滅し穿孔されている。陸中産。		35－3
6	Ⅳ SX103竪穴	硯	長さ(11)cm、幅6.7cm、厚さ(1.3)cm。粘板岩の長方硯(雄勝石)。地元産。		
7	Ⅳ SX103竪穴	硯	長さ(3.5)cm、幅5.9cm、厚さ(1.2)cm。粘板岩の長方硯(雄勝石)。地元産。		
8	Ⅱ 盛土	碁石	直径1.9cm、厚さ7.0mm。		
9	Ⅱ 整地Ⅱ	碁石	直径2.3cm、厚さ3.0mm。		35－6
10	Ⅱ 整地Ⅰ	碁石	直径2.0cm、厚さ5.0mm。		

第65図　石製品（1）



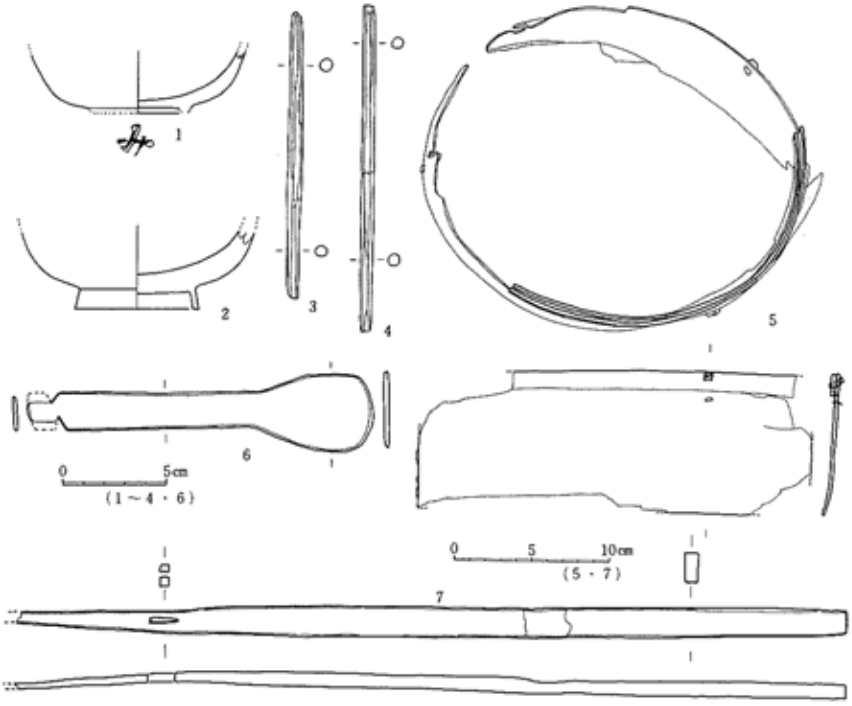
No.	地区・遺構・層位	種　類	特　徴	写真図版
11	V　SX04南側溝	石臼(上臼)	安山岩。最大径34cm。高さ12cm。上面に高さ4.0cm・幅3.3cmの縁が巡る。側面に把手取り付け用の一辺3.0cm・深さ4.2cmの孔。	35－7
12	V　SX04南側溝	石臼(下臼)	安山岩。最大径33cm。高さ13cm。上面に放射状の目。摩滅痕が著しい。内面は製作時の削り痕が残る。	8
13	II　SX52石列	石臼(下臼)	安山岩。縁付き。最大径約40cm・高さ20cmで中央に径2.5cmほどの軸受け孔、放射状の目。	9

第66図　石製品(2)

残されている。これらは法量がほぼ同じでともにＳＸ04道路跡南側側溝から出土しているので、組み合う一対のものと思われる。13はII区ＳＸ52石刻の礫に転用されていた、受け皿を伴う下臼である。周囲に縁が付く。上面(摺面)には放射状の目が見られ、中央部には軸受け用の孔が穿たれている。

⑦木製品(第67図、第11表、写真図版35)

II区ＳＸ50池跡・ＳＥ53井戸跡から、漆塗り椀、箸、曲物、柄杓の柄などが出土している。第67図－1は黒漆塗りの椀で、胴部から底部にかけて薄く仕上げられている。底部中央には「み」と朱書きされている。2の赤漆塗りの椀は全体的に厚手に作られているが、高台部は2㎜程度の厚さに丁寧に削り出されている。3・4の箸は2本ともＳＥ53井戸跡から出土した。いずれも欠損しており、図上端には焼けた痕跡が認められる。5の曲物は欠損しており歪みもあるが、口径約24.0㎝、器高約9.0㎝ほどの大きさのものと推定され



No.	地区・遺構・層位	種 類	特 徴	写真図版
1	Ⅱ SE50埋土	椀	黒漆椀。底径4.6cm。底部に「み」の墨書き。	25～30
2	Ⅱ SE50埋土	椀	赤漆椀。底径6cm。	31
3	Ⅱ SE53	箸	長さ12cm以上。最大径0.6cm。	34
4	Ⅱ SE53	箸	長さ15.8cm以上。最大径0.8cm。	35
5	Ⅱ SE50埋土	曲物	残存半約70%。口縁部は二重になっており、金属で止めてある。	32
6	Ⅱ SE50埋土	不 明	用途不明。長さ16.6cm。幅3.7cm。厚さ0.2cm。しゃもじ形。基部に抉りあり。	33
7	Ⅱ SE50埋土	杓の柄	長さ53.4cm。幅1.6cm。厚さ0.9cm。先端一部欠。先端部に器を固定するための穴あり。	36

第67図　木製品

る。口縁部は二重になっており、木と木の繋目には薄手の金属が使われている。7は柄杓の柄である。先端が若干欠けているが、ほぼ完形に近い。先端には、容器を止めたと思われる穴がある。これらのほか、6のようなしゃもじ形の薄い木製品が出土しているが用途は不明である。

⑧動物遺体

本遺跡より出土した動物遺体は、整地層や井戸跡、溝跡、土壙などから検出された。貝類と魚・鳥・獣類がある。これらは、本来「ゴミ」として一括廃棄されたものと思われるが、各遺構ともまとまって出土したものはなく、全体の種類や出土量も少ない。また、関

節部も残らないような断片的な資料が多いことや焼けて白色灰化状態にあるものも少なくないことなどからみて、これらの多くは「ゴミ」として廃棄されたものの二次的な混入と考えられる。以下、同定結果を第12表および第13表に示すが、今回得られた動物遺体は発掘時に任意に採集されたものであり、当時の利用状況を知る上においてはかなり部分的なものと思われる。

ａ．同定結果

今回同定した動物遺体は、第12表に示す腹足綱2種類、二枚貝綱5種類、硬骨魚綱5種類、鳥綱2種類、哺乳綱3種類である。

第12表　出土動物種名表

Ⅰ軟体動物門　Phylum Mollusca
- ①腹足綱　Class Gastropoda
  - アワビ類　Haliotis sp. indent.
  - アカニシ　*Rapana venosa*
- ②二枚貝綱　Class Pelecypoda
  - イシガイ科　Unionidae gen. et sp. indent.
  - マガキ　*Crassotrea gigas*
  - マシジミ　*Corbicula leana*
  - アサリ　*Ruditapes philippinarum*
  - ハマグリ　*Meretrix lusoria*

Ⅱ脊椎動物門　Phylum vertebrata
- ①硬骨魚綱　Class Osteichthyes
  - ボラ　*Mugil cephalus*
  - タラ科　Gadidae gen. et sp. indent.
  - タイ科　Sparidae gen. et sp. indent.
  - カツオ　*Euthynnus pelamis*
  - ヒラメ　*Paralichthys olivaceas*
- ②鳥綱　Class Aves
  - キジ科　Phasianidae gen. et sp. indent.
  - ガンカモ類　Anatidae sp. indent.
- ③哺乳綱　Class Mammalia
  - イヌ　*Canis famirialis*
  - イノシシ　*Sus scrofa*
  - ニホンジカ　*Cervus nippon*

ｂ．魚貝類

貝類は鹹水産5種(アワビ、アカニシ、マガキ、アサリ、ハマグリ)、汽水産1種(マシジミ)、淡水産1種(イシガイ科)があり、種類・量とも鹹水産のものが多い。全体量は少ないが、アカニシ・マガキが目立つ。また、1点のみの出土であるが、ハマグリは殻高が6.5㎝以上の大型の固体である。

魚類はいずれも鹹水産のもので、貝類と同様、近世の遺跡から出土する食用種としてはごく一般的なものである。

ｃ．鳥類

キジ科とガンカモ類を検出した。ガンカモ類には、大きさがマガンクラスのもの（ガン

第13表　動物遺体出土量

区	遺構	貝類	魚類	鳥類	哺乳類
Ⅱ	整地Ⅰ・Ⅱ	アカニシ 7 ハマグリ L1 アワビ　1	ボラ 尾椎1	ガンカモ類（大）上腕骨R2（遠），鎖骨1 ガンカモ類（小）上腕骨R1（中），尺骨R1（近） 種不明　尺骨L1(中)，右大腿骨R1，腓骨R1(近)	イノシシ　腓骨L1(中)、下顎第3後臼歯L1 ニホンジカ　腰椎1(幼)，肩甲骨R1(幼)，腓骨L1(中)，中手骨L1，角製品1 種不明　骨製品1
区	盛　土	アカニシ 1		種不明 橈骨R1(近)	ニホンジカ 角製品1
	井戸跡SE54	マガキ　L1，R3 マシジミ R1 イシガイ科破片	カツオ 尾椎1	ガンカモ類(大) 尺骨L1(近)，中手骨L1，腓骨L1(近) キジ科　上腕骨R1(近) 種不明　尺骨L1，R1	イヌ　腓骨L1(遠) ニホンジカ 腓骨R1(幼・近)、中足骨1(LR不明，加工痕あり)
	溝跡SD60		ｻﾒ科 尾椎棘1		
	溝跡SD61		種不明 尾椎1		
	土壙SK58				イヌ　上腕骨R1(遠)
	その他の遺構	アカニシ 2		種不明 上腕骨R1(遠)	
	不 明・カクラン	アカニシ 1 アサリ　L2			
Ⅳ	整地Ⅰ・Ⅱ		タラ科 腹椎1 尾椎1		
区	竪穴状遺構SX103	種不明破片			
	竪穴状遺構SX104		ヒラメ 尾椎1		
	不 明		タラ科 歯骨R1		

※（幼）は幼獣を示し、これ以外のものは成獣を示す。
※（近）は近位部片、（中）は中間部片、（遠）は遠位部片を示し、近・中・遠のないものはほぼ完存のものを示す。

カモ類(大)）とマガモ・カルガモクラスのもの（ガンカモ(小)）の大小2種類が認められた。これらの鳥類は、冬を中心とした季節に、周辺の湖沼で捕獲されたものであろう。

d. 獣類

イヌ・イノシシ・ニホンジカの3種がある。いずれも各遺構から数点ずつが検出されたのみであり、これら獣類の利用状況については明らかではないが、ニホンジカについては幼個体が目立っている。また、鹿角を加工したもの(写真図版36－34・35)や解体痕とは異なる金属器による加工痕が顕著に認められる中足骨片(写真図版36－33)も出土しており、食用以外の利用法も窺い知ることができる。整地層からは、種・部位とも不明であるが、一端を斜めに切断・整形し、孔を穿った骨製品(写真図版36－32)が出土している。残存長5.4cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmである。

⑨植物遺体

池跡・井戸跡などから植物遺体が出土したが、散漫な出土状況であり調査ではごく一部の種子類(クルミ・ウメほか)の採取にとどまっているため、本報告では提示するに至らなかった。

第Ⅵ章　考察

これまで6次にわたる発掘調査で検出され遺構と遺物について述べてきたが、ここでは上野館に関わる遺構とその変遷・性格、出土遺物について若干の考察を加え、地方上級武士の「居館」の姿の一端を捉えてみたい。

1．記録上の上野館と館内建物群

前項でも述べたように、松山の地を拝領した茂庭氏は、当初中世以来の千石城に入るが、初代良元の時(寛永8年：1631)に下屋敷として上野館を築き、二代定元が明暦三年(1657)に千石城からここに居を移し、以後慕末まで上野館を正式な居館としている(茂庭ほか1980)。

下屋敷時代については記録がほとんどなく具体的にその様相を知ることができない。ただ、良元が隠居して上野館に移り住む際(慶安4年：1651)には、新たな普請をおこない館内の建物群を整備したことが伝えられている。正式な居館となった明暦三年以降の館内の作事については、いくつかの記録が「茂庭家記録」に残されている。この中で館内建物の大きな変化を示す記録には元禄元年(1688)のものがあり、この時には「大書院・御座ノ間」などの普請をおこない、館内建物を一新したようである。また、元文初年(1736)頃には仙台藩主(伊達家)来訪の際に使用する「御成書院」を既に設けていたことが記録からわかる。これ以降幕末までの間に何度かの増改築が行われたらしいが、大きな変化を窺わせる記録は見あたらず、この時点で館内建物群の配置・構造はおおむね確立されたものと考えられる。こうした記録をもとに館の構築および館内建物の増改築の変遷をまとめてみると、①寛永8年(1631)：下屋敷の造営、②慶安4年(1651)：下屋敷の整備、③明暦3年(1657)：正式な居館とする際の館の整備(？)、④元禄元年(1688)－元文元年(1736)：大書院・御座ノ間・御成書院の増築、⑤明治元年(1868)：館の廃絶、ということになろう。

ところで、上野館全体の建物の配置・規模を具体的に知る手がかりとなる資料には、寛永年間・天和元年などの数葉の絵図(第3図、写真図版1)と、建物群を記した年代不詳の絵図(奥の区域が欠けている)、そして第4図に示した建物配置図がある。これらの中で館内建物群について詳しく見ることができるのは年代不詳(幕末頃か)の絵図と第4図の絵図だけである。つまり、残されている絵図からは慕末頃の館内の様子を知ることができるのみである。この平面図をみると、「表門」を入って右手に広間・書院などの「表」の建物群、その裏手に御成書院・御寝所、中央付近に勘定所・地行方室などの建物群、そして左手奥に茶ノ間・御座ノ間などの「奥」関係の建物群が建ち並んでいるのがわかる。前にも述べたように、このような建物配置は元禄～元文年間頃には既に整っていたものと推定

される。

2．発見された遺構とその変遷・年代

約8000㎡の調査区は、第4図でいえば表門を入った左手の「表」の区域にほぼ相当し、当初より遺構の密度は非常に高いことが予想されていた。調査の結果、第7図・付図に示したように数多くの遺構が密集して検出され、特に中央のⅡ区はおびただしい数の遺構数であることがわかった。第4～8表に検出された遺構をまとめたが、礎石建物跡(4)、掘立柱建物跡(22＜)、柱穴列(32＜)、池跡(4)、井戸跡(10)、土壙(46＜)、竪穴状遺構(2)、溝跡(26＜)をはじめ、石列・石組遺構(5＜)、粘土貼り遺構(2)、通路・道路跡(3)、土墨跡(1)、カマド跡(1)など多様である。これらの遺構は上野館の構築から廃絶まで、すなわち17世紀中ごろから19世紀後半頃までの年代に該当するものと考えられる。

まず、これらの遺構群の変遷・年代について考えてみたい。はじめにそれぞれの調査区の中での遺構の変遷・年代を考えてみる。

Ⅰ区：ほとんど整地層は残っておらず、地山面での確認である。遺構の新旧関係は第68図に示したようになる。遺構は部分的な確認のため、その変遷・年代については明確でないが、この調査区域は第4図の絵図でみるとちょうど表門付近に当たっており、ＳＢ101礎石建物跡を幕末頃の表門と考えることも可能である。そう捉えれば、絵図では表門付近には建物が見あたらないことから、掘立柱建物跡や溝跡は絵図以前の遺構群と考えることもできる。

Ⅱ区：すでに述べたように、近世の整地層は後世の削平のためにほとんどあるいは全く残っていない区域が多かったが、このⅡ区西側では比較的厚く残存しており(第15図)、第Ⅳ章層序で示した整地Ⅰ・Ⅱａはほぼ西側全体に、ⅡｂはＳＢ50の東と南側に分布している。遺構の一部は層位的に検出されており、以下のように3群に分けることができる。

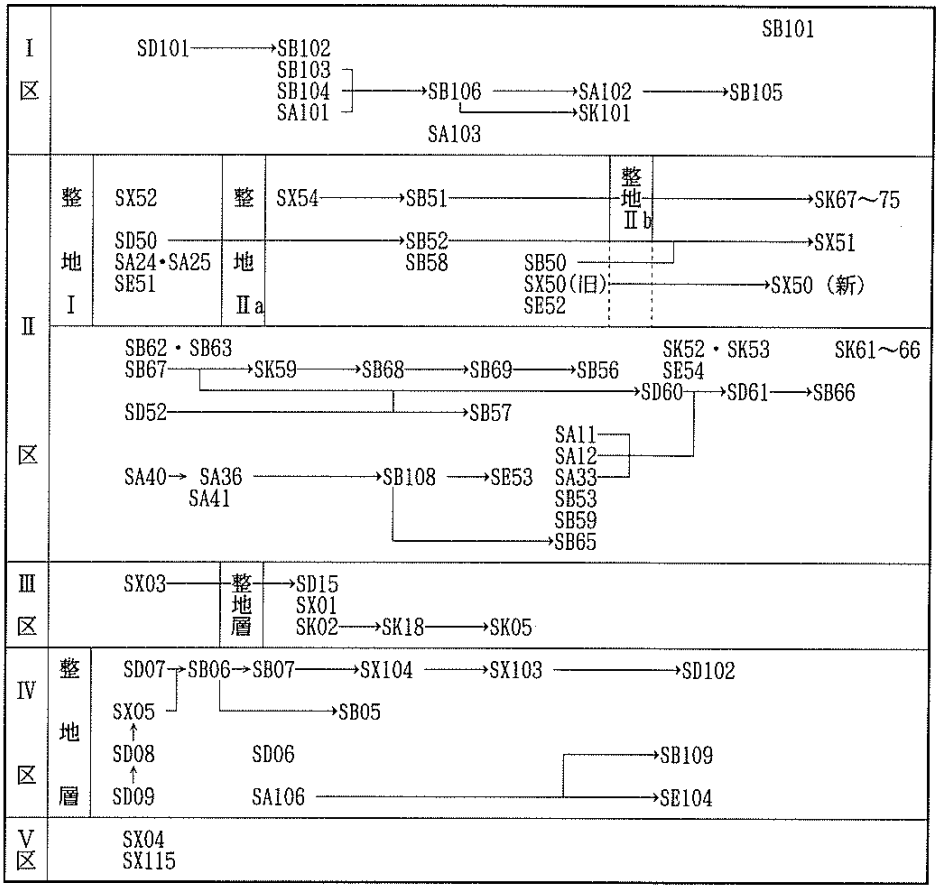
1群(整地Ⅰ)：ＳＸ52、ＳＤ50、ＳＡ24・25、ＳＥ51、ＳＢ59～61

2群(整地Ⅱａ)：ＳＢ51・52・58、ＳＸ50(旧)・54、ＳＥ52

3群(整地Ⅱｂ)：ＳＸ50(新)、ＳＸ51、ＳＫ67～75

これらは1群→2群→3群という変遷をへる。これら以外の遺構の中でＳＢ50礎石建物跡(整地Ⅱａ)は、整地Ⅱｂに直接覆われておらず2・3群の遺構ということになる。

次に年代についてみると、1群ではＳＤ50溝跡から第53図－33、ＳＥ51井戸跡から第51図－20の美濃の皿が出土しており、整地Ⅰ出土陶磁器も17世紀代である。このことから1群はほぼ17世紀代におさまるものと考えられる。この遺構群を覆う整地Ⅱａからは、第48図－69の猪口、第50図－8の京焼の碗、第50図－10の京焼風陶器碗など17世紀末から18世紀代の資料が多く出土しているので、2群は17世紀末～18世紀前ということになる。3群



第68図　主要遺構の新旧関係

については年代がはっきりしないが、ＳＸ51付近からややまとまって出土した瓦類(平・丸瓦が多い)をみると18世紀後半～19世紀と推定される。したがって、それぞれの年代は1群：17世紀、2群：17世紀末～18世紀後半、3群：18世紀後半～19世紀とまとめることができる。

Ⅱ区東側遺構群は複雑に重複しており、また整地層の識別も困難で、西側のように遺構と整地層の関係を明確に捉えることはできなかった。そこで、遺構の確認面・切り合い関係・方向などを手がかりにして以下の4群に分けた。

1群：主に地山・整地Ⅰ検出。建物・柱列は南北基線に対し3°～4°東へ振れる。

ＳＢ62・63・67、ＳＡ36・40・41、ＳＤ52

2群：主に整地Ⅰ・Ⅱ検出。建物・柱列は南北基線に対し2°～3°東へ振れる。

ＳＢ57・68・69・108、ＳＫ59

3群：主に整地Ⅰ・Ⅱ検出。建物・柱列は南北基線に対し2°～5°西へ振れる。

ＳＢ53・56・59・65、ＳＡ11・12・33

4群：主に整地Ⅱ検出。建物・柱列は南北基線に対し2°～3°東へ振れる。

ＳＢ66、ＳＤ60・61、ＳＥ54、ＳＫ52・53（ＳＫ61～66）

これらの遺構は1群→2群→3群→4群と変遷したものと考えられる。1群については、ＳＢ62・67が最も古い段階の遺構であり、ＳＢ67を切るＳＫ59から新しい年代の遺物はなく、第46図―54のような17世紀中頃の型打色絵輪花皿が出土しているので、1群遺構は17世紀代に帰属するものと推定される。また、4群についてはＳＤ60・61から19世紀代の資料がまとまって出土しており、概ねこの年代と考えられる。2群・3群はその間の18世紀代と推定されるが、2群については後述するⅣ区建物群との比較から17世紀に遡る可能性もある。西側遺構群との対応を考えれば、西側1群＝東側1群、西側2群＝東側2・3、西側3群＝東側4群の関係がほぼ得られる。

Ⅲ区：整地層は比較的残っており(第31図)、ＳＸ01・02池跡、ＳＸ03通路状遺構、ＳＤ15溝跡、ＳＫ02～18土壙などの遺構が分布する。遺構は整地層を介在して発見され、ＳＸ03→整地層→ＳＸ01、ＳＤ15、ＳＸ02、ＳＫ02・18・05という変遷が成り立つ。このことから、1群：ＳＸ03、2群：ＳＸ01、ＳＤ15、ＳＫ02・05・18とまとめることができる。年代についてみると、ＳＸ03は確実にともなう遺物が出土していないため不明である。ＳＸ01は下層から17世紀末～18世紀前半(第46図―55,第48図―62)、上層から18世紀～19世紀中ごろまでの資料が出土している。従って、ＳＸ01の構築年代は17世紀末～18世紀前半と推定することができる。ＳＫ02・05・18においても17世紀末～18世紀前半の年代のものが出土していることから、1群：17世紀、2群：17世紀末―18世紀前半(～19世紀)と推定できる。

Ⅳ区：この区では若干の整地層が残存しているものの遺構との関係は不明確である。遺構は第68図のような新旧関係がある。このなかでＳＸ104竪穴状遺構はＳＢ07を切っていることから、ＳＢ07はＳＸ104が作られたときには既に廃絶しており、ＳＢ07より古いＳＢ06もこの時には既になくなっていたと考えてよい。このＳＸ104からは17世紀末～18世紀前半頃の資料が比較的まとまって出土しているので、いまあげた建物群は17世紀末～18世紀前半には廃絶されていたものと推定される。このＳＸ104より確実に新しい遺構は、17世紀末～19世紀前半の資料が出土しているＳＸ103、ＳＤ102などわずかである。これらから、遺構群の変化をＳＸ104の構築にみて、1群(17世紀)：ＳＤ09・08、ＳＸ05、ＳＤ07、ＳＢ06・05、2群(17世紀末～19世紀)：ＳＸ104、ＳＸ103、ＳＤ102とまとめることができる。

これらの遺構の他には、ＳＢ05、ＳＡ105、ＳＢ109、ＳＥ101・102・104・105などがあるが、年代がわかるのはＳＢ109で、2群に含められる。ＳＢ05はⅡ区ＳＢ108と規模・構造・方向

などが類似しており、これも2群に位置づけられるだろう。
Ⅴ区：ＳＸ04道路跡と側溝、ＳＸ115土塁跡、井戸跡などである。ＳＸ04は側溝の改修は認められたが道路自体の造り替えは確認されていない。遺物はすくなく年代がはっきりしないが、側溝からは17世紀代の陶磁器も若干出土しているので、絵図にみられるように館の造営当初から廃絶までの時期と推定される。ＳＸ115土塁跡も同様であろう。ＳＥ103はＳＸ04側溝を切っているが年代は不明である。
Ⅵ・Ⅶ区：調査面積が狭く、検出された溝跡については規模・時期とも不明である。
　さて、これまで各区の遺構の変遷と年代をみてきたが、全体の変遷を考えてみた場合、大まかには2時期(Ａ期：17世紀、Ｂ期：17世紀末～19世紀)に区分できることがわかる。すなわち、

Ａ期
　　Ⅱ区西側1群　ＳＸ52，ＳＤ50，ＳＡ24・25，ＳＥ51，ＳＢ59－61
　　Ⅱ区東側1群　ＳＢ62・63・67，ＳＡ36・40・41，ＳＤ52
　　Ⅲ区1群　ＳＸ03
　　Ⅳ区1群　ＳＤ07・08・09，ＳＸ05，ＳＢ06・07
　　Ⅴ区　　ＳＸ04，ＳＸ115

Ｂ期
　　Ⅱ区西側2・3群　ＳＢ50－52・58，ＳＸ50・54，ＳＥ52，[ＳＸ51，ＳＫ67－75]
　　Ⅱ区東側2～4群　ＳＢ57・68・69・108，ＳＫ59，ＳＢ53・56・59・65
　　ＳＡ11・12・33，ＳＢ66，ＳＤ60・61，ＳＥ54，ＳＫ52・53
　　Ⅲ区2群　ＳＸ01，ＳＤ15，ＳＫ02・05・18
　　Ⅳ区3群　ＳＢ05・ＳＸ103・104，ＳＤ102
　　Ⅴ区　　ＳＸ04，ＳＸ115

　いうまでもなくＡ期～Ｂ期への変遷は、さきに述べた元禄～元文年間にかけての「大書院・御成書院」などの増築にともなう館の整備と対応するものである。Ａ期の遺構群は下屋敷時代から元禄－元文頃までの遺構群であり、Ｂ期の遺構群はそれ以降の館の整備された時代の遺構群と考えられる。それぞれの時期の遺構群は、さらに細かい変遷を経ており、増改築がたびたびなされたことが窺われる。

3．遺構の性格

　次にこれらの遺構群の性格について考えてみたい。
　Ａ期の遺構
　　この時期の遺構は断片的に確認されているのみで、建物群にしても明確ではない。館

の外郭施設の道路と土塁の位置は少なくとも南辺については下屋敷当初から変化はなかったようである。西側で確認された石列や溝跡、通路跡のある区域は西側へ傾斜しており、南西に延びるＳＸ52石列は屋敷内の区画的な施設であったと思われる。この西側区域では建物跡は確認されていない。建物群はいずれもこれらより東へ寄った位置に建てられている。建物は時期的にみて下屋敷から元禄頃までの館の建物配置を示しているものと考えられるが、ＳＢ68は切り合い関係・柱穴埋土の特徴から最も古い段階の建物とみられ、下屋敷当時の建物の一部と推定される。建物についていえば、この時期では礎石建物跡の痕跡は明確には確認されていない。次の段階の整地の際に削平を受けてしまったのか、この時期は礎石式の建物は建てられなかったのか、いずれかは不明である。

Ｂ期の遺構

Ａ期の段階では西側区域は西側へ傾斜していたが、この傾斜地を平坦にするために行われたのが整地Ⅱａである。「御成書院・御寝所」などを西側に増築するためになされたものであろう。この区域で検出されたＳＢ50は、ほぼ全体が把握できた唯一の礎石建物である。4間×7間以上の南北棟のこの建物は、周囲に石列・石組を伴う、周囲からはやや独立した建物であり、右手のＳＸ50池に対しては一段高く、東側へ対してはやや低まった位置になる。第4図の絵図と比較すると、ちょうど御寝所の位置になり、建物の規模からみてもその可能性が高い。また、大書院・御成書院の増築に伴い造営されたのがＳＸ0Ｉ池跡と思われる。書院南側の庭園としての空間に池を造ったのであろう。

さて、全体の遺構の分布をみると中央付近(Ⅱ区)～東側(Ⅳ区)に建物群が密集し、南側(Ⅲ区～Ⅴ区)では池や土壙がみられる程度である。これを第4図幕末の絵図と重ね合わせるとＳＸ01とＳＸ50池跡は一致し、また、役所関係の建物や「広間・大書院」などが置かれた区域には建物群が重複して密集していることがわかる。元禄・元文年間の増築の段階で館の建物配置・構造がほぼ確立したと考えるなら、幕末の絵図にみられる配置は元禄・元文年間以降の館の姿を示していると言える。とするならば、中央付近の建物群はおおむね役所関係や広間・書院の建物に関わりを持つものと言えるだろう。この区域で発見された2棟の礎石建物ＳＢ65・66は残りが悪く全体の構造は不明ではあるが、ＳＢ66は江戸後期の陶磁器類を含むＳＤ60・61を切っており新しい段階の礎石建物である。絵図と対比すれば、ＳＢ65は大書院の東側、ＳＢ66は勘定所右手の出入り室付近に当たる。東側にあるＳＥ54も絵図の井戸に対応するものであろう。

ところで、この区域で検出されている建物はほとんどが掘立柱建物跡で、礎石建物は前に述べた2棟のみである。推測される遺構群の性格からいえば時期的にも掘立柱建物が主体とは考えにくい。戦後、削平を受けていることは明らかなので、この時に礎石建物跡の

大部分は失われてしまったと考えてよいと思われる。御成書院・大書院があるはずの位置から建物跡が検出されていないことや、広間があるはずのⅣ区付近でもこの時期の建物跡が検出されていないことは、礎石建物であった御成書院・大書院・広間などが広い区域に及んだ削平によってことごとく失われてしまったということを示唆している。削平されずに残っていた中央付近の掘立柱建物跡は、この時期の中でも比較的古い段階のものである。

Ⅰ区ではこの時期に帰属する遺構は明確ではない。しかし、この区域は絵図と対比すると表門が置かれた区域にほぼ相当するので、ＳＢ101礎石建物は位置からしてその表門の可能性がある。一方、掘立柱建物跡は、絵図では表門以外は建物がみられないことからＡ期の遺構に遡るかもしれない。ただし、ＳＢ101と柱筋を揃えるＳＢ103とＳＢ104掘立柱建物跡はＳＢ101と同時期の遺構の可能性もあろう。

以上のように、「表」の大半の区域の調査を通して遺構群のおおよその変遷や年代、一部についてはその性格についても把握することができたが、重要な点は言うまでもなく元禄から元文年間を境とする上野館の大きな変遷が捉えられ、館全体を理解する上での手がかりが得られたことである。しかし、さらに細部をつき詰めて論じることは難しいと言わざるを得ないだろう。建物の構造の複雑さは当時の絵図をみれば明らかであり、一方、調査段階での整地層の把握・遺構確認が困難を極め、さらに絵図に描かれているような幕末段階の建物群の大半が失われている可能性が高い状況では、遺構群の細部にわたる構造・変遷を復元し遺構群の性格を捉えていくには限界がある。地方上級武士の居館の姿は一部見えたものの残された課題は多いというのが結論である。

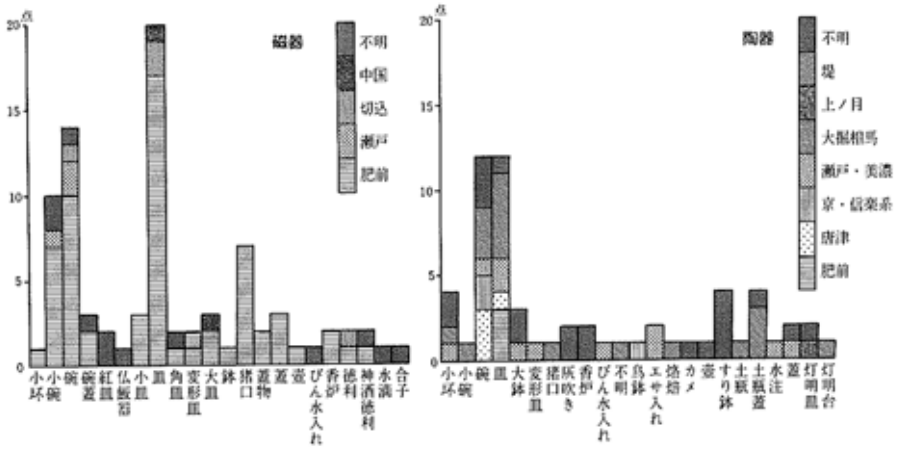
4．出土遺物

第9～11表に示したようにⅡ区整地層から多量に出土しているが、これは北東部を中心として分布していた上位層の炭化物を多く含む黒褐色土からのものが大半である。また、遺構ではＳＸ0Ⅰ、ＳＸ50池跡、ＳＸ103・104竪穴状遺構からの出土が多い。

遺物は、陶磁器類、瓦質・土師質土器(皿・焼塩壷・七厘ほか)、瓦類、石製品(硯・碁石・石臼ほか)、金属製品(銭貨・煙管・かんざしほか)、人形、動物遺体など、他の近世の消費地遺跡同様その種類が豊富である。

Ａ．陶磁器について

第9表では、陶磁器の破片数と（　）内に底部から口縁部まで残存し全体器形の復元できる資料数を示した。陶磁器類は器種によって破損の仕方が異なり、また、先にも述べたように上位層は削平を受けているため一部区域をのぞいて新しい段階の遺物は消失している可能性が大きいなど、その残存のあり方には差異があるので、この表の数値が上野館に



第69図　図示資料と産地

おいて使用された陶磁器類をどの程度反映するかは問題が残る。こうした点にあらかじめ留意して全般的な傾向をみてみる。なお、第69図には参考のために図示資料の産地を示した。

まず磁器においては、碗・皿類が圧倒的に多く、他に鉢、猪口、香炉、徳利、蓋物、びん水入れ、壷、水滴、合子など、種類はほぼ出そろっている。どの器種においても肥前製品が主体を占め、他に瀬戸の碗、山形県平清水窯の碗・皿、県内切込窯の碗・皿・徳利、中国製の皿などがわずかに含まれている。年代的には各時期にわたるが、18世紀以前が多く、17世紀代の肥前産の碗・皿類も比較的多い。これらはほとんどが日用雑器の類であるが、上級武士の居館らしく肥前の高級製品(第47図―60)や中国製の大皿(第47図―61)なども含まれている。

陶器をみるとやはり碗・皿類の割合が高く、他に鉢、すり鉢、土瓶、香炉、灰吹き、火いれ、灯明皿などがみられる。瀬戸・美濃、唐津、京・信楽系のほか、大堀相馬、上野目窯、堤窯など東北製品もわずかに含まれる。陶器の中には京焼風陶器(大橋1988ｂ)と称される一群(第51図-21～23)がみられる。いずれも皿類で、Ⅱ区整地、Ⅲ区ＳＫ05、Ⅳ区ＳＸ104などから出土している。全体的に淡黄色をおび、見込には鉄絵の山水文を描き、高台内に円刻と「森」・「柴」・「清水」・「木下弥」・「小松吉」などの押印を持つのが特徴である。今後県内でも類例は増えると思われるが、年代的に限られる資料でもあり注目される。

Ｂ．焼塩壷について

焼塩壷は20個体以上(全体器形復元できるのは6個体)出土しているが、「泉州麻生」とみられる刻印をもつ印篭形の1点を除けば他はすべて下半分に斜格子状のタタキ目を施したコップ形のものである。後者の特徴をみると、1.制作にロクロ使用し、底部に回転

糸切り痕を残す、2.コップ形で外面下半部に斜格子状のタタキ目がある、3.平均して器壁は1cm前後、底部は2.5〜4cmと厚い、4.刻印はない、などの点をあげることができる。これらは今のところ出土例が仙台城など宮城県内に限定されている。年代的には、上野館においては17世紀の整地Ⅰから出土しており、また仙台城でも17世紀までさかのぼることが明らかなので(仙台市教委1985)、こうした特徴をもつ焼塩壷は17世紀にはすでに生産・使用されていたものと考えられる。これらの資料は概報Ⅱ(宮城県教委1991)でも論じたように、焼塩壷を畿内から搬入する一方、仙台藩内でも江戸初期から既に焼塩壷を用いた塩生産を行い、藩内に供給していた証拠と言えるものであろう。

C．瓦について

軒平瓦や軒桟瓦には、数種の文様タイプがみられる。そのうち、仙台城にも類例が見られる、雪持笹を中央に配し両脇に二重線(凸線)の唐草文をもつ第59図－7の軒平瓦には「明和四」年(1767)の刻印がある。この種の文様タイプは桟瓦には認められないので平瓦に限定されると考えられる。さらにこの資料から、上野館においては少なくとも18世紀後半にはまだ桟瓦は用いられず平・丸瓦が使用されていたと考えるべきであろう。

ところで、既に述べたように「明和四」年刻印軒平瓦は2点出土している。1点は第59図－7であり、もう1点は瓦当部と左半部を欠損しているが、その形状から平瓦と推定されるものである。これは尻部のまったく同じ位置に「明和四」年の刻印がみられる。前者はＳＸ50池跡が改修された時に埋められたＳＥ52井戸跡の埋土から、後者はＳＸ50改修後の池の最下層出土から出土しており、いずれも池の改修の時に関わっている。おそらく、2点とも同時期に廃棄されたものであろう。

発掘調査の出土品ではないが、同様の「明和四」年刻印の1対のシャチ瓦が現在松山歴史資料館に保管されており、これらは幕末まで上野館の表門にのっていたものと伝えられている(茂庭ほか1980)。さきの平瓦やこの資料が「明和四」年の瓦の葺替えを示すのか、あるいは改築などの大きな普請を伴っていたことを示唆するものなのか明かではないが、「明和四」年刻印瓦の廃棄とほぼ同時に池の改修を行っているということは、この時には館の普請が比較的大規模に行われた可能性が強いとみてよいだろう。いずれにしてもこれらの刻印瓦は、瓦や館の変遷などを考える上で重要な手がかりを与えてくれる資料である。

5．まとめ

(1)1988年〜1992年度の6次にわたる発掘調査によって、上野館跡の「表」区域の約8割の面積を調査し、この区域の遺構群が概ね把握できた。検出された遺構には、礎石建物跡(4)、掘立柱建物跡(22＜)、柱穴列(32＜)、池跡(4)、井戸跡(10)、土壙(46＜)、竪穴状遺構(2)、溝跡(26＜)、通路・道路跡(3)、土塁跡(1)、粘土貼り遺構(2)、石刻・石

組遺構(5<)、カマド跡(1)などがある。なお、7世紀末〜8世紀初頭の竪穴住居跡が1軒検出されている。

(2)近世の遺構群は大きく2時期(Ａ・Ｂ)に分けることができる。A期の遺構群は下屋敷時代から元禄一元文年間の館の時代、Ｂ期の遺構群は「大書院・御成書院」などを増築したそれ以降の整備された館の時代に相当するものと推定される。

(3)検出された遺構群を唯一建物配置がわかる幕末の絵図と対比すると、表門＝ＳＢ101礎石建物跡、御寝所＝ＳＢ50礎石建物跡の可能性が強く、また、南辺道路＝ＳＸ04、南辺土塁＝ＳＸ115、南側の池＝ＳＸ01、中央西側の池＝ＳＸ50、中央の井戸＝ＳＥ54の対応関係が得られる。「大書院・御成書院」などは戦後の削平により失われてしまったものと考えられる。

(4)遺物は、Ⅱ区を中心として陶磁器類、土師質・瓦質土器(皿・焼塩壷・七厘ほか)、瓦類、石製品(硯・碁石・石臼ほか)、金属製品(銭貨・煙管・簪ほか)、人形、動物遺体など種類が豊富である。陶磁器は碗・皿類を中心に多種多様なものが出土している。肥前を主体に、唐津、瀬戸・美濃、京・信楽系、大掘相馬(福島)、平清水窯(山形)、そして宮城県内の切込窯、上野目窯、堤窯などの製品が見られる。タタキ目をもつ焼塩壷は今のところ県外に類例がなく、これらの資料は宮城県内産の可能性が強い。

(5)近世の地方上級武士の「居館」の大規模な調査は県内では初めてであり、全国的に見ても例が少ないと思われる。報告書作成にあたっては遺物の分析などが充分に行えず多くの課題を残してしまったが、「居館」の姿は多少なりともこれで明らかになったと考えている。

引用・参考文献

愛知県陶磁資料館　1984　『近世城館跡出土の陶磁』

江戸遺跡研究会　1990　『江戸の陶磁器』　江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨

1991ａ　『発掘された江戸時代』　江戸遺跡研究会第4回大会発表要旨

1991ｂ　『甦る江戸』新人物往来社

1992ａ　『考古学と江戸文化』　江戸遺跡研究会第5回大会発表要旨

1992ｂ　『江戸の食文化』　吉川弘文館

江戸陶磁土器研究グループ編　1992　『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』

大橋康二ほか　1988ａ　『有田町史　古窯編』　有田町史編纂委員会

1988ｂ　『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社

大竹憲二　1982　『近世山神窯跡の研究』　大熊町史編纂委員会

1989　『大掘・長井屋窯跡』　浪江町教育委員会

小川啓司　1974　『そば猪口絵柄辞典』　光芸出版

古泉　弘　1983　『江戸を掘る・近世考古学への招待』　柏書房

1985　「江戸の町の出土遺物」『季刊考古学第13号』　PP.51～55　雄山閣

1987　『江戸の考古学』

佐藤広史・伊藤　裕ほか　1990　『切込窯跡―近世磁器窯跡の調査―』　宮崎町文化財調査報告書第3集

佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』　叢文社

白金館址遺跡調査会　1988ａ　『白金館址遺跡Ⅰ』

1988ｂ　『白金館址遺跡Ⅱ』

新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』

鈴木公雄　1985　「東京都港区内の江戸時代遺跡」『季刊考古学第13号』　pp.17～24　雄山閣

芹沢　長介　1978　「切込焼の碗と皿」『東北考古学の諸問題』　pp.513～531

1987　『東北の近世陶磁』　東北磁陶磁文化館

芹沢　長介編　1978　『切込』　東北大学文学部考古学研究会

芹沢　長介ほか　1981　『日本やきもの集成Ⅰ　北海道・東北・関東』　平凡社

仙台市教育委員会　1985　『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第76集

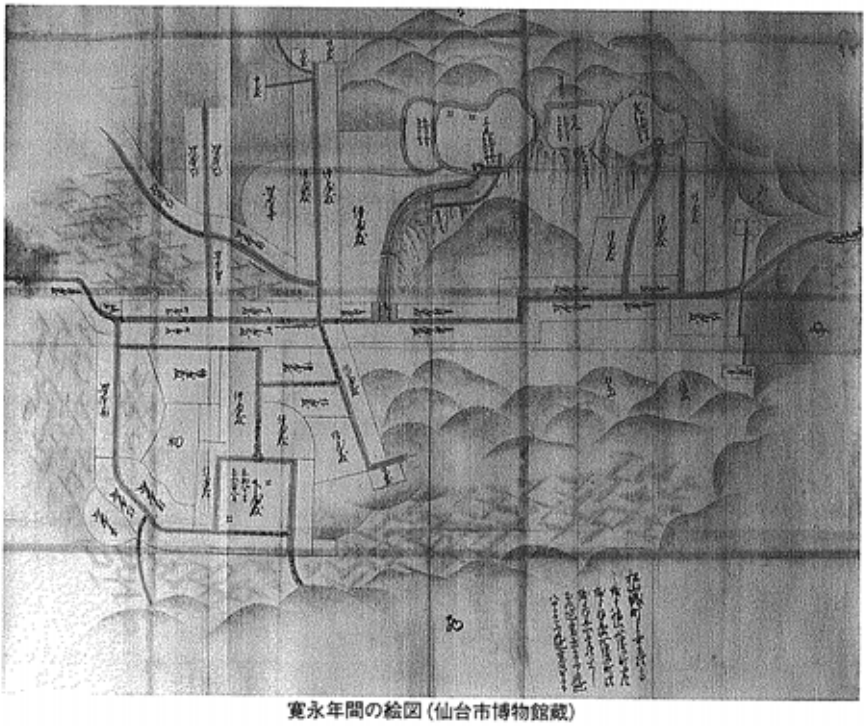
坪井利弘　1976　『日本の瓦屋根』　理工学社

1977　『図鑑瓦屋根』　理工学社

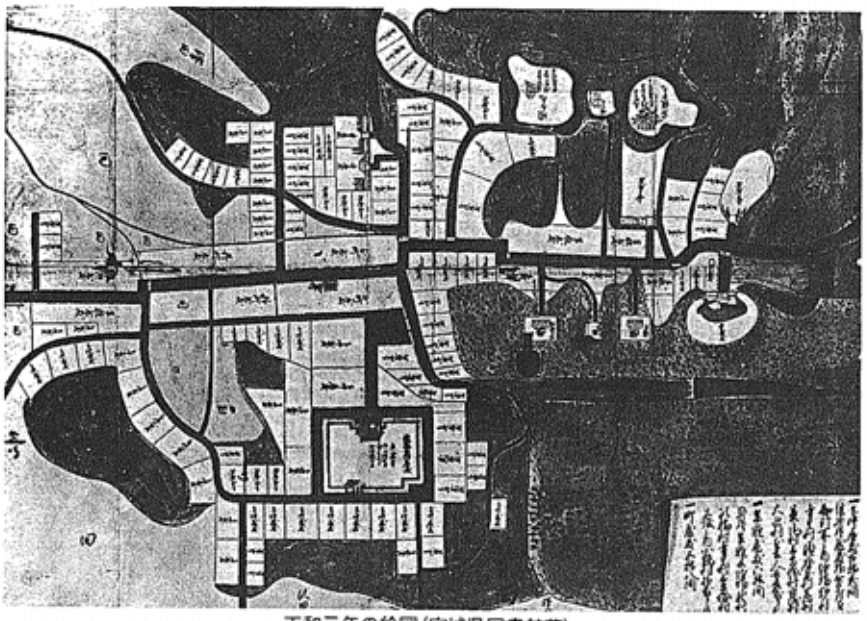
東京都新宿区教育委員会　1988　『三栄町遺跡』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報3』
1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報4・5』
都立学校遺跡調査会　1990　『白鷗』
西　和夫　1990　『図解　古建築入門』　彰国社
西田宏子・大橋康二　1988　「古伊万里」『別冊　太陽　日本のこころ63』　平凡社
藤本　強　1991　「江戸の考古学の可能性」『月刊　文化財　338号』　pp.4～9
藤村　泉　1991　『武士の住まい』　日本の美術1　至文堂
平井　聖　1980　『図説　日本住宅の歴史』　学芸出版社
宮城県教育委員会　1987　『硯沢・大沢窯跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第116集
1990ａ　『寂光寺ほか』　宮城県文化財調査報告書第135集
1990ｂ　『上野館』　宮城県文化財調査調査報告書第139集
1991　『上野館跡(Ⅱ)』　宮城県文化財調査報告書第143集
1992　『上野館跡(Ⅲ)』　宮城県文化財調査報告書第149集
茂庭邦元・鈴木重郎・宮本制一　1980　「第四章　近世の松山」『松山町史』　松山町史編纂委員会
森本伊知郎　1989　「江戸における陶磁器流通について」『考古学の世界』　pp.93～114
渡辺　誠　1985ａ　「物資の流れ―江戸の焼塩壷」『季刊行古学第13号』　pp.42～47　雄山閣
1985ｂ　「焼塩壷」　『講座・日本技術の社会史　第二巻塩業・漁業』　pp.312～329　日本評論社

写　真　図　版



寛永年間の絵図（仙台市博物館蔵）



天和元年の絵図（宮城県図書館蔵）

写真図版 1

上野館跡全景（北から）

中央の校舎と手前の空地が館跡の範囲
校舎の間の調査区は第６次調査区

Ⅱ区

第６次調査区

ＳＢ66、ＳＤ61付近
左手ではＳＥ54を調査中

写真図版２

Ⅰ区

1. ＳＢ101礎石建物跡
ＳＢ102掘立柱建物跡
ＳＤ101溝跡（北から）

Ⅰ区

2. ＳＢ103南桁中央の柱穴
3. ＳＢ105南桁東側の柱穴
4. ＳＢ107東側中央の柱穴
5. ＳＢ107西側南隅の柱穴

Ⅰ区

6. ＳＡ102・103柱穴列
（北から）

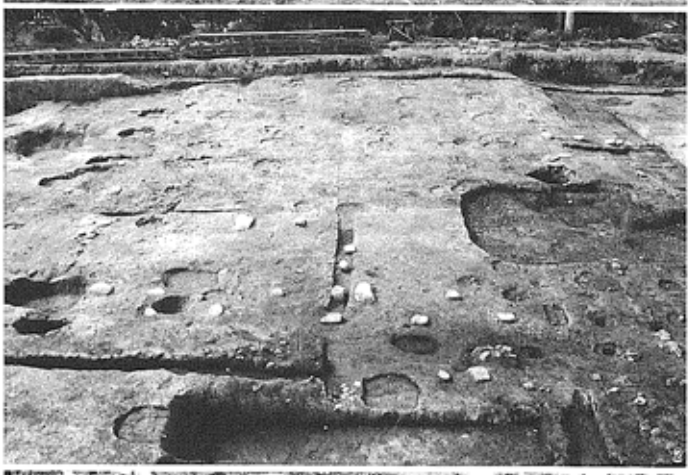
写真図版３

Ⅱ区

1.西壁断面

手前は最下層の遺構面

（整地Ⅰ）



Ⅱ区

2.ＳＢ50礎石建物跡

（東から）

Ⅱ区

3.ＳＢ52掘立柱建物跡

（南から）

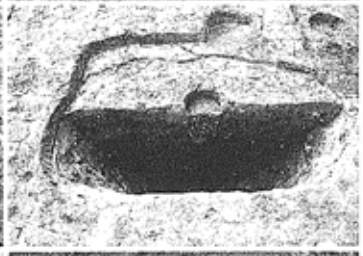
写真図版４

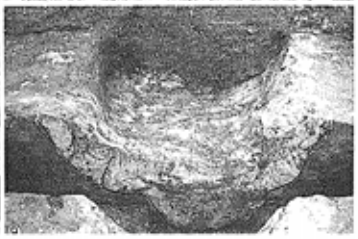
Ⅱ区

1. ＳＢ56掘立柱建物跡
（西から）

Ⅱ区

2. ＳＢ65根固め石
（東から）
3. ＳＢ52・ＳＡ30柱穴
断面（北から）
4. ＳＢ52柱穴断面
（東から）
5. ＳＢ53・ＳＡ14柱穴
断面（東から）
6. ＳＢ65柱穴断面
（西から）
7. ＳＢ57柱穴断面
（東から）
8. ＳＢ108柱穴断面
（南から）
9. ＳＸ54粘土貼り遺構
断面（東から）





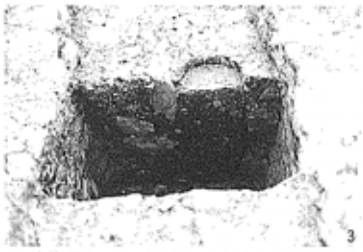
写真図版５

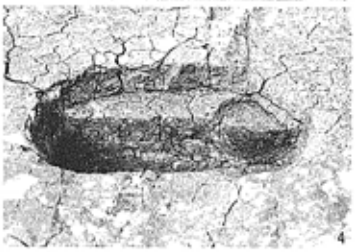
Ⅱ区

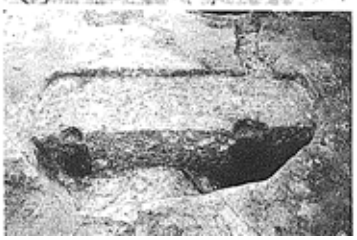
1. ＳＡ11～18柱穴列
布掘り状（北から）

Ⅱ区

2. ＳＥ53井戸跡、ＳＡ36・37・39・40柱穴列
（東から）







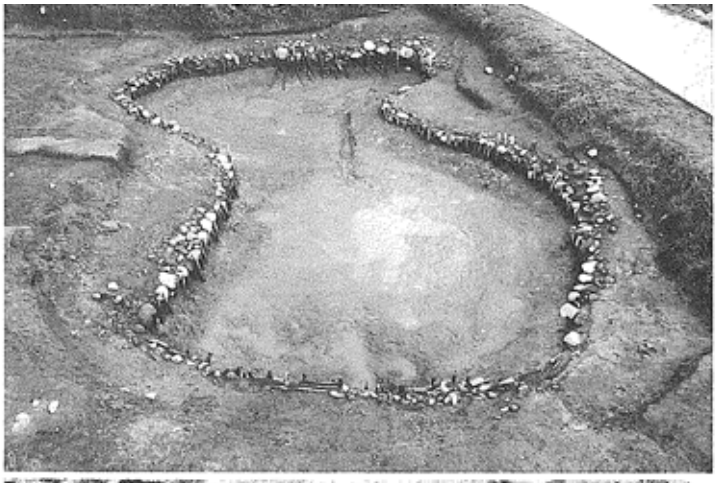
Ⅱ区

3. ＳＡ36柱穴断面
（東から）
4. ＳＡ39柱穴断面
（西から）
5. ＳＡ40柱穴断面
（南から）
6. ＳＡ41柱穴断面
（西から）

写真図版６

Ⅱ区

2. ＳＸ50池跡
改修後（東から）



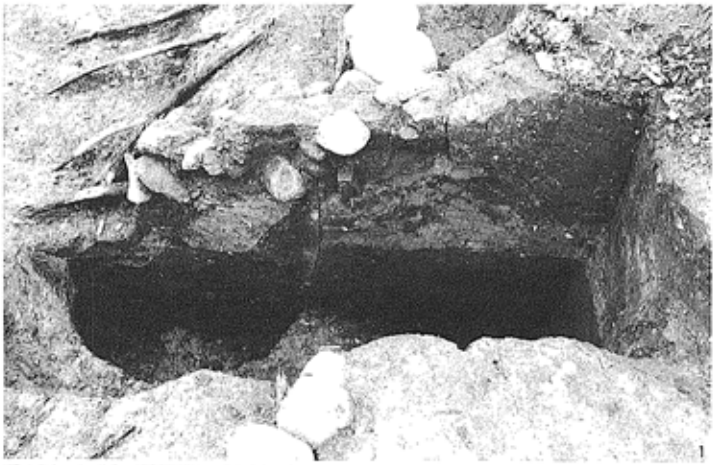
Ⅱ区

2. ＳＸ50池跡改修前の
東半部（北から）
散乱している杭・板材は改修前のもの。
右側の打ちこみ杭列は改修後のもの。

Ⅱ区

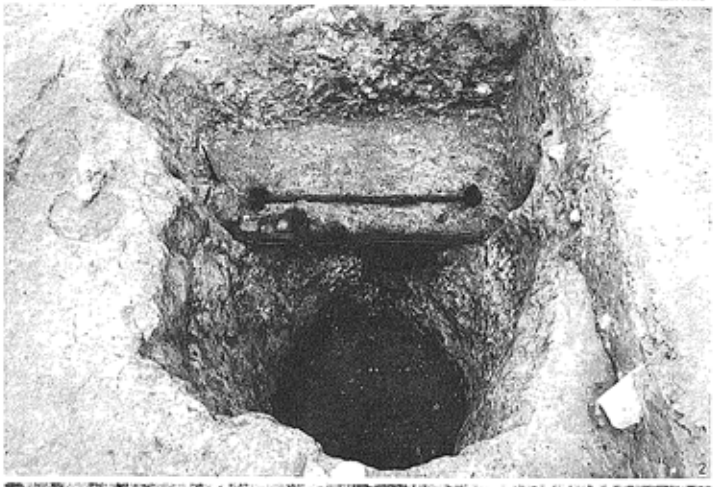
3. ＳＸ50池跡改修時接続
部分（南から）
手前の杭列が改修時のもの。

写真図版 7



Ⅱ区

1. ＳＸ50池跡・ＳＥ51井戸跡断面（南から）
ＳＥ51廃絶後にＳＸ50を構築



Ⅱ区

2. ＳＥ54井戸跡（南から）

Ⅱ区

3. ＳＥ54井戸跡木組部分（西から）
木組は土留めのためか？

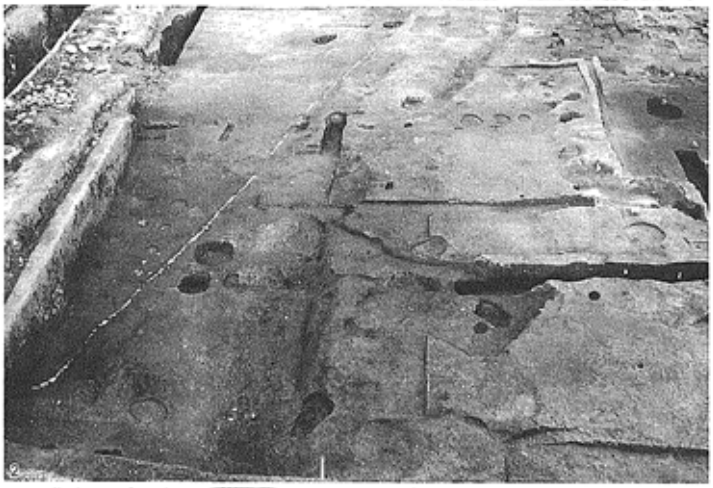
写真図版８

Ⅱ区

1. ＳＫ68～75土壙群
（東から）
土壙は一度に埋めもどされている。

Ⅱ区

2. ＳＸ52石列遺構
ＳＤ50溝跡（南から）



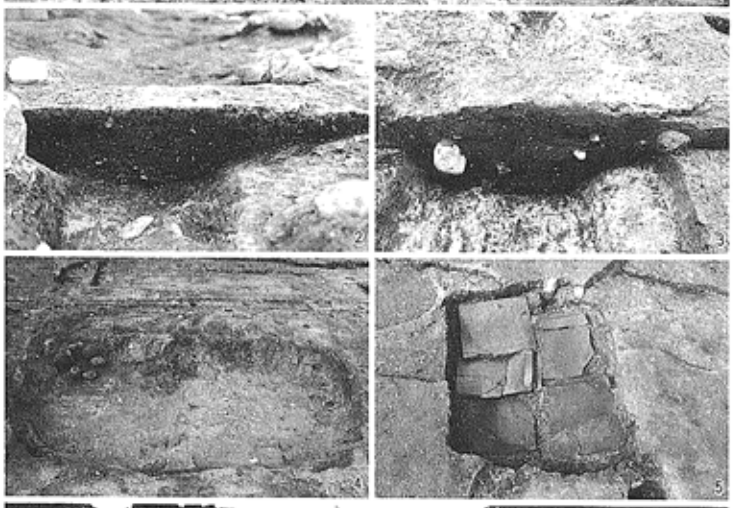
Ⅱ区

3. ＳＤ50溝跡石組部分
（北から）

写真図版９

Ⅱ区

1. SD60・61溝跡
（北から）



Ⅱ区

2. SD60・61断面
（北から）
3. SD60断面（西から）
4. SK52土壙（南から）
5. SK56土壙（東から）
SK56は底面に棟瓦が敷かれている。

Ⅱ区

6. SX01池跡（北から）

写真図版10

Ⅲ区

1. SK02・05・18土壙周辺
（東から）

Ⅲ区

2. SD15溝跡西側
（東から）

Ⅲ区

3. SD15断面
（西から）

Ⅲ区

4. SD15東側
（西から）

写真図版11

Ⅲ区

1. ＳＸ03通路状遺構
ＳＤ15溝跡（左側）
（西から）

Ⅳ区

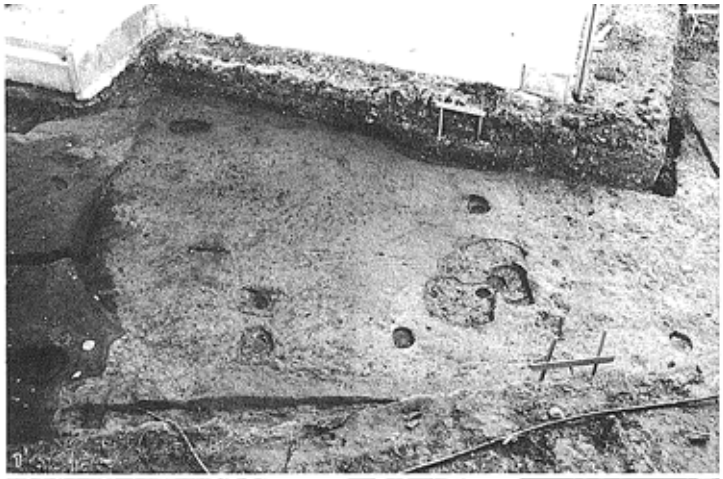
2. ＳＢ05～07掘立柱建物跡
ＳＤ08溝跡
ＳＸ05カマド跡ほか
（北から）
手前左がＳＸ05

Ⅳ区

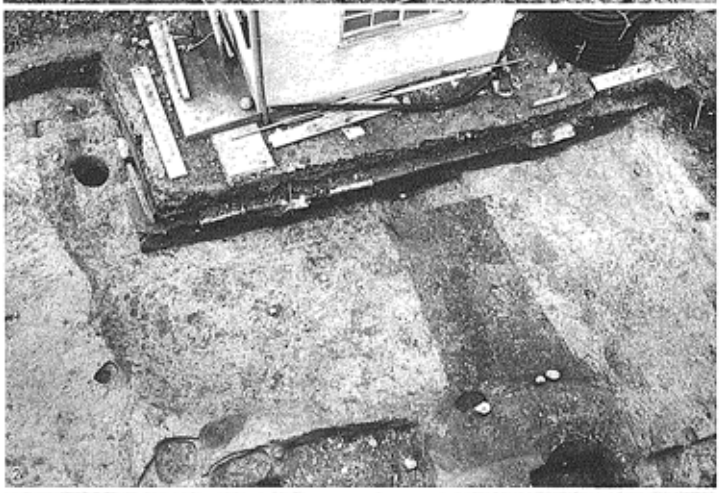
3. ＳＡ105柱穴列
ＳＢ109掘立柱建物跡
ＳＥ104井戸跡）
（南から）

写真図版12

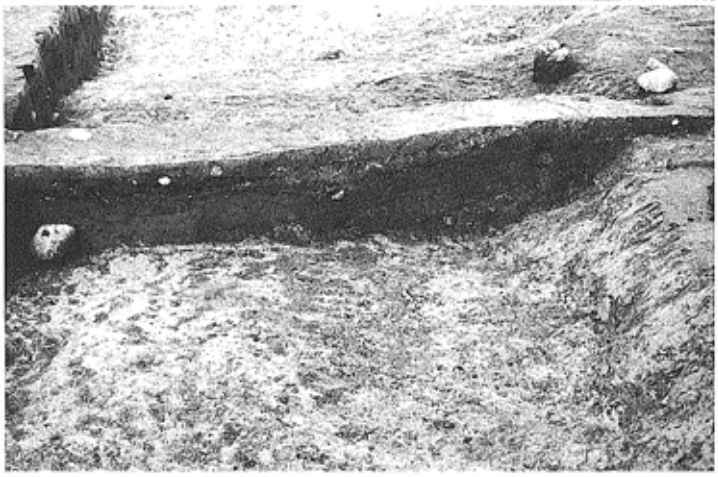
Ⅳ区
1. ＳＸ103竪穴状遺跡
（北から）



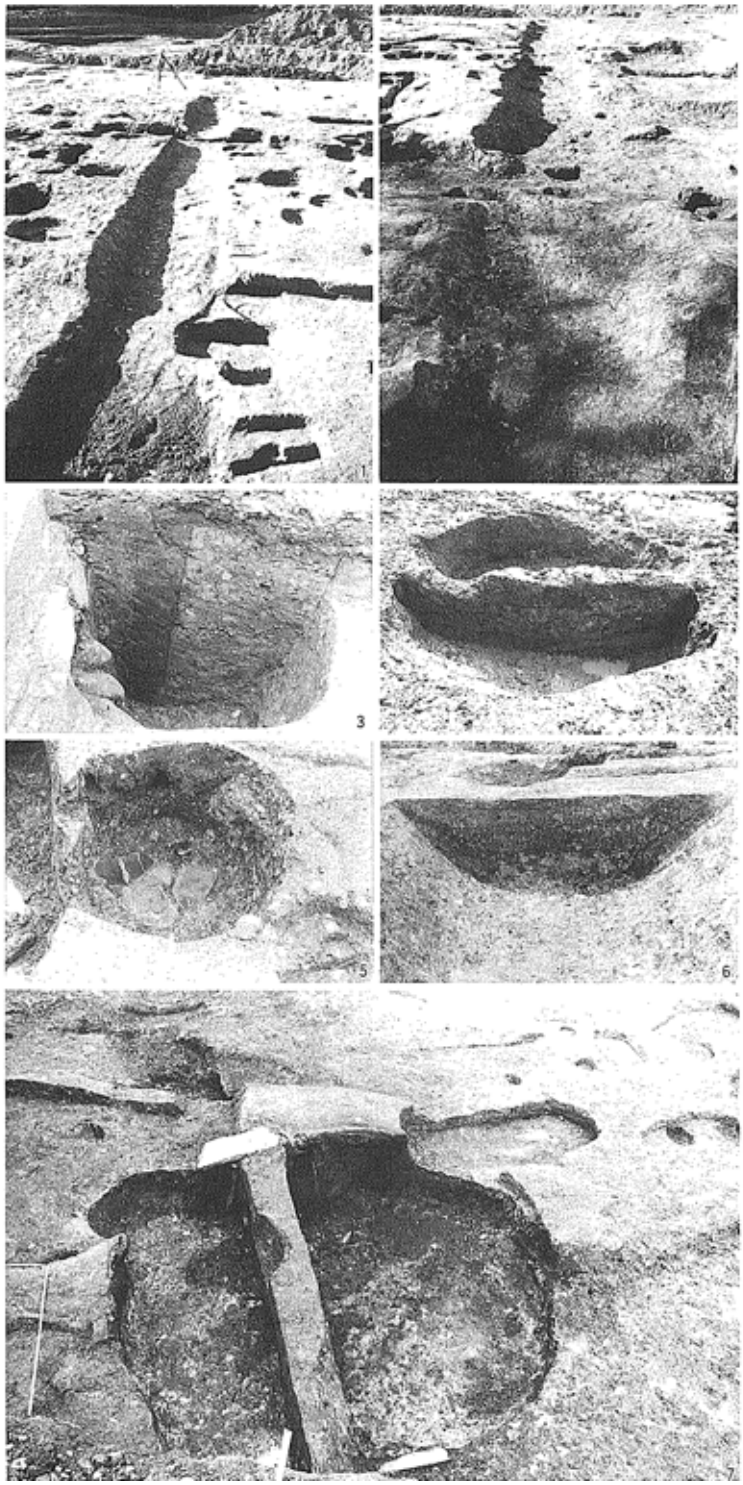
Ⅳ区
2. ＳＸ104竪穴状遺跡
（南から）



Ⅳ区
3. ＳＸ104断面（西から）



写真図版13



Ⅳ区

1. ＳＤ07溝跡（東から）
2. ＳＤ08・09溝跡（東から）

Ⅳ区

3. ＳＡ104柱穴断面（北から）
4. ＳＫ01土壙断面（北から）
5. ＳＫ102土壙（西から）
6. ＳＤ09断面（北から）

Ⅳ区

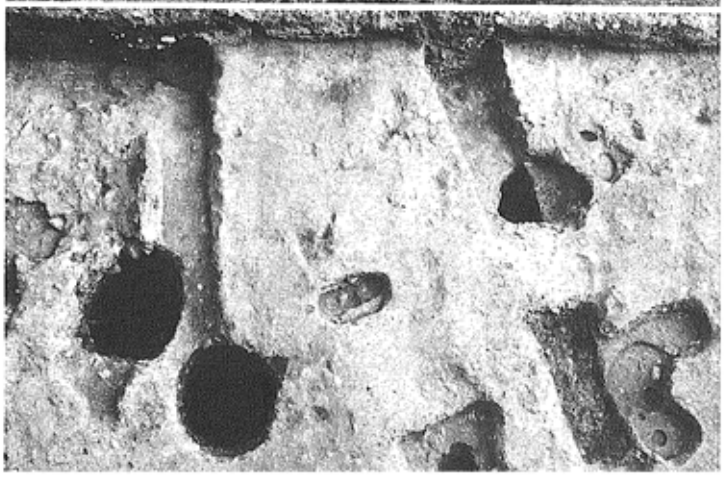
7. ＳＸ05カマド跡（北から）

写真図版14

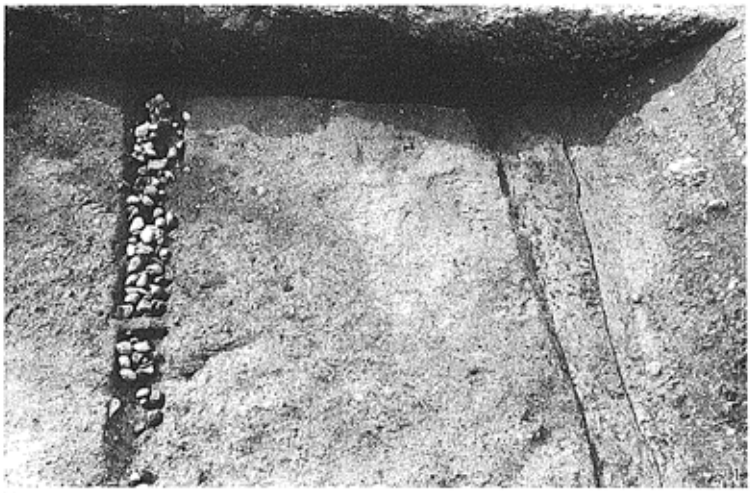
Ⅳ区
1. ＳＸ05カマド焚口
（西から）

Ⅳ区
2. ＳＸ05かき出し部断面
（東から）

Ⅳ区
3. ＳＥ101・102井戸跡
（西から）



写真図版15



V区

1. ＳＸ04道路跡（東から）

V区

2. ＳＸ04道路跡西側
（西から）

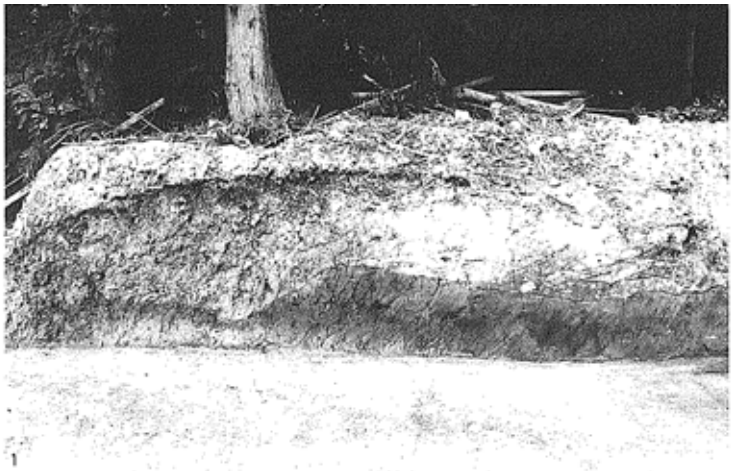
V区

3. ＳＥ103井戸跡
4. ＳＸ04東側断面
5. ＳＸ04北側断面
6. ＳＸ04西側断面

写真図版16

Ⅴ区

1. ＳＸ115土塁跡
（東から）



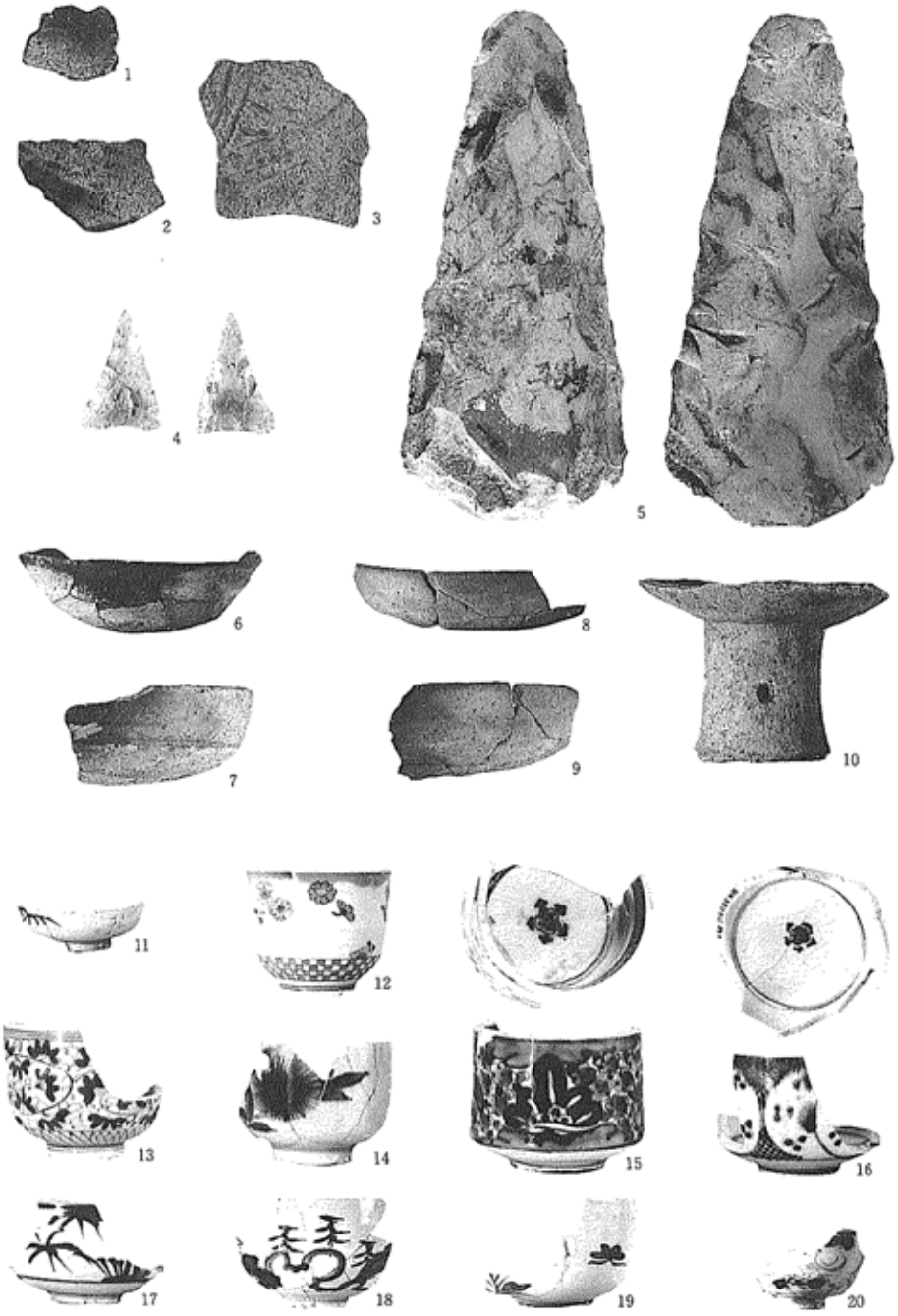
Ⅵ区

2. ＳＤ106溝跡（西から）

Ⅱ区

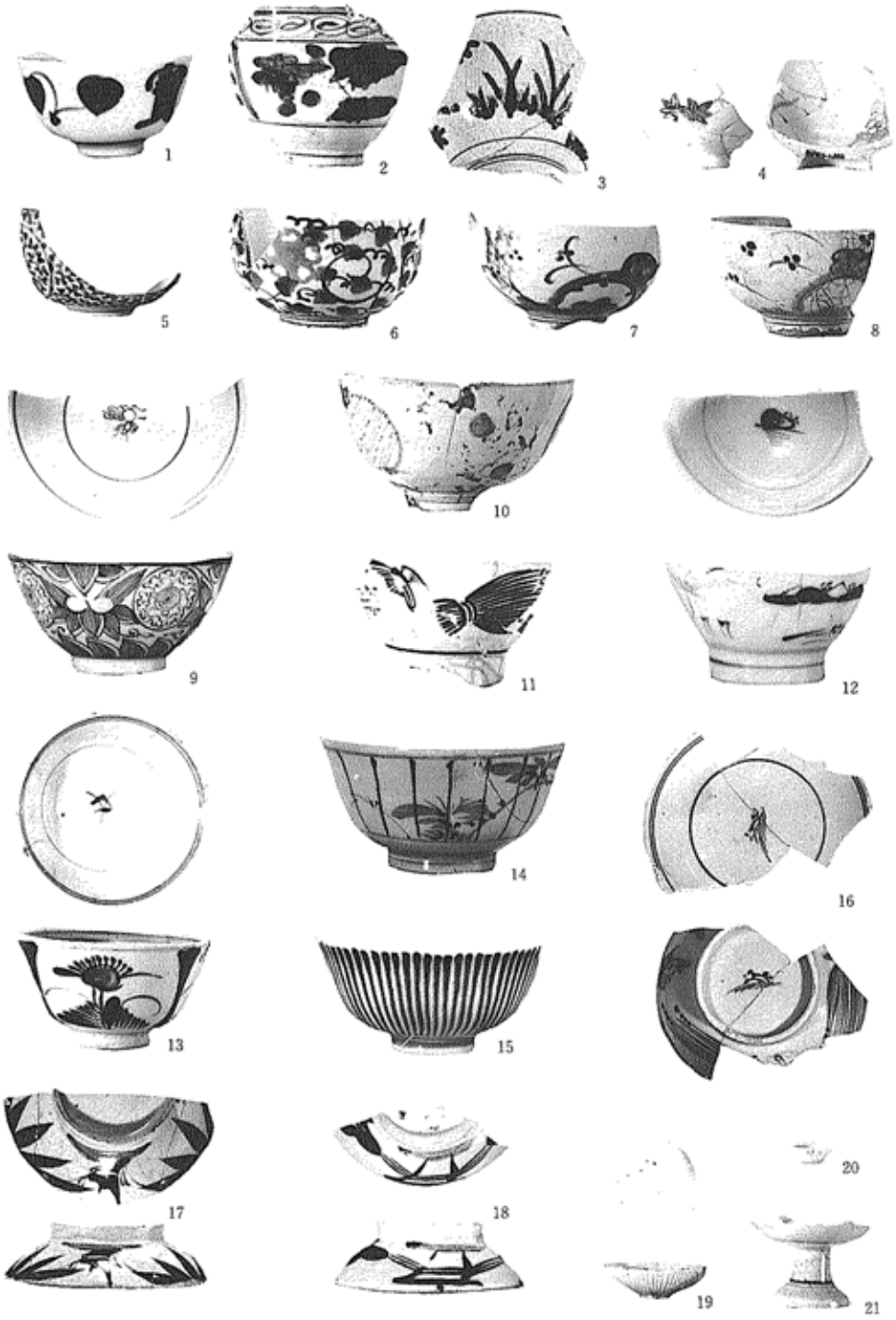
3. ＳＩ01竪穴住居跡
（東から）
周溝とカマドが痕跡的に残っている。

写真図版17



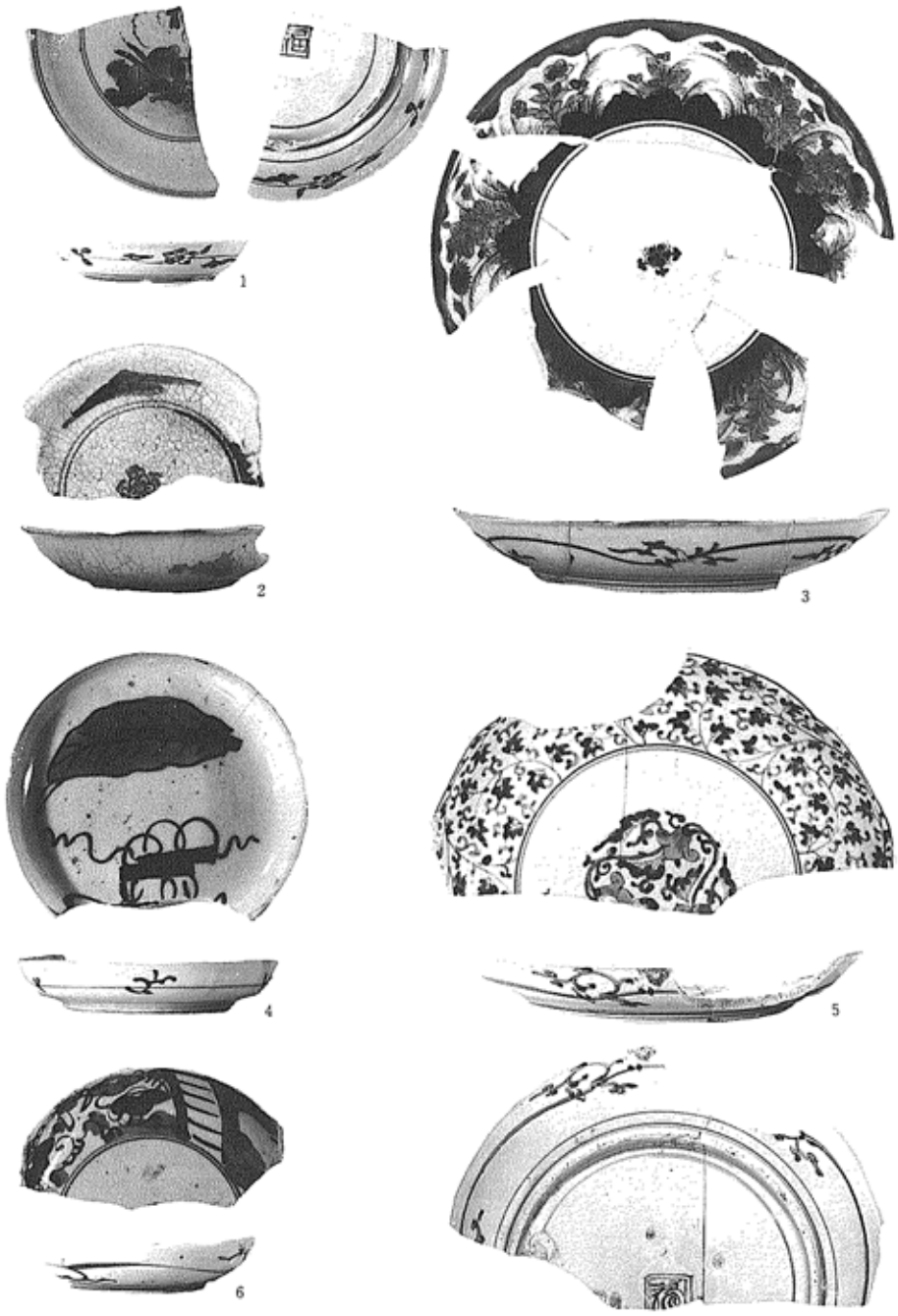
写真図版18　縄文土器・石器、土師器、磁器(1)

4・5のみS＝⅔
ほかは　S＝⅓

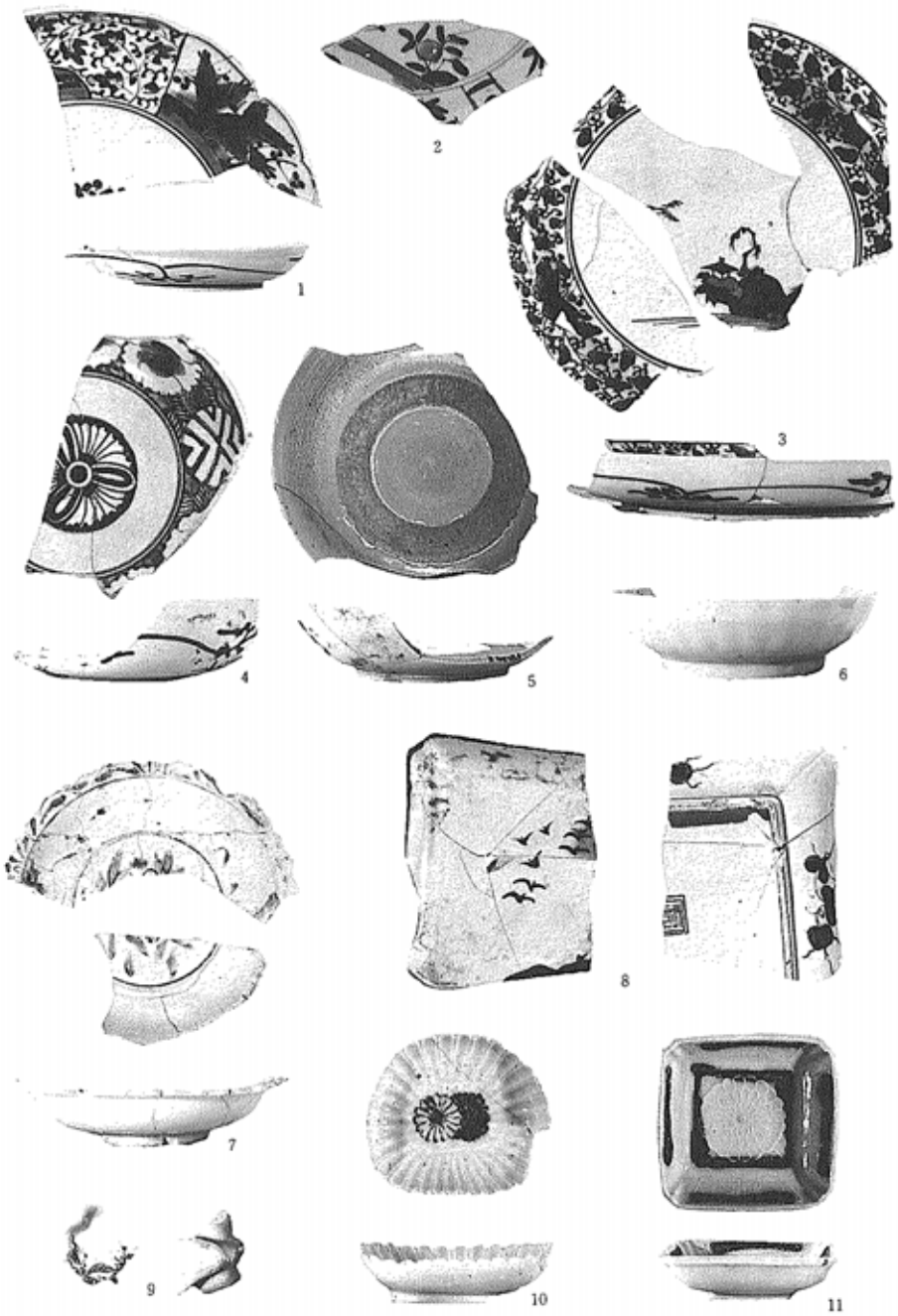


写真図版19　磁器(2)　S＝½

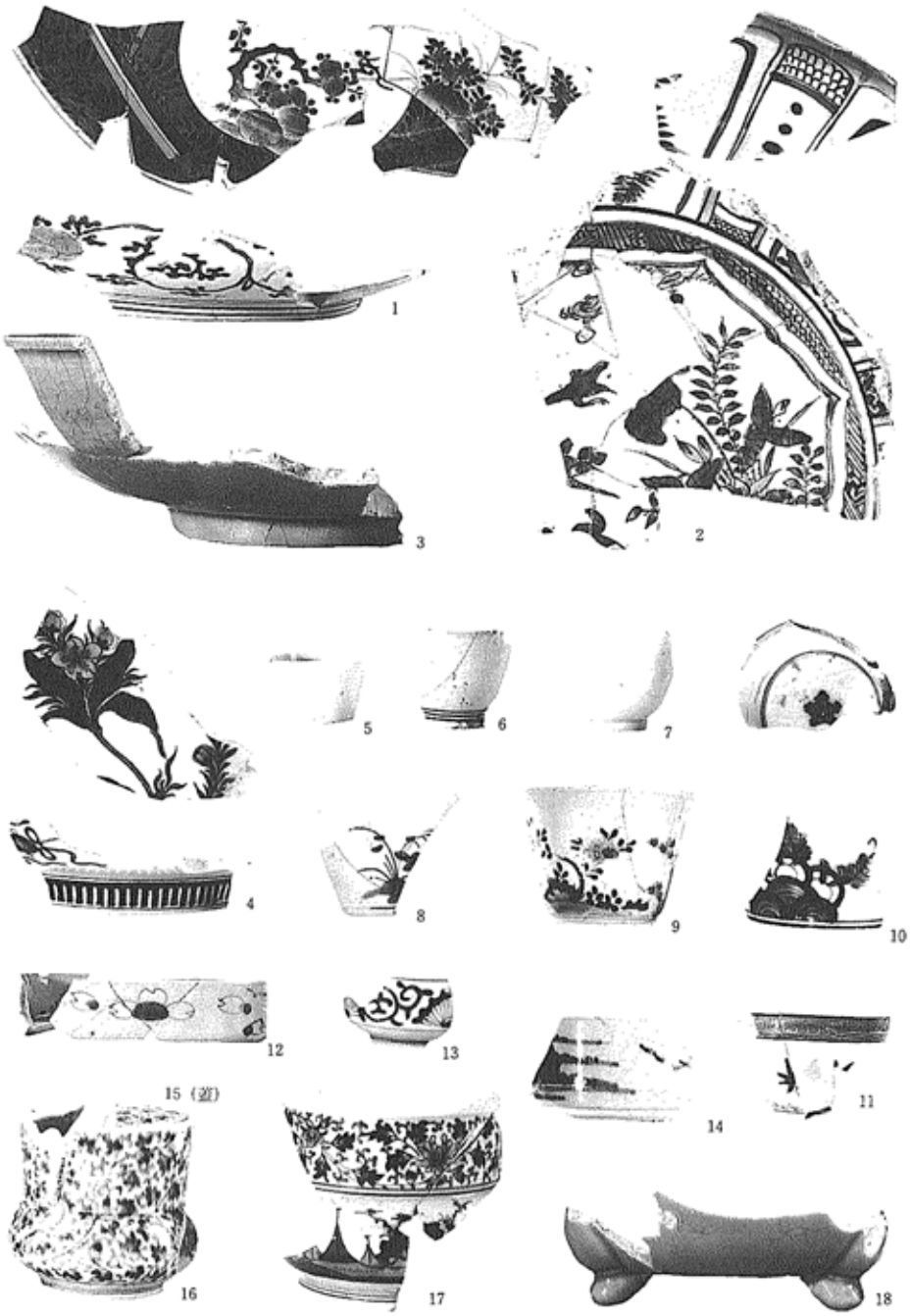
写真図版20　磁器(3)　S＝½



写真図版21　磁器（4）　S＝⅓

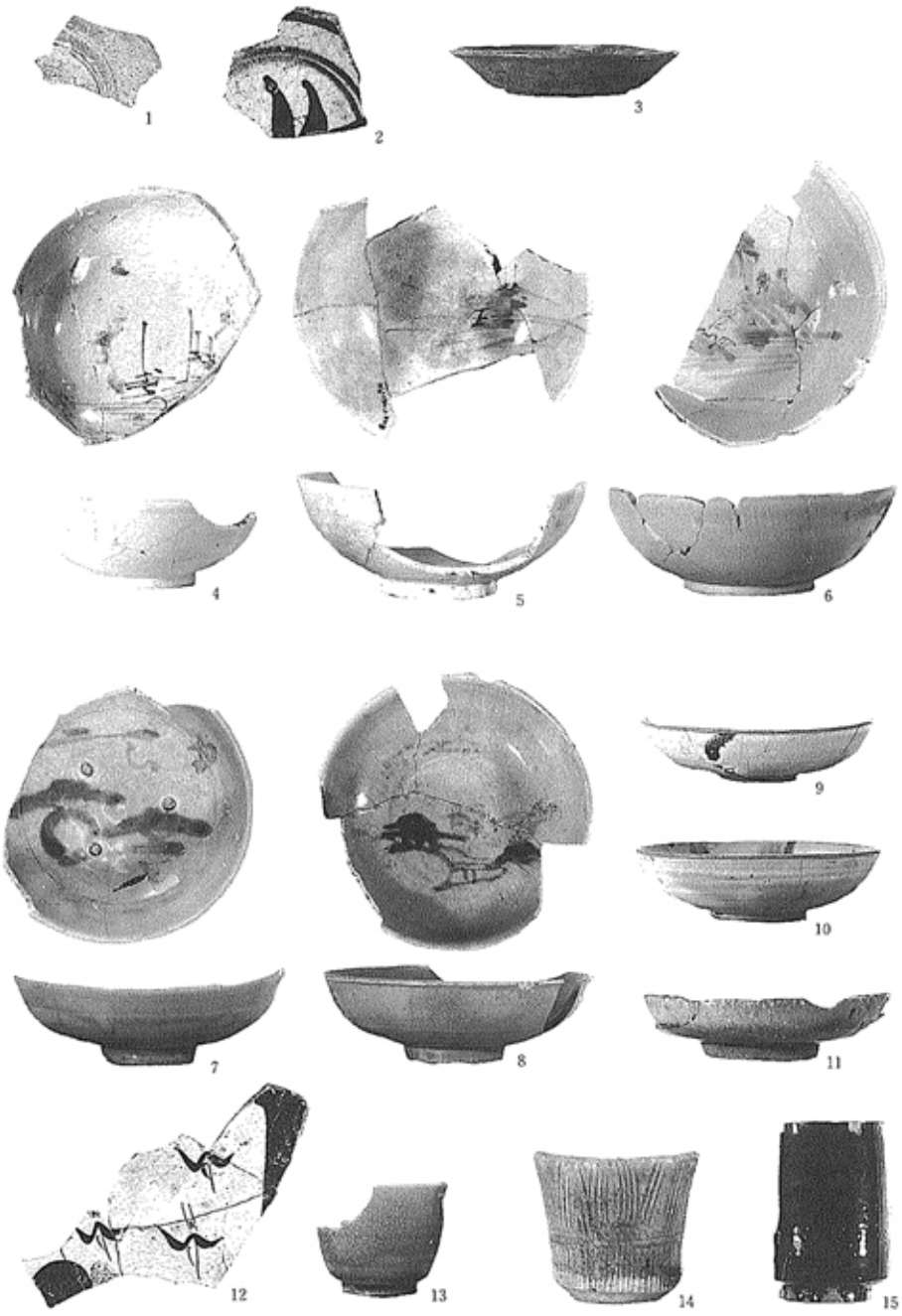


写真図版22　磁器(5)　S＝½

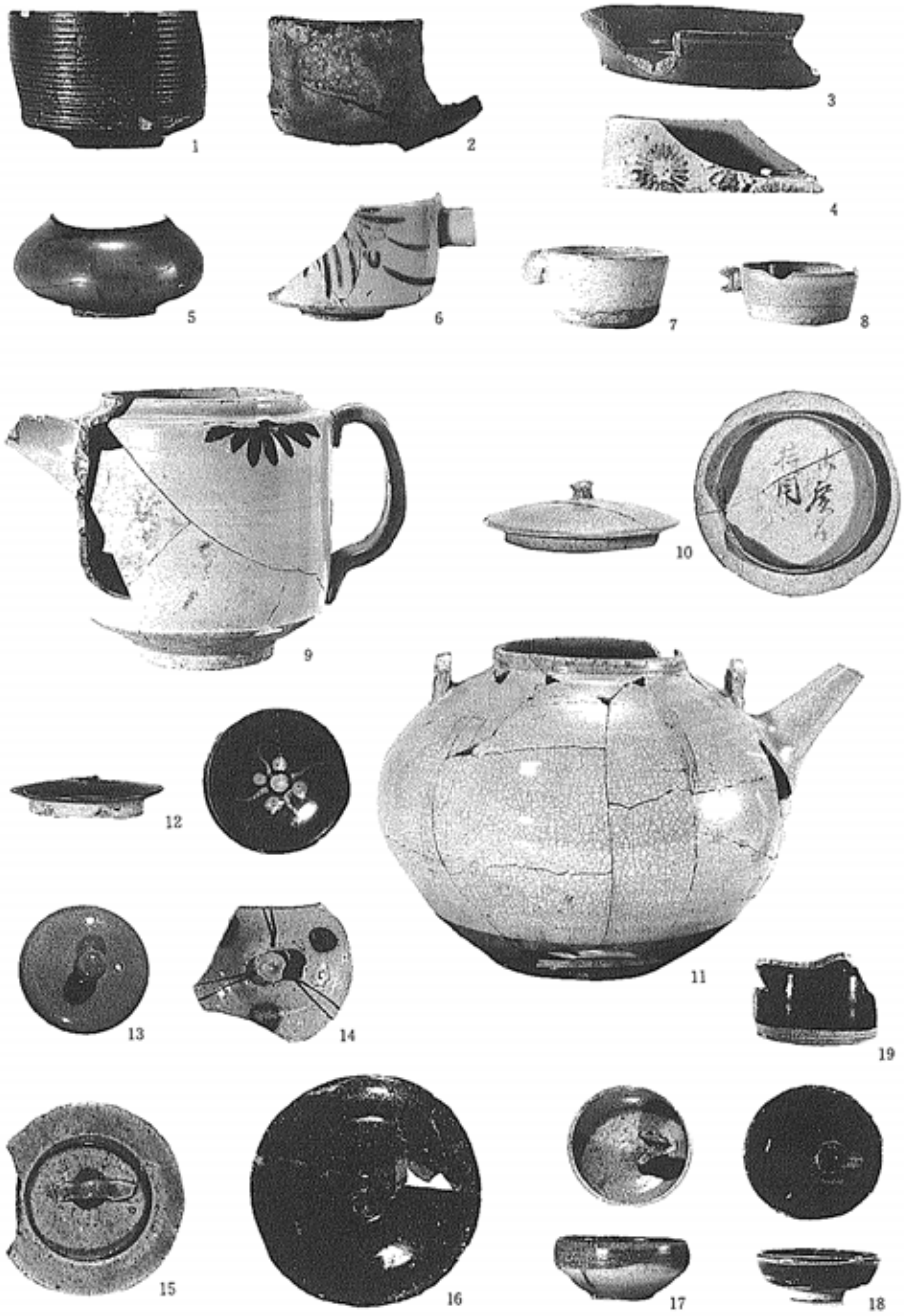


写真図版23　磁器（6）　S＝½

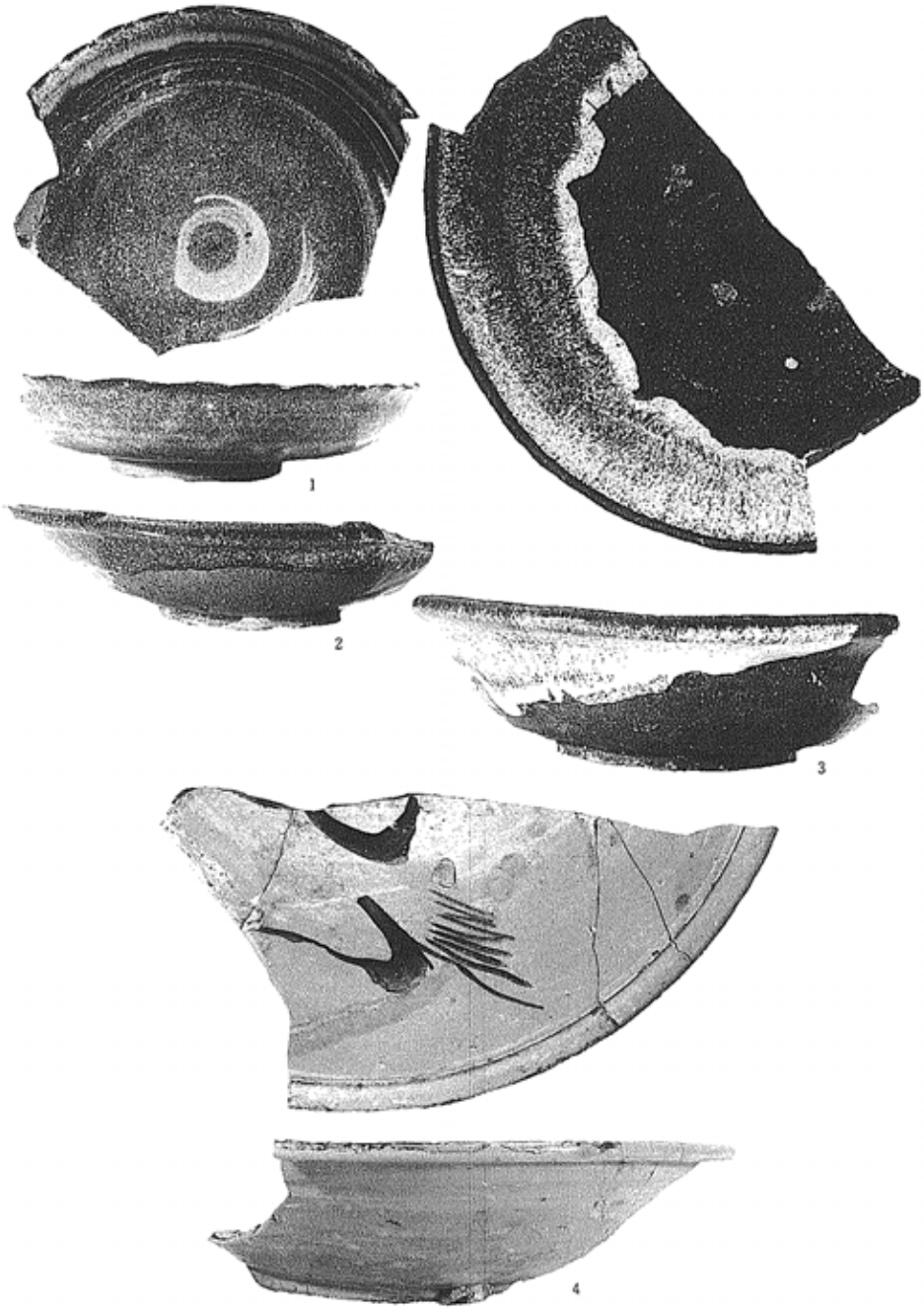
写真図版24　磁器（7）、陶器（1）　S＝½



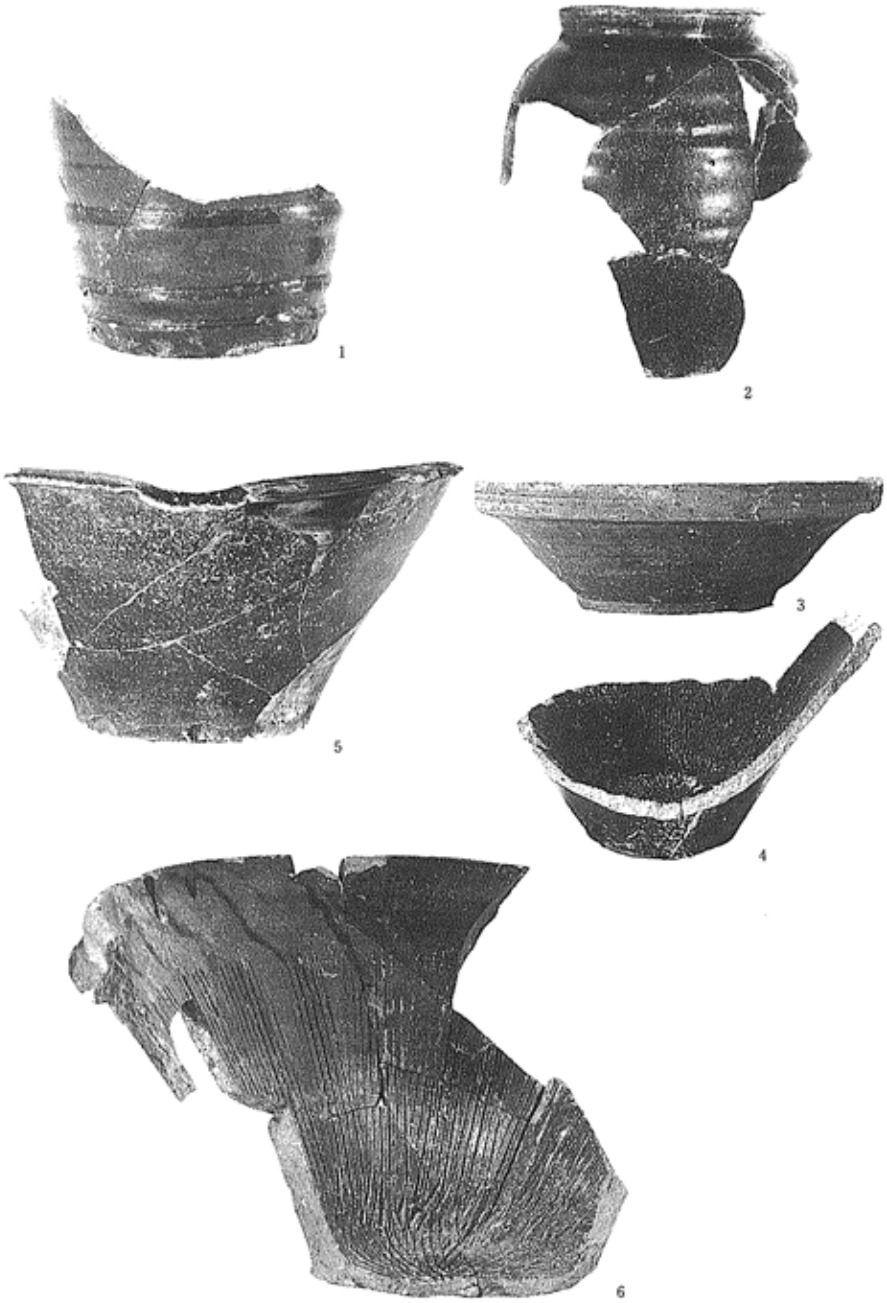
写真図版25　陶器(2)　　S＝½



写真図版26　陶器（3）　S＝½

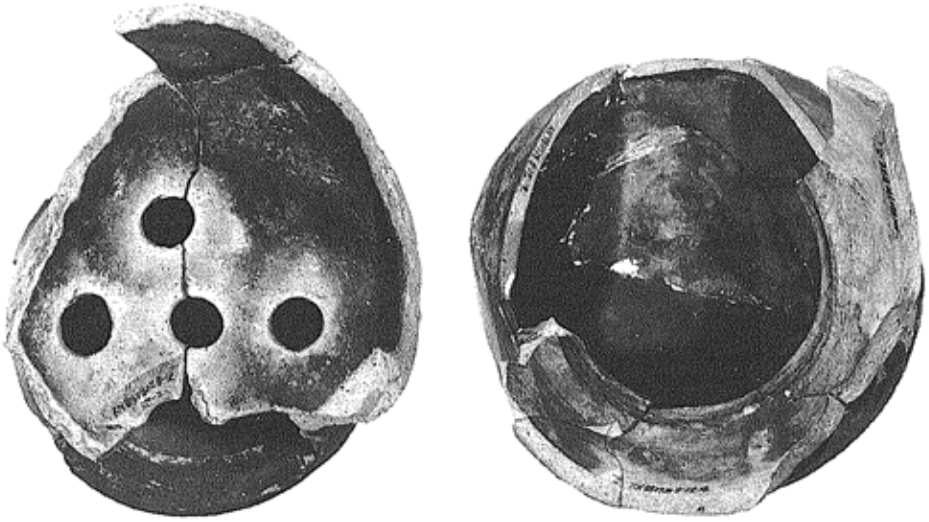


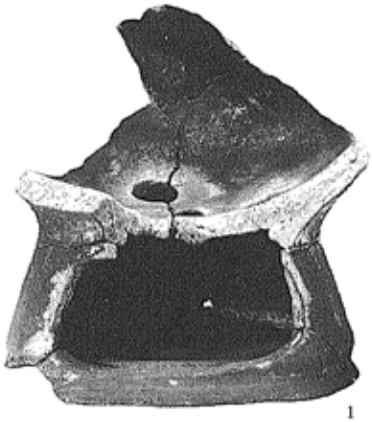
写真図版27　陶器（4）　S＝½



写真図版28　陶器(5)　　S＝½

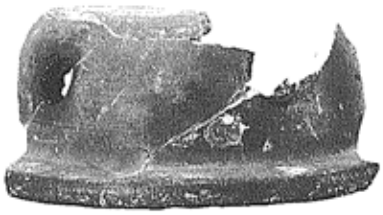
写真図版29　土師質・瓦質土器　　S＝½





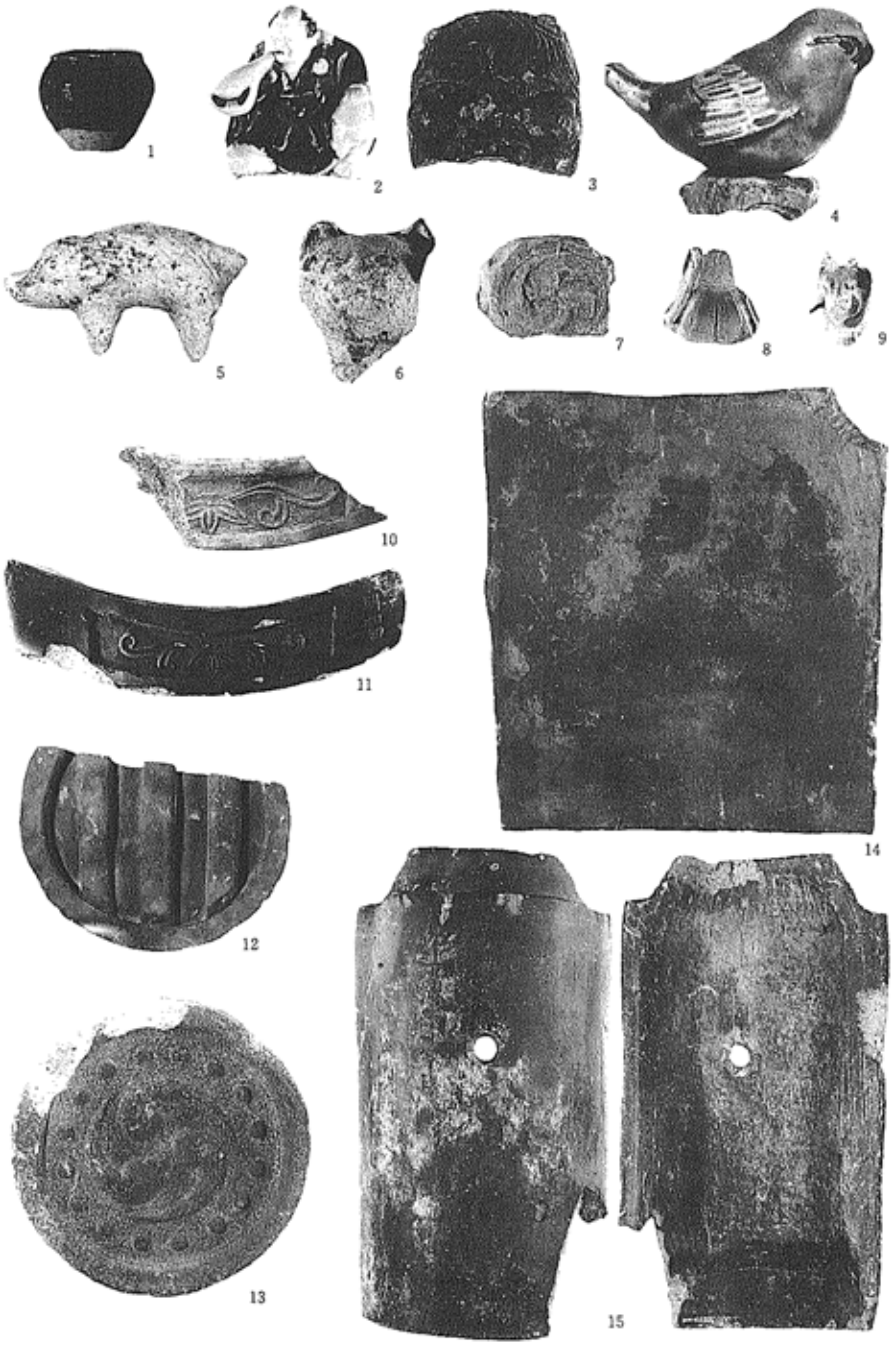
1

2



3

写真図版30　瓦質土器　　S＝⅓

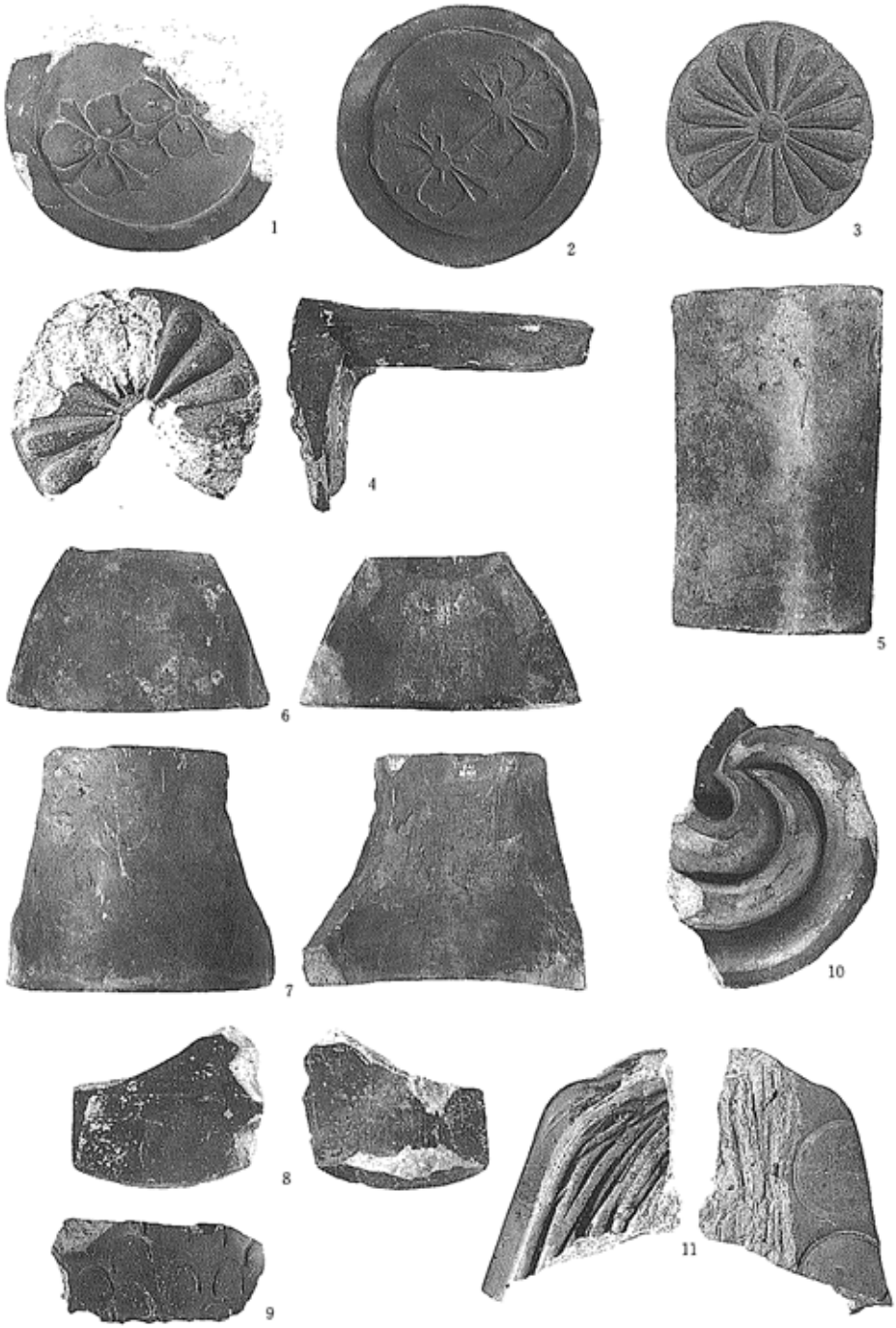


写真図版31　人形・ミニチュア土器、瓦類(1)

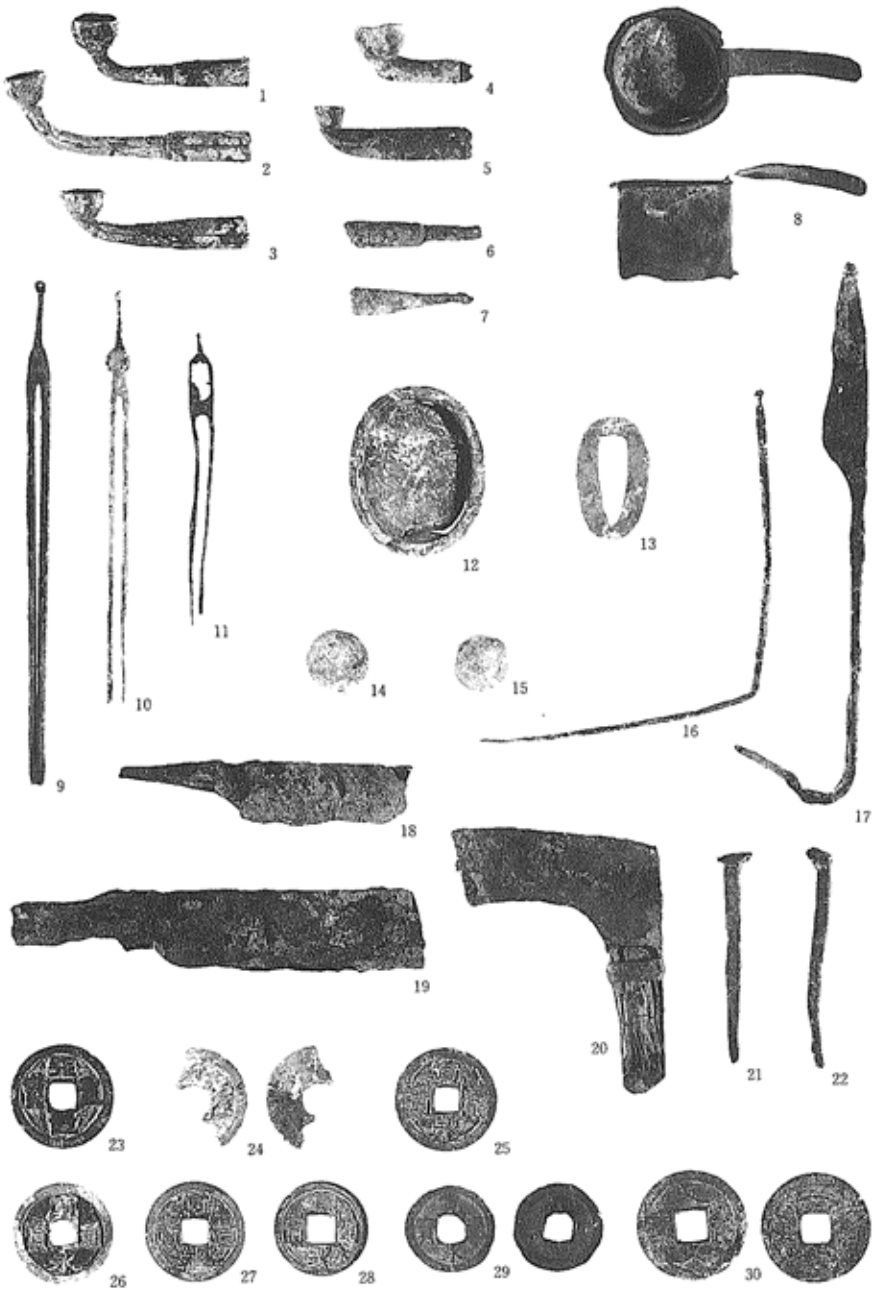
1～9：S＝⅔
10～15：S＝¼

写真図版32　瓦類(2)

1～6：S＝¼
7・8：S＝⅙

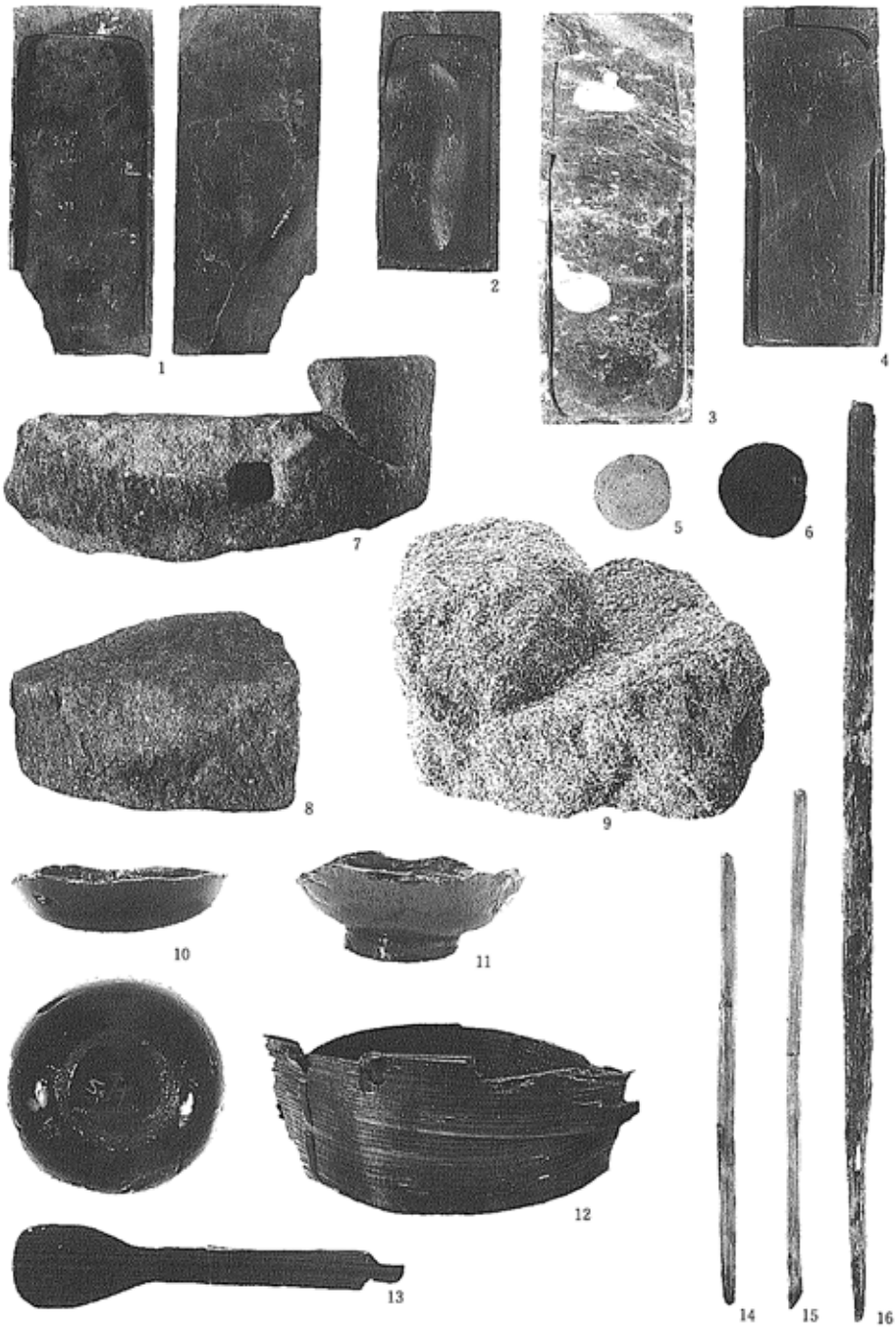


写真図版33　瓦類(3)　S＝¼



写真図版34　金属製品

14・15、23～30：S＝⅔
1～13、16～22：S＝½



写真図版35　石製品、木製品

1～4、10～13：S＝½
5・6：S＝⅓
7～9、16：S＝¼
14・15：S＝½

1・2アカガイ、3・4マガキ、5マシジミ、6ハマグリ（1/3）
7ボラ尾椎（×1/2）、8～10タラ科（8a・b右歯骨、9腹椎、10尾椎）（×1/2）、11タイ科尾椎棘、12カツオ尾椎、13種不明魚類尾椎（×1/2）、14キジ科右上腕骨、15～19ガンカモ類(大)（15鎖骨、16・17右上腕骨、18左中手骨、19左脛骨）、20～23種不明鳥類（20右尺骨、21左尺骨、22右橈骨、23右大腿骨）（×1/3）
24・25イノシシ（24a・b左下顎第3後臼歯、25左脛骨）、26～29ニホンジカ（26右肩甲骨）、26～29ニホンジカ（26右肩甲骨、27右脛骨、28腰椎、29左中手骨）、30・31イヌ（30右上腕骨、31左脛骨）（×1/3）
32a・b穿孔骨製品（種・部位不明）、33加工痕ある骨（ニホンジカ中足骨）、34・35加工痕ある鹿角（×1/3）

写真図版36　骨・角製品、動物遺体

S-84
S-72
S-60
S-48
S-36
S-24
S-12
S-0-N
N-12
N-24
N-36
N-48
N-60
W-60
W-48
W-36
W-24
W-12
E-12
W
0
E
SX115土塁跡
SX04道路跡
SX01道路跡
SX02道路跡
SX03道路跡
SX50道路跡
SX51道路跡
SX101道路跡
側溝
0
10
20m

付図 遺構全体図